

# 奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 21 (2009) 年度



奈良市教育委員会

2012

# 奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 21 (2009) 年度

奈良市教育委員会

2012



播磨産軒瓦（古大内式軒丸瓦Ⅰ型・古大内式軒平瓦）

平城京跡（左京五条四坊九坪・五条条間北小路）の調査 第608-F次（軒丸瓦）・第459-2次（軒平瓦）



奈良三彩小壺

平城京跡（左京五条四坊九坪）の調査 第622-A次



(背面)



(鏡面)

弥勒寺藏 三角綠苔作鑄二神二獸鏡

## 例　言

1. 本書は、平成 21 年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要と、埋蔵文化財調査センター紀要を収録したものである。

ただし、平成 21 年度に実施した調査のうち東紀寺遺跡第 11 次調査については、昨年度に刊行した『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 20（2008）年度』に同第 10 次調査の概要とともに既に収録済みである。また、平城京跡第 623 次、626 次調査については次年度以降に報告の予定であるため、本書には収録していない。

さらに、平成 20 年度に実施した平城京跡第 608 次調査については、平成 21 年度に実施した平城京第 622 次調査の成果とともに、本書に収録した。このほか、西大寺旧境内第 25 次調査については、平成 24 年度に報告書を刊行する予定であるので、本書には収録していない。

2. 平成 21 年度の埋蔵文化財調査に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局 教育総務部

文化財課

課長 西岡康夫

課長補佐 西崎卓哉 大西章市（文化財総務係長事務取扱）

文化財総務係

主任 三好美穂 植松宏益

技術職員 大窪淳司

埋蔵文化財調査センター

所長 森下恵介

所長補佐 岡田恭明

主任 森下浩行 鐘方正樹

技術職員 松浦五輪美 武田和哉 秋山成人 安井宣也 宮崎正裕 原田憲二郎 久保清子

池田裕英 中島和彦 久保邦江 原田香織 池田富貴子 山前智敬

事務職員 酒井真弓

嘱託職員 大原 瞳 中居和志（現 京都府教育委員会）

3. 発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表す。

4. 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。

H J	平城京跡	D A	大安寺旧境内	G G	元興寺旧境内	S D	西大寺旧境内
K K	菅原寺旧境内	T I	東市跡推定地	H K	東紀寺遺跡	F S	古市遺跡

5. 古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものがある。

6. 本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。

S A (柱列・塀) S B (掘立柱建物) S D (溝・濠・溝状遺構・暗渠)

S E (井戸) S F (道路) S K (土坑) S X (その他)

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

7. 本文中で示した過去の調査の実施機関は、調査次数の前に下記の略記号を使用し表記した。

国 一 独立行政法人奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所含む）

県 一 奈良県教育委員会 および 奈良県立橿原考古学研究所

市 一 奈良市教育委員会

8. 本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。

奈良時代 軒 瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会 1996

土 器：『平城宮発掘調査報告書VII』奈良国立文化財研究所 1976

『平城宮発掘調査報告書XII』奈良国立文化財研究所 1982

古墳時代 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

弥生時代 土 器：奈良県立橿原考古学研究所『奈良県の弥生土器集成』2003

9. 発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」(1/2,500)を、また調査地位置図については、国土地理院発行の1/25,000の地形図(1/25,000)を利用した。

10. 本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）の数値である。なお、座標値の表・図中の標記については単位(m)を省略した。

11. この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

12. 第1・3章の執筆は、当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター職員が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。第2章は分析機関の報告を再編集して構成した。第4章は埋蔵文化財調査センター職員が執筆した紀要を掲載した。

13. 本書の執筆および編集は平成23年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長 森下恵介、同 グループリーダー主任 三好美鶴・鐘方正樹・久保清子の助言、および主務 久保邦江の協力を得て、主任 武田和哉が編集を担当した。

# 目 次

卷首図版	I ~ II
例言・目次	i ~ v
第1章 平成21年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告	1
1. J R奈良駅南特定土地地区画整理事業に係る発掘調査	2
平城京跡（左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路）の調査 第608次・622次	3
2. 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査	25
平城京跡（右京一条二坊十三坪）の調査 第625次	26
3. 平城京跡（右京三条三坊五坪）の調査 第620次	35
4. 平城京跡（右京三条一坊四坪）の調査 第621次	38
5. 平城京跡（左京四条五坊八坪）の調査 第624次	41
6. 平城京跡（左京四条一坊三坪）の調査 第627次	43
7. 平城京跡（右京五条大路）の調査 第628次	45
8. 平城京跡（左京二条五北郊）の調査 第629次	49
9. 史跡大安寺旧境内の調査 東塔跡の調査 第122次	51
10. 元興寺旧境内の調査 東面回廊推定地・奈良町遺跡の調査 第65次	57
11. 西大寺旧境内の調査 （1）正倉院跡推定地の調査 第26次 （2）西大寺寺地の調査 第27次	62
12. 香原寺旧境内の調査 第5次	63
13. 古市遺跡の調査 第8次	66
14. 平成21年度実施小規模調査・試掘等一覧	69
15. 平成21年度実施工事立会一覧	72
16. 平成21年度実施踏査一覧	72
第2章 自然科学分析報告	79
1. 平城京第459-2次調査における樹種同定	81
2. 平城京第608次調査における自然科学分析	83
3. 平城京第622次調査における自然科学分析	92
第3章 平成21年度保存活用事業報告	103
第4章 紀要	113
平城京の陶器　三好美穂	114
弥勒寺蔵　三角縁吾作銘二神二獸鏡について　鐘方正樹	147
卷末図版	I ~ IV



平成 21 (2009) 年度 発掘調査位置図 (過年度調査で本書にて報告する文も含む 1/50,000)

## 平成 21 (2009) 年度 奈良市教育委員会実施 埋蔵文化財発掘調査一覧表

No.	調査 次数	遺跡名	調査地	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	事業区分	事業者	事業内容	届出受理 番号	担当者	摘要
1	H J 620	平城京跡（右京三条三坊五坪）	宝来一丁目 84-1、85-1	100	4/8 - 4/28	原因者	ヤマトラ	宅地造成	H 20.3450	大原・中島	
2	H J 621	平城京跡（右京三条一坊四坪）	三条大路四丁目 1-1	190	5/12 - 5/29	原因者	積水化学工業株式会社	工場増築	H 20.3408	松山	
3	H J 622	平城京跡（左京五条四坊九・十五・十六坪、四条五条通北小路、東四坊坊間東小路）	大森町 141、142番地他	1300	5/11 - 10/6	公共	奈良市長	J R 奈良駅南特定土地人権整理連立開発公共施設整備事業	H 12.3145	原田憲・大原	
4	H J 623	平城京跡（左京五条四坊十九・十五・十六坪、四条大路）	大森町 131、134番地他	3450	5/25 - 3/5	公共	奈良市長	J R 奈良駅南特定土地人権整理都市再生事業	H 12.3145	宮崎・池田裕・山前・中居	次年度以降に報告の予定
5	H J 624	平城京跡（左京四条五坊八坪）	三条本町地内	153	8/19 - 9/9	公共	奈良市長	J R 奈良駅前周辺整備事業	H 21.3095	武田・松浦	
6	H J 625	平城京跡（右京一条二坊十三坪）	西大寺南町 2271-2 ~ 4	850	9/24 - 1/22	公共	奈良市長	西大寺駅南地区土地人権整理通常事業	S 63.3056	久保清・中居	
7	H J 626	平城京跡（左京五条四坊一坪）	大森西町 182 番地他	462	12/14 - 12/12	公共	奈良市長	J R 奈良駅南特定土地人権整理臨時交付金事業	H 12.3145	原田憲・大原	次年度以降に報告の予定
8	H J 627	平城京跡（左京四条一坊二坪）	四条大路三丁目 984・992	150	12/26 - 1/5	原因者	株式会社 ZERO	宅地造成	H 21.3343	範方・中島	
9	H J 628	平城京跡（右京五条大路）	西ノ京町 188 番地、五条町 325-1 他	110	1/20 - 2/19	公共	奈良市長	西ノ京地区歴史環境整備事業	H 21.3404	松山	
10	H J 629	平城京跡（左京二条五坊北部）	法蓮町 717 番 4	26	2/1 - 2/5	緊急	個人	個人住宅新築	H 21.3445	安井	
11	D A 122	史跡大安寺旧境内	東九条町 1326	80	11/16 - 12/15	公共	奈良市教育委員会 教育長	史跡大安寺旧境内保存整備事業	H 21.1079	山前	
12	GG 65	元興寺旧境内	中新屋町 40-2 他	10	7/13 - 7/24	緊急	個人	賃貸住宅新築	H 21.3093	中島	
13	KK 5	喜光寺旧境内	普願町 516-2、516-3	42	8/17 - 8/21	原因者	崇喜光寺	庫裏新築	H 21.3178	松山	
14	S D 25	西大寺旧境内	西大寺新田町 2564-1 他	321	4/8 - 7/14	緊急	個人	個人住宅新築	H 20.3421	久保邦・中居	次年度に正報書刊行の予定
15	S D 26	西大寺旧境内	西大寺新田町 536 番地	44	8/24 - 8/31	緊急	個人	個人住宅新築・道路工事	H 21.3152	中島	
16	S D 27	西大寺旧境内	西大寺国見町一丁目 224 番地 1 の一部他	78	11/9 - 11/10	原因者	奈良交通株式会社	駐輪場建設	H 21.3222	中島	
17	H K 11	東紀寺遺跡	東紀寺町一丁目 50 番 1 号	96	4/13 - 5/1	公共	奈良市長	奈良市立病院建設事業	H 20.3046	池田裕	平成 20 年度年報にて既報告
18	F S 8	古市遺跡	古市町 1611 他	195	4/13 - 4/28	公共	奈良市長	第 10 号市営住宅建替事業	H 20.3471	武田・松浦	

---

## 第1章 平成21年度 奈良市埋蔵文化財調査概要報告

---

## I. JR奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査

この調査は奈良市が進めるJR奈良駅南特定土地区画整理事業（総面積14.6万m<sup>2</sup>）に係り、実施したものである。

奈良市教育委員会では、平成13年度から当事業地内の発掘調査を行っており、平成20年度までに27,035m<sup>2</sup>の発掘調査を実施している。

調査位置は、JR関西本線、桜井線、および主要地方奈良生駒線の南に広がる水田地帯であり、東から西へと緩やかに低くなる沖積地上に位置する。また、事業地の中央には東西方向の用水路があり、南北方向の地形は、この用水路付近に向かい緩やかに下っている。

平成21年度は、前年度事業の継続分として連続立体関連公共施設整備事業で1,300m<sup>2</sup>、平成21年度の事業に係わる発掘調査として、都市再生事業で3,450m<sup>2</sup>、地域活力基盤

創造交付金事業で462m<sup>2</sup>の計5,212m<sup>2</sup>の調査を行った。

発掘調査位置は、平城京の条坊復原では、左京五条四坊九・十・十五・十六坪、四条大路、東四坊大路、五条条間北小路、東四坊間東小路である。

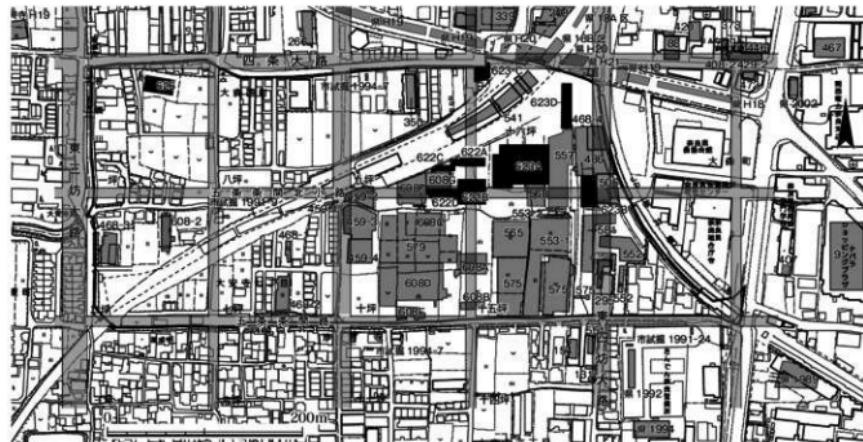
これらの事業と調査の概要は下記のとおりである。

このうち、今回報告する調査は、市HJ第622次A・B・C・D発掘区と、平成20年度に実施した市HJ第608次F・G発掘区である。市HJ第623次A・B・C・D発掘区と626次調査については、次年度以降に報告する。

報告に際しては、古墳時代以前の遺構には2桁を、奈良時代以降の遺構には3桁以上の遺構番号を付している。これらは、当事業に係る調査で設定している遺構番号であり、条坊遺構・坪ごとに設定した通し番号である。

平成21年度 JR奈良駅南特定土地区画整理事業 発掘調査一覧表

調査次数	発掘区	事業名	遺跡名	調査面積	調査期間	調査地	調査担当者
HJ第622次	A	連続立体関連公共施設整備事業（平成20年度継続）	平城京跡（左京五条四坊九・十六坪、東四坊間東小路）	200m <sup>2</sup>	H21.5.11～H21.8.11		
	B		平城京跡（左京五条四坊九・十・十五・十六坪、東四坊間東小路、五条条間北小路）	700m <sup>2</sup>	H21.5.11～H21.8.11	大森町141・142番地他	原田憲・大原
	C		平城京跡（左京五条四坊九坪）	171m <sup>2</sup>	H21.8.17～H21.10.6		
	D		平城京跡（左京五条四坊九坪、五条条間北小路）	229m <sup>2</sup>	H21.8.17～H21.10.5		
HJ第623次	A	都市再生事業	平城京跡（左京五条四坊十六坪）	2,300m <sup>2</sup>	H21.5.25～H22.2.19		
	B		平城京跡（左京五条四坊十五・十六坪、東四坊大路、五条条間北小路）	520m <sup>2</sup>	H21.5.25～H21.7.29	大森町131・134番地他	宮崎・池田裕・山前・中居
	C		平城京跡（左京五条四坊十六坪、四条大路）	180m <sup>2</sup>	H21.7.15～H21.8.14		
	D		平城京跡（左京五条四坊十六坪）	450m <sup>2</sup>	H21.12.25～H22.3.5		
HJ第626次		地域活力基盤創造交付金事業	平城京跡（左京五条四坊一坪）	462m <sup>2</sup>	H21.12.14～H22.2.12	大森西町182番地他	原田憲・大原



JR奈良駅南特定土地区画整理事業地内 発掘調査位置図(1/5,000)

# 平城京跡（左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路）の調査 第608次F・G発掘区・第622次A・B・C・D発掘区

## Iはじめに

HJ第608次F・G発掘区とHJ第622次A・B・C・D発掘区は、平城京の条坊復原によると、平城京左京五条四坊九・十・十五・十六坪、五条条間北小路、東四坊坊間東小路に相当する。

調査地周辺での調査成果については、まず九坪でHJ第459-2・541次の各調査が実施されている。特にHJ第459-2次調査では播磨産軒平瓦や播磨産とみられる平瓦・熨斗瓦が出土し、その出土分布から、これらが九坪で使用されたものと考えられている。十坪ではHJ第459-2～4・579・608次A～D発掘区の各調査が実施され、中心建物や多くの埋納遺構が検出されている。5時期の遺構変遷があり、奈良時代を通じて一町利用されていたことが判明している。十五坪はHJ第553-1・2と565・575・581次の各調査が実施され、5時期の遺構変遷が確認された。特に8世紀後半には前殿・後殿を中心に、その周間に雜舎と倉庫群を配置していること、さらには面内観の出土割合が宮内に匹敵することから、宮外官衙の可能性が指摘されている。

十六坪はHJ第468-4・486・541・557・568次の各調査が実施され、東西・南北ともに4分割した正方形の1/16町を基準に利用された時期があったと考えられている。東四坊坊間東小路は、HJ第541・608次A・B発掘区で確認され、ここでは側溝心々間距離が約7.0mの幅員であることが判明している。五条条間北小路は、HJ第459-2・506・568・557次の各調査区で確認され、側溝心々間距離が7.2mの幅員であること、同北側溝が東四坊大路を横断することが判明している。

このような周辺の調査成果を受け、HJ第608次F・G発掘区は左京五条四坊九坪の南辺部と十坪の北辺部および五条条間北小路の様相確認を目的とし、その推定位置に発掘区を設定して調査を行った。

HJ第622次A発掘区は東四坊坊間東小路および十六坪の南北1/4ラインにおける宅地削設施の有無の確認を目的として、東四坊坊間東小路とこれに面する左京五条四坊九・十六坪にかけて設定した。

HJ第622次B発掘区は五条条間北小路と東四坊坊間東小路の交差点の様相確認を目的として、交差点およびこれに面する九・十・十五・十六坪にかけて設定した。

HJ第622次C発掘区は九坪内の様相確認を目的とし

て、A発掘区の西側で、HJ第608次G発掘区北側の位置に設定した。

HJ第622次D発掘区は、五条条間北小路の様相確認を目的として、B発掘区の西側で、HJ第608次G発掘区北側の位置に設定した。

なお、HJ第579次・608次C発掘区の各調査では、縄文時代晩期の土器を包含する貯蔵穴・ピットを、HJ第486・557・568次の各調査では、縄文時代晩期の土器を包含する河川を検出している。奈良時代の遺構面下で下層遺構の検出も想定できるため、その確認も目的として調査を進めた。

## II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から水田耕作土の黒灰色土、灰褐色砂質土、灰色土、灰色細砂土と続いて、現地表面下約0.3～0.4mで黄灰色粘土に至る。ただし、五条条間北小路〔以下「北小路」と略称する〕付近では、灰色細砂土の下に、北小路上が流路化した時の埋土である灰褐色砂質土が堆積しており、現地表下約0.5～1.1mで黄灰色粘土に至る。弥生時代中期以降の遺構はこの黄灰色粘土上面で検出した。遺構面は標高が62.3～63.2mで、北東から南西へ低くなる。

黄灰色粘土は、周辺の調査で確認されている縄文時代晩期～弥生時代前期の土器を包含する層である。このため弥生時代中期以降の遺構調査完了後、黄灰色粘土を除去し、地山である黄褐色粘土上面で遺構検出を行った。黄褐色粘土上面の標高は、62.6～62.7mである。下層の黄褐色粘土上面で縄文時代後期から晩期の土器を包含する幅約50mの河川を確認した。河川の掘削は一部に留まつたが、東岸付近では深さ約2.2mである。埋土は灰白色砂または灰色砂砾である。縄文土器は南岸付近で多く出土した。検出位置の関係から、HJ486・557・568次調査で確認されている河川Iと一連の流路とみられる。HJ486・557・568次調査では、河川は北東から南西に向かって流れることに対し、今回の調査区では南東から北西へ流れていることから、河川の屈曲部を確認したことになる。

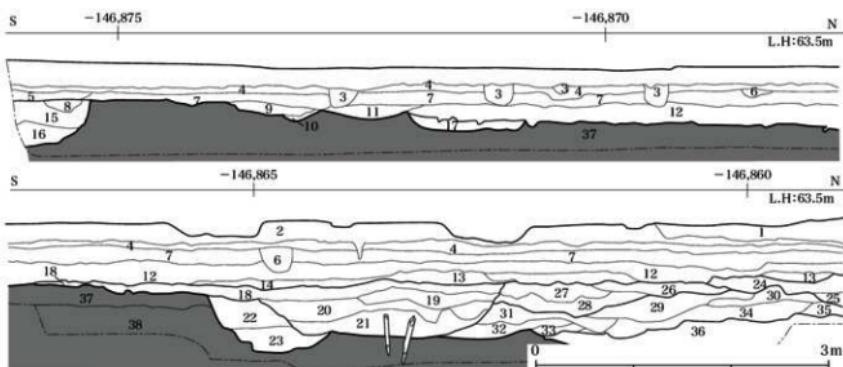
## III 検出遺構

各遺構の概要は一覧表にまとめた通りである。以下、主要な遺構について述べる。

### 弥生時代の遺構

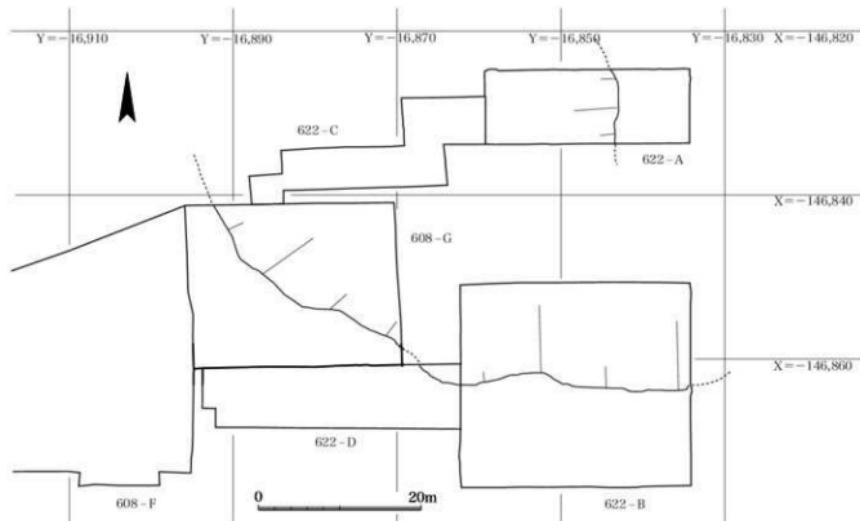
土坑を2検出した。土坑SK02はHJ第608次F発掘

平城京跡(左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東西坊坊間東小路)  
の調査 第608次F・G発掘区・第622次A・B・C・D発掘区



- |               |                               |
|---------------|-------------------------------|
| 1. 黒灰色土(灰色礫混) | 14. 橙灰色砂質土                    |
| 2. 黒灰色土       | 15. 棕色粘土(SD119)               |
| 3. 灰褐色土       | 16. 褐褐色砂質土(SD119)             |
| 4. 灰褐色砂質土     | 17. 黄褐色粘土(SD2006)             |
| 5. 灰色土        | 18. 茶褐色砂質土(SD2005b)           |
| 6. 灰色砂質土      | 19. 灰白色細砂(SD2005b)            |
| 7. 淡灰褐色砂質土    | 20. 灰色粘土(SD2005b)             |
| 8. 灰色細砂土      | 21. 灰色砂(SD2005b)              |
| 9. 灰褐色細砂土     | 22. 淡灰色砂質土(SD2005a)           |
| 10. 灰褐色細砂     | 23. 棕褐色砂(SD2005a)             |
| 11. 灰褐色細砂土    | 24. 灰褐色砂質土(SD114)             |
| 12. 灰褐色砂質土    | 25. 棕灰褐色粘土(SD114)             |
| 13. 灰褐色土      | 26. 棕褐色細砂土(築地盛土)              |
|               | 27. 棕白色粘土(築地盛土)               |
|               | 28. 青灰色粘土(灰色粘土混)(築地盛土)        |
|               | 29. 黄色灰褐色粘土(SD2005北岸崩壊土)      |
|               | 30. 湖灰色砂(SD2005北岸崩壊土)         |
|               | 31. 灰色細砂(SD2005北岸崩壊土)         |
|               | 32. 灰色砂(SD2005北岸崩壊土)          |
|               | 33. 淡黑灰色砂(SD2005北岸崩壊土)        |
|               | 34. 灰色粘質土(淡灰色砂混)(SD2005北岸崩壊土) |
|               | 35. 灰色細砂(鶴文河川)                |
|               | 36. 白色砂(鶴文河川)                 |
|               | 37. 黄灰色粘土(地山)                 |
|               | 38. 黄褐色粘土(地山)                 |

H J 第622次調査 B発掘西壁土層図 (1/50)



鶴文時代後～晩期の河川平面図 (1/600)



区に位置し、東西約1.1m、南北約0.7m、深さ約0.7mである。埋土から弥生時代後期の広口壺が出土した。土坑SK 03はH J第622-A発掘区南西隅に位置し、東西約2.3m、南北約1.5m、深さ約0.3mである。埋土から弥生時代中期末～後期初頭の長頸壺、甕が出土した。

#### 奈良～平安時代の遺構

条坊遺構・掘立柱建物・掘立柱列・溝・井戸・土坑・門・橋・護岸施設・埋納遺構を検出した。以下に条坊関連遺構・九坪内の遺構・十坪内の遺構・十五坪内の遺構・十六坪内の遺構の順に主な遺構を報告する。

**条坊関連遺構** H J第622次調査A・B発掘区の東四坊間東小路(以下「東小路」と略称する)が想定される位置で、南北溝2条(S D 1011・1012)を検出した。両溝は左京五条四坊九・十六坪間に検出した東小路の東西両側溝(H J第541次調査)、左京五条四坊十・十五坪間に検出した同小路の東西両側溝(H J第608次A・B発掘区)と検出位置に矛盾がないことから、S D 1011は東小路の西側溝、S D 1012は同東側溝と判断できる。東小路S F 1010の路面幅は、側溝心々間距離で7.5mである。路面上に舗装などの造作はなかった。東小路西側溝S D 1011・東小路東側溝S D 1012の溝底はともに、五条三条間北小路(以下「北小路」と略称する)北側溝S D 2005へ向かって勾配をつけ、北小路S F 2004を横断する。東小路西側溝S D 1011の埋土は下から茶灰色砂質土、褐灰色土で、溝心の国土座標値は、X=-146,869.00、Y=-16,852.90である。東小路西側溝S D 1011と北小路北側溝S D 2005との合流部付近には、東小路西側溝S D 1011西岸に沿って護岸施設S X 810がある。護岸施設S X 810は、西岸の勾配に合わせて杭を打ち込んでいることから、西岸を守る為の護岸施設と考える。東小路東側溝S D 1012の埋土は下から灰褐色土、茶灰色土で、溝心の国土座標値は、X=-146,869.00、Y=-16,845.40である。宅地側である溝の東岸には、南北2間の橋脚をもつ橋S X 809が架かる。十六坪の西面築地跡S A 305上に開く門S B 293と南北中軸ラインが一致することから、これと同時期とみることができる。

H J第608次F発掘区・H J第622次B・D発掘区で、東西溝S D 2005を検出した。またH J第608次F発掘区・H J第622次B発掘区では東西溝S D 2005の南に平行して流れる東西溝S D 2006を検出した。両溝は左京五条四坊九・十坪間に検出した北小路の南北両側溝(H J 459-2次)、左京五条四坊十五・十六坪間に検出した北小路の南北両側溝(H J 506・557・568次)と検出位置に矛盾がないことから、S D 2005は北小路の北側溝、S D 2006は同南側溝と判断できる。北小路S F 2004は、周囲の宅地よ

り標高が低いため、両側溝埋没後、路面上が流路化しており、浸食により東小路S F 1010との交差点付近では大きく削平されていた。遺構の重複関係から、北小路北側溝S D 2005は南から北へ位置をずらして掘り直し、東小路S F 1010上を横断することが判明した。溝底は東から西へ排水するように勾配を下げている。九坪南東隅に面する北小路北側溝S D 2005の北岸は、水流によって崩壊した痕跡があった。以下、古い順に北小路北側溝S D 2005 a・S D 2005 b・S D 2005 cとする。北小路S F 2004の側溝心々間距離は、北小路北側溝S D 2005 aの時期では、東方のH J第622次B発掘区で7.6m、西方のH J第608次F発掘区で7.2m、北側溝S D 2005 bの時期ではH J第622次B発掘区で6.7m、H J第608次F発掘区で8.3mである。

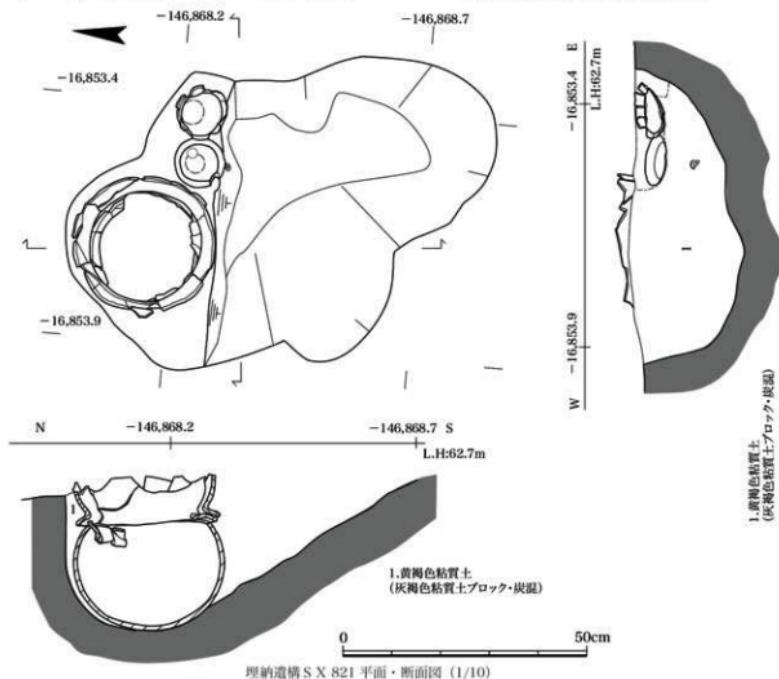
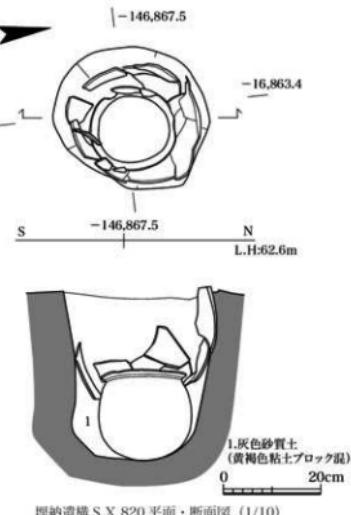
北小路北側溝S D 2005 aは、東小路西側溝S D 1011西側からH J第622次調査D発掘区西端までの間でのみ検出した。溝の南岸はほぼ垂直に落ちている。溝の北岸は北小路北側溝S D 2005 bによって削平され、溝幅は不明である。ただし、北小路北側溝S D 2005の中央には杭列S X 814が残存し、これを北小路北側溝S D 2005 a北岸の護岸施設と考えると、幅は約2.5mであったと推定できる。埋土は下から灰色粗砂、暗灰色粘質土である。上層は腐植土を主体とし、木簡をはじめ、木製品などが遺存していた。北小路北側溝S D 2005 a溝心の国土座標値は、X=-146,864.80、Y=-16,893.60である。埋土から8世紀後半から末頃にかけての土器が出土した。

北小路北側溝S D 2005 bは、北小路北側溝S D 2005 a埋没後に約1.0m北側に位置をずらして掘りなおしている。宅地側である北小路北側溝S D 2005 bの北岸は、北小路北側溝S D 2005 cによって削平されている。交差点付近の北小路北側溝S D 2005 b両岸は東小路両側溝S D 1011・1012からの排水によって大きく浸食を受け、溝幅が最大で5.0mと広くなっていた。溝底は、東から西に向かって排水するように勾配を下げているが、東小路西側溝S D 1011との合流部は、土坑状に窪み深くなっていた。この窪みは、周囲の溝底からの深さ約0.6mを測る。北小路北側溝S D 2005 bの埋土は下から灰色砂、灰色粘土、茶褐色砂質土である。埋土から8世紀後半から10世紀にかけての土器が出土したが、9～10世紀にかけての土器は少量で、8世紀後半の土器が多い。北小路北側溝S D 2005 b溝心の国土座標値はX=-146,863.90、Y=-16,860.80である。

木橋S X 803・816～819は北小路北側溝S D 2005 bの時期に架かる橋と考える。木橋S X 803・817・819は北小路北側溝S D 2005 bと平行する東西1間の橋脚であり、これらはいずれも路面側である北小路S F 2004の北

端にて検出した。一方、宅地側にはこれに対応する橋脚はなかったことから、当初からなかったものと考える。木橋S X 803は九坪内を東西に2等分するラインのやや東寄りに位置する。北小路北側溝S D 2005内では橋板とみられる部材2枚を確認した。木橋S X 816は直径0.25mの円形の柱根が残る。一柱穴のみの検出であるが、検出位置から木橋S X 817と同じ構造と考え、東西1間に復原した。なお、組み合用柱穴は、西側のH J 第608-F・次発掘区内には無かったことから、H J 第608-F・622-Dの両発掘区間にあるものと考える。木橋S X 819は角柱の柱根が残り、掘削には地山の黄灰色粘土ではなく、根腐れを防ぐ目的で灰色粘土を充填していた。木橋S X 818は北小路北側溝S D 2005 bと直交する南北1間に橋脚である。また、木橋S X 818は後述する九坪の南面築地塀S A 221上に開く門S B 217と、S X 819は門S B 218と南北中軸ラインを揃えることから、それぞれ同時期と考える。重複関係から近接する位置で西から東へ造り替えていることがわかる。

なお、東小路と北小路との交差点付近では、橋脚の痕跡がなかった。ただし、交差点東側の溝底には樹皮が残る自



然木の先端を尖らせた丸太杭S X 815が打ち込まれていた。これを「芥よけ」に伴う杭と考えると、この西側に橋を想定することも可能である。

北小路北側溝S D 2005 cは北小路北側溝S D 2005 b埋没後に掘削された溝である。D発掘区東辺から始まり、H J第608次F発掘区に続く。埋土から10世紀の土器が出土。

北小路南側溝S D 2006は、北小路北側溝S D 2005とは対照的に浅く、溝幅も狭く、東小路S F 1010を横断しない。東小路東側溝S D 1012とは合流するのに対し、東小路西側溝S D 1011とは接続せず手前で途切れる。そのためか、北小路S F 2004上に南北溝S D 122・123を設けて、北小路北側溝S D 2005へ向けて排水する。埋土は下から灰色砂質土、黄灰褐色粘土である。上層は地山ブロックを多く包含し、短期間のうちに人為的に埋めたようだ。播磨産軒丸瓦が上層から出土した。北小路南側溝S D 2006溝心の国土座標値は、X=-146,871.50、Y=-16,860.80である。

北小路S F 2004路面上では埋納遺構S X 820・821を検出した。S X 820は直径0.3mの掘形内に土師器壺Aを正位に据え、その上に底部を打ち欠いた土師器壺Aを正位に据える。下段土器周囲には土師器甕片を埋めており、これらは下段土器を固定させる目的で差し込んだものと考える。甕内に内容物はなかった。S X 821は東西0.6m、南北0.9mの掘形内に合口にした土師器壺A 2個を据え、その東横に土師器壺B 2個を正位に据える。壺Bの下で錢貨(和同開珎)4点を確認した。堆積状況から壺Aを据えたのち、埋めながら錢貨と壺Bを埋納したものと考える。

九坪の遺構 挖立柱建物9棟(S B 205・206・210~213・216~218)、挖立柱列7条(S A 203・204・207~209・214・215)、壺2条(S A 220・221)井戸4基(S E 501~504)、土坑2(S K 606・607)、溝6条(S D 106・113~118)、埋納遺構2基(S X 802・803)があり、遺構の重複関係から3時期に区分できる。

東小路西側溝S D 1011とその西側の南北溝S D 106に挟まれた幅約1.8mの空閑地には九坪東面を限る築地壠S A 220の存在を考え、南北溝S D 106は築地壠雨落溝と判断した。北小路北側溝S D 2005とその北側の東西溝S D 114に挟まれた、幅約1.5mの空閑地には九坪南面を限る築地壠S A 221の存在を考え、東西溝S D 114は築地壠雨落溝と判断した。坪内南東隅では北小路北側溝S D 2005の北岸が崩壊し、宅地側である溝岸は大きく浸食されていた。築地壠S A 220・221はともに、北小路北側溝S D 2005の崩壊土上に厚さ約0.3m分の築成土が残存しており、北小路北側溝S D 2005北岸崩壊後に補修されたとわかる。溝S D 106・114はいずれも坪内南東隅で大きく氾濫して溝

幅が広くなる。溝S D 114は、H J第608次F発掘区東辺では、重複関係から2時期あることがわかり、古い南側のものを溝S D 114 a、新しい北側のものを溝S D 114 bとした。溝S D 114 bは遺構の重複関係から井戸S E 502・S K 607より新しいことがわかる。溝S D 118は、築地壠S A 221上で検出し、築地壠雨落溝と考える。溝S D 118内には半裁し削り抜いて製作した木樋を北から南へ向かって勾配が下がるように設置しており、宅地内の水を北小路北側溝S D 2005 bへと排水するためのものと考える。

南北溝S D 113は坪内東西1/2ラインに、南北溝S D 115は東西1/4ラインに、東西溝S D 117は南北1/4ラインにそれぞれ位置し、坪内区画施設とみられる。溝S D 116は西側の溝S D 115と平行しており、両溝間の幅約4mの空閑地を坪内道路とみることができる。なお、同じく九坪で行ったH J第541次調査区でも、東西1/4ライン付近で、平行して流れる南北溝S D 111・112を確認しており、これが溝S D 115・116と一連の溝である可能性も考えられる。

掘立柱列S B 217・218は、九坪南面築地壠S A 221上で検出し、九坪内に入る門と考える。重複関係から2時期あることが判明した。門S B 217の南側には木橋S X 818が、門S B 218の南側には木橋S X 819がそれぞれ位置する。門S B 217東側の柱穴には直径0.3mで、八角形に面取りを施した柱を据え、柱の根腐れを防止するためであろう、柱の周囲に粘土を巻いていた。門S B 217の東側柱穴および門S B 218の西側柱穴は、坪内の概ね東西1/6ラインに位置する。柱の重複関係から、門S B 217から門S B 218の順で、西から東へと建て替えられていることがわかる。

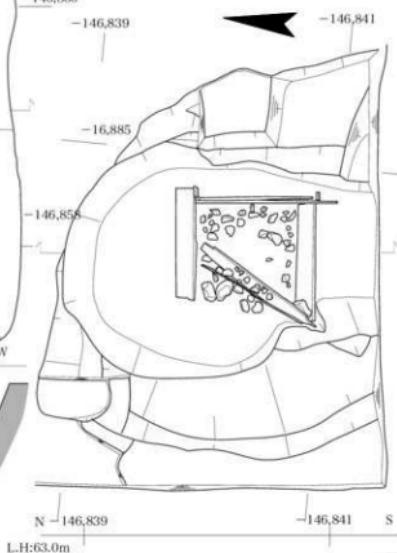
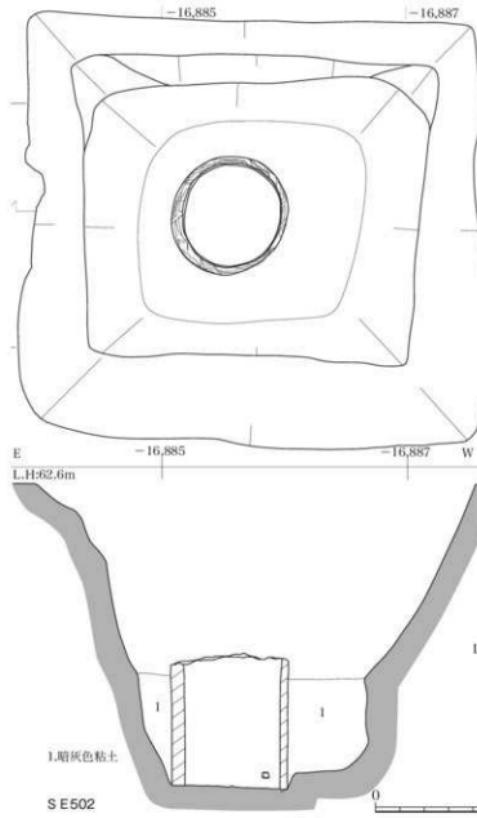
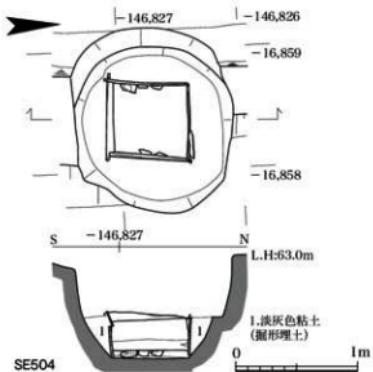
井戸S E 501は井戸枠が抜き取られており、枠組構造は不明であるが、湧水層まで達しており井戸と判断した。井戸S E 502は一本削り抜きの枠である。検出面から約1.4mまで掘り下げたところで、枠を確認した。枠材は丸太材をそのまま内削りしたものである。枠は径約1.0m、厚さは約0.1m、残存高約1.3mである。井戸S E 503は方形横板組で、下段の1段分が遺存していた。井戸S E 504は方形横板組で、下段の2段分が遺存していた。東側と西側の掘形底面には0.2m程の縁を並べ、その上に枠を据えている。枠内埋土から奈良三彩小壺・蓋などが出土した。奈良三彩小壺をX線撮影した結果、ガラス玉6点を確認した。井戸を埋める際に納置したものと考える。

埋納遺構S X 802はS E 502北側で検出した。土師器壺Aを正位に置き、土師器杯で蓋をする。甕内部のX線撮影で、金属片と錢貨片が写っていたが、掘り出したところ、それらしきものは無かった。埋納遺構S X 803は東面築地壠S A 220上で検出した。掘形内に土師器壺Aを正位に置く。

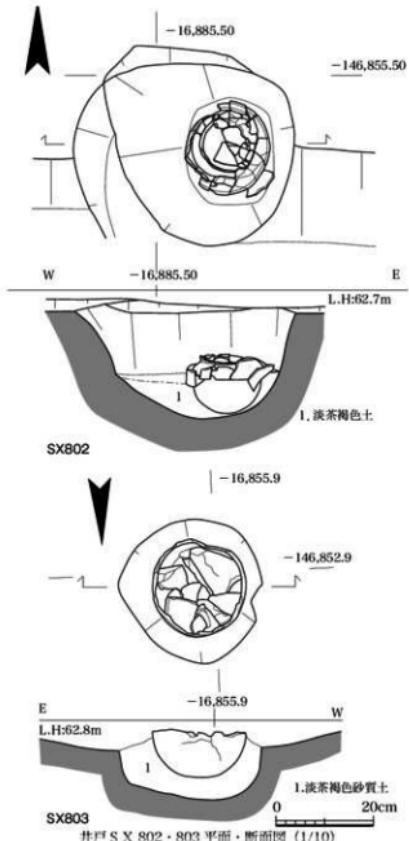
平城京跡(左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東西坊坊間東小路)  
の調査 第608次F・G発掘区・第622次A・B・C・D発掘区

X線撮影の結果、甕内に和同開珎5枚、ガラス玉10点以上、銀薄板2枚を確認した。検出位置から東面築地塀S A 220構築時の地鎮と考える。

十坪の遺構 東小路西側溝 S D 1011とその西側の南北溝 S D 123との間には幅約1.5mの空閑地があり、ここに築地塀S A 252を想定し、南北溝 S D 123はその雨落溝と考える。北小路南側溝 S D 2006とその南側の東西溝 S D 119の間は幅約2.4mの空閑地で、ここに北面築地塀S A 264を想定し、東西溝 S D 119はその雨落溝と考える。南北溝 S D 139は南から北へ向かって勾配を下げるところから、雨落溝 S D 119から北小路南側溝 S D 2006へ向けて排水するための暗渠排水路と考える。南北溝 S D 118も、同様に宅地内から北小路南側溝への排水施設と考える。



井戸 S E 502・503・504 平面・断面図 (1/40)



井戸 SX 802・803 平面・断面図 (1/10)

十五坪の遺構 北小路南側溝 S D 2006 とその南側の東西溝 S D 101 の間は幅約 2.4 m の空閑地で、ここに十五坪の北面を限る築地塀 S A 201 を想定し、東西溝 S D 101 はその雨落溝と考える。東小路東側溝 S D 1012 とその東側の南北溝 S D 104 との間には約 3.9 m の空閑地があり、ここに十五坪の西面を限る築地塀 S A 203 を想定し、東西溝 S D 104 はその雨落溝と考える。

十六坪の遺構 挖立柱建物 4 棟 (S B 293・295・298・302)、挖立柱列 8 条 (S A 294・296・297・299～301・303・304)、塀 2 条 (S A 305・306)、土坑 1 (S K 627)、溝 6 条 (S D 117・148・151～154) がある。

東小路東側溝 S D 1012 とその東側の南北溝 S D 117 b との間には約 2.1 m の空閑地があり、ここに十六坪の西面を限る築地塀 S A 305 を想定し、溝 S D 117 b はその雨落溝

を考える。北小路北側溝 S D 2005 とその北側の東西溝 S D 148 b との間には約 1.5 m の空閑地があり、築地構築時の板留めとみられる小柱穴を検出したことから、ここに十六坪の南面を限る築地塀 S A 306 を想定し、溝 S D 148 b はその雨落溝と考える。小柱穴から復原できる築地塀 S A 306 の基底幅は約 1.3 m である。築地塀 S A 305 の南端と築地塀 S A 306 の西端部分には厚さ約 0.2m の褐灰色粘砂があり、これを築成土と考える。雨落溝 S D 117 b・148 b の埋土は下から灰色粘土、茶灰色土である。溝 S D 117 b 溝底は、北から南へと勾配を下げており、十六坪内は南側の北側溝 S D 2005 へ排水していたと考える。

築地塀 S A 305・306 の接続部の下で、十六坪南西隅に沿って L 字状に屈曲する溝を確認した。位置関係から古い築地塀雨落溝と判断し、古い西面築地塀雨落溝を S D 117 a・古い南面築地塀雨落溝を S D 148 a とする。雨落溝 S D 117 a・148 a の埋土は下から灰色砂、褐灰色粘砂である。溝幅は堆積状況から両溝とも約 2.7 m 以上と推察できる。南北溝 S D 153・154 は、築地塀 S A 306 上で検出し、北から南へ勾配を下げることから、坪内から北小路北側溝 S D 2005 への排水を意図した築地暗渠と考える。築地暗渠 S D 153 には、木樁が埋められていた。木樁は残存長約 1.7 m で、厚さ約 5 cm の底板と両側の側板が残存していた。底板の幅は約 25cm、側板の高さは約 12cm で、木樁の内法幅は約 16cm である。

十六坪内の南北 1/4 ラインでは、平行する 2 条の東西溝 S D 151・152 を検出した。両溝間は幅 2.4 m あり、ここに東西方向の坪内道路 S F 904 を想定して、北側溝が S D 151、南側溝が S D 152 と考える。北側溝 S D 151 の埋土は下から灰褐色土、茶灰色土で、南側溝 S D 152 の埋土は灰褐色土である。南側溝 S D 152 は、発掘区東端で幅 1.0 m であったものが、西面築地塀雨落溝 S D 117 との合流部付近では幅 0.3 m に狭くなる。重複関係から南側溝 S D 152 は掘立柱建物 S B 298 より新しい。なお、坪内道路 S F 904 部分には、重複関係から北側溝 S D 151 より古い小柱穴が 2 条平行して並んでいた。これは発掘区外東側へ続く東西棟建物 S B 295 と復原したが、これら小柱穴を築地構築時の板留めの柱とみると、ここに築地塀があったとも考えられる。

掘立柱列 S B 293 は、西面築地塀 S A 305 上で検出し、十六坪に入る門と想定できる。柱間中央が坪内道路 S F 904 の道路心と一致し、坪内東西道路 S F 904 と同時期と考える。

東西方向の掘立柱列 S A 294 は坪内の概ね南北 1/4 分割ラインに位置する。坪内を区画する施設と考えるが、検出できたのは 1 段分である。掘立柱列 S A 294 は、遺構の重複関係から雨落溝 S D 117、坪内道路南側溝 S D 152 より古いことがわかる。

(原田憲二郎・大原 雄)

条坊間連造構一覧表

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)		
S F 1010	南北道路	長さ 34.0 以上 × 幅 5.5 ~ 6.0	—	—	東西坊坊間東小路。東西側溝心々間距離は 7.5 m。路面心の国土座標値は $X = -146,869.00$ , $Y = -16,849.20$ 。
S D 1011	南北溝	長さ 34.0 以上 × 幅 0.6 ~ 1.8	0.2 ~ 0.5	8~9世紀前半・土師器杯・皿・碗・甕・ 壺蓋器杯・甕・壺・瓶・丸瓦・平瓦	東西坊坊間東小路西側溝。溝心の国土座標値は $X = -146,869.00$ , $Y = -16,852.90$ 。五条条間北小路 S F 2004 を縦断する。
S D 1012	南北溝	長さ 34.0 以上 × 幅 1.1 ~ 2.1	0.2 ~ 0.5	8~9世紀前半・土師器杯・皿・頭須器 杯・甕・壺・瓶・新石器器・墨書き・土器 ・軒丸瓦 (6311 B-a・新型式)・軒平瓦 (6704 A)・丸瓦・平瓦	東西坊坊間東小路東側溝。溝心の国土座標値は $X = -146,869.00$ , $Y = -16,845.40$ 。五条条間北小路 S F 2004 を縦断する。
S F 2004	東西道路	長さ 90.0 以上 × 幅 3.5 ~ 5.5	—	—	五条条間北小路。南北側溝と々間距離 S D 2005 a では 6.7 m, S D 2005 b では 7.6 m。路面心の国土座標値は $X = -146,867.70$ , $Y = -16,860.30$ 。
S D 2005 a	東西溝	長さ 28.0 以上 × 幅 0.9 以上	0.5	8世紀後半～末期・土師器杯・碗・甕・壺・ 壺蓋器杯・甕・盤・杯・瓶・甕・墨書き土器・ 人面彫書土器・丸瓦・平瓦・銅削鉋板・木簡・ 漆舟・曲物底板・甕・漆塗陶器・盒蓋・木 質支脚・石鏡・鐵針・錢貨 (和銅開闢・ 萬年通寶)	五条条間北小路北側溝。溝心の国土座標値は S D 2005 a では $X = -146,864.80$ , $Y = -16,863.60$ , S D 2005 b では $X = -146,863.90$ , $Y = -16,860.30$ 。東西坊坊間東小路 S F 1010 を横断して流れる。このことから側溝地盤には橋が想定されたが、橋脚と所定できるものはなかった。たゞ、橋脚付近では径 5cm の白鳥糞が先端を丸らせた丸太杭を 1 本確認しており、これらが橋脚地盤から為のものである。また、漆舟付近で一度崩壊しておる。その後復元から古いものを新しいものをもじとした。2005 a の船は北岸が 2005 b の船 により削ぎ落を受け不明だが、航行 S X 814 を 2005 a 時の北岸護岸施設とみると、約 2.5 m に復原できる。
S D 2005 b				8世紀後半～10世紀後半・土師器杯・皿・碗・ 壺・高杯・甕・壺蓋器・甕・瓶・漆・頭須器・漆・ 圓筒・盤・杯・甕・平瓦・銅削鉋板・木簡・ 漆舟・曲物底板・甕・漆塗陶器・盒蓋・木 質支脚・石鏡・鐵針・錢貨 (和銅開闢・ 萬年通寶)	
S D 2005 c		長さ 90.0 以上 × 幅 1.5 ~ 4.4	0.6 ~ 1.1	8世紀後半～10世紀後半・土師器杯・皿・碗・ 壺・高杯・甕・壺蓋器・甕・瓶・漆・頭須器・漆・ 圓筒・盤・杯・甕・平瓦・銅削鉋板・木簡・ 漆舟・曲物底板・甕・漆塗陶器・盒蓋・木 質支脚・石鏡・鐵針・錢貨 (和銅開闢・ 萬年通寶)・木製馬頭形・車軸・石鏡・漆舟 ・鐵舟・鐵鏈	
S D 2006	東西溝	長さ 19.0 以上 × 幅 1.0 ~ 2.0	0.2 ~ 0.3	8世紀後半～10世紀中頃・土師器杯・皿・碗・ 壺・高杯・甕・壺蓋器・甕・漆・黑色土器・A型・ B型・新羅土器・軒丸瓦 (6134 B・古大内 式 A型)・軒平瓦 (6664 F)・丸瓦・平瓦	五条条間北小路南側溝。溝心の国土座標値は $X = -146,871.50$ , $Y = -16,860.80$ 。
S D 122	南北溝	長さ 3.0 × 幅 0.5	0.3	サツカイト削器・8世紀後半以降・土師 器杯・甕・壺・漆・頭須器・漆・甕	溝底は南から北へ緩やかに下っており。五条条間北小路南側溝 S D 2006 から北側溝 S D 2005 への排水施設と考える。
S D 123	南北溝	長さ 4.0 × 幅 0.5	0.3	サツカイト削器・8世紀後半以降・土師 器杯・甕・漆・頭須器・漆・甕	溝底は南から北へ緩やかに下っており。五条条間北小路南側溝 S D 2006 から北側溝 S D 2005 への排水施設と考える。
S X 810	—	南北 1.5 m	—	—	東西坊坊間東小路西側溝 S D 1011 西岸付近で検出した木杭列。樹皮が残る自然木の先端を丸めた丸太杭を用いる。杭の径は 0.1 m 前後で最も長いもので残存長は 0.4 m。護岸施設。
S X 811	—	東西 4.0 m	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 北岸付近で検出した木杭列。樹皮が残る自然木の先端を尖らした丸太杭を用いる。杭の径は 0.1 m 前後で最も長いもので残存長は 0.6 m。護岸施設。
S X 812	—	東西 1.9 m	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 北岸付近で検出した木杭列。角杭を用い、垂直に打ち込む。各杭間の間隔は広く、杭間に板を打ち付けた。丸太杭からの梁柱型 S D 118 からの排水を受ける構造。
S X 813	—	東西 3.0 m × 南北 1.2 m	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 中央付近で検出した木杭列。樹皮が残る自然木の先端を尖らした丸太杭を用いる。杭の径は 0.1 m 前後。残存長は 0.6 m。垂直に打ち込む。最も長いもので残存長は 0.8 m。護岸施設。
S X 814	—	東西 4.0 m	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 中央付近で検出した木杭列。角杭を用い、垂直に打ち込む。最も長いもので残存長は 0.6 m。護岸施設。
S X 815	—	—	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 中央付近で検出した木杭列。12 本確認。樹皮が剥離自然木の先端を尖らせた丸太杭を用いる。杭の径は 0.05 m 前後。最も長いもので残存長は 0.45 m。
S X 820	不整形	南北 0.3 × 東西 0.3	0.35	土師器甕	五条条間北小路 S F 2004 の路面上に位置する埋納構造。掘形内に土師器甕を貯え、その上部底部を打ちいた土師器甕 A を転ぶ。
S X 821	不整形	東西 0.6 × 南北 0.9	0.3	土師器甕・壺・錢貨 (和銅開闢)	五条条間北小路 S F 2004 の路面上に位置する埋納構造。土師器甕 A を 2 つ合せし。壺は土師器甕 B を 2 つ置く。壺の下部で錢貨 4 枚確認。
S X 822	—	東西 23.0 m	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 北岸付近で検出した木杭列。樹皮が残る自然木の先端を尖らせた丸太杭を用いる。杭の径は 0.1 m 前後で最も長いもので残存長は 0.7 m。護岸施設。

条坊間連造構一覧表

遺構番号	行方向	規模	堀行全長	柱間寸法 (m)	備考
S X 803	東西	2	4.8	2.4 等間	五条条間北小路北側溝 S D 2005 に架かる橋。橋脚は掘立柱で、柱穴深さ 0.4 ~ 0.45 m, 柱底とみられる木材は、1 枚の哨春長 1.3 m, 残存幅 0.14 m, 残存厚 2cm, もう 1 枚は哨春長 1.1 m, 残存幅 0.1 m, 残存厚 3cm。
S X 809	東西	2	4.8	2.4 等間	東西坊坊間東小路東側溝 S F 1012 に架かる橋。橋脚は掘立柱、柱穴深さ 0.4 m。
S X 816	東西	1 以上	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 に架かる橋。橋脚は掘立柱、柱穴深さ 0.5 m。
S X 817	東西	1	4.8	4.8	五条条間北小路北側溝 S D 2005 に架かる橋。橋脚は掘立柱、柱穴深さ 0.4 m。
S X 818	南北	1	1.8	1.8	五条条間北小路北側溝 S D 2005 に架かる橋。橋脚は掘立柱、柱穴深さ 0.25 m。
S X 819	東西	1	1.7	1.7	五条条間北小路北側溝 S D 2005 に架かる橋。橋脚は掘立柱、柱穴深さ 0.4 m。

九坪内検出遺構(築地塀・溝・土坑・埋納遺構)一覧表

遺構番号	剖面		主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)		
S K 02	長円形	東西1.1×南北0.7	弥生土器底広口壺	弥生時代後期。
S K 03	長円形	東西2.3×南北1.5	弥生土器底・高杯・短頸壺	弥生時代中期末～後期初頭。
S A 220	—	長さ34.0以上×幅1.8	—	九坪東面築地塀。
S A 221	—	長さ70.0以上×幅1.5	—	九坪南面築地塀。東端付近で厚さ0.3m分の盛土が残存。
S D 106	南北溝	長さ34.0以上×幅1.6～5.4	8～10世紀前半：土師器底・皿・甕・高杯・甕・須恵器底・皿・甕・壺・甕・製陶土器・丸瓦・平瓦	九坪東面築地塀雨落溝。九坪南面築地塀雨落溝S D 114との合流部では西側に大きく広がる。
S D 113	南北溝	長さ8.5以上×幅0.7～1.2	8世紀代：土師器底・皿・甕・須恵器底・杯・甕	九坪の東西約1/2ラインに位置する。
S D 114-a	東西溝	長さ7.5×幅1.0～1.5	8世紀代：土師器底・皿・甕・須恵器底・甕	九坪南面築地塀雨落溝。両溝とも西はY=-16,902辺りで途切れ、さらにS D 114 aは、東が608次F発掘区とG発掘区間に途切れる。
S D 114-b	東西溝	長さ46.0以上×幅9.2以上	8世紀代：土師器底・皿・甕・須恵器底・甕・壺・土器・墨書き土器・継縫土器・丸瓦・平瓦	S D 114 bは九坪東面築地塀雨落溝S D 106との合流部では途切れる。
S D 115	南北溝	長さ1.0以上×幅1.2	8世紀後半：土師器底・皿・甕・須恵器底・杯・甕・甕・墨書き土器	九坪内東西1/4ラインに位置する。S E 503より古い。
S D 116	南北溝	長さ14.0以上×幅0.5～2.0	8世紀代：土師器底・皿	S D 115と平行する。H J 第541次調査のS D 111と一連の可能性。S B 216により新しく、S A 215より古い。
S D 117	東西溝	長さ7.0×幅2.0以上	サマカイト器片・石器、8世紀末～9世紀初頭：土師器皿・皿・甕・高杯・甕・須恵器皿・杯・蓋・皿・甕・壺・継縫土器・製陶土器・丸瓦・平瓦	九坪内南北1/4ラインに位置する。
S D 118	南北溝	長さ2.8×幅0.4	出土遺物なし	九坪内から、五条条間北小路北側溝へ排水する築地塀暗。
S K 606	長楕円形	南北9.0×東西2.4以上	8世紀後半：土師器皿・皿・甕・高杯・甕・須恵器皿・甕	S B 212より新しい。
S K 607	長方形	南北3.6×東西5.0以上	8世紀代：土師器皿・皿・甕・墨書き土器・製陶土器・輪羽口・丸瓦・丸瓦	8世紀代：土師器皿・甕・金屬片・鉄質(鐵文不明)
S X 802	不整円形	南北0.4×東西0.32	8世紀代：土師器皿・甕・金屬片・鉄質(鐵文不明)	丹戸S E 502北側で確認した埋納遺構。腹面に土師器蓋を置き、土師器蓋で蓋を覆す。蓋に金屬片と鉄質を納める。
S X 803	円形	径0.25	8世紀代：土師器皿A・鉄質(和同開珎)	九坪東面築地塀暗部で確認した埋納遺構。腹面内に土師器皿Aを正位に置く。蓋内に鉄質・銀薄板確認。

九坪内検出遺構(掘立柱建物・列)一覧表

遺構番号	棟方向	規格		桁行	梁行	柱間寸法(m)	備考
		桁行×梁行	(m)				
S A 203	南北	2以上	4.2以上	2.1等間	柱穴の深さ0.3～0.4m。		
S A 204	東西	6以上	9.6以上	1.6等間	柱穴の深さ0.1～0.5m。		
S B 205	南北	2以上×2	2.8以上×3.6	1.4等間	1.8等間	東側に柱穴。柱の出は2.1m。柱穴の深さ0.2～0.5m。	
S B 206	東西	3×2	北側5.8×西側3.8 南側5.6×東側4.0	北側5.8 南側5.6 西側5.8 東側5.6 6.0 6.0	1.8～1.8～2.2 2.0～2.0～1.6	西から 西から 西側1.9等間 西から 東側2.0等間	柱穴の深さ0.1～0.6m。九坪南面築地解雨落溝S D 114 bより古い。
S A 207	南北	5以上	10.5以上	2.1等間	柱穴の深さ0.4～0.9m。掘立柱列S A 208より古い。		
S A 208	南北	3	7.2	2.4等間	柱穴の深さ0.3～0.4m。掘立柱列S A 207より新しい。		
S A 209	東西	5	6	1.2等間	柱穴の深さ0.2m。		
S B 210	南北	5×1	II III	3.8 3.8	2.2等間	柱穴深さ0.1～0.25m。溝S D 115より新しい。	
S B 211	南北	3×2	5.4	3.6	1.8等間	柱穴深さ0.2～0.4m。掘立柱建物S B 216より新しい。	
S B 212	南北	2×2	3.6	3.2	1.8等間	柱穴深さ0.2～0.4m。	
S B 213	東西	3以上×2	7.8以上	3.2	2.6等間	柱穴深さ0.3～0.4m。	
S A 214	南北	2	4	2.0等間	柱穴深さ0.15～0.3m。		
S A 215	東西	8以上	13.6以上	西から2.1～1.4～2.3～1.7 -2.7～1.7～1.7	柱穴深さ0.05～0.2m。溝S D 116より古い。		
S B 216	南北	1以上×2	1.5以上	3.2	1.5 西から1.5	柱穴深さ0.15～0.3m。掘立柱建物S B 211、溝S D 116より古い。	
S B 217	東西	1	3.3	3.3	門、東側の柱穴は九坪東西約1/6ラインに位置する。柱穴の深さ0.5m。		
S B 218	東西	1	3.3	3.3	門、西側の柱穴は九坪東西約1/6ラインに位置する。柱穴の深さ0.6～0.65m。		

九坪内検出遺構(井戸)一覧表

遺構番号	剖面		井戸寸法	主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)			
S E 501	方形	東西1.05×南北1.1	1.2	—	8世紀代：土師器皿・須恵器皿
S E 502	方形	東西3.6×南北3.8	2.45	-本削り抜き	8世紀後半下(4年):土師器皿・皿・甕・須恵器皿・甕・壺・墨書き土器・輪羽口・丸瓦・平瓦
S E 503	円形	南北2.6以上×東西3.2	1.1	方形横組版	8世紀後半下(4年):土師器皿・皿・甕・須恵器皿・甕・壺・墨書き土器・輪羽口・丸瓦・平瓦
S E 504	円形	—	0.9	方形横組版	8世紀後半下(4年):土師器皿・皿・甕・須恵器皿・甕・壺・墨書き土器・輪羽口・丸瓦・平瓦

## 平城京跡(左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東西坊坊間東小路)

の調査 第608次F・G発掘区・第622次A・B・C・D発掘区

十坪内検出遺構一覧表

遺構番号	掘形			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)		
S A 252	—	長さ 4.5 以上 × 幅 1.5	—	—	十坪東面築地解。
S A 264	—	長さ 7.5 以上 × 幅 2.4	—	—	十坪北面築地解。
S D 119	東西溝	長さ 7.0 以上 × 幅 1.0	0.5	8世紀代：土師器皿・甕・高杯・須恵器 柱か皿・甕・土馬・平瓦	十坪北面築地解雨落溝。
S D 123	南北溝	長さ 0.7 以上 × 幅 1.0	0.2	出土遺物なし	十坪東面築地解雨落溝。
S D 139	南北溝	長さ 2.5 × 幅 0.2	0.1	出土遺物なし	十坪内から。五条条間北小路南側溝へ排水する築地暗渠。

十五坪内検出遺構(築地塀・溝)一覧表

遺構番号	掘形			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)		
S A 201	—	長さ 8.5 以上 × 幅 2.4	—	—	十五坪北面築地解。
S A 203	—	長さ 2.5 以上 × 幅 3.9	—	—	十五坪西面築地解。
S D 101	東西溝	長さ 5.0 以上 × 幅 1.0	0.2	出土遺物なし	十五坪北面築地解雨落溝。
S D 104	南北溝	長さ 1.0 以上 × 幅 2.7	0.2 ~ 0.3	土師器・須恵器	十五坪西面築地解雨落溝。

十六坪内検出遺構(築地塀・溝・土坑・道路)一覧表

遺構番号	掘形			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)		
S A 305	—	長さ 11.5 以上 × 幅 2.1	—	8世紀代：土師器杯・高杯・甕・須恵器 杯・甕・製造柱・平瓦	十六坪西面築地解。
S A 306	—	長さ 9.0 以上 × 幅 1.5, 基底幅 1.3	—	8世紀代：土師器杯か皿・甕・須恵器杯・ 甕	十六坪南面築地解。
S D 117 b	南北溝	長さ 19.0 以上 × 幅 2.4 ~ 2.7	0.3	サヌカイト石塗・洞片・8世紀末~9世 紀初頭：土師器杯・皿・碗・高杯・ 須恵器杯・甕・壺・蓋・土馬・盆・盤・ 縦列土器・製造土器・丸瓦・平瓦	十六坪西面築地解雨落溝。掘立柱列 S A 294・299 より新し い。
S D 148 b	東西溝	長さ 7.0 以上 × 幅 3.0	0.4	8世紀後半~9世紀初代：土師器杯・皿・碗・ 高杯・須恵器杯・甕・壺・蓋・土馬・盆・盤・ 縦列土器・製造土器・丸瓦・平瓦	十六坪南面築地解雨落溝。
S D 151	東西溝	長さ 5.5 以上 × 幅 1.5	0.2 ~ 0.3	8世紀末~9世紀初頭：土師器杯・皿・碗・ 高杯・甕・壺・須恵器杯・甕・蓋・平瓦・丸瓦	坪内東西道路 S F 904 の北側溝。掘立柱建物 S B 295 より新 しい。
S D 152	東西溝	長さ 5.5 以上 × 幅 0.3 ~ 1.0	0.05 ~ 0.15	8世紀代：土師器杯か皿・甕・須恵器杯・ 甕・杯・壺・蓋・平瓦・丸瓦	坪内東西道路 S F 904 の南側溝。掘立柱列 S A 294・296・ 絶柱建物 S B 298 より新しい。
S D 153	南北溝	長さ 1.5 以上 × 幅 0.5	0.8	サヌカイト楔形石器・8世紀代：土師器 杯・皿・碗・壺・吉富土器	坪内から、五条条間北小路北側溝へ排水するための築地暗渠。
S D 154	南北溝	長さ 1.5 以上 × 幅 0.5	0.2 ~ 0.3	8世紀代：土師器杯か皿・高杯・甕・ 須恵器杯・壺・吉富土器	坪内から、五条条間北小路北側溝へ排水するための築地暗渠。
S F 904	東西道路	長さ 6.0 以上 × 幅 2.4	—	—	ほぼ十六坪内南北 1/4 分割ラインに位置する坪内道路。掘立 柱建物 S B 295 と隣接させて、坪内土器の可能性も。
S K 627	楕円形	南北 2.0 × 東西 2.0	0.2	サヌカイト石塗・8世紀末~9世紀初頭： 土師器杯・皿・碗・蓋・壺・甕・須 恵器杯・甕・高杯・製造土器・縦列土器・ 土馬・平瓦	掘立柱列 S A 296・297・絶柱建物 S B 298 より新しい。

十六坪内検出遺構(掘立柱建物・列)一覧表

遺構番号	棟方向	規模			柱行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m)	備考
		柱行	× 梁行	(m)				
S B 293	南北	1		2.7		2.7		十六坪南北約 1/4 ラインに位置しており、十六坪西面築地解上に位置するこ とから、門の可能性を考える。柱穴深さ約 0.2 m。
S A 294	東西	1 以上		2.4 以上		2.4		坪内東西道路 S F 904 南側溝 S D 152・十六坪西面築地解雨落溝 S D 117・ 掘立柱列 S A 296 より古い。
S B 295	東西	1 以上 × 1	3.0 以上	2.1	3.0	2.1		坪内東西道路 S F 904 北側溝 S D 151 より古い。柱穴深さは約 0.4 m。
S A 296	南北	2 以上		3.0 以上		1.5 等間		十六坪西壁を示し、発掘区外南側へ続く掘立柱解の可能性を考える。礎盤を 用いる。柱穴深さは約 0.3 m。掘立柱列 S A 294・絶柱建物 S B 298 より新 しく。坪内東西道路 S F 904 南側溝 S D 152・土坂 S K 627 より古い。
S A 297	南北	1 以上		3.0 以上		1.5 等間		発掘区外南側へ続く掘立柱解の可能性を考える。掘立柱列 S A 296 から 1.5 m 東へ続く。柱間も同じ。柱穴深さも同じ。約 0.3 m。絶柱建物 S B 298 より 新しく。土坂 S K 627 より古い。
S B 298	—	3 以上 × 3 以上	東西 4.5 以上	南北 4.5 以上	東西 1.5 等間	南北 1.5 等間	2.7	十六坪西壁を示し、発掘区外北側へ続く掘立柱解の可能性を考える。柱穴深 さ 0.5 ~ 0.6 m。掘立柱列 S A 296・297・坪内東西道路 S F 904 南側溝 S D 152・土坂 S K 627 より古い。
S A 299	南北	2 以上		4.2 以上		2.1 等間		十六坪西壁を示し、発掘区外北側へ続く掘立柱解の可能性を考える。柱穴深 さ 0.3 ~ 0.4 m。十六坪西面築地解雨落溝 S D 117 より古い。
S A 300	南北	2 以上		4.2 以上		2.1 等間		十六坪西壁を示し、発掘区外北側へ続く掘立柱解の可能性を考える。柱穴深 さ 0.3 m。柱間は異なるが、掘立柱列 S A 296 とは同じ南北 1/4 ラインに位置し、 これと連携の可能性もある。S A 299 と柱筋を備える。
S A 301	南北	2 以上		4.2 以上		2.1 等間		十六坪西壁を示し、発掘区外北側へ続く掘立柱解の可能性を考える。柱穴深 さ 0.4 ~ 0.5 m。
S B 302	東西	1 以上 × 2	2.1 以上	4.2	2.1	2.1 等間		西側柱列は中央柱がその両側の柱に比べて浅く、これを妻柱とみて、発掘区 外北側へ続く東西建物を考える。柱穴の深さ約 0.6 m。西妻柱は約 0.4 m。
S A 303	南北	2 以上		3.6 以上		1.8 等間		発掘区外北側へ続く掘立柱解の可能性を考える。柱穴深さ 0.4 m。
S A 304	東西	2 以上		4.2 以上		2.1 等間		十六坪南壁を示し、発掘区外東側へ続く掘立柱解の可能性を考える。柱穴深 さ 0.2 ~ 0.3 m。

#### IV 出土遺物

6箇所の発掘区を合わせて、遺物整理箱で約260箱分の遺物が出土した。これらのうち、主な出土遺物について、以下に述べる。

##### 1. 土器類

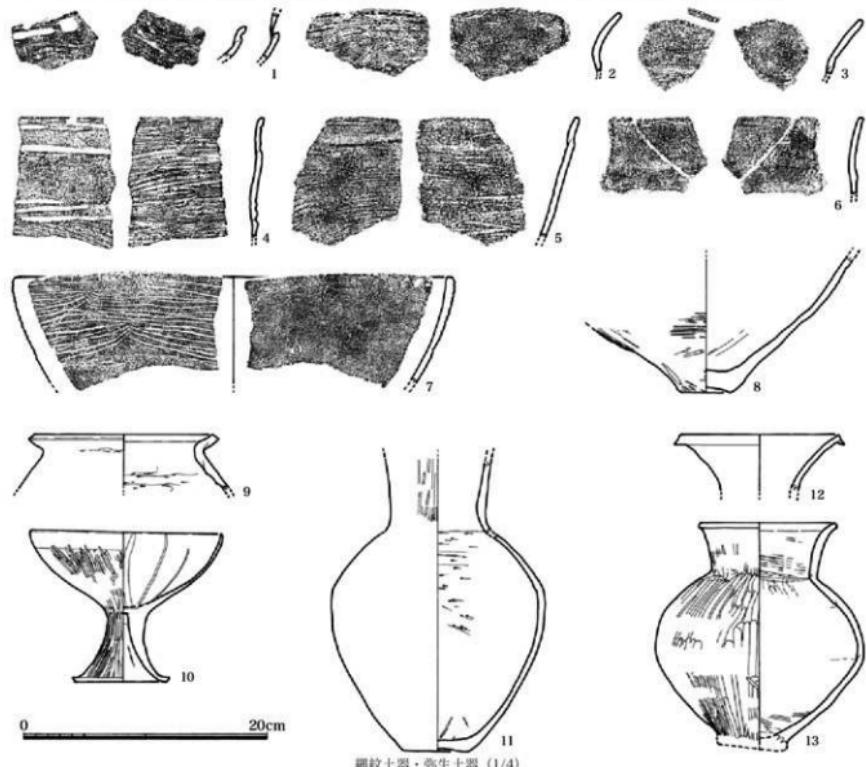
土器類には、縄紋土器・弥生土器、8~9世紀の土師器・須恵器・統一新羅陶器・唐三彩・奈良三彩・黒色土器A類、灰釉陶器・輸入陶磁器、12世紀後半~13世紀の瓦器碗、17~18世紀の陶磁器がある。

**縄紋土器** 第608次G発掘区と第622次A・B・C・D発掘区で確認した縄文時代の河川から总数1,214点の縄紋土器片が出土した。縄文後末期~晚期中葉頃の土器片が大半を占めるが、中期末~後期前半頃の土器片も少量ながら混在している。晚期後半の突帯文土器は、今回の調査区内では出土していない。

1は波状口縁の深鉢あるいは浅鉢で、波頂の突起に伴う

と思われる半円形の割りが口縁の一部に残る。口縁部外面に沿って2条の凹線があり、波頂下に一つの卷貝压痕がある。2~6は深鉢の口縁部である。2は口縁部外面に横方向の条痕が残り、体部外面をケズリ調整する。3は波状口縁で、口唇部に刻目があり、体部外面をケズリ調整する。4は2段に屈曲して外反し、上段に2条、下段に3条の沈線をめぐらせる。内外面に条痕が残る。5の口縁部は、段を付けて短く外反する。内外面に条痕が残る。6は口縁部が直立気味に外反し、体部外面をケズリ調整する。7は浅鉢の口縁部で、復原口径36.0cm。口縁部外面に多重弧線文を入れる。8は深鉢の底部で、底面が壅む。内外面の一部に条痕が残る。

これらの土器は、1が宮殿式、4・5が滋賀里1式、7が滋賀里2式、2・3・6が縦原式の範疇に相当しよう。1・2・4・5・7・8は第622次B発掘区内の南岸付近、3・6は第622次C発掘区内からの出土品である。



縄紋土器・弥生土器 (1/4)

**弥生土器** 9～11は第622次A発掘区の土坑SK03出土土器である。9は甕で、復原口径14.7cm。体部内面をケズリ調整する。10は高杯で、残存部での器高12.2cm・復元口径15.6cm。口縁部を除く外表面をタテ方向にヘラミガキし、杯部内面に粗い放射状の暗文を入れる。11は口縁部を欠失するため断定はできないが、短頸甕と思われる。外面をミガキ調整するが、表面風化のためよくみえない。体部内面は、上半部をヘラケズリ、下半部を板ナデする。これらの土器は、大和第V様式の範疇に属する。

12～13は第608次F発掘区の土坑SK02出土土器である。この他に別個体の広口甕口縁部片1点があり、土坑SK02出土土器はすべて広口甕となるのが大きな特徴である。口縁端部を下方に拡張する例(12)2点と拡張しない例(13)がある。12は復原口径12.9cmで、表面風化のため調整がよくみえない。13は底部を欠失するが、概ね18.8cm前後の器高に復原できる。復原口径11.05cmで、外表面をタテ方向にヘラミガキする。これらの土器は、大和第VI～3様式の範疇に相当しよう。  
(鍾方正樹)

**奈良～平安時代の土器** 遺物整理箱で99箱分出土した。条坊側溝からの出土が大半であり、五条条間北小路〔以下「北小路」と略称する〕北側溝SD2005が最も多い。8世紀後半～9世紀初頭の時期を示す土器が多く、8世紀前半と9世紀前半～10世紀前半の土器はごく少量である。以下に主な出土土器について概述する。

**埋納構造SX821出土土器(1～4)** 1・2は土師器壺Bで、体部は開き気味である。口縁部内外面はヨコナデ調整で、体部外表面は指頭圧痕が残る。3・4は土師器甕Aである。3が上段、4が下段土器である。3は球胴状を呈するとみられる。口径28.0cm・残存高8.3cmである。4は体部内面にハケメ調整と当て具痕跡が残る。口径27.4cm・器高26.4cmである。

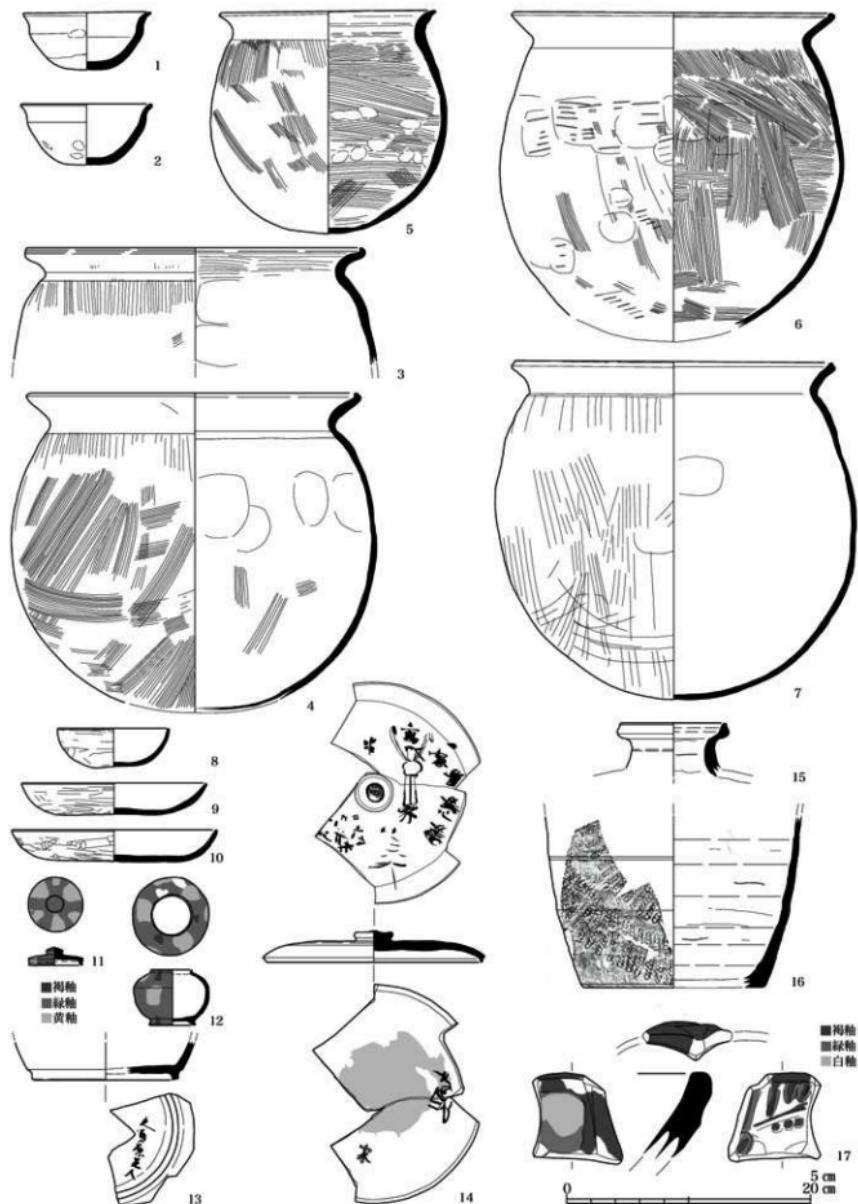
**埋納構造SX820出土土器(5～7)** 5～7は土師器甕Aである。6が上段、5が下段土器である。7は下段周囲から破片で出土し、接合の結果、ほぼ完形に復原できた。5の口縁部は器厚が0.9cmと肥厚する。体部外面上位にタテハケ、それ以下と体部内面はハケメ調整。内面は体部中位と底部に指頭圧痕による凹凸が残る。口径17.8cm・器高18.3cm。6・7は直線に伸びる口縁と外傾する端面を有する。6は体部外面上にハケメ調整と叩き痕跡が、体部上端には粘土積み上げ痕跡が残る。体部内面は細いハケメ調整と当て具痕跡が残る。口径26.5cm・器高27.0cm。7は体部外全体に叩き痕跡とハケメ調整、体部内面に当て具痕跡が残る。口径26.6cm・器高27.0cm。叩き痕跡が見られることから、8世紀末～9世紀前半頃の土器とみられる。

**井戸SE504枠内出土土器(8～12)** 8は土師器椀Aで、外表面全体をヘラケズリ調整する。口径9.05cm・器高3.25cm。9・10は土師器皿Aで、いずれも外表面全体をヘラケズリ調整する。9は口径15.1cm・器高2.65cm、10は口径16.9cm・器高2.6cm。11は完形の奈良三彩小壺蓋で、全体に淡黄釉を施釉後、緑釉をつまみから放射状に6方向に施釉する。褐釉は頂部外表面の縁部寄りに施釉する。口径4.4cm・器高1.5cm。12は11と組み合う完形の奈良三彩小壺で、球胴の体部と短い口縁部を有する。内外面ともロクロナデ調整。淡黄釉を全体に施釉した後、緑釉を肩部、体部中央、高台付近の各段に淡黄釉を大小の鹿子斑状に残して施釉する。褐釉は小鹿子斑の周囲を録取る。口径3.5cm・器高4.5cm。8世紀末～9世紀初頭の土器とみられる。

**墨書き器(13～14)** 総数118点が出土した。出土遺構の内訳は、北小路北側溝SD2005aが7点・2005bが87点、東四坊間東小路〔以下「東小路」と略称する〕東側溝SD1012が3点、九坪南面築地壟雨落溝SD114bが4点、九坪南北溝SD115が2点、十六坪南面雨落溝SD148が1点、十六坪南面築地壟暗渠SD153が1点、九坪井戸SE502が3点、九坪土坑SK607が1点、九坪南面築地壟築成土SA221が2点、耕作に伴う溝が3点、近世土坑が2点、遺物包含層が2点である。このうち、判読できた36点については以下の一覧表にまとめた。13は須恵器杯Bの底部外面に「久須原足人」という人名を墨書きする。北小路北側溝SD2005bから出土した。14は須恵器杯蓋

墨書き器一覧表

番号	次数	出土箇所	種類	器種	記載位置	転文
1		SD2005a第2層	須恵器	杯カム	底部外表面	奈
2		SD2005a第3.2層	須恵器	杯カム	底部外表面	（三カ）口
3		SD2005b第2層	須恵器	杯カム	底部外表面	東カ
4		SD2005b第3.1層	須恵器	杯カム	底部外表面	質
5		SD2005b第3.3層	上階器	杯カム	底部外表面	大
6		SD2005b第3.3層	上階器	杯カム	底部外表面	（三カ）
7	608	SD2005b第3.3層	須恵器	杯B	底部外表面	久須原足人
8	-F	SD2005b第3.3層	須恵器	杯B	底部外表面	本
9		SD2005b第3.3層	須恵器	杯カム	底部外表面	カ
10		SD2005b第3.3層	須恵器	杯カム	底部外表面	カ
11		SD2005b第3.3層	須恵器	杯カム	底部外表面	（人名）
12		SD2005b第3.3層	須恵器	杯カム	底部外表面	（人名）
13		SD2005b第3.3層	須恵器	杯カム	底部外表面	（大）合
14		SD2005b第3.3層	須恵器	杯カム	底部外表面	（大）合
15		SD114b	須恵器	杯カム	底部外表面	（大）合
16	608	SD114b	須恵器	杯カム	底部外表面	（大）合
17	-G	SD114b	須恵器	杯カム	底部外表面	（大）合
18		SD502井内	須恵器	杯カム	底部外表面	春
19		SD2005b第2層	上階器	杯カム	底部外表面	（南カ）
20	622	SD2005b第3.3層	上階器	杯カム	底部外表面	（角カ）
21	-B	SD2005a	上階器	高杯	底部外表面	井
22		SD2005b	須恵器	杯カム	底部外表面	（三カ）
23		SA221	須恵器	杯A	底部外表面	杯
24		近世土坑	須恵器	杯カム	底部外表面	（鳥カ）
25		SD2005b第1層	須恵器	杯蓋	底部外表面	（鳥カ）
26		SD2005b第1層	須恵器	杯B	底部外表面	清または諸□
27		SD2005b第2層	須恵器	杯カム	底部外表面	（鳥カ）
28		SD2005b第2層	須恵器	杯カム	底部外表面	（鳥カ）
29		SD2005b第2層	須恵器	杯A	底部外表面	（鳥カ）
30	622	SD2005b第2層	須恵器	杯カム	底部外表面	（鳥カ）
31	-D	SD2005b第2層	須恵器	杯カム	底部外表面	奈
32		SD2005b第2層	須恵器	杯A	底部外表面	井
33		SD2005b第2層	須恵器	杯蓋	底部外表面	（中）
34		SD2005b第2層	須恵器	杯B	底部外表面	（中）
35		SD2005b第2層	須恵器	杯B	底部外表面	井
36		SD2005b第2層	須恵器	杯蓋	底部外表面	（東）



奈良～平安時代の土器 (1～16は1/4, 17は実物大)

の頂部内面に輪郭を線取りした「家」の字を、頂部外面には絵と「家/家/器」などの文字を墨書する。九坪井戸SE 502枠内から出土した。

統一新羅土器(15・16) 第622次B・D発掘区から总数61片が出土した。出土遺構の内訳は、北小路北側溝SD 2005 bが13点、東小路東側溝SD 1012が27点、北小路南側溝SD 2006が2点、北小路北側溝SD 2005あふれの埋土が18点、耕作に伴う素掘溝が1点である。これらの所などが東小路SF 1010と北小路SF 2004の交差点周辺から出土しており、胎土・焼成・調整技法から同一個体になるものとみられる。15は壺の口頭部である。外面ともロクロナデ調整。外側は暗青灰色で、断面は灰赤色に焼き上げる。口径8.6cm。北小路北側溝SD 2005 bと東小路東側溝SD 1012出土分が接合した。16は壺の底部で、平底である。体部内外面はロクロナデ調整、底部外面はロクロケズリ調整。内面には粘土積み上げ痕跡が残る。外面は一条の沈線を巡らした後、綫長連続文をジグザグ状に施す。色調は15と同じである。底径15.0cm。北小路北側溝SD 2005 b出土品と、東小路東側溝SD 1012と北小路南側溝SD 2006との合流部出土品が接合した。

唐三彩(17) 第622次F発掘区内の北小路北側溝SD 2005 bから1点出土した。17は細片ではあるが、輪花形の杯か碗の器形になるものとみられる。外面には花弁などの印花文を施す。内面は白釉、緑釉、褐釉を、外面は褐釉と花弁に僅かな綠釉を施す。釉薬には細い貫入が見られる。胎土は軟質で白色を呈する。  
(大原 雄)

## 2. 瓦類

瓦類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が150箱分出土した。ここでは軒瓦について記す。軒瓦の型式と出土点数の内訳は別表のとおりで、これらのうち、遺構から出土したもののは遺構規模一覧表に示した。

出土した軒瓦のうち、軒平瓦6666型式A種と6671型式I a種は十五坪の主要瓦であり、軒平瓦6702型式A種は十坪の主要瓦であることが、過去の調査で判明している。2点出土した新型式軒丸瓦について報告する。

Iは単弁蓮華紋。古代山陽道賀古駅家に比定されている、兵庫県加古川市の古大内遺跡出土品を標識名とする、「古大内式軒丸瓦」のI型と同范<sup>1)</sup>であり、単弁13弁蓮華紋軒丸瓦とわかる。中房蓮子はI+6に配置し、中心蓮子は周囲の蓮子より一回り大きい。蓮弁は輪郭線で囲まれた子葉からなる。外縁は素紋の直立線である。瓦当裏面に接合溝を設け、丸瓦を接合する。瓦当側面下半部の一部には瓦当面から1.2cm幅でめぐる面があり、範の側面の痕跡とみられる。胎土は密、焼成はやや軟質、色調は白灰色である。

軒瓦出土点数表

	608 -F	622 -A	622 -B	622 -D	計
軒丸瓦	6 1 3 4 B	1			1
	6 1 4 3 A		1		1
	6 2 8 2 C a			2	2
	6 3 0 1 種別不明	1			1
	6 3 1 1 B a		1		1
	6 3 1 1 F	1			1
	6 3 1 8 A	1			1
	6 3 4 8 A a		1		1
	新型式		1		1
	新型式(古内式I型)	1			1
奈良時代型式不明	2	4		6	
	近世以降左巴紋	1			1
軒平瓦	6 6 6 4 F	1	1		2
	6 6 6 6 A	1			1
	6 6 7 1 I a	1	2		3
	6 6 8 1 E		1		1
	6 6 9 1 A		1		1
	6 7 0 2 G		1		1
	6 7 0 4 A	6			6
奈良時代型式不明	6 7 2 1 種別不明		1		1
	奈良時代型式不明		1	1	2



北小路南側溝SD 2006から出土した。

2は小片で、内区と外区の間に2重の圈線が巡るのが特徴的である。中房からのびる弁の輪郭線は、界線に接続する。間弁は短く三角形状である。外区内縁に珠紋を、外区外縁に線彫齒紋をめぐらす。外縁の形態は、内面が内傾する傾斜線。東堀河出土品<sup>2)</sup>は同范の可能性が高い。実物照合を行った結果、一致する部分は無かったが、紋様構成や各紋様の大きさ、種紋・鉢齒紋の間隔は同じで、東堀河出土品の欠損部分の紋様を補完するものとみられる。東堀河出土品と本例をもとに紋様構成を復原すると、蓮弁は複弁7弁と單弁1弁の、複弁單弁混合紋となる。瓦当裏面は粗い縦方向のナデツケ調整をおこなう。瓦当側面には瓦当面から0.9cm幅でめぐる面があり、範の側面の痕跡とみられる。胎土は粗く、焼成はやや軟質、色調は灰色を呈する。東小路東側溝SD 1012から出土した。  
(原田憲二郎)

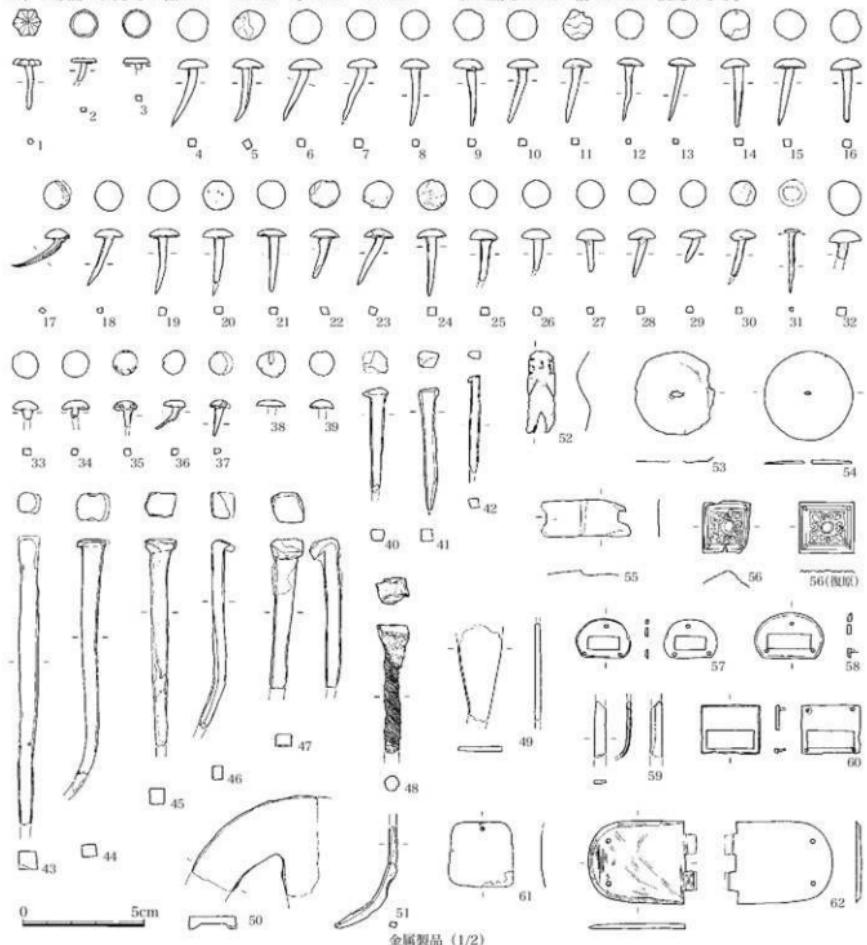
## 3. 金属製品

銀製品 埋納遺構SX 803の土師器甕内に納入されていた銀の薄板が2点ある。最大長1.9cmと1.4cmで、厚さ0.01cm。いずれも不整形で、不規則に折れ曲がっている。

銅製品 銅鉢は合計45点あり、このうち頭部が残るもの

(1～39)は39点である。頭部の形態から、花形銅鏡(1点)・扁平形銅鏡(2点)・半球形銅鏡(36点)の3つに分類できる。花形銅鏡(1)は6弁で構成され、弁中央に稜線をつくる。足部の断面が丸いという特徴を有する。頭部表面にのみ鍍金が認められる。全長2.1cm・頭部径1.2cm・頭部厚0.25cm・足部厚0.4cm。扁平形銅鏡(2・3)は頭頂に径1.0cm前後の平坦面をつくる。足部は断面方形で、2点ともにその一部を欠損するため全長は不明である。頭部径1.05～1.1cm・頭部厚0.15～0.2cm・足部厚0.25cm。半球形銅鏡(4～39)は頭部の大きさが径1.0～1.35cm・厚0.25～0.5cmの範囲に広がるが、径1.1～1.25cm・厚0.3～0.4cmの範囲に全体の85%が集まる。足部は断面方形で、足部厚は0.3～0.5cmの範囲内に収まる。足部長は2.1～2.5cmの範囲内に20点(77%)が集まり、1.0～1.7cmの範囲内に散布する6点(23%)は先端部が丸いなど湯取りが悪いものが目立つ。半球形銅鏡の多くは不良品とみられる。

人形(52)1点は、厚さ0.02cmの薄い銅板を人形に切り抜き、顔と手を輪で叩いて線で表現する。S字状に屈曲した状態で遺存するが、これをまっすぐに延ばした時の大きさは全長3.6cm・幅1.15cmに復元できる。



円盤(53・54) 2点は、厚さ0.05cm～0.15cmの薄い銅板を円形に切り抜き、中央を齧て穿孔する。53は径3.4cmで、片面から穿孔し、一部が割れて表裏に折れ曲がる。54は径3.6cmで、表裏両面から穿孔する。

銅板片は7点あるが、本来の形状が推定できるのは55のみである。残存長3.7cm・幅1.5cm・厚さ0.03cmの銅板を中央で鍛形に屈曲させ、両端部を円形に切り欠いているよううにみえる。

飾板(56) 1点は、屈曲し変形して遺存するが、全長2.25cm・幅2.1cm・厚さ0.02cmの方形に復元できる。四隅に向かってのびる法相華紋を中心で打ち出した後、四隅に鉢留孔をあける。

丸輪(57・58) は2点ある。57は縦1.6cm・横2.2cm・厚さ0.1cm、58は縦1.85cm・横2.85cm・厚さ0.15cmで、周縁に面取りがある。長方形孔と3つの鉢留孔があり、2点ともに裏金具とみられる。

巡方(60) は1点あり、縦2.0cm・横2.4cm・厚さ0.15cmで、四周に面取りがある。長方形孔と四隅に足があり、表金具とみられる。足は跨板と一体で鋳造されている。

鉢具は3点あり、2点(59・62)を図示した。59は弓金具の一部と推定され、残存長2.25cm・幅0.5cm・厚さ0.15cmである。62は板金具で、差し金との結合部分が欠失する。三方に面取りを行い、2つの鉢留孔がある。表面に研磨痕が残る。縦3.4cm・横4.3cm以上・厚さ0.2cm。

瑠璃(61) 1点は、縦2.65cm・横2.68cmの隅丸方形で、厚さ0.03cm。上辺中央に1つの穿孔がある。

他に小さな銅片が5点ある。図示した銅製品は56が北小路北側溝SD2005a、61が北小路北側溝SD2005c、それ以外はすべて北小路北側溝SD2005bから出土した。

鉄製品 鉄釘は概ね形状の判明するものが8点ある。小型品(40～42)と大型品(43～47)に大きく分かれる。すべて欠失部があり、全長が判明するものはない。足部の断面形はすべて方形。小型品は全長5cm前後であったと推測でき、足部幅0.6cmの太釘(40・41)と0.4cmの細釘(42)がある。頭部のつくりは40が鍛造、41・42が折り曲げである。大型品は全長10～13cm程度であったと推測され、足部幅0.7～0.8cmの太釘(43～45・47)と足部幅0.5cm前後の細釘(46)がある。頭部のつくりは44・45が鍛造、46・47が折り曲げ、43が不明である。なお、51は鉄釘足部の可能性があるが、凹凸をつくり出す点に差異がある。48はねじり鉄で、先端に付着する何かを挟みこんでいるよううにみえる。残存長5.3cmで、断面は径0.6cmの円形を呈する。49・50は不明鉄製品である。49は残存長3.95cm・最大幅1.8cm・厚さ0.25cmの鉄板で、広端間に向かって厚みが減り、

狭端間に屈曲を認める。50は復原径10cm・厚さ0.5cmの鉄製品の一部で、内部に透孔がある。裏面には深さ0.2cmの凹みをつくり出す。

42は第622次B発掘区北半中央に位置した野井戸の枠内から出土しており、近世以降まで時期が下る。44・46は北小路北側溝SD2005aの出土品で、50が壊構面直上の出土品。その他は北小路北側溝SD2005bの出土品である。

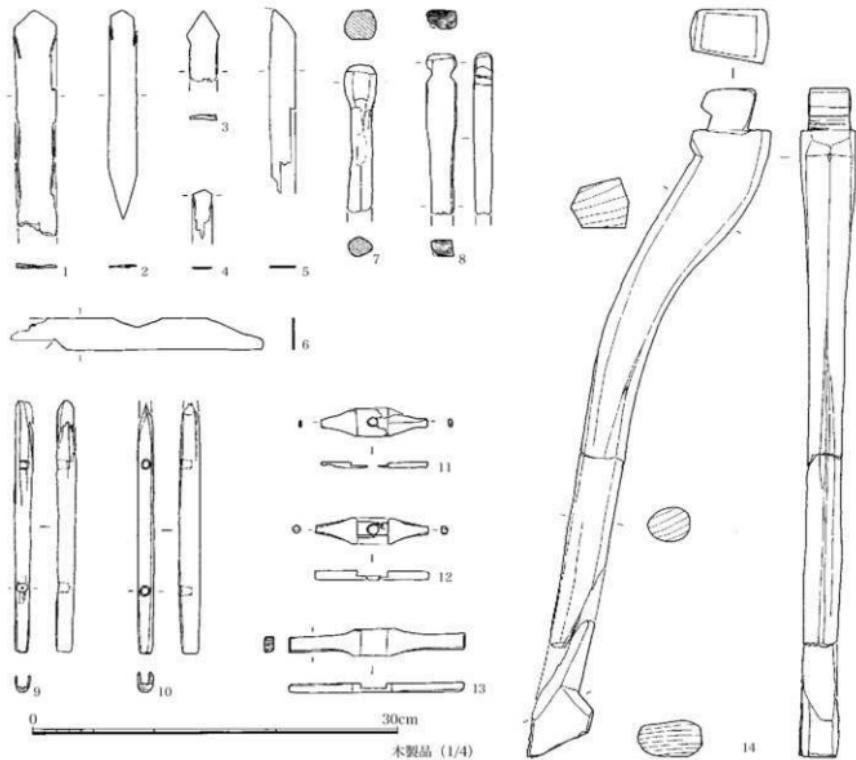
#### 4. 木製品

北小路北側溝SD2005から杭・棒状品・削裂き材・燃えさし・檜皮等と共に出土した主な木製品について以下に記す。6・7は北小路北側溝SD2005bの出土品で、それ以外はすべて北小路北側溝SD2005aの出土品である。

祭祀具 1～5は斎申、6は馬形と推定でき、すべて削裂き材を使用して製作されている。1は残存長18.4cm・最大幅3.5cm・厚さ0.2～0.4cmで、下半部を欠失する。上端を主頭形につくり、上下の切込みを側面の左右に2対以上入れるものと思われる。2は全長17.1cm・最大幅2.4cm・厚さ0.2cmである。上端を主頭形、下端を剣先形につくり、上端近くの側面の左右に1箇所の切込みを入れる。3は残存長5.8cm・最大幅2.7cm・厚さ0.25～0.45cmで、下半部を欠失する。上端を三角形につくり出す。4は残存長4.05cm・最大幅1.65cm・厚さ0.15cmで、上端部がわずかに遺存する。上端を主頭形につくり、上端近くの側面の左右に1箇所の切込みを入れる。5は残存長15.0cm・残存幅2.15cm・厚さ0.2cmで、上半部の左右1/2がわずかに遺存する。側面の切込みは確認できない。6は残存長20.75cm・最大幅2.65cm・厚さ0.1cmで、頭部の一部を欠失する。下辺に頭と頸の境をあらわす三角形の切欠き、上辺に背をあらわす弧状2段の切欠きをいれる。

7・8は棒状木製品で、いずれも下半部を欠失する。7は残存長12.15cm・最大幅2.7cmで、頭部を隅丸方形状に削り出す。8は残存長13.2cm・最大幅2.5cm・厚さ1.3～1.6cmで、上端近くの側面の左右に1箇所の切欠きを入れる。

9～12は系巻の一部、13はその未製品と考えられる。9・10は棒木で、端部の一部を欠失する。いずれも横木を結合するための枘穴を2箇所に設けている。断面形はU字形で、横木を結合する面のみ平らに削る。枘穴は貫通しない。9は全長20.7cm・最大幅1.45cm・厚さ1.2～1.6cmで、枘穴は径0.8cm前後・深さ0.9～1.0cm。10は残存長20.6cm・最大幅1.35cm・厚さ1.3～1.75cmで、枘穴は径0.8～0.9cm・深さ0.9cm。11・12は横木で、いずれも2片に割れ一部を欠失する。棒木に結合するため両端を細く丸く削り、中央に相欠きをつくり軸孔を穿孔する。相欠き幅は2点ともに2.5cmであり、組み合う可能性が考えられる。11は全長



8.85cm・最大幅2.4cm・厚さ0.5cmで、軸孔は径0.7cm。12は全長9.4cm・最大幅2.2cm・厚さ0.8cmで、軸孔は径0.8cmに復元できる。13は横木の未製品で、全長14.6cm・最大幅2.3cm・厚さ0.8cm。両端を細く削る前の状態で、軸孔も未穿孔である。相欠き幅は2.15cmである。

14は机などの天板を支える脚部(支脚)と考えられる。脚先の破片とは直接接合しないが、その形状や同じ遺構内から出土している点から同一個体と判断できる。上端につくり出した鍼形の出納で天板と結合したと推測できる。獸脚に似ており、上部は太く六角形に面取りし、下へいくにつれて細く丸くなるが、脚先は蹄状に大きくつくる。全長は57.5cm前後に復元でき、最大幅6.6cm・最大厚4.5cmである。他に曲物(一部)が北小路北側溝S D 2005 aから7点、九坪の井戸S E 502枠内から1点、九坪の井戸S E 504枠内からは曲物1点・横櫛1点が出土した。(鐘方正樹)

5. 木簡  
木簡は九坪の井戸S E 503の掘形の底から1点(1)が、

北小路北側溝S D 2005 aの暗灰色粘質土層から2点(2・3)が密着して出土した<sup>3)</sup>。

(1) □□□ 家家 足

〔臣カ〕

・□□□ (297) ×32×8 065

上端は表面側と裏面側の両側から切り込みを入れ、二次的に折りとる。下端部は切断し、平坦である。左側面は刀物を途中まで入れ、削り裂く。右側面は削り裂きの後、一部削り調整を行う。表裏両面とも丁寧に削る。

(2) □□□ (297) ×32×8 065

鉢の付札。上端部寄りの左右に切り込みを入れていたとわかる。下端部は頭頂状に削る。表裏両面と両側面は丁寧に削る。表面最下段の文字と、裏面の文字は元の木簡として利用されていた時の文字とみられる。古銭は8世紀後半に発行された新銭である萬年通寶・神功開寶に対する呼称で、それより前に発行された和同開珎を指すとみられる。



木簡 縮尺(2/3)  
(撮影:奈良文化財研究所 中村一郎氏)

(3) ▽佐伯×

(61) ×19×6 039

上端部寄りの左右に切り込みを入れる。下半部は欠損しており、下端部の形状は不明である。表裏両面と両側面は丁寧に削る。

#### 6. その他の遺物

錢貨 総数 61 枚(和同開珎 28 枚・神功開寶 19 枚・萬年通寶 6 枚・錢文不明 8 枚)が出土したが、このうち 49 枚(和同開珎 22 枚・神功開寶 19 枚・萬年通寶 6 枚・錢文不明 2 枚)が条間北小路北側溝 S D 2005 出土で大半を占める。

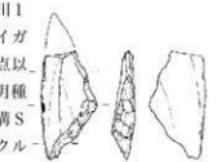
ガラス玉 九坪の井戸 S E 504 出土の三彩小壺内に納入されたガラス玉 6 点は X 線写真で確認できるものの、極めて遺存状態が悪い。X 線写真から径 0.5cm 前後のガラス玉と判断できる。北小路路面の埋納遺構 S X 803 出土の土師器甕内に納入されたガラス玉も遺存状態が悪く、風化して緑灰白色を呈し破損が著しい。ガラス玉は径 0.6 ~ 0.65cm・厚さ 0.4 ~ 0.45cm で、6 点前後を確認できる。

石器 出土石器の内訳は、旧石器時代の国府型ナイフ形石器 1 点・繩文～弥生時代の楔形石器 7 点・石匙 2 点・石錐 5 点・石鎌 19 点(未製品 6 点を含む)・削器 20 点・攝器 2 点・石核 49 点・剥片 363 点(RF43 点・UF70 点を含む)・碎片 79 点・大型始刃石斧 1 点である。図示した国府型ナイフ形石器は、サヌカイト製で刃部に微細な剥離痕がある。残存長 3・3cm・幅 1.7cm・厚さ 0.7cm。片端を欠損する。

その他 出土した砥石 8 点のうち 5 点と土馬 10 体以上・円盤形土製品 1 点・輪羽口・焼土・木炭等が北小路北側溝 S D 2005 から出土した。

#### 自然遺物 繩文時代の河川 1

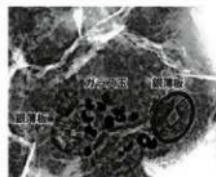
から栗皮 26 点以上・イチイガシ 33 点以上・クルミ核 2 点以上・トチノミ 6 点以上・不明種実 14 点以上、北小路北側溝 S D 2005 から桃核 130 点・クルミ核 4 点・不明種実 2 点・馬齒 16 点以上、井戸 S E 504 から桃核 80 点以上・不明種実 2 点以上・クルミ核 1 点・栗皮 1 点が出土した。



ナイフ形石器(2/3)



井戸 S E 504  
三彩小壺 X 線写真



埋納遺構 S X 803  
土師器甕 X 線写真

## V 調査所見

①五条条間北小路北側溝 S D 2005 については、H J 第506 次調査で、東四坊大路の路面を横断するように造られていることが確認されていた。このことは周辺地形をも勘案すると、五条条間北小路北側溝が周辺の基幹排水路として機能していたためという見方ができる。その西方となる今回の発掘区でも、五条条間北小路北側溝 S D 2005 は、交差する東四坊坊間東小路両側溝 S D 1011・1012 からの排水を受け、東四坊坊間東小路の路面を横断していたことが判明した。この成果は五条条間北小路北側溝が周辺の基幹排水路であったことを追認するものであるとともに、排水計画を重視した平城京の条坊施工計画の一端を示すものと評価できよう。

また、今回の発掘区では五条条間北小路北側溝 S D 2005 が南から北へ位置をずらして掘り直されていたことが判明した。五条条間北小路北側溝 S D 2005 北岸付近の地盤が、縄文時代の河川による灰色砂が堆積した場所であり、基幹排水路である五条条間北小路北側溝 S D 2005 の流水によって、常に浸食されやすい状況であったことがうかがえる。この地質的条件を考慮し、九坪側では五条条間北小路北側溝 S D 2005 崩壊土上に築地壠と雨落溝を築く時期には、坪南東隅に接する東四坊坊間東小路西側溝 S D 1011 西岸や、五条条間北小路北側溝 S D 2005 北岸に護岸施設を設け、溝岸の浸食を防ごうとしたのであろう。

②五条条間北小路北側溝 S D 2005 に架かる橋 S X 816～819 を検出した。柱の中には角柱を用いるものがあった。橋脚は、溝の一方の岸側では検出したものの、対岸ではこれに対応する橋脚が無く、橋桁等の詳細な構造は不明である。ただし、橋の架かる五条条間北小路北側溝 S D 2005 はこの周辺の基幹排水路であったため、流水量が多かったことが考えられ、増水時の流水により橋板が流されないように、取り外し可能な橋板を掛け渡したような簡易な構造だったとも考えられる。

③交差点付近の五条条間北小路 S F 2004 上で埋納遺構を検出した。平城京における埋納遺構の検出例は管見の限り 140 例以上確認されているが、道路上に合口にした土師器甕を埋納する類例は左京七条一坊の 5 例のみである。これらの性格については、小児を埋葬した可能性が高いものと指摘されている<sup>4)</sup>。今回検出した埋納遺構 S X 821 は、左京七条一坊と同様に小児を埋葬した可能性も考えられるが、合口にした土師器甕を縦位に埋納する例は今回が初例となるため、今後同様の類例を確認した上で性格を判断したい。

④五条条間北小路両側溝 S D 2005 からは、多量の遺物が出土したが、特に「古大内式軒瓦」が出土したことは



平城京出土「古大内式軒瓦」(1/4)

注目される。今回の調査地西隣の H J 第 459 - 2・3 次調査では、これらと組み合う播磨産の「古大内式軒平瓦」が出土しているからである。ここでは他に播磨産とみられる平瓦・熨斗瓦・須恵器が出土している。播磨産とみられる平瓦・熨斗瓦の出土分布からは、左京五条四坊九坪にこれらの瓦を葺いた建物が存在した可能性を指摘できる。

「古大内式軒瓦」は「播磨国系瓦」と呼称される瓦の一群で、出土分布はほとんど播磨国内に限定されており、出土遺跡も播磨国府推定地（姫路市本町遺跡）・播磨国分寺・古代山陽道沿いの駅家等であることから、播磨国司の管理下において生産と配布がなされたと考えられている<sup>5)</sup>。

こうした瓦が平城京内で出土した要因としては、九坪に播磨国の調邸が存在した可能性が考えられる。調邸とは諸国から運ばれた調物を一時保管する施設であり、国から調物を運んできた運脚や在京中の郡司の宿泊機能も併せもっていたと考えられている<sup>6)</sup>。史料では、平城京の東市の西辺りに相模国の調邸があったと知られるだけであるが、各國の出先機関ともいえる調邸の性格を考えれば、諸国が平城京内外にそれを設置していたと想定できる。

調邸内には調物を保管する倉庫群や、運脚が宿泊したであろう長屋建物の存在が想定できる。これまで九坪内の調査地は、そのほとんどが坪南端部でもあり、遺構の上から存在を証明できているわけではないが、今後はそういった視点での調査が必要となろう。

(原田憲二郎)

1) 今里幾次のご教示による。

2) 「平城京左京四条三坊九坪（東堀河）の調査」『平城京左京四条四坊・四条五坊発掘調査報告書』2007 (p.104-図 80-14)

3) 木簡の記載方法は、「木簡研究」の凡例に準拠した。

4) 奈良国立文化財研究所「第VI章 4 A 十六坪周辺の埋納遺構」『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告書』1997

5) 今里幾次「姫路市本町遺跡の古瓦」『本町遺跡（本文）』姫路市教育委員会 1984

6) 鶴野和己「相模国調邸と東大寺領東市庄」『高井柳三郎先生喜寿記念論集歴史と考古学』高井柳三郎先生喜寿記念事業会 1988



H J 第608次G発掘区全景（西から）



H J 第608次G発掘区全景（東から）



H J 第622次A発掘区全景（東から）



H J 第622次B発掘区全景（西から）



H J 第622次C発掘区全景（西から）



H J 第622次D発掘区全景（東から）



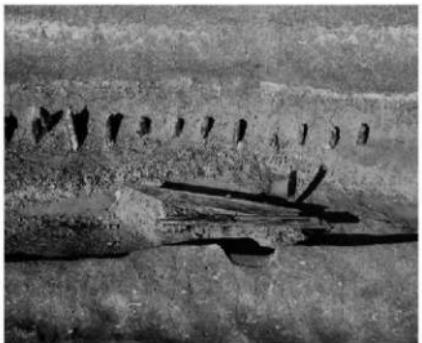
H J 第 608 次 G 発掘区 下層遺構面全景 (西から)



H J 第 608 次 F 発掘区 五条条間北小路 S F 2004 (東から)



H J 第 622 次 B 発掘区 東四坊坊間東小路 S F 1010 (南から)



H J 第 608 次 F 発掘区 木橋 S X 803 (南から)



H J 第 622 次 B 発掘区  
築地暗渠 S D 118・護岸杭列 S X 810・812・813 (南西から)



H J 第 622 次 B 発掘区 築地暗渠 S D 153 (南から)



H J 第 608 次 G 発掘区 井戸 S E 502 (北から)



H J 第 622 次 C 発掘区 井戸 S E 503 (南から)



H J 第 622 次 A 発掘区 井戸 S E 504 (北東から)



H J 第 622 次 A 発掘区 井戸 S E 504 井内奈良三彩小壺出土状況 (南から)



H J 第 608 次 G 発掘区 埋納遺構 S X 802 (南から)



H J 第 622 次 B 発掘区 埋納遺構 S X 803 (北から)



H J 第 622 次 D 発掘区 埋納遺構 S X 820 (東から)



H J 第 622 次 B 発掘区 埋納遺構 S X 821 (西から)

## 2. 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査

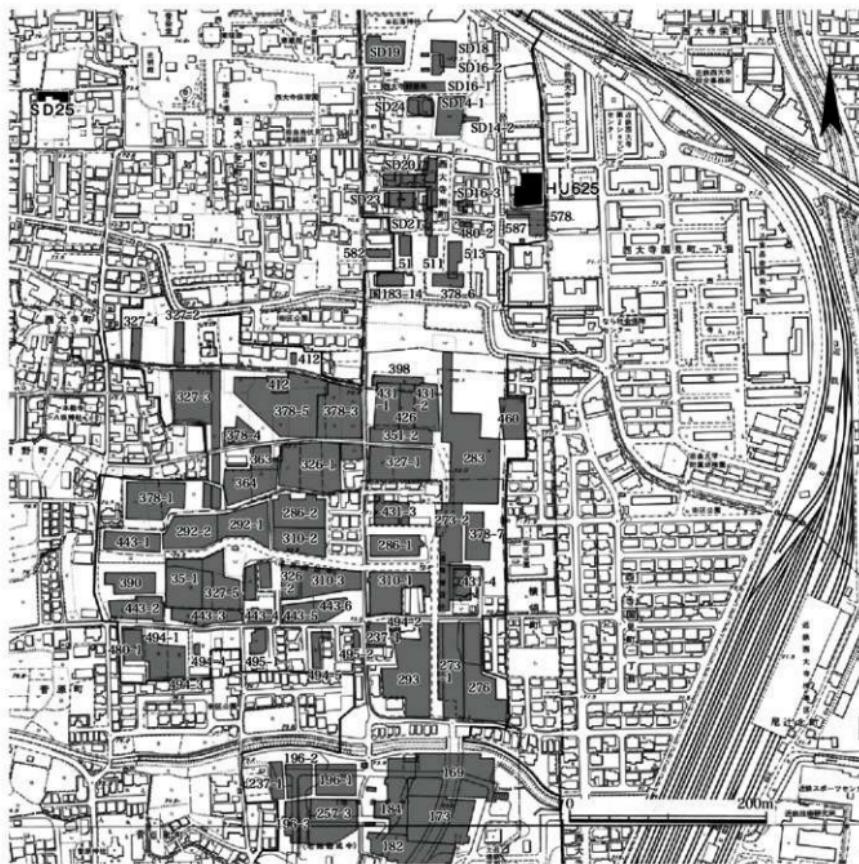
奈良市教育委員会では、昭和 63 年度から近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業地内（総面積 32 万 m<sup>2</sup>）の発掘調査を実施しており、平成 20 年度までの調査面積は 109,674 m<sup>2</sup> である。平成 21 年度は、平城京の条坊復原では、右京一条二坊十三坪にあたる地点において、1 箇

所 850 m<sup>2</sup> の調査を実施した。

報告に用いる遺構番号は、当事業地内で設定している坪ごとの通し番号であり、古墳時代以前の遺構には 2 衍を、奈良時代以降のものには 3 衍の番号を用いた。

平成 21 年度　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業 発掘調査一覧表

遺跡名	調査次数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
平城京跡（右京一条二坊十三坪）	H J 第 625 次	通常事業	西大寺町南 2271-2~4	H21. 9.24 ~ H 22. 1.22	850m <sup>2</sup>	久保清・中居



近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業地内の調査 発掘区位置図 (1/5,000)

# 平城京跡（右京一条二坊十三坪）の調査 第625次

## I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京一条二坊十三坪の南西隅にある。今回の調査地の南側では、平成19年度に市HJ第578・587次調査を実施しており、奈良時代の道路（一条南大路）、十三坪の南辺を限る東西溝、井戸の他、平安時代以降の掘立柱列、土坑を検出している。

今回、十三坪内の様相を確認する目的で、敷地の東半部で700m<sup>2</sup>、西半部で150m<sup>2</sup>、計850m<sup>2</sup>の発掘区を設定し調査を実施した。

## II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、東半では旧駐車場造成土（0.4～0.6m）の下に旧耕作土である黒灰色土（0.2m前後）、灰色砂質土（0.1m）、黄灰色粘土と灰色砂質土の混合土（0.05m）と続き、現地表下0.7～0.9mで黄褐色粘土の地山となる。西半では、旧宅地造成土（0.2m前後）の下に旧耕作土である黒灰色土（0.1m前後）、灰色砂質土（0.05m）、橙灰色粘土（0.1m）と続き、現地表下0.4mで黄褐色粘土の地山となる。なお、発掘区北東部は弥生時代以前の河川上にあたり、黄灰色細砂、青灰色砂、橙褐色細砂などが堆積し、河川上層埋土には弥生時代前期の土器が含まれる。遺構はすべて、地山及び河川上面で検出し、その標高は70.9～71.0mである。

## III 検出遺構

検出遺構には、古墳時代の土坑・溝、奈良時代以降の掘立柱建物・掘立柱列・井戸・土坑・溝等がある。各遺構の概要は一覧表にまとめた。以下、時代順に報告する。

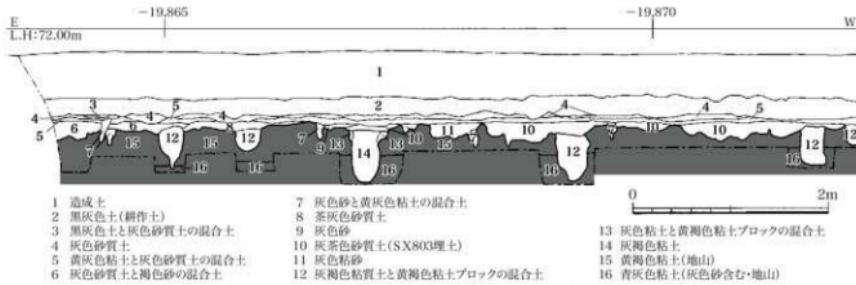
### 古墳時代の遺構

土坑6基（SK 01～06）、溝1条（SD 07）がある。SK 01～04は発掘区北東部で、SK 05・06・SD 07は発掘区西半部で検出した。

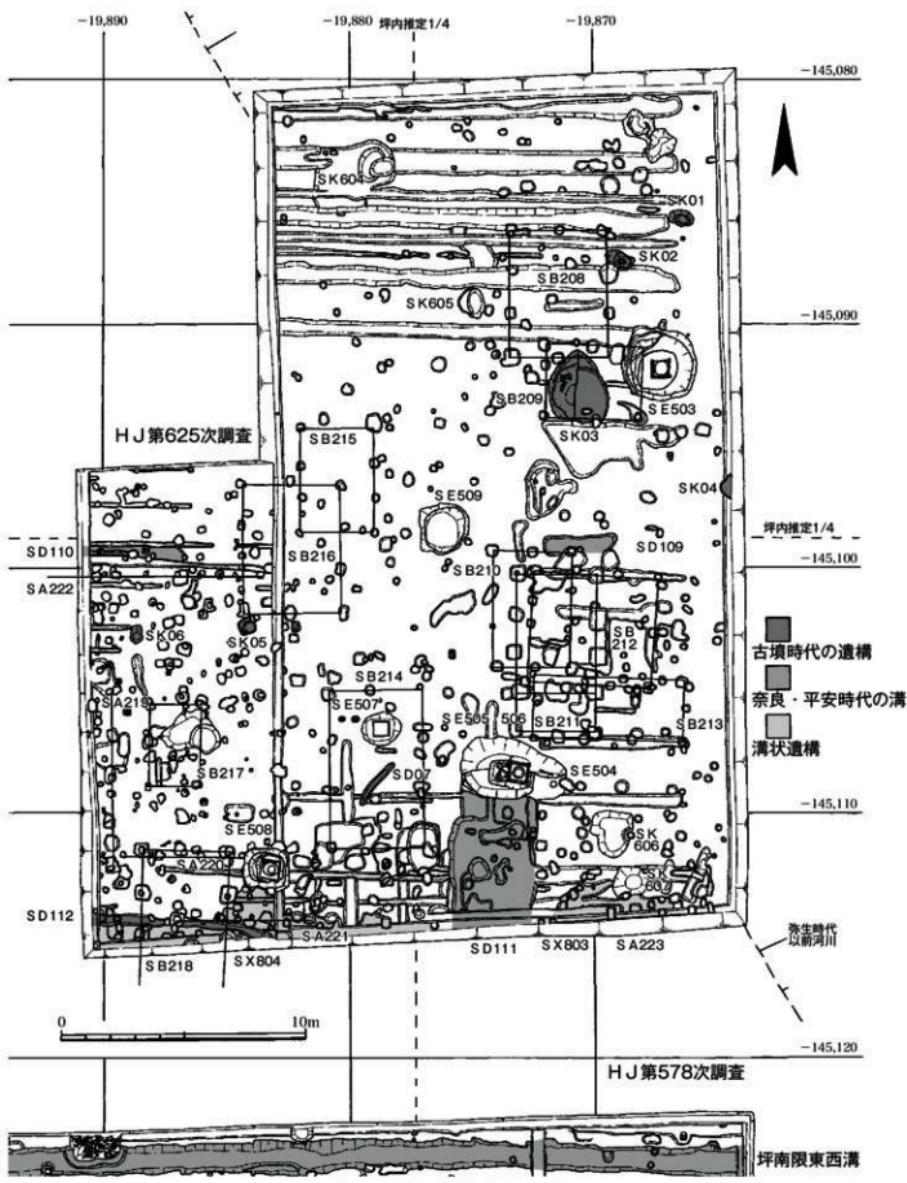
SK 01・02は平面が長円形の土坑で、SK 01の埋土は灰色粘土と下層の暗灰色粘土と青灰色粘土の混合土に分かれ、上層埋土からは古墳時代前期後半の土器が出土した。SK 02の埋土は炭化物を多く含む暗灰色粘土の1層で古墳時代前期末～中期の土器が出土した。SK 03は平面が円形になるとみられる土坑で、一度掘り直しされている。埋土は最上層の暗紅褐色砂質土、上層の暗灰色粘土と灰褐色砂の混合土、中層の暗灰色粘質土と青灰色粘土の互層状堆積土、下層の灰褐色粗砂と灰色粗砂の混合土の4層に大きく分かれる。最上層埋土からは古墳時代前期後半の完存する土器類が横位置で出土した。堀内は、土が充満しているのみ他の内容物は無い。上層からは古墳時代前期後半の土器、鑄造関係遺物、下層からは古墳時代前期中頃～後半の土器、核等が出土した。SK 04は西端部分のみの検出で、発掘区外に続く。平面が円形の土坑になるとみられ、埋土からは古墳時代前期頃の土器小片が出土した。SK 05は平面が不整形方、SK 06は平面が不整長方形の土坑で、いずれの埋土も堅く締まっており、上層の暗灰色粘土と黄褐色粘土ブロックの混合土、下層の灰色砂と黄褐色粘土ブロックの混合土の2層に分かれる。SK 05は出土遺物がなく、SK 06は土器小片が出土した。SD 07は国土方眼方位に対し北で東に振れる素掘りの溝である。埋土は、上層の暗灰色粘土、下層の暗灰色粘土と青灰色粘土の混合土の2層に分かれる。いずれの層からも出土遺物は無い。

SK 05・06とSD 07については、明確な時期を示す遺物が出土しなかつたが、他の古墳時代の遺構と埋土が近似しており、これらと同時期のものであるとみられる。奈良時代以降の遺構

掘立柱建物11棟（S B 208～218）、掘立柱列5条（S



HJ第625次調査 発掘区南壁土層図 (1/50)



H.J 第 625 次調査 遺構平面図 (1/200)

A 219～223)、溝4条(S D 109～112)、井戸7基(S E 503～509)、土坑4基(S K 604～607)、溝状遺構2基(S X 803・804)がある。これらの遺構は、重複関係から4時期以上の変遷がある。

掘立柱建物・列(S B 208～218・S A 219～223)発掘区東部で南北棟建物S B 208・東西棟建物S B 209を検出した。S B 209は重複関係から井戸(S E 503よりも古い)。発掘区南東部では南北棟建物S B 210・南廻付南北棟建物S B 211・東西棟建物S B 212・213・東西方向の柱列S A 223を検出した。重複関係からS B 210・211はS B 212・213よりも古い。S B 212は建物の主軸が西で北に約5度振れる。発掘区西半部では南

北棟建物S B 214～218・南北方向の柱列S A 219・東西方向の柱列S A 220～222を検出した。S A 219は南北棟建物の東側柱列、S A 221は東西棟建物の北側柱列になる可能性がある。S B 218・S A 221は重複関係から溝S D 112・溝状遺構S X 804よりも古く、S A 220は井戸(S E 508よりも古い)。

溝(S D 109～112) S D 109は発掘区中央部東寄りで検出した東西方向の素掘りの溝である。埋土は灰色砂質土と灰茶色粘土の混合土で、8世紀の土器、瓦片が出土した。溝心の国土座標値はX=-145,099.05m、Y=-19,870.00mである。S D 110はS D 109の西側の延長上にあたる地点で検出した東西方向の素掘りの溝で

H J 第625次調査 検出遺構一覧表(1)

## 古墳時代の遺構

遺構番号	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	主な出土遺物	備考
S K 01	不整長円形	東西1.0×南北0.7	0.5	古墳時代前期土師器壺・高杯	
S K 02	不整長円形	東西1.2×南北0.7	0.4	古墳時代前期土師器壺・甕・高杯	
S K 03	不整円形	東西2.4×南北3.0	1.3	古墳時代前期土師器壺・甕・高杯・鉢・輪羽口、金属鋳、砾石、石皿状石製品、サヌカイト剥片、核桃	
S K 04	円形?	東西0.5以上×南北2.2	0.7	古墳時代前期土師器片	
S K 05	不整形	一辺0.7	0.3	出土遺物なし	埋土は他の古墳時代遺構と近似。
S K 06	不整長円形	東西0.5×南北0.8	0.2	時期不明土師器片	埋土は他の古墳時代遺構と近似。
S D 07	斜行溝	長さ2.2、幅0.3	0.2	出土遺物なし	埋土は他の古墳時代遺構と近似。

## 奈良時代以降の遺構

遺構番号	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	主な出土遺物	備考
S D 109	東西溝	長さ10.0、幅0.8	0.1	サヌカイト剥片・8世紀土師器杯カ皿・皿C・高杯・壺・甕・須恵器杯Aカ皿A・杯カ皿蓋・甕・甕、製塙土器、丸瓦、平瓦	坪内南北1/4分割ライン付近に位置する。溝心の国土座標値はX=-145,099.05、Y=-19,870.00
S D 110	東西溝	長さ4.2以上、幅0.9	0.1	8世紀後半須恵器杯Bカ皿B・甕・丸瓦、平瓦、11世紀前半土師器皿、羽釜、黒色土器B類焼	坪内南北1/4分割ライン付近に位置する。溝心の国土座標値はX=-145,099.25、Y=-19,890.00
S D 111	南北溝	長さ7.3以上、幅3.5	0.3	8世紀後半土師器杯A・皿A・椀A・杯Bカ皿B・杯C・皿C・高杯・壺B・甕・須恵器杯Aカ皿A・杯Bカ皿B・皿C・杯カ皿蓋・甕・甕、圓足円面鏡、電・製塙土器、軒平瓦(式形不明)、丸瓦、平瓦、埠、鉄釘、刀子	溝の東脇がS D 109西端とほぼ揃う位置にある。重複関係からS E 504～506、S X 803・804よりも古い。
S D 112	東西溝	長さ6.0以上、幅1.0以上	0.1～0.4	8世紀後半土師器杯Aカ皿A・甕・須恵器杯Bカ皿B・杯カ皿蓋・甕・土馬、鉄釘	重複関係からS B 218、S A 221よりも新しく、S X 804よりも古い。
S K 604	不整長方形	東西3.2×南北1.5	0.1	弥生土器壺・甕・古墳時代土師器片、8世紀土師器杯カ皿・皿、須恵器杯Bカ皿B・甕	
S K 605	不整円形	東西1.1×南北1.2	0.6	古墳時代土師器壺、8世紀後半土師器杯カ皿・杯カ皿蓋・甕・須恵器杯カ皿・壺・甕・丸瓦、平瓦	
S K 606	不整形	東西1.6×南北1.8	0.25	古墳時代土師器高杯、8世紀土師器杯カ皿・甕・須恵器杯Aカ皿A・杯カ皿蓋・甕・甕、製塙土器、平瓦、丸瓦、輪羽口	
S K 607	不整形	東西1.4×南北1.1	0.4	8～9世紀土師器杯カ皿・甕・須恵器杯Aカ皿A・壺・皿蓋・甕・黑色土器A類杯・杯、丸瓦、平瓦	重複関係からS X 803よりも古い。
S X 803	不整形	東西4.6以上×南北4.5以上	0.6～1.0	8～9世紀土師器杯カ皿・甕・須恵器杯カ皿・杯カ皿蓋・甕・製塙土器、平瓦	重複関係からS D 111・S A 223・S K 607よりも新しい。
S X 804	不整形	東西1.2以上×南北0.5以上	0.1～0.2	8～9世紀土師器杯カ皿・皿C・甕・須恵器杯Bカ皿B・杯カ皿蓋・甕・黑色土器A類杯・椀、丸瓦、平瓦	重複関係からS D 111・112・S B 218・S A 221・S E 508よりも新しい。

ある。埋土は灰茶褐色粘質土で、8～9世紀の土師器、須恵器、瓦、11世紀前半の土器が出土した。溝心の国土座標値はX=-145,099.25 m, Y=-19,890.00 mであることから、SD 109・110ともに一条南大路北側溝心と一条条間南小路南側溝心を基準にした場合の坪の南北1/4ライン付近に位置する。SD 111は発掘区南端中央で検出した南北方向の素掘りの溝である。溝幅は3.5mと広く、埋土は上層の炭化物を含む暗灰褐色粘砂、下層の灰褐色砂質土と黄灰色粘土の混合土に分かれ、8世紀後半の土師器、須恵器、土製品、瓦、金属製品等が出土した。重複関係から井戸SE 504～506、SX 803・804よりも古い。西二坊大路東側溝心と西二坊坊間西小路西側溝心を基準にした場合の坪の東西1/4ラインよりもやや東側に位置する。SD 112は発掘区南西隅で検出した西から南東に向かう素掘りの溝で発掘区外に続く。埋土は茶灰色シルトと黄褐色粘土ブロックの混合土で、8世紀後半の土師器、須恵器、瓦等の小片が出土した。重複関係からSX 804よりも古く、SB 218・SA 221よりも新しい。

**井戸(SE 503～509)** SE 503は発掘区北東部で、SE 504～508は発掘区南端で、SE 509は発掘区中

央で検出した。SE 503の井戸枠の構造は、方形縦板組横棟留で、その下には基盤枠として方形横板組が2段と、枠の集水施設として曲物1段と浄水用の礫敷が設置されている。灰色粘土と灰色砂が互層に堆積する枠内埋土からは、8世紀末～9世紀初頭の土師器、須恵器等の他、銅製鉢及び丸鞘各1点が出土した。SE 504～506は重複しており、ほぼ同じ場所でSE 504→505→506の順に造り替えられている。SE 504・505とともに枠は抜き取られているが、SE 505は井戸底の集水施設として据えられた長円形の曲物とその中に敷かれた礫敷が残存していた。曲物は長軸が北でやや東に振れた位置になるよう設置され、曲物の裏込め上面には須恵器遺片と「理」の刻印平瓦を含む瓦片が敷かれており、その形状からこの上には方形に組まれた井戸枠があったことが推測できる。曲物内からは8世紀後半の土師器等が出土した。SE 506の井戸枠の構造は、方形縦板組横棟留で、枠内は、上から灰色粘質土、灰色粘土と灰色粘砂の混合土、暗灰色粘土の順に堆積している。枠底直上で8世紀末～9世紀初頭頃の底部外面に墨書(記号)がある土師器皿Aが1点出土した。枠内からは、他に8世紀後半～9世紀

H J 第 625 次 調査 検出遺構一覧表 (2)

遺構番号	棟方向	規模(間)	桁行全長 桁行×梁行 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法(m) 桁行 梁行	備考	
						柱間寸法(m) 梁行	備考
SB 208	南北	3×2	5.1	4.2	北から 1.5-1.8-1.8 東から 2.25-1.95		柱穴の深さ 0.3～0.5 m。
SB 209	東西	2×1	3.9	2.85	東から 1.8-2.1	2.85	柱穴の深さ 0.1～0.15 m、重複関係から SE 503より古い。
SB 210	南北	3×2	4.5	3.3	1.5 等間	1.65 等間	柱穴の深さ 0.1～0.2 m、重複関係から SB 213・SD 109よりも古い。 南廻(廻の出 1.65 m)、柱穴の深さ 0.3～0.5 m、重複関係から SB 212・213よりも古い。
SB 211	南北	4×2	6.6	3.3	北から 1.8-1.5-1.65	東から 1.5-1.8	
SB 212	東西	3×2	4.95	4.5	1.65 等間	2.25 等間	柱穴の深さ 0.1～0.2 m、重複関係から SB 211よりも古い。
SB 213	東西	3×1	6.15	2.55	東から 1.95-1.95-2.25	2.55	柱穴の深さ 0.1～0.2 m、重複関係から SB 210・211よりも古い。
SB 214	南北	3×2	6.3	3.9	2.1 等間	東から 2.1-1.8	柱穴の深さ 0.1～0.2 m。
SB 215	南北	3×1	4.5	3.0	1.5 等間	3.0	柱穴の深さ 0.1～0.2 m。
SB 216	南北	3×2	5.1	4.2	北から 1.65-1.8-1.65	2.1 等間	柱穴の深さ 0.1～0.2 m。
SB 217	南北	2×1	3.45	2.1	北から 1.65-1.8	2.1	柱穴の深さ 0.2～0.3 m。
SB 218	南北	2以上×2	3.6以上	3.45	1.8 等間	東から 1.8-1.65	柱穴の深さ 0.2～0.3 m。重複関係から SD 112・SX 804よりも古い。
SA 219	南北	4	7.2		1.8 等間		柱穴の深さ 0.1～0.2 m。
SA 220	東西	3	4.95		1.65 等間		柱穴の深さ 0.1 m。重複関係から SE 508よりも古い。
SA 221	東西	3	5.4		1.8 等間		SD 112・SX 804よりも古い。 柱穴の深さ 0.1 m以上。
SA 222	東西	4以上	6.0以上		東から 1.65-1.65-1.35-1.35		柱穴の深さ 0.2 m。坪内南北1/4ライン付近に位置する。
SA 223	東西	3	6.15		東から 2.25-2.1-1.8		柱穴の深さ 0.1～0.2 m。SX 803よりも古い。

H J 第 625 次調査 検出遺構一覧表(3)

遺構番号	掘形		井戸枠		主な出土遺物	備考	
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)		
S E 503	隅丸方形	東西 3.1 × 南北 3.0	2.4	方形縦板 組横桟留	一辺 0.73  方形横板組 2段(一辺 0.61) + 曲物 (径 0.56、 高さ 0.42) ・曲物内壁敷	(鉢抜取坑) 8世紀後半～9世紀初頭土 師器杯A・皿A・高杯・壺・須恵 器杯A・皿A・杯B・壺B・壺・壺・丸 瓦・平瓦・鉄釘 (鉢内) 8世紀後半～9世紀初頭土師器 杯A・皿A・杯B・皿B・皿C・壺A・ 高杯・壺・須恵器杯A・皿A・杯B・皿B・ 杯C・皿C・杯・壺蓋・鉢・壺・壺・壺・ ミニチュア壺A・製埴土器・壺・丸瓦・軒丸 瓦(6225・6314 B)・軒平瓦(6641 C)・ 平瓦・博・銅鏡・筒製丸瓶・鉄滓・横櫛・ 曲物底板・桃核 (掘形) 8世紀後半土師器杯A・皿A・ 杯B・皿B・皿C・壺A・高杯・壺・須 恵器杯A・杯B・杯C・皿C・壺A・杯C・ 壺蓋・壺・壺・盤・製埴土器・軒丸瓦(型 式不明)・平瓦・博・土馬	鉢上部は抜 き取られて いる。 横桟2段残 存。曲物側 面に一辺1 cm前後の孔 が多数ある。 S E 209 よ り新しい。
S E 504	隅丸長方形?	東西 1.4 以上 × 南北 1.8	1.1	抜き取り		(鉢抜取坑) 8世紀後半土師器壺A・壺・ 須恵器杯カ皿・皿B・壺・壺(口縁外 線刻)・丸瓦・平瓦・鉄釘	S E 505・ 506よりも 古く、SD 111よりも 新しい。
S E 505	隅丸長方形?	東西 0.9 以上 × 南北 1.1 以上	2.0	抜き取り (方形枠 組)	曲物 1段 (長径 0.58, 短径 0.38, 高さ 0.28) ・曲物内壁敷	(鉢抜取坑) 8世紀後半土師器杯A・皿A ・壺・須恵器杯A・皿A・杯B・皿B(底 部外面墨書き)・壺・壺・丸瓦・平瓦・博 (曲物内) 8世紀後半土師器杯カ皿・皿C・ 壺・須恵器杯B・皿B・壺・壺・製埴土器・ 軒丸瓦(6311 A)・丸瓦・平瓦・博 (掘形) 8世紀後半土師器杯カ皿・壺・ 須恵器杯カ皿・壺・壺・丸瓦・平瓦・壺 印平瓦(凹面「理」)	曲物下と側 面に板材あ り。 S E 506 よ りも古く、 SD 111・ S E 504 よ りも新しい。
S E 506	隅丸長方形	東西 3.0 × 南北 1.4	1.9	方形縦板 組横桟留	東西 0.77 × 南北 0.83	(鉢抜取坑) 8世紀後半～9世紀初頭土 師器杯A・皿A・杯B・皿B・壺・須恵 器杯A・皿A・杯B・皿B・杯C・壺・壺・ 壺・壺・壺・壺・壺・壺・壺・壺・壺・壺 (鉢内) 8世紀後半土師器杯A・皿A・ 須恵器杯A・杯B・皿B・杯C・皿C・ 杯L・杯カ皿蓋・壺・壺・鉢・軒丸瓦(6228 A・6275 A・6311 A a・式不明)・ 丸瓦・平瓦・博	鉢上部は抜 き取られて いる。 SD 111・ S E 504・ 505よりも 新しい。
S E 507	不整円形	東西 1.9 × 南北 1.7	1.2	抜き取り	方形横板組 1段(東西 0.60×南北 0.52)・壺敷	(鉢抜取坑) 8世紀後半土師器杯A(底 部外面墨書き)・杯C・皿C・壺A・高杯・壺・ 須恵器杯A・杯B・皿A・皿C・壺C・壺・壺・ 壺・壺・壺・壺・壺・壺・壺・壺・壺・壺 (鉢内) 8世紀後半土師器皿A・杯B・ 皿B・皿C・杯C・壺・須恵器壺・製埴 土器・平瓦	鉢抜取部分 出土軒丸瓦が S E 506 掘形出土のものと接合 する。

HJ第625次調査 検出遺構一覧表(4)

遺構番号	掘形			井戸枠			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法(m)	底部施設(m)		
S E 508	隅丸方形	東西2.0 × 南北2.1	2.0	方形縦板 組横枠留	東西0.75 × 南北0.72	曲物2段 (上段: 長径0.63、 短径0.51、 高さ0.38、 下段: 径0.32、 高さ0.28)	(棒抜取坑) 8世紀後半～9世紀初頭土 師器杯A(底部外面線彫)・皿A・杯B・ 皿C・高杯・甕・須恵器杯A・杯B・皿 A・甕N・甕・鉢D・鉢E・横瓶・丸瓦、 平瓦、埠、砾石、鉄釘 (枠内) 8世紀後半～9世紀初頭土師器 皿A・杯C・杯C・杯カ皿蓋・高杯・甕・ 須恵器杯A・皿A・甕・甕・黑色土器A 類陶々・製壇上器・軒平瓦(6721 A) ・丸瓦・平瓦・刀子・桃核・ (撮影) 8世紀後半土師器杯A・皿C・ 杯カ皿蓋・須恵器杯A・皿A・杯B・ 杯B・杯カ皿蓋・甕・甕・軒丸瓦(6311 A a)・丸瓦・平瓦	枠上部は抜 き取られて いる。 横枠2段残 存。上段曲 物裏込め上 面と下段曲 物底辺敷。 S X 804よ り古く、 S A 220よ り新しい。
S E 509	隅丸方形	東西2.0 × 南北2.1	0.9以上	抜き取り			(棒抜取坑) 古墳時代土師器高杯・甕、8 世紀土師器皿A・皿C・甕・須恵器杯B・ 皿B(底部外面「美」刻印)・皿C・杯カ 皿蓋・甕・甕・鐵釘・鐵錠	

初頭の土師器、須恵器、軒丸瓦（型式不明）等が出土した。S E 507は方形横板組1段と礫敷が残存していたのみで、他の枠材は抜き取られていた。井戸枠抜取り坑の埋土中には8世紀後半の土師器、須恵器、瓦片が多く含まれ、その中の軒丸瓦（6311型式A種）が、先述のS E 506掘形出土のものと接合することから、S E 506の構築時期とS E 507の廃絶時期が同時期であったことがわかる。S E 508の井戸枠の構造は方形縦板組横枠留で、枠底には集水施設として曲物が2段設置されている。上段曲物裏込め上面と上下段曲物底には、径5～10cmの大円礫がまばらに散かれていた。枠内は、灰色粘砂と青灰色粘砂の混合土が堆積しており、8世紀末～9世紀初頭の土師器、須恵器等が出土した。重複関係からS X 804よりも古く、S A 220よりも新しい。S E 509は枠がすべて抜き取られて残存しない。枠抜取り坑の埋土中からは8世紀の土師器、須恵器、瓦等が出土した。

**土坑(S K 604～607)** S K 604～605は発掘区北半で、S K 606・607は発掘区南東隅で検出した土坑である。S K 604は炭化物を含む暗褐色粘砂の埋土から8世紀の土器小片等が出土した。S K 605は埋土が上層の灰褐色砂質土と下層の灰色砂と灰褐色粘土の混合土に分かれ、8世紀後半の土器小片等が出土した。S K 606は埋土が上層の茶灰色砂と下層の青灰色粘土と灰色砂の混合土に分かれ、8世紀の土師器、須恵器小片等が出土した。S K 607は埋土が灰色砂と灰褐色粘土の混合土で8～9世紀の土師器、須恵器、黑色土器A類、瓦小片等が出土した。

**溝状遺構(S X 803・804)** S X 803・804は発掘区

南端で検出した溝状に広がる遺構で、発掘区外に続く。埋土が同じ灰茶色砂質土であることから、発掘区南側で接続し、一連の遺構になることが考えられる。埋土中からは8～9世紀の土師器、須恵器小片等が出土した。S X 803・804ともにそれぞれ重複する遺構の中では、一番新しい。

この他、建物としてはまとまらない多数の小柱穴や17世紀以降の耕作溝がある。

#### IV 出土遺物

土器類が遺物整理箱で35箱、瓦類が19箱、木・金属・石製品が5箱、計59箱分の遺物が出土した。出土した遺物には、弥生土器、古墳時代土師器、石製品、鑄造関係遺物、8～9世紀の土師器、須恵器、黑色土器A類、製塙土器、土製品、圓足円面鏡、瓦埠、鑄造関係遺物、金属製品、石製品、木製品、11世紀土師器、黑色土器B類などがある。

以下、主なものについて述べる。

**S K 03出土土器** S K 03から出土した土器には、土師器甕・甕・高杯・鉢がある。大半が破片であるが、図示の甕(1)はほぼ完存で最上層埋土から出土している。口径16cm、器高24.6cmで、口縁部はやや内凹気味に外側へ広がり、端部の内面がわずかに丸く肥厚する。体部は球形で、体部外面はハケ調整しており、煤が付着している。体部内面はヘラケズリしており、布留式前半の新しい様相を示す。

**墨書き土器** S E 506枠内から3点出土している。1点は8世紀末～9世紀初頭の土師器皿Aで、底部外面に記号とみられる「+」の墨書きがある(2)。他2点は土師器杯か皿と須恵器杯Bの小片で、いずれも底部外面に文字の一部とみられる墨書きがある。

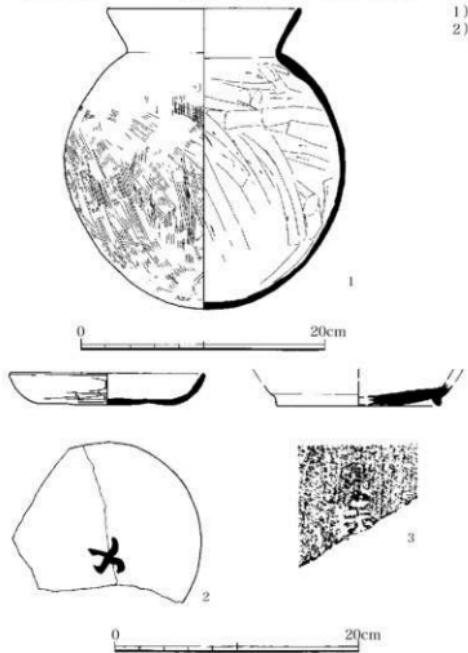
刻印土器 S E 509 柄抜き取り坑からは底部外面に「美」の刻印がある須恵器Bの破片が1点出土している(3)。本来は「美濃」または「美濃國」と刻印されていたとみられる。近隣の右京三条三坊八坪(H J第257-1次調査)においても「濃」の刻印がある須恵器高杯や美濃産とみられる須恵器Lが出土している。この他、口縁部や底部外面に「x」などの記号とみられる線刻がある須恵器B、杯蓋、甕、壺や土師器杯か皿が計10点ある。

刻印平瓦 S E 505 曲物裏込み上面から「理」(じ種)<sup>1)</sup>の刻印のある平瓦が1点出土した。刻印は平瓦四面の狭端間に押捺されている。この平瓦は、凹面狭端面を面取りし、凸面には縦縫タキ痕と離れ砂が確認できる。

管玉を包含する丸瓦 S E 508 柄内から管玉1点と管玉の痕跡1箇所を有する丸瓦片が1点出土した。この丸瓦は玉縁凸面に2条の凸線があり、同面側縁を面取りする。焼成は軟質で灰~青灰色を呈する。管玉は観察と蛍光X線分析の結果、粘土による製品であると考えられる<sup>2)</sup>。

## V 調査所見

平城京以前については、弥生時代前期頃に埋没する河川



H J 第625次調査 S K 03・S E 506・509 出土土器 (1/4・3の拓本は1/1)

が流れおり、河川埋土等からの弥生土器出土により、近隣に弥生時代の遺跡が存在することがわかった。また、古墳時代前期の土坑及び同時期とみられる溝を検出した。南隣接地の調査(H J 第578・587次調査)では弥生・古墳時代の遺構が見つかっていないことと今回発掘区北半に集中して見つかっている点から、両時代ともに遺跡の中心は、今回の発掘区北側にあることが予想される。

奈良時代については、重複関係から4時期以上の変遷があることがわかった。今回の発掘区は十三坪の南西部部分にあたり、出土遺物の時期から奈良時代後半から平安時代初頭にかけて宅地として利用されていたとみられる。なお、坪の南北1/4ライン付近にあたる位置で東西方向の溝SD 109とその南側でSD 109西端と東肩がほぼ揃う位置で南北方向の溝SD 111を検出していることから、宅地内を溝で区画していた時期があることがわかる。

平安時代以降については、11世紀前半の東西方向の溝SD 110を検出した。南隣接地の調査においても、11世紀末から15世紀の遺構がみつかっており、調査地周辺には11世紀以降の遺構が広がっているものとみられる。(久保清子)

- 奈良文化財研究所『奈良国立文化財研究所V 瓦編5』1977
- 分析に関しては奈良県立橿原考古学研究所奥山誠義主任研究員にご協力をいただいた。



H J 第625次調査 S E 505 出土刻印平瓦 (1/2)



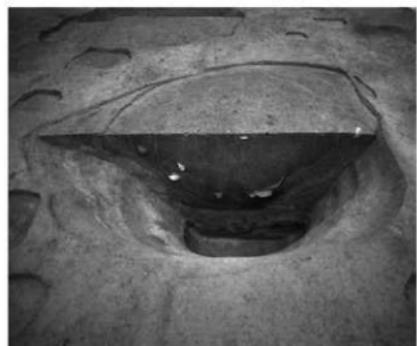
H J 第625次調査発掘区 垂直モザイク写真(右が北)



西発掘区全景(南西から)



東発掘区全景(南から)



S K 03 西半掘 (西から)



S E 503 (東から)



S E 505 (北から)



S E 506 (南から)



S E 507 (北から)



S E 508 (東から)

### 3. 平城京跡（右京三条三坊五坪）の調査 第620次

事業名	宅地造成	調査期間	平成21年4月8日～4月24日
届出者名	ヤマトラ	調査面積	100m <sup>2</sup>
調査地	奈良市宝来一丁目84番1・85番1の一部	調査担当者	中島和彦・大原 隆

#### I.はじめに

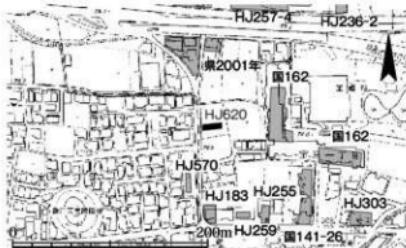
平城京第620次調査地は、条坊復原によると右京三条三坊五坪の西端北寄りに位置する。現状は水田で、発掘区西側にある南北道路は、西三坊坊間路東側溝の位置を踏襲した遺存地割として残る。五坪内の調査例は、過去6回実施されており、奈良～平安時代の掘立柱建物・柱列・土坑・井戸および中世の建物・柱列・溝が確認されている。今回は五坪北西部の土地利用の様相を把握する目的で調査を実施した。

#### II. 基本層序

発掘区の基本層序は、上から耕作土の黒灰色土(0.2m)、淡灰色砂質土(0.05m)、淡褐色砂質土(0.1m)、橙色粘質土(0.05～0.1m)、黄灰色粘質土(0.1～0.15m)、灰黄色粘質土(0.1～0.25m)と続いて、発掘区西半では現地表面下約0.4mで地山の明黄褐色粘質土となる。発掘区東半は南東方向に地形が一段低くなり、灰黄色粘質土の下にさらに茶褐色土(0.1m)・黄茶色粘質土(奈良時代整地層Ⅱ、0.15m)、橙灰色粘質土(0.1m)・灰色シルト(奈良時代整地層Ⅱ、0.1m)が堆積して、現地表面下約1.1～1.2mで明黄褐色粘質土の地山に至る。整地層Ⅰは8世紀代、整地層Ⅱは8世紀後半の土器類を含む。遺構面の標高は73.2～73.4m、発掘区東半の最も低い地山上面の標高は72.5mである。遺構検出作業は奈良時代整地層Ⅱの上面と地山上面の二回に分けて行った。

#### III. 検出遺構

検出遺構には弥生時代の井戸1基(S E 01)・古墳時代の井戸1基(S E 02)・8～9世紀の掘立柱建物2棟(S B 03・04)・掘立柱列2条(S A 01・02)・南北溝1条(S D 03)・土坑5基(S K 04～08)・甕棺付穴群(S X 09)、13～14世紀頃の素掘溝などがある。なお、各遺構の概要は一覧表にまとめた通りである。以下、主要



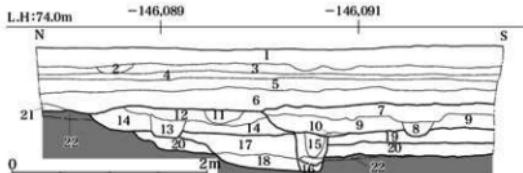
H J 第 620 次 調査 発掘区位置図 (1/5,000)

な遺構について概述する。

**弥生時代の遺構** S E 01は平面隅丸形、断面形状は逆台形を呈す。埋土は上層の黒灰色粘質土、下層の淡黄褐色粘質土の2層に分けられ、上層から弥生時代後期前半の短頭壺が1点出土。

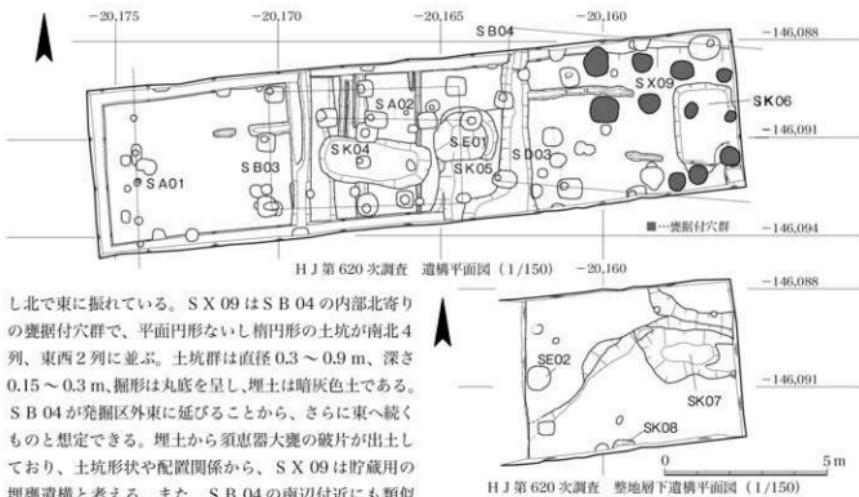
**古墳時代の遺構** S E 02は整地層下の地山上面で検出した。井戸枠の構造は遺存状態から一本削り貫きと考えられる。復原できる井戸枠の内法は0.5m。枠内から古墳時代前期末～中期前半の土師器甕の口縁部片が出土。

**奈良時代の遺構** 奈良時代は発掘区東半の低い一帯を整地しており、遺構は整地層ⅠまたはⅡの上面から掘り込まれる。整地層Ⅰ上面から掘り込まれる遺構には、S K 07・08がある。S K 07は平面稍円形の土坑で、発掘区外東に続く。埋土から8世紀前半～中頃の土器が出土した。さらにこの部分は整地層Ⅱによって再度整地されており、この上面から掘り込まれる遺構にはS B 04・S D 03・S K 05・06・S X 09、西半では地山上面で検出したS A 01・S B 03・S K 04がある。S A 01は南北4間以上(3.9m)の掘立柱列で、発掘区外北と南に続く。S B 04は桁行3間以上(6.3m以上)、梁行2間(4.8m)の東西棟建物である。建物の主軸は、国土方眼方位に対



H J 第 620 次 調査 発掘区東壁土層図 (1/50)

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| 1 黒灰色土        | 12 茶褐色土(整地層Ⅱ)   |
| 2 淡灰色砂質土      | 13 橙褐色土(整地層Ⅲ)   |
| 3 淡褐色砂質土      | 14 黄茶色粘質土(整地層Ⅱ) |
| 4 橙色粘質土       | 15 灰褐色土(柱穴取抜)   |
| 5 黄灰色粘質土      | 16 黄褐色土(柱穴取抜)   |
| 6 灰黄色粘質土      | 17 黄褐色粘質土(SK07) |
| 7 茶褐色土(SK06)  | 18 黄褐色粘質土(SK07) |
| 8 黄褐色土(SK06)  | 19 橙褐色粘質土(整地層Ⅰ) |
| 9 暗茶褐色土(SK06) | 20 灰色シルト(整地層Ⅰ)  |
| 10 黑灰色土(SK06) | 21 淡灰色砂質土       |
| 11 暗褐色土       | 22 明黄褐色粘質土(地山)  |



し北で東に振れている。SX09はSB04の内部北寄りの据付穴群で、平面円形ないし梢円形の土坑が南北4列、東西2列に並ぶ。土坑群は直径0.3~0.9m、深さ0.15~0.3m、掘形は丸底を呈し、埋土は暗灰色土である。SB04が発掘区外東に延びることから、さらに東へ続くものと想定できる。埋土から須恵器大甕の破片が出土しており、土坑形状や配置関係から、SX09は貯蔵用の埋糞遺構と考える。また、SB04の南辺付近にも類似した土坑群があり、これらも同様に据付穴群の可能性がある。SD03は長さ5.0m以上、幅0.8mの南北溝である。発掘区南端で溝幅が1.3mと広くなる。溝底は北から南へと勾配を下げておらず、南へ向けて排水していたものと考える。埋土から8世紀末頃の土器類が出土した。

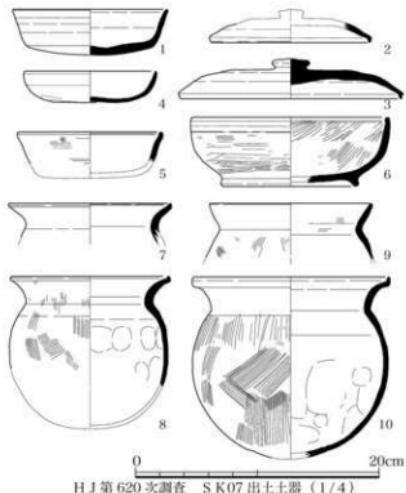
#### IV. 出土遺物

土器類が遺物整理箱20箱、瓦類が2箱の計22箱が出土した。土器類では弥生土器、古墳時代の土師器、8世紀~9世紀の土師器・須恵器・製塙土器・線刻土器・墨書き土器、9世紀の灰釉陶器、13~14世紀の土師器・瓦質土器・国産陶器などがあり、瓦類では8世紀の軒平瓦6691型式A種・丸瓦・平瓦が出土した。以下、SK07出土土器について概述する。SK07からは1箱分の土器が出土し、1~3が須恵器で、4~10が土師器である。1は杯Aで、口縁部内外面はロクロナデ調整、底部外面はロクロケズリ調整である。口径12.4cm、器高3.7cm。2・3は杯蓋で、2は口径13.4cm、残存高2.5cm。3は口径18.6cm、器高3.3cm。4は杯Eとみられる器形で、口縁部外面から底部外面には粗いヘラケズリ調整が残る。口径11.0cm、器高2.55cm。5は杯Aで、口縁部外面に横方向のヘラミガキが僅かに残る。口径12.0cm、残存高2.5cm。6は杯Bとしたが、内湾する口縁部はあまり類例がない。口縁部内面は二段の斜放射状暗文、口縁部外面は横方向のヘラミガキを密に施す。口径16.8cm、器高5.7cm。7~10は甕Aである。口縁部形態には、外反する口縁部と内傾もしくは直立する端面を持つ(7・8・10)と、や

や内湾気味の口縁部と丸くおさめた端部を持つ(9)がある。これらは8世紀前半~中頃の土器とみられる。

#### V. 調査所見

今回の調査では、弥生時代後期前半および古墳時代前期~中期前半の井戸を検出した。調査地北東には菅原東遺跡が展開し、近接する市HJ第570次調査においても古墳時代前期の溝を検出していることから、調査地近辺においても同時期の遺構の広がりが想定できる。



奈良時代では平城京の宅地造成に伴い、S D 03 以東の低い帯が整地されて土地利用が大きく変容することが判明した。坪内の利用時期は、S K 07 出土土器から少なくとも8世紀中頃以前には利用されていたと考える。その後8世紀後半になると整地層IIが形成され、この上

面に建物等が構築される。整地層II上面にある遺構は、重複関係から3時期以上の変遷が窺える。S D 03 から8世紀末頃の土器が出土しており、S B 04 は重複関係からこれよりも新しいことから、平城京廃都後も宅地利用がしばらく継続していたと推定できる。(大原 瞳)

H J 第620次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模(間)	桁行全長	梁行全長	柱間寸法		備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行(m)	梁行(m)	
S A 01	南北	4以上	3.9以上	北から	1.0~1.0~0.9		
S A 02	東西	3	4.8	1.6	1.6等間		柱穴の深さ0.2~0.5m。重複関係からS B 03とは並存せず。
S B 03	東西	2×2	6.0	3.6	3.0等間	北から 1.5~2.1	柱穴の深さ0.05~0.3m。配置関係からS A 02と並存せず。S A 02との前後関係は不明。
S B 04	東西	3以上×2	6.3以上	4.8	2.1等間	2.4等間	柱穴の深さ0.3~0.4m。建物内部に発掘付穴群S X 00を伴う。発掘区外東に延びる。重複関係からS D 03・整地層IIより新しい。

遺構番号	掘形			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)		
S E 01	圓丸方形	南北1.6×東西2.0	1.5	弥生時代後期前半の短頭壺1点	素掘り井戸。掘形の断面形状は逆台形を呈す。S A 02・S K 05・整地層Iより古い。
S E 02	円形	直径0.7	0.7	古墳時代前期末~中期前半の土師器甕の口縁部片1点	井戸枠の構造は一本削り貫きか。復元できる内法は0.5m。整地層Iより古い。
S D 03	南北溝	長さ5.0以上×幅0.8~1.3	0.3~0.5	8世紀末頃の土師器杯・皿・甕、須恵器皿	S B 04より古く、S K 05・整地層IIより新しい。
S K 04	梢円形	南北1.4×東西3.4	0.2	8世紀後半~末頃の土師器杯・皿・甕、須恵器皿	
S K 05	不整形	南北3.3以上×東西1.9以上	0.3	8世紀代の土師器杯・皿・甕、須恵器皿	発掘区外南に延びる。S A 02・S D 03より古く、S E 01・整地層IIより新しい。
S K 06	不整形	南北2.7×東西1.8以上	0.2	8世紀代の土師器杯・皿・甕、須恵器皿	S X 09より古く、整地層IIより新しい。
S K 07	不整形	南北2.0×東西3.6以上	0.2~0.4	8世紀前半~中頃の土師器杯・皿・甕、須恵器皿	整地層IIより古く、整地層Iより新しい。
S K 08	不整形	南北0.3以上×東西0.8	0.5	出土遺物なし	整地層IIより古く、整地層Iより新しい。
S X 09	円形	直径0.3~0.9	0.2~0.3	8世紀後半以降の土師器・須恵器・瓦	発掘付穴群。南北4列、東西2列の計8基検出。S K 06・整地層IIより新しい。



H J 第620次調査 発掘区全景（東から）



H J 第620次調査 発掘区全景（西から）



H J 第620次調査 S D 03・S K 05 (北から)



H J 第620次調査 整地層下の遺構（西から）

## 4. 平城京跡（右京三条一坊四坪）の調査 第621次

事業名	工場新築	調査期間	平成21年5月12日～5月29日
届出者名	積水化学工業株式会社	調査面積	190m <sup>2</sup>
調査地	奈良市三条大路四丁目1-1	調査担当者	秋山成人

### Iはじめに

平城京第621次調査地は、条坊復原によると朱雀大路の西に面する右京三条一坊四坪の南東に相当する。調査地の北側で行われた国第288次調査では、弥生時代の溝、奈良時代の掘立柱建物などが検出されている。また、国道308号線拡幅工事に伴う県2006～2009調査では、弥生時代後期の土坑、飛鳥時代の下ツ道東西両側溝、奈良時代の朱雀大路東西両側溝・三条大路北側溝が確認されている。本調査は、奈良時代の四坪内の様相および弥生時代の遺構の広がりを確認する目的で実施した。

### II 基本層序

発掘区内の基本層序は、上からアスファルト舗装、砕石、造成土、黒灰色土（旧耕作土）、黄灰色砂質土、淡黄灰色砂質土と続き、現地表下約1.25mで黄灰色粘土の地山となる。また、発掘区中央には地山上面に灰色粗砂が堆積する。地山は、南から北に向かって緩やかに低くなり、標高は63.1～63.4mである。

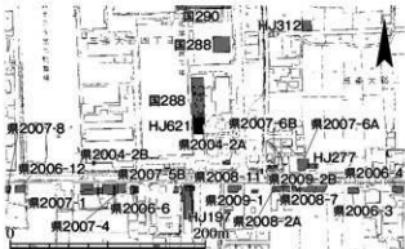
遺構検出作業は、灰色粗砂および地山上面で行った。

### III 検出遺構

検出遺構には、弥生時代後期の掘立柱建物（S B 01）1棟・溝（SD 04～11）8条・土坑（SK 12）1基・性格不明の遺構（SX 02・03）2基、奈良時代の掘立柱建物（S B 13・14）2棟・掘立柱列（SA 15・16）2条・溝（SD 17）1条・土坑（SK 18・19）2基がある。詳細は次頁の一覧表にまとめた。以下、概要を記す。

弥生時代の遺構 検出した溝は、重複関係からみて、SD 08→SD 09→SD 10→SD 11の順で新しいことが判明した。SD 04～07は南北方向に延びる素掘りの溝で、規模は幅0.1～0.2m、深さ0.1～0.2m。断面はU字形で、埋土は灰褐色土である。このうち、溝SD 04は、国第288次調査で検出のSD 2603に接続する。溝SD 06から、弥生時代末の壺が出土した。溝SD 09・10から弥生時代後期後半の広口壺・台付鉢・高杯の破片が出土した。また、溝SD 11からは、弥生時代後期後半の壺・甌の破片が出土した。

なお、溝SD 09・10によって区画される地山の高まり（SX 02）と、溝SD 10・11で区画される部分（SX 03）の計2箇所がある。この部分は、後世の削平もある



H J 第621次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

り、墓坑などの遺構は確認できなかった。

奈良時代の遺構 建物S B 14は、国第288次調査検出のS B 2601につながり、桁行3間・梁行2間の南北棟建物であることが判明した。また、建物S B 13の東側妻柱列と建物S B 14の西側妻柱列は、約2.1mの間隔をおいて概ね柱筋を揃えている。柱列SA 15・16は、建物S B 14の東側と南側を遮蔽する位置にある。溝SD 17は、坪内を南北に3分割した際の南から3分の1付近に位置し、宅地を区画する溝の可能性がある。

### IV 出土遺物

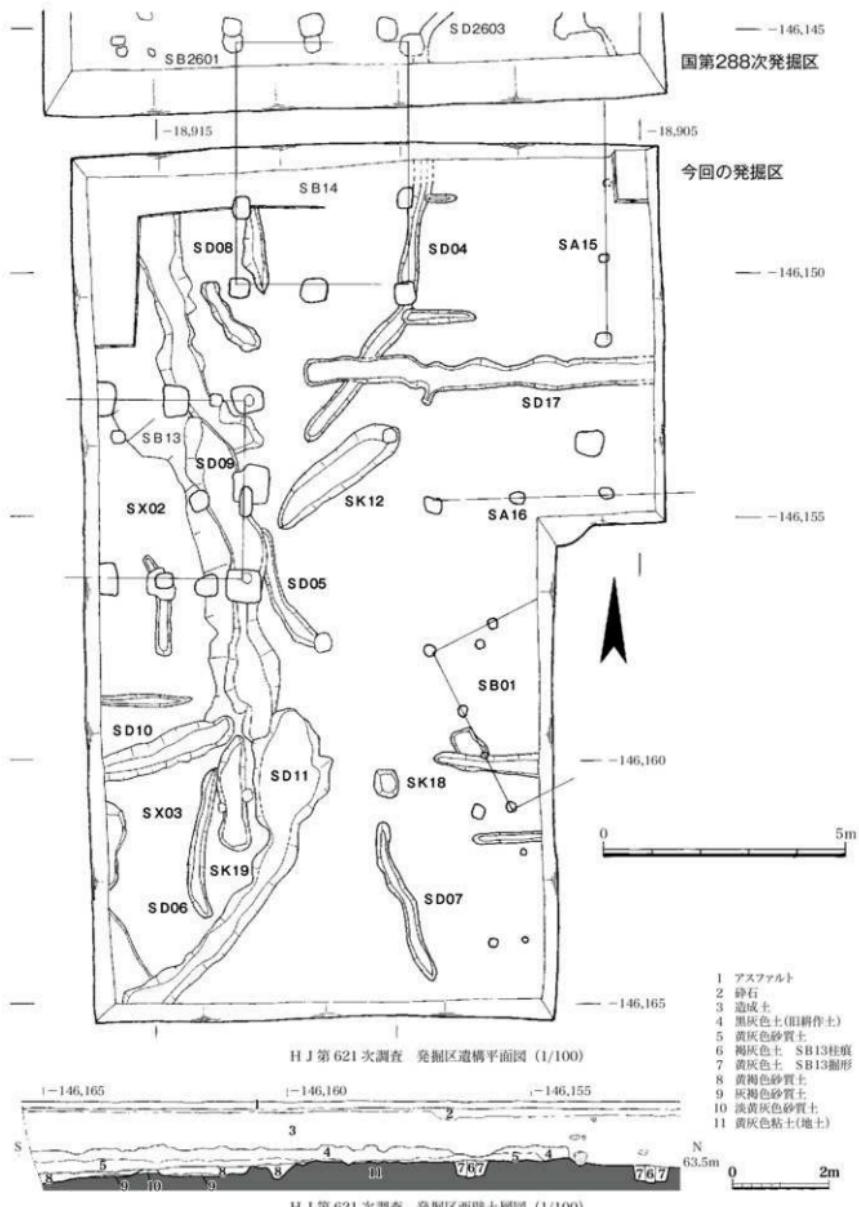
遺物整理箱6箱分が出土した。弥生土器がほとんどを占め、後期後半の長頸壺・広口壺・小型甌・台付鉢・高杯と後期末の直口壺がある。奈良時代の遺物は、土師器・須恵器・製塙土器・および丸瓦・平瓦が少量あるが、詳細な時期は不明である。

### V 調査所見

弥生時代の遺構としては、複数の溝と土坑を確認した。溝は主に発掘区西側を中心に分布し、そこから発掘区外へと延びる。これらの溝には重複関係がみられ、発掘区の南側で検出した溝ほど時期が新しくなる傾向が確認できる。また、これらで区画されたSX 02・03は、埴丘や埋葬施設こそみられないが、状況からみて周溝墓である可能性がある。

奈良時代の遺構は、朱雀大路に面している四坪内であるにも関わらず、遺構密度は比較的希薄である。本調査では、坪内を南北に区画するとみられる東西溝を新たに検出したことにより、坪内を分割して宅地として利用していた時期があることが推定できた。

（秋山成人）



HJ第621次調査 遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模		柱行全長	梁行全長	柱間寸法(m)		備考
		柱行×梁行	(m)			柱行	梁行	
S B 01	北で西に振れる 28°振れる	3×1以上	3.6	2.4以上	北から 1.4-1.2	1.4		柱穴の径 0.1~0.2m、深さ 0.2m
S B 13	東西	2以上×2	3.0以上	3.6	1.5	1.8		柱穴一辺 0.8m、深さ 0.2~0.3m
S B 14	南北	3×2	4.95	3.6	1.65	1.8		柱穴一辺 0.4m、深さ 0.2~0.3m
S A 15	南北	2以上	3.3		1.65			柱穴一辺 0.2~0.3m、深さ 0.2m~0.3
S A 16	東西	2以上	3.6		1.8			柱穴一辺 0.3m、深さ 0.2~0.4m S B 04より新しい
遺構番号	平面形	平面規模(m)		深さ(m)	主な出土遺物・備考			
S X 02	平面方形	東西 2.5以上、南北 7以上		0.3	主軸は北で西に振れる。東辺は S D 09、南辺 S D 10 で区画される 北辺は既存建築物排水溝掘形により削平されている			
S X 03	平面不整形	東西 3.3以上、南北 4.5以上		0.3	北辺は S D 10、東辺から南辺にかけて S D 11 で区画される			
遺構番号	平面形	平面規模(m)		深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	
S D 04	断面U字形	幅0.4、長さ 6以上		0.2	灰褐色土		重複関係から S D 17 より古い	
S D 05	断面U字形	幅0.4、長さ 2.5		0.1	灰褐色土			
S D 06	断面U字形	幅0.3、長さ 3.2		0.1	灰褐色土	直口壺(弥生末)		
S D 07	断面U字形	幅0.3、長さ 3.3		0.2	灰褐色土	土器小片(弥生)		
S D 08	断面逆台形	幅0.9、長さ 6以上		0.2	赤褐色土	広口壺(弥生後期)	重複関係から S D 09 より古い	
S D 09	断面逆台形	幅1.0、長さ 6.7以上		0.3	褐色土	広口壺(弥生後期)	重複関係から S D 11 より古い	
S D 10	断面逆台形	幅0.7、長さ 2.8		0.3	褐色土	広口壺(弥生後期)	発掘区外西側へ延びる	
S D 11	断面逆台形	幅0.5~1.5、長さ 7以上		0.2	暗褐色土	広口壺(弥生後期)	発掘区外南西へ延びる	
S K 12	平面不整形	幅0.8、長さ 3.2		0.3	褐色土	長頸壺(弥生後期)		
S D 17	断面逆台形	東西 0.6、長さ 7以上		0.1	淡灰色土	土師器甕、製埴土器小片(8世紀)	坪内を南北 1/3 に分割する付近に位置する	
S K 18	平面不整形	東西 0.5、南北 0.6		0.2	淡灰色土	須恵器甕・丸瓦・平瓦小片(8世紀)		
S K 19	平面不整形	東西 0.6、南北 2.4		0.1	淡灰色土	須恵器甕小片(8世紀)		



発掘区全景（北東から）



S X 02・03（南西から）



発掘区全景（北から）



S X 02・03（北西から）

## 5. 平城京跡（左京四条五坊八坪）の調査 第624次

事業名	J R奈良駅周辺整備事業	調査期間	平成21年8月19日～9月9日
届出者名	奈良市長	調査面積	153m <sup>2</sup>
調査地	三条本町地内	調査担当者	武田和哉・松浦五輪美

### I.はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では、左京（外京）の四条五坊八坪の北辺中央付近に該当している。調査地周辺では過去に調査事例が数件あり、調査地の西約90mの地点では、江戸時代および時期不明の土坑を検出している<sup>1)</sup>。また、調査地の西隣約30mの地点でも江戸時代の土坑を数基検出しているが、遺構の密度が低いという所見が得られている<sup>2)</sup>。

### II. 基本層序

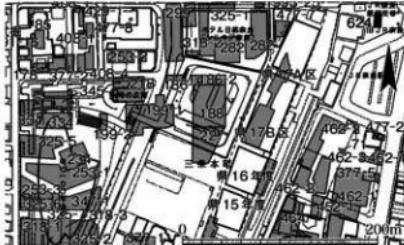
基本層序は、アスファルト・クラッシャーおよび造成土（0.9～1.2m）以下、黒灰色土（0.1～0.2m=旧水田土）、黒灰色粘土（約0.1m）、などが堆積し、地表下約1.2～1.5mで黄灰色シルト（粘土）または暗青灰色砂礫の地山層に達する。地山上面の標高は発掘区北側では約65.6m、また発掘区南側では約65.4mである。

### III. 検出遺構

遺構検出は地山上面で実施した。以下に主要遺構の概要を記す。規模や出土遺物の詳細は別表に示す。

S E 01は、発掘区北側で検出した平面楕円形の素掘りの井戸。遺構の重複関係から、後述のS E 02より古い。S E 02は、発掘区北側で検出した平面隅丸方形の素掘りの井戸で、北半は発掘区外へと続く。S E 03は発掘区北西角で検出した平面円形の素掘りの井戸で、西半は発掘区外へと続く。S K 04は発掘区北半部で検出した

H J 第640次調査 発掘区位置図(1/5,000)



平面楕円形の土坑。S E 05は発掘区北半部で検出した平面楕円形の素掘りの井戸。S K 06は発掘区北半部で検出した平面円形の土坑。S E 07は発掘区北西角付近で検出した井戸で、西半は発掘区外へと続く。鉄道用枕木を使用して覆いをした状態で検出されており、石組みの井戸枠内からガラス・煉瓦の破片等が出土したことから、20世紀以降に埋められたとみられる。S E 08は発掘区西壁中央付近で検出した平面円形の井戸で、西半は発掘区外へと続く。S E 09は発掘区ほぼ中央で検出した平面円形の井戸で、鉄道軌道敷用のクラッシャーで埋められていることから、前述のS E 07同様に20世紀以降に埋められたとみられる。S K 10は発掘区中央やや南寄りで検出した平面円形の土坑。わずかに薄い曲物様の板が壁面に推定してもらっていた。S K 11は発掘区南半部で検出された主要遺構一覧表

遺構番号	形			井戸件	主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)			
S E 01	楕円形	長径1.8×短径1.5	1.0以上	素掘り	土師器、瓦質土器、陶磁器（17～18世紀）、丸瓦、平瓦、桟瓦、土質、鉄滓、砾石、現瓦	
S E 02	隅丸方形	東西1.8×南北1.5以上	1.0以上	抜き取り、不明	土師器、瓦質土器、陶磁器（17～18世紀）、輸入陶磁器（明代龍泉系青磁）、丹波形土製品、丸瓦、軒丸瓦（巴紋・13世紀以前）、軒瓦（17世紀以前）、平瓦、桟瓦、土質、鉄滓、輪羽口、現瓦	S E 01より新しい
S E 03	円形	径1.8	1.0以上	素掘り	土師器、瓦質土器、陶磁器（17～18世紀）、丸瓦、平瓦、桟瓦、土質、鉄滓、下駄	
S K 04	椭円形	長径1.8×短径1.5	0.2	素掘り	土師器、瓦質土器、陶磁器（17～18世紀）、丸瓦、平瓦、桟瓦、土質、鉄滓	
S E 05	楕円形	長径1.7×短径1.4	0.8以上	素掘り	土師器、瓦質土器、陶磁器（17～18世紀）、丹波形土製品、軒丸瓦（巴紋・13世紀以前）、丸瓦、平瓦、桟瓦、鉄釘、曲物側板、曲物底板、輪羽口	深部の掘形は円形
S K 06	円形	径1.5	0.5以上	素掘り	土師器、瓦質土器、陶磁器（17～18世紀）、丸瓦、平瓦、桟瓦、鉄滓、砾石、現瓦、段	
S E 07	円形	径1.2	0.4以上	石組み	土師器、瓦質土器、陶磁器（18～19世紀）、丸瓦、平瓦、桟瓦、土質、鉄滓	
S E 08	円形	径1.5	0.5以上	素掘り	土師器、瓦質土器、丸瓦、平瓦、桟瓦、土質、キセル、庶	
S E 09	円形	径1.2	0.5以上	石組み	土師器、瓦質土器、陶磁器（18～19世紀）、墨書き土器（19世紀）、軒平瓦（15～16世紀）、丸瓦、平瓦、桟瓦、鉄滓、庶、炭	
S E 10	円形	径1.2	0.2	曲物	道具瓦、土質、鉄滓	
S K 11	隅丸方形	東西1.5×南北1.6	0.3	素掘り	陶磁器（17世紀以前）、鉄滓、庶	
S E 12	円形	径1.3	0.5以上	素掘り	—	

部で検出した平面隅丸方形の土坑の埋土から遺物はほとんど出土せず、時期は不明。S E 12は発掘区南辺中央で検出した平面円形の素掘りの井戸で、南半は発掘区外へと続く。江戸時代の陶磁器片が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

#### IV. 出土遺物

遺物整理箱 21 箱分の遺物が出土した。その大半を江戸時代の土器・陶磁器・瓦の破片、輪羽口、鉄滓などの鋳造関連遺物が占めている。このほかに、製塙土器(時期不明)、軒桟瓦(17世紀以降)、木製品(時期不明)、鉄片(時期不明)などが少量出土した。

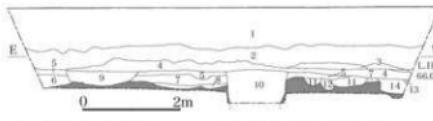
#### V. 調査所見

本調査では、江戸時代の土坑や井戸などの遺構を数多く検出した。隣接する県 2003 年度調査の所見とは異なり、遺構密度は高い。江戸時代の井戸は素掘りのものばかりである。土坑も、平面円形または梢円形を呈し、深さは概ね 0.5 ~ 0.6 m に留まり、底は平坦に掘られる傾向にある。ほとんどの遺構の埋土には鉄滓や輪羽口などの鋳造関連遺物が数多く含まれる点が特徴的である。

江戸時代の三条村の絵図面によれば、調査地付近は弥勒堂町に該当している<sup>3)</sup>。また『奈良坊目切解』によれば、弥勒堂町は当初は田畠であったところを、江戸時代初期の寛永年間に開発がなされて、寛文年間(1661 ~ 1672)頃には建物が「続き建つ」状況になっていたと記す<sup>4)</sup>。しかし、本調査では明確な建物跡遺構は検出できなかった。これは、発掘区が当時の三条通りからやや南側に離れた場所に位置しているからかもしれない。

大量の鋳造関連遺物が出土したことからみて、調査地付近には鍛冶場などの工房があったと推測されるが、この点については『奈良坊目切解』には言及がない。これらの遺物は、当時の弥勒堂町内の状況を知る上では大きな手がかりである。

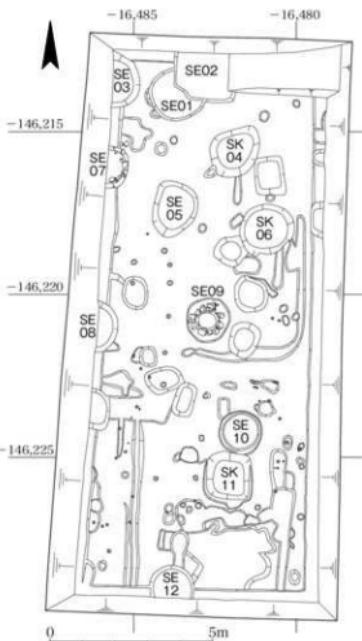
(武田和哉)



- |                         |                                |
|-------------------------|--------------------------------|
| 1 : アスファルト・クラッシャー・地盤改良土 | 9 : 黒灰色粘質土(土坑埋土)               |
| 2 : 造成土                 | 10 : 暗灰色土+地山ブロック<br>(井戸SE12埋土) |
| 3 : 暗灰褐色粘質土(旧耕作土)       | 11 : 暗灰色粘質土(素掘埋溝土)             |
| 4 : 黑灰色粘土(旧耕作土)         | 12 : 黑灰色土(溝埋土)                 |
| 5 : 黑灰色土(旧耕作土)          | 13 : 暗黄褐色粘土(土坑埋土)              |
| 6 : 黑灰色粘土               | 14 : 黑灰色粘質土(土坑埋土)              |
| 7 : 暗黄褐色粘質土             | 地山: 黄灰色シルト(粘土)<br>または暗灰色砂礫     |
| 8 : 暗黄褐色砂質土             |                                |

H J 第 624 次調査発掘区南壁土層図 (1/100)

- 1) 奈良市教育委員会「平城京左京四条五坊八坪の調査第 477-7 次」  
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告平成 14 年度』2006
- 2) 奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京四条五坊八坪」  
『奈良県遺跡調査概報 2003 年度(第一回)』2004
- 3) 三條農業組合・三條水利組合編『三條村史』2006
- 4) 村井古道『奈良坊目切解』卷六・弥勒堂町条



H J 第 624 次調査発掘区遺構平面図 (1/150)



発掘区全景(南から)

## 6. 平城京跡（左京四条一坊三坪）の調査 第627次

事業名	宅地造成	調査期間	平成21年12月26日～平成22年1月5日
届出者名	株式会社ZERO 代表取締役 田中久美子	調査面積	150m <sup>2</sup>
調査地	奈良市四条大路三丁目 984・992	調査担当者	鐘方正樹 中島和彦

### Iはじめに

調査地は、左京四条一坊三坪の西半部のほぼ南北中央にある。調査地の南約200mの五条一坊一坪の市HJ第65次調査では、一坪利用の宅地が見つかっている。また北西約70mの地点の市HJ第328次調査では、朱雀大路と四条大路とともに、弥生時代の溝が検出されている。今回の調査は、三坪内の様相確認の他、平城京以前の遺構の確認を目的とした。

### II 基本層序

発掘区内の層序は、発掘区西端で上から耕作土（1）、灰色砂質土（2）、奈良時代整地土の暗黄灰色シルト（3）とつづき、地表下約0.5mでにぶい黄色シルト（7）の地山となる。地山面は発掘区東側に向かい高くなり、東端は西端に比べ約0.2m高く、耕作土直下で地山面となる。地山面の標高は60.9～61.1mである。

### III 検出遺構

掘立柱建物1棟、掘立柱列3条、溝、河川等がある。詳細は遺構一覧表に記す。

掘立柱建物・列は、いずれも柱穴規模から中小規模の建物群になると考えられるが、発掘区外につづき全容は不明である。東西柱列S A 02はS B 01の北側妻柱列と柱筋が揃い、西端でS A 03と接続することから、これらは一連の遺構と考えられる。

S D 06は、幅1.5～2.0m、深さ約0.2mのL字状の溝で、東西約7.0m分、南北約5.0m分を検出した。発掘区外西側と北側につづく。奈良時代の整地土（3）の下で検出した。出土遺物には8世紀後半以降の土師器高杯・甕、須恵器杯・杯蓋・鉢・壺が少量ある。

河川Iは、北西から南東方向に斜行し、西岸から約3.3m分を検出した。深さは約0.5mで、灰色砂で埋まる。上層から土師器の小片が3点出土した。重複関係から奈良時代以前の流路であるが、詳細な時期は不明である。

### IV 出土遺物

土器類・瓦類がいずれも遺物整理箱1箱分ある。土器類の多くは整地層から出土で、8世紀後半の土師器・須恵器の他、製塙土器少量と円面鏡1点がある。瓦類は丸瓦と平瓦のみで、軒瓦、道具瓦等は出土していない。

### V 調査所見



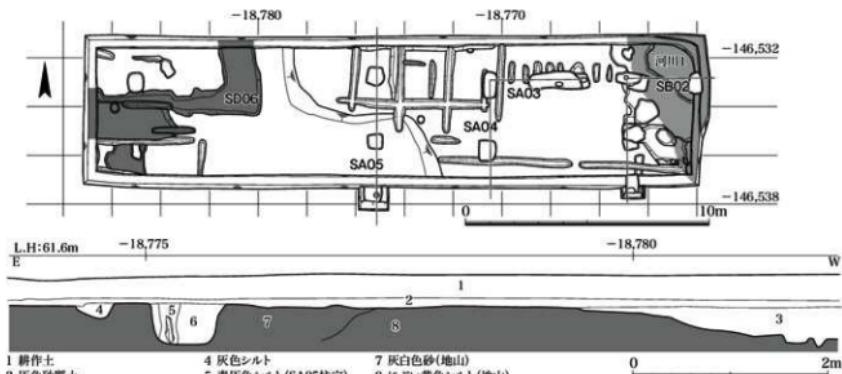
HJ第627次調査 発掘区位置図(1/5,000)

調査の結果、奈良時代の遺構の存在を確認したが、いずれも発掘区外につづき詳細は不明である。一方、三坪北側の四条大路間小路は、北西側の市HJ第328次調査成果から道路心座標がX=-146,470.36、Y=-18,804.3と判明している。これを基に三坪の南北中心線を求めるとき、おおよそ発掘区のすぐ南のX=-146,538付近と推定できる。S B 02とS A 03・04はいずれもその位置関係から、三坪の南北中心線をまといで築かれていることがわかる。

(中島和彦)



発掘区全景(西から)



発掘区遺構平面図 (1/200)・南壁上刷図 (1/50)

H J 第627次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模(間)	桁行全長	梁間全長	桁行柱間寸法	梁間柱間寸法	備考
		桁行 × 梁間	m	m	m	m	
SB02	南北	2以上 × 1以上	4.8以上	2.7以上	2.4等間	2.7	
SA03	東西	2	3.6		1.8等間		東側1間分は、柱穴2個分の布隔
SA04	南北	1以上	3.0		3.0		北端でS A02と接続
SA05	南北	2以上	4.8		2.4等間		



発掘区全景 (北東から)

## 7. 平城京跡（右京五条大路）の調査 第628次

事業名	西ノ京地区歴史的環境整備事業	調査期間	平成22年1月20日～2月19日
届出者名	奈良市長	調査面積	110m <sup>2</sup>
調査地	奈良市西ノ京町188、五条町325-1他	調査担当者	秋山成人

### Iはじめに

本調査地は、条坊復原では右京五条二坊五坪と五条大路に該当し、南側は薬師寺旧境内の北辺と接する。調査地東側を南流する秋篠川の東・西側の水田には五条大路の痕跡を示すとみられる畦畔が断続的に残っているが、過去の調査で五条大路の遺構を検出した例はない。地形的には、西の京丘陵東側の台地東縁辺部から秋篠川に合流する大納言川の南側に括る冲積地で、現況は宅地および水田・畑である。調査対象地の東側は秋篠川の堤防に接しており、そこから幅約12m、高さ0.9～1.3mの堤防状の高まりが西へ約120m延び、台地東縁辺部へ繋がっている。堤防の北側水田の標高は約61.0m、南側は60.6m。今回は、五条大路関連遺構の検出を目的に、第1～3・7発掘区を東西に延びる堤防の性格を把握するために第4・5発掘区を設定した。また、対象地東側の一画に墳丘状の高まりが残っていたため、この性格を明らかにするため第6発掘区を設定し調査を行った。

### II基本層序

**第1・2発掘区** 上から造成土、黒灰色土（旧耕作土）、暗灰色粘土と続き、地表下約1.3mで黄灰色粘土の地山となる。遺構面は地山上面で、標高は約60.8mである。

**第3発掘区** 発掘区中央付近では黒灰色土（旧耕作土）の下が黄灰色粘土の地山となる。発掘区北半の河川跡部分では上から淡褐色土・淡灰色土・灰色土・灰褐色土・黄褐色土（以上埋立土）暗灰色土・灰色粘土・灰色砂の順で堆積する。遺構面は埋立土上面と地山上面で、標高はそれぞれ約61.6mと約61.5mである。

**第4発掘区** 黒灰色土（旧耕作土）、黄褐色粘土・黄灰色粘土・淡灰色砂・黄褐色粘砂・暗灰色土・灰白色粘土・淡灰白色粘土・暗灰白色粘土（以上堤盛土）、灰色粘土・青灰色粘土（以上谷堆積土）の順で堆積する。堤の南側は表土の下に暗灰色砂質土・褐灰色砂質土・灰色砂が堆積、北側は表土の下に淡褐色土・灰褐色土・灰色砂が堆積する。盛土上面の標高は高い所で約61.3m。

**第5発掘区** 上から黒灰色土（耕作土）、白色砂（堤状堆積土）、灰色粘土・青灰色粘土（谷堆積土）の順で堆積する。白色砂（堤状の堆積土）の南側では表土の下に淡褐色土・灰褐色土・褐灰色砂質土、北側では表土



H J 628 次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

の下に灰褐色土、灰色砂、灰色砂礫が堆積する。白色砂上面の標高は高い所で61.8mである。

**第6発掘区** 上から造成土、黒灰色土（旧耕作土）、灰色砂・褐色砂・白色砂（河川堆積土）、灰色粘土（谷堆積土）の順で堆積する。谷堆積土上面の標高は約60.2m。

**第7発掘区** 上から黒灰色土（旧耕作土）、赤褐色土（床土）、灰白色砂、白色砂、褐色土（河川堆積土）、灰色粘土・青灰色粘土（谷堆積土）の順で堆積する。谷堆積土上面の標高は約60.2mである。

### III検出遺構

各発掘区で検出した遺構の詳細は遺構表にまとめた。

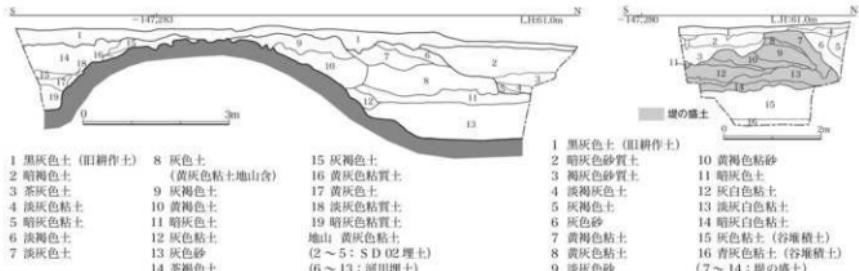
**第1・2発掘区** ほぼ全域で粘土探掲坑群を検出した。埋土から8世紀代の土器片・瓦片、12世紀の土師器片、15世紀後半の瓦質鉢が出土した。

**第3発掘区** 土坑S X 01、素掘り溝S D 02、河川跡を検出した。S X 01は北肩を確認しただけで規模や性格は不明。検出面からの深さは1.3m、埋土から12世紀中頃の土師器皿等が出土。S D 02は、河川跡と重複して検出した東西方向の溝で、河川跡よりも新しい。溝底には18世紀代の国産磁器片を包含する暗灰～淡灰色粘土（厚さ約0.2m）が堆積していた。河川跡は、検出面からの深さは1.8m、川底は広く平坦な形状を呈す。堆積土は大きく上下2層に分かれ、下層は粘土と砂の互層で、上層は人為的な埋土である。下層から8世紀代の土器・瓦片とともに14世紀の瓦質土器片が出土した。

**第4発掘区** 堤S X 03と谷地形を確認した。S X 03は、谷地形の堆積土の上に砂と粘土で積まれており、南北幅3.1m以上、東西1.9m以上ある。高さは1.2m分

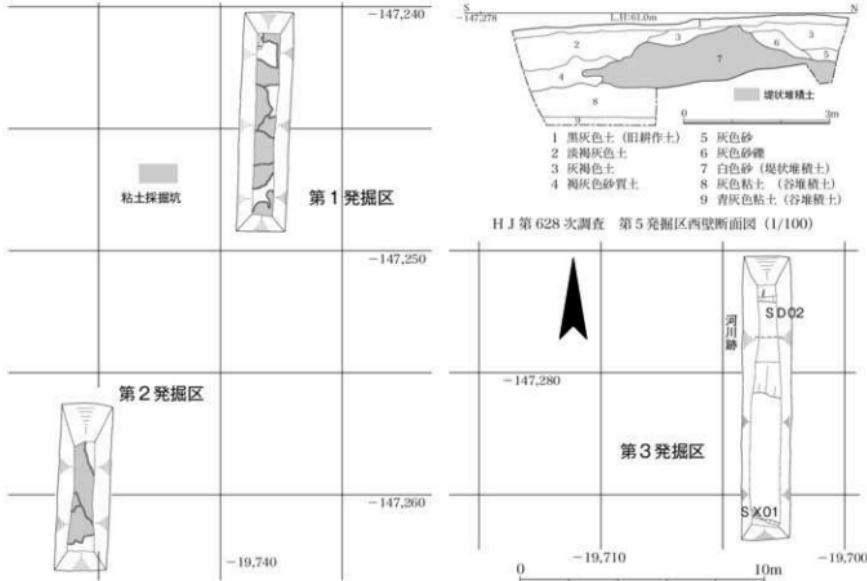
H J 第628次調査 検出遺構一覧表

発掘区	遺構名	形状	平面規模(m)	深さ・高さ(m)	出土遺物
第1・2 発掘区	粘土探掲坑	平面不整形	東西0.7以上 南北1以上	0.1以上	8世紀の土師器皿・須恵器杯・甕、奈良・平安時代の丸瓦・平瓦、12世紀の土師器皿、15世紀後半の擦鉢
第3 発掘区	S X 01	不明	東西1.2 南北3.6	1.3	奈良・平安時代の丸瓦・平瓦、12世紀中頃の土師器皿・羽釜・瓦器皿・白磁皿
	S D 02	断面逆台形	東西0.8以上 南北3.1以上	0.9	18世紀の肥前産磁器碗
	河川跡	断面U字形	東西1.2以上 南北6.2以上	1.8	8世紀の須恵器甕・奈良・平安時代の丸瓦・平瓦・壇、12世紀の土師器皿・瓦器皿、14世紀の瓦質土器
第4 発掘区	S X 03	断面台形	東西1.9以上 南北3.1以上	1.2	8世紀の須恵器甕・土師器甕・奈良・平安時代の丸瓦・平瓦、12世紀の瓦器皿、15世紀の瓦質土器
第5 発掘区	S X 04	断面台形	東西1.3 南北4.2	1	堤状堆積北斜面上に堆積する褐色砂から17世紀後半の土師器皿・肥前産陶磁器



H J 第628次調査 第3発掘区西壁断面図 (1/100)

H J 第628次調査 第4発掘区西壁断面図 (1/100)



H J 第628次調査 第1～3発掘区遺構平面図 (1/200)

を確認した。8世紀代の土器片・瓦片とともに、15世紀の瓦質土器鉢片が出土した。

**第5発掘区** 谷地形と東西方向の堤 SX 04を検出。SX 04は、谷の堆積土の上に白色砂で積み上げられており、高さは1m分を確認した。

**第6・7発掘区** 秋篠川の洪水層および谷地形の堆積土を確認したが、遺構は検出できなかった。

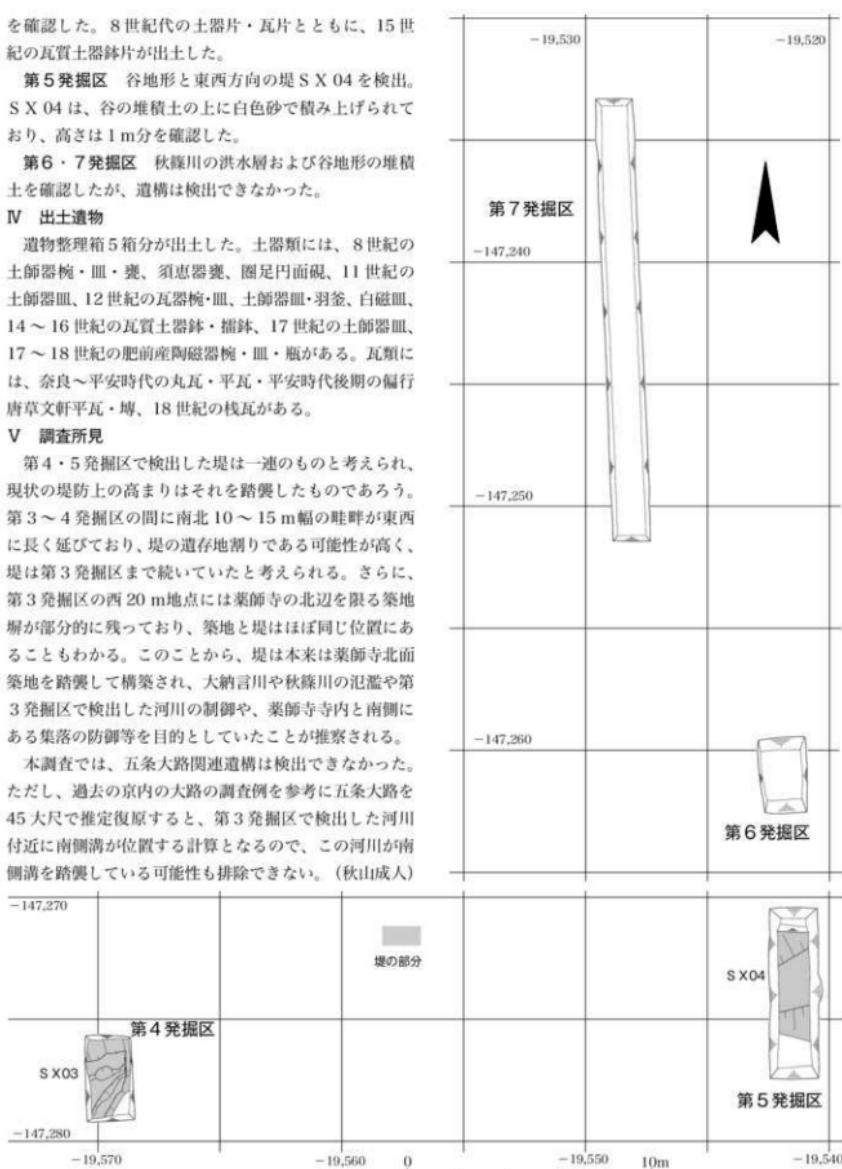
#### IV 出土遺物

遺物整理箱5箱分が出土した。土器類には、8世紀の土師器楕・皿・甕、須恵器甕、圈足円面鏡、11世紀の土師器皿、12世紀の瓦器楕・皿、土師器皿・羽釜、白磁皿、14~16世紀の瓦質土器鉢・鉢鉢、17世紀の土師器皿、17~18世紀の肥前産陶磁器楕・皿・瓶がある。瓦類には、奈良~平安時代の丸瓦・平瓦・平安時代後期の偏行唐草文軒平瓦・埠、18世紀の棟瓦がある。

#### V 調査所見

第4・5発掘区で検出した堤は一連のものと考えられ、現状の堤防上の高まりはそれを踏襲したものであろう。第3~4発掘区の間に南北10~15m幅の畦畔が東西に長く延びており、堤の遺存地割りである可能性が高く、堤は第3発掘区まで続いていると考えられる。さらに、第3発掘区の西20m地点には薬師寺の北辺を限る築地塀が部分的に残っており、築地と堤はほぼ同じ位置にあることもわかる。このことから、堤は本来は薬師寺北面築地を踏襲して構築され、大納言川や秋篠川の氾濫や第3発掘区で検出した河川の制御や、薬師寺寺内と南側にある集落の防護等を目的としていたことが推察される。

本調査では、五条大路関連遺構は検出できなかった。ただし、過去の京内の大路の調査例を参考に五条大路を45大尺で推定復原すると、第3発掘区で検出した河川付近に南側溝が位置する計算となるので、この河川が南側溝を踏襲している可能性も排除できない。(秋山成人)



HJ 第628次調査 第4～7発掘区遺構平面図 (1/200)



第1発掘区（北から）



第4発掘区（南西から）



第2発掘区（北から）



第5発掘区（北から）



第3発掘区（北東から）



第6発掘区（西から）



第3発掘区（南から）



第7発掘区（北から）

## 8. 平城京跡（左京二条五坊北郊）の調査 第629次

事業名	個人住宅新築	調査期間	平成22年2月1日～2月5日
届出者名	個人	調査面積	26m <sup>2</sup>
調査地	奈良市法蓮町717番4	調査担当者	安井宣也

### Iはじめに

調査地は、佐保川右岸の沖積平野の北縁に位置し、平城京の条坊復原では左京二条五坊北郊の西辺南寄りにある。現状は宅地である。

調査地のすぐ南に市HJ第600次調査<sup>1)</sup>（平成19年度）の西発掘区がある。地山上面（標高69.2～69.8m）で古墳時代中期後半の古墳S X 01と土坑S K 02、平安時代の柱穴と平安時代前葉に埋没する旧河川、地山や旧河川の上を覆う整地層上面で鎌倉時代初頭の溝S D 03・04、井戸S E 05・土坑S K 06を検出したことから、古墳S X 01が平安時代前葉まで残存していたことや、平安時代中葉以降に開発されて居住地化したことが判明した。

このうち、古墳S X 01は全長約15mの西向きの前方後円墳で、埴丘の南辺部分と周濠の一部を検出した。埴丘の大半は削平されているが、後円部は基底部、前方部は2段目の斜面下部までが残存していた。周濠は幅1.8mで、くびれ部及び前方部の南面が旧河川の侵食で失なわれていた。底面の標高は、後円部南面が69.0m、前方部前面が68.7mである。周濠内や埴丘に面した旧河川から、この古墳に伴うものとみられる埴輪編年IV期の埴輪が出土した。葺石はみられなかった。

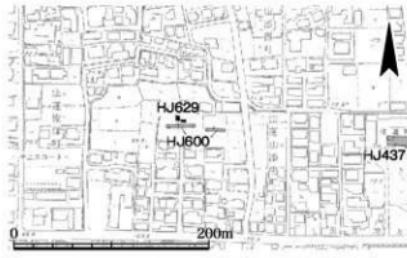
今回の調査地内では、古墳S X 01の後円部・くびれ部と周濠の存在が想定されたので、埋葬施設の確認を目的としてA発掘区を、くびれ部付近の埴丘と周濠の確認を目的としてB発掘区をそれぞれ設定した。なお、遺構番号は市HJ第600次調査の続き番号とする。

### II 基本層序

A発掘区では、造成土（厚さ0.9m）、耕作土（厚さ0.3m）、水田床土（厚さ0.1m）の下で沖積層の地山上面となる。B発掘区では、造成土（厚さ1.0m）、耕作土（厚さ0.1～0.2m）、水田床土（厚さ0.2m）、暗灰黄色砂質シルトやオリーブ褐色シルト質砂（厚さ0.1m）の下で沖積層の地山上面となる。地山上面の標高は、A発掘区が69.8m、B発掘区が69.6～69.8mである。

### III 検出遺構

A発掘区 地山上面で時期不明の溝S D 07、平安時代以降の柱穴と耕作溝を検出した。S D 07は北西から南東へ斜行する幅0.6m、深さ0.2mの溝で、埋土中から



HJ第629次調査 発掘区位置図(1/5,000)

土師器片が1点出土した。形状からみて、古墳時代以前の遺構の可能性がある。なお、古墳S X 01の埋葬施設とみられる遺構はなかった。

B発掘区 地山上面で古墳S X 01の周濠、地山上面を覆う土層の上面で平安時代以降の柱穴と鎌倉時代初頭頃の溝S D 08を検出した。古墳S X 01の周濠は幅約1.8m、深さ0.1mの浅い凹みで、層位と位置から認識した。埴丘は後世の改変が著しく、発掘区西壁付近でわずかに残る程度である。底面の標高は69.6mである。出土遺物はない。S D 08は重複関係から柱穴より新しく、12～13世紀頃の土器片が出土した。

### III 出土遺物

遺物整理箱1箱分があり、主なものに水田床土から出土した古墳時代の円筒埴輪、8～9世紀の須恵器壺・壺、灰釉陶器壺、平瓦、12世紀頃の白磁碗と、溝S D 08から出土した12～13世紀頃の土器皿、瓦器碗、白磁碗がある。いずれも小片で、円筒埴輪・土器・瓦器は摩耗が著しい。白磁碗は輸入品で口縁部は玉縁状である。

### IV 調査成果

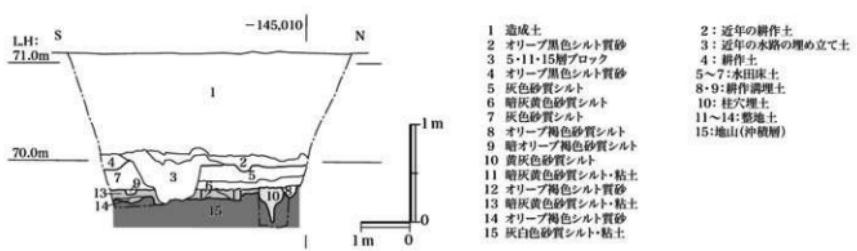
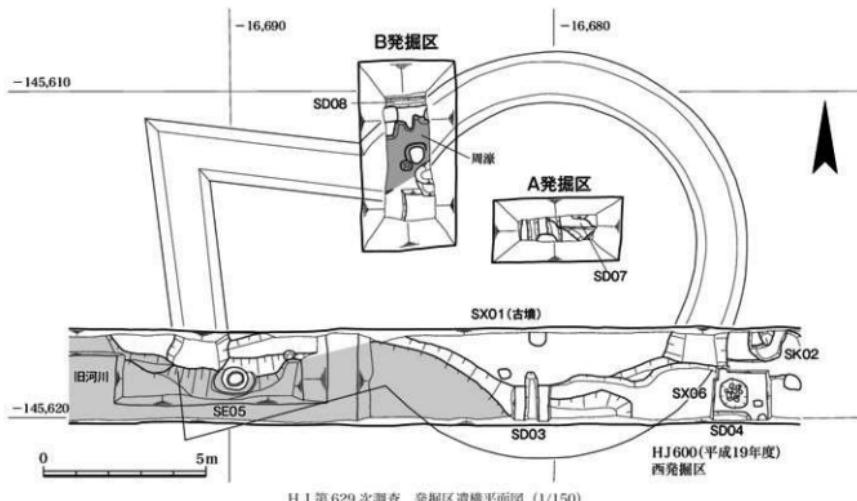
古墳S X 01については、後円部の埋葬施設が残存せず、北側くびれ部の埴丘根や周濠の遺存状態が悪いことや、市HJ第600次調査地と比べて周濠の幅はほぼ同じながら底面の標高が高いことがわかった。埴丘や周濠の遺存状態から、埴丘の規模は全長約15m、後円部径約9m、前方部幅約7mで、幅1.8mの周濠が埴丘の周囲を鍵穴形に巡ると想定される。なお、B発掘区の地山上面を覆う土層は平安時代中葉以降の整地土とみられる。（安井宣也）  
① 奈良市教育委員会「平城京跡（左京二条五坊北郊）の調査 第600次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成19年度』2010



A発掘区全景（北東から）



B発掘区全景（北東から）



HJ 第629次調査 B発掘区西壁土層断面図 (縦: 1/50、横: 1/100)

## 9. 史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 21 年度に史跡大安寺旧境内において 1 件の調査を実施した。第 122 次調査は、

遺跡範囲確認を目的として、東塔跡地区で実施したものである。

平成 21 年度史跡大安寺旧境内 発掘調査一覧表

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA122	史跡大安寺旧境内保存整備事業	東九条町 1326	H21.11.16 ~ 12.15	80m <sup>2</sup>	山前



平成 21 年度史跡大安寺旧境内 発掘調査位置図 (1/5,000)

## 東塔跡の調査 第122次

### I はじめに

史跡大安寺旧境内保存整備事業に係る東塔地区の発掘調査を平成18年度から行っている。本年度は、基壇上の確認調査を行った。

東塔跡については過去2回の調査が行われている。昭和49年に現土壇の擁壁工事に際して行われた小規模な調査では、土壇南西裾に基壇化粧の一部（延石）が確認されている。このことから、現在の擁壁ブロックで囲まれた土壇が東塔基壇とほぼ一致すると推定された。

DA第114次調査（平成18年度）では、東塔基壇（南・北・西階段および基壇辺）のほか、溝、石敷き、古墳時代以前の柱穴群、溝、土坑、流路、奈良～平安時代の柱列、溝、土坑、鎌倉時代以降の池状遺構、江戸時代以降の盛土を検出した。この調査の結果、東塔基壇の規模が西塔と同規模であったこと、基壇の東辺が1.5mほど大きく削られていること、基壇の構造が西塔と同じ壇上積基壇であることが新たに確認された。また、南階段前の石敷きは9世紀後半～10世紀後半までの間に敷設されたもので、幅が0.8mと狭く、形状的にも上面が曲面をなしており歩きにくいことから、装飾的もしくは一時的なものとしての可能性が高い。また、文献史料に出てくる鎌倉期の東塔の修理についてでは調査成果から事実と判断でき、13世紀中頃の修理の際に用いられた瓦とみられる「大安寺寶塔」などの文字瓦が焼土中から大量に出土したことは、修理後最終的に焼け崩れたことが考えられている。

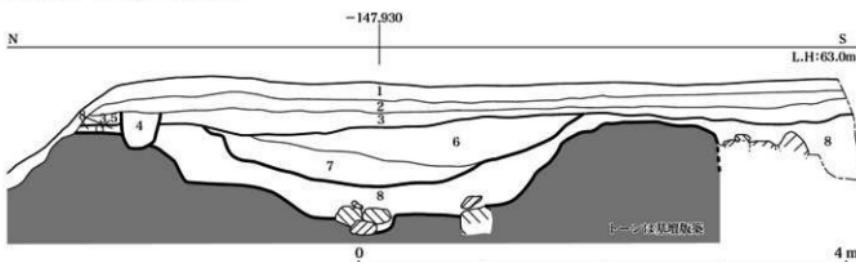
本調査では、東塔基壇の様相の確認を目的に、推定基壇中心を交点として東西南北に幅2.5m、長さ9mまたは9.5mの発掘区を北東部（第1発掘区）と南西部（第2発掘区）の2箇所に設定した。



発掘位置図 (1/1,000)

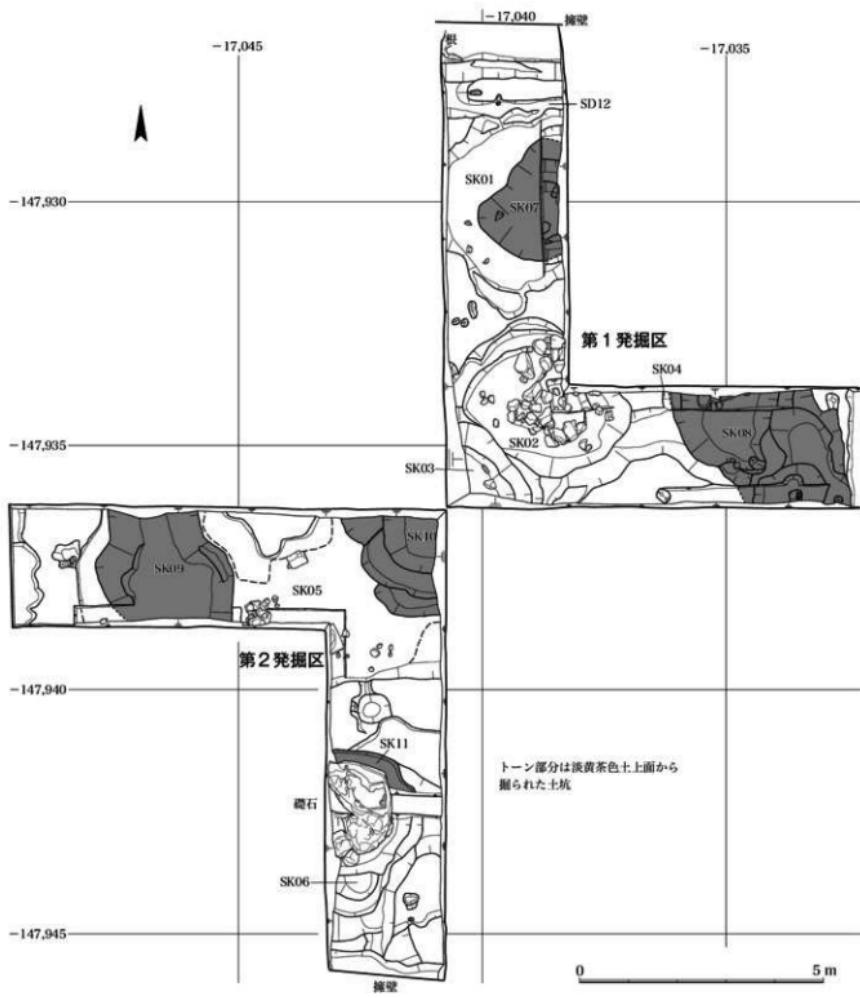


発掘区全景（南から）



- |             |                |                       |
|-------------|----------------|-----------------------|
| 1. 暗灰色土（表土） | 4. 灰色土         | 7. 淡茶色土（瓦多く含む）        |
| 2. 黒茶色土     | 5. 暗茶灰色土       | 8. 淡黄茶色土（礫岩片を含む）      |
| 3. 蘭茶色土     | 6. 赤褐色土（瓦多く含む） | (6・7はSK07埋土 8はSK01埋土) |

DA第122次第1発掘区東壁土層図 (1/40)



DA第122次調査 発掘区平面図 (1/100)

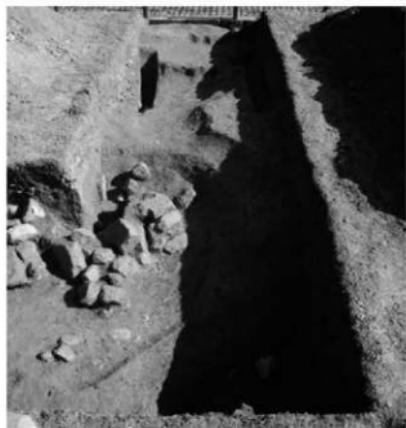
## II 基本層序

基壇上の基本層序は、上から暗灰色土（表土）、灰茶色土、濁茶色土、凝灰岩片を多く含む淡黄茶色土と続き、版築による基壇の築成土に至る。遺構面は淡黄茶色土上面と基壇築成土上面で、それぞれの上面の標高は約62.5 m、62.4 mである。

## III 検出遺構

淡黄茶色土上面で礎石および土坑（SK 07～11）、溝 S D 12、基壇築成土上面で土坑（SK 01～06）を検出した。以下、検出面ごとに述べる。

基壇築成土上面の検出遺構 南側柱列中の間の柱位置にあたる花崗岩製の礎石を検出した。南北約2.0 m、東



第1発掘区南半（上）西から・同東半（下）北から

西約1.2mが残存しており、概ね南西半が割りとられている状態である。柱座と東側の地盤座が認められる。厚さ約1.0mで根石の上に座っており、版築層に埋まる状態で据えられている。残存礎石上面天端の標高が62.69m、柱座の基底が62.56mである。

土坑を6基検出した（SK 01～06）。これらは心礎、北東・南西の四天柱、東西南北それぞれの側柱の礎石を抜きとった痕跡とみられる。平面規模は概ね直径3.0m、深さ0.6～0.8mの碗状を呈する。底部には人頭大またはそれ以上の川原石を用いた根石が、版築層に埋まる状態で据えられている。土坑SK 01～06内は凝灰岩片

第2発掘区北半（上）東から・同東半（下）北から

を含む淡黄茶色土で埋められており、基壇全体をある程度の高さまで淡黄茶色土で覆っている。根石の上端の標高は61.7m前後である。埋土から8世紀の須恵器、13世紀の土師器、17世紀前半頃の土師器が出土した。

**淡黄茶色土上面の検出遺構 四天柱以外の礎石抜き取り位置には、土坑（SK 07～11）がある。幅2.5～3.2m、深さ約0.5mで碗状を呈する。これらは多量の丸・平瓦で埋められており、17世紀の染付碗片も混じっている。溝SK 12は幅0.4m、深さ0.3mである。長さ2.5m分を確認した。重複関係から淡黄茶色土より新しい。**

#### IV 出土遺物

遺物整理箱で23箱分あり、そのほとんどが丸・平瓦である。8～9世紀の須恵器、綠釉陶器、丸・平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、13～14世紀の土師器、丸・平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、17世紀の土師器、染付がある。以下、主なものについて述べる。軒瓦の大半はSK 07～11で出土した。

8世紀～9世紀の軒丸瓦は6138型式C a種1点、6138型式C b種2点、51型式A d種3点、軒平瓦は6575型式B種1点、6664型式A種2点、6667型式A種1点、6712型式A種3点、6712型式B種4点、6716型式F種1点、型式不明2点、13～14世紀の軒丸瓦は173型式A種4点、174型式A種10点、新型式1点(1)、型式不明25点、軒平瓦は274型式A種2点、274型式B種29点、新型式7点(2・3・4)、型式不明9点である。

1は右巻きの三巴紋で、巴同士の頭部は分離する。尾は圓線につかない。内圓線のみある。内圓線の外側に珠紋をめぐらす。巴紋は尖り気味であるSK 07から1点



出土礎石（東から）

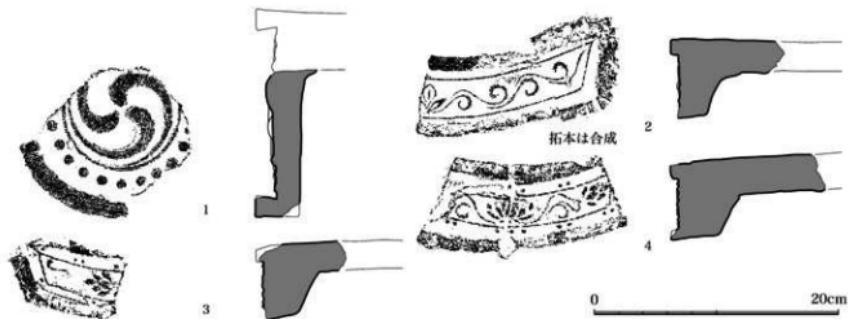
出土。2は3弁の花紋状の中心飾をもつ均整唐草紋軒平瓦。5回反転である。顎面と顎部瓦当裏面はヨコケズリ、凸面平瓦部はタテケズリを施すSK 03から1点、SK 09から2点、SK 10から2点、計5点出土。4は横視した蓮華紋の中心飾をもつ均整唐草紋軒平瓦。唐草と蓄状を交互に配置する。顎貼り付け技法。顎面はヨコケズリ、顎部瓦当裏面はヨコナデ、凸面平瓦部はタテナデ、凹面平瓦部は荒くヨコケズリを施すが布目が残る。SK 10から1点出土。3は紋様構成から4に向かって左部分の可能性が高いと考える。SK 08から1点出土。

#### V 調査所見

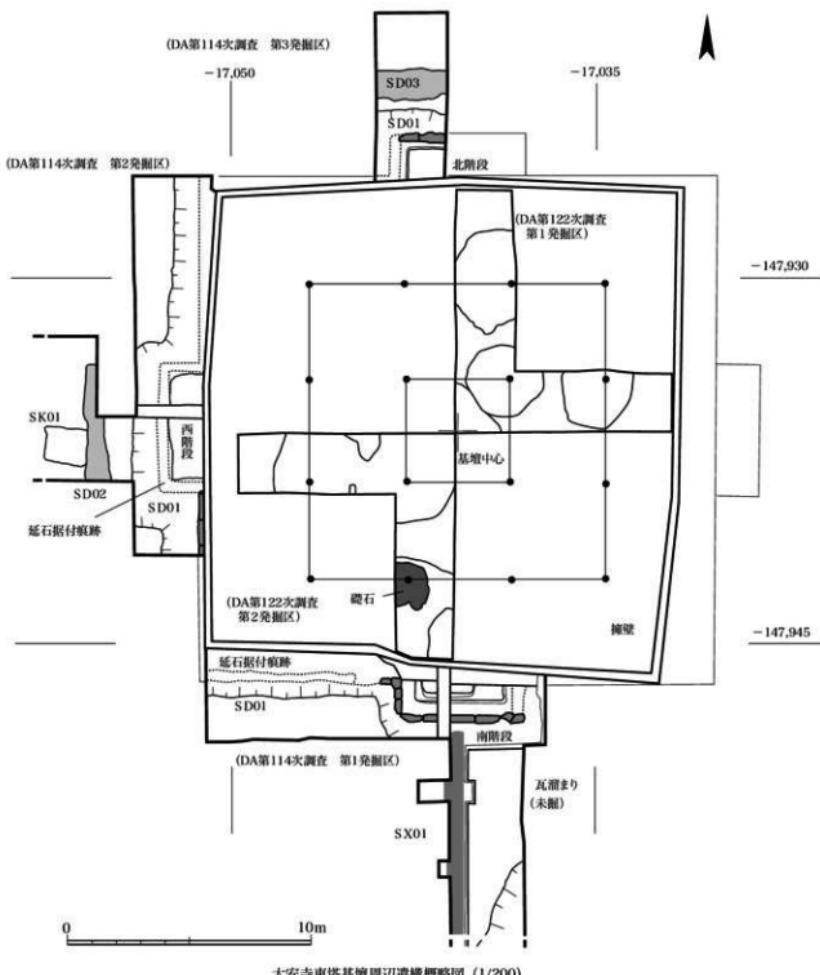
礎石は現地表面から約8cmの深さで柱座の一部が現われた。位置・方向・据付状態からみて、原位置を保っていると判断される。したがって現地表面は築成当初より若干高いことがわかる。「奈良縣に於ける指定史蹟第二冊<sup>1)</sup>」の記事には「東塔の土壇は・・南端に近く一個の礎石片が埋没している外・・」と見え、また、黒田氏の著書<sup>2)</sup>にも「東塔の南辺に一個の礎石片を埋没している外は一切の礎石を失っている」との記述がある。今回の調査で検出した礎石はこれらの記事に記載されているものと同じであろう。

礎石の抜き取り時期については、17世紀前半頃の土器が出土しているので、この時期の可能性が高いと考える。礎石を抜き取った後には凝灰岩を多量に含む淡黄茶色土で埋められるとともに、基壇全体をある程度の高さ(現状では約0.1m)まで覆っている。ここに含まれる凝灰岩は整形加工が認められるものが多く、基壇化粧に用いられたものが壊され、廃棄された可能性が考えられる。

四天柱以外の礎石抜き取り位置にはSK 07～11が



DA第122次調査出土軒瓦実測図・拓本(1/4)



大安寺東塔基壇周辺遺構概略図 (1/200)

ある。

これらの土坑は13世紀の修復に用いられたと考えられる軒瓦・丸・平瓦で埋められているが、17世紀の染付も混じる。出土遺物からみて礎石抜き取り穴との時期差も認められないことから、抜き取り穴が埋められず窪んでいたところに瓦を廃棄した可能性もある。

礎石やその抜き取り痕跡の配置から、東塔の初重の平

面規模は一込約12m(40尺)の方三間となる可能性が高く、基壇の高さについては、礎石を確認しており、その礎石の柱座基底部から、約1.8m(6尺)とみることができ、西塔の復原寸法とほぼ一致することが確認できた。

(山前智敬)

- 1) 内務省『史蹟調査報告書第四 奈良縣に於ける指定史蹟第2冊』昭和3年 内務省
- 2) 黒田昇義『大和の古塔』昭和18年 天理時報社

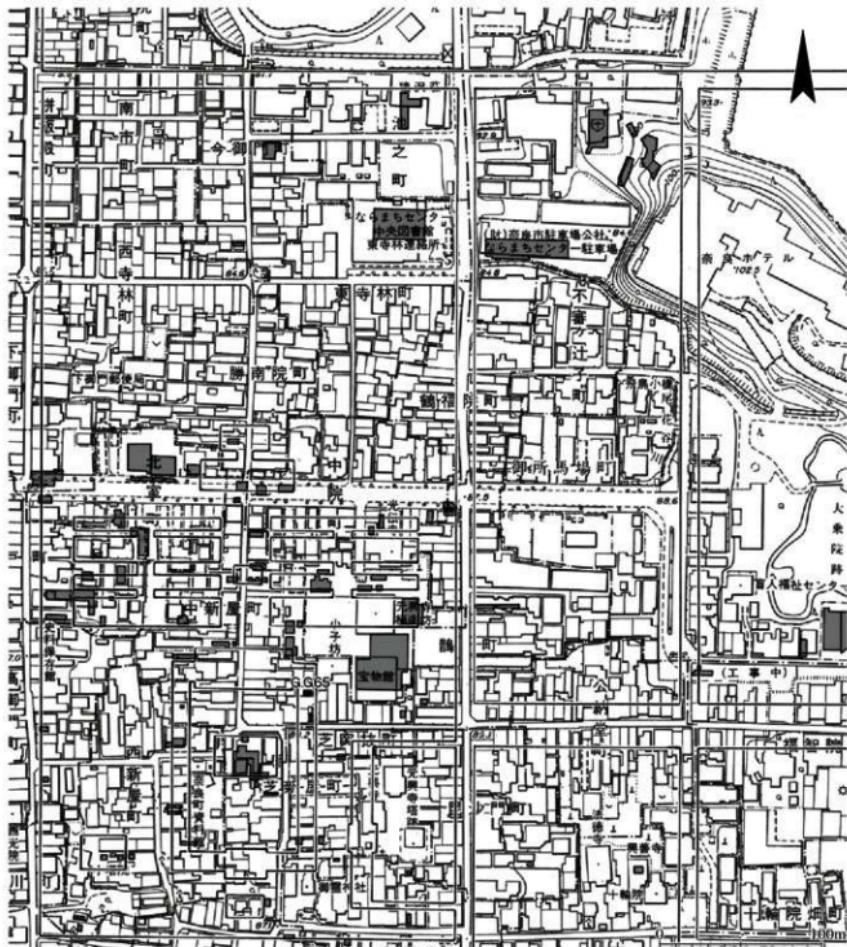
## 10. 元興寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 21 年度に元興寺旧境内において 1 件の調査を実施した。第 65 次調査は賃貸住

宅新築にかかる調査であり、東面回廊推定地において実施した。

平成 21 年度元興寺旧境内 発掘調査一覧表

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
GG 65	賃貸住宅新築	中新屋町 40-2 他	H21.7.13 ~ 7.24	10	中島



元興寺旧境内の調査 発掘調査位置図 (1/3,000)

# 東面回廊推定地・奈良町遺跡の調査 第65次

## I はじめに

調査地は、元興寺旧境内の東面回廊推定地で、東面回廊が講堂に接続するため西に折れる部分にあたる。調査地の南隣接地では、市G G第43次調査が行われており、16世紀後半頃の盛土が確認されたが、東面回廊は検出できなかった。今回の調査は、東面回廊とともに中世以降の土地利用の確認を目的とした。

## II 基本層序

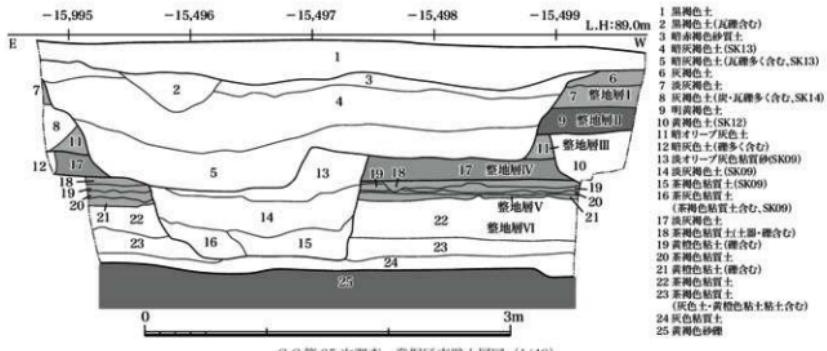
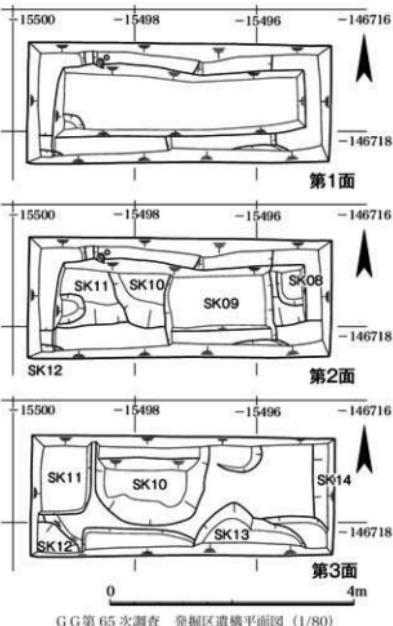
発掘区内の層序は、上から表土層（1. 黒褐色土）、整地層Ⅰ（6. 灰褐色土、7. 淡灰褐色土）、整地層Ⅱ（9. 明黄褐色土）、整地層Ⅲ（11. 暗オリーブ灰色土）、整地層Ⅳ（17. 淡灰褐色土）、整地層Ⅴ（18～21. 茶褐色粘質土と黄橙色粘土の互層）、整地層Ⅵ（22・23. 茶褐色系の粘質土、24. 灰色粘質土）で、現地表下1.8mで黄褐色砂礫の地山に至る。地山上面はおおむね平坦で、標高は86.6mである。

整地層Ⅰ上面が19世紀前半、整地層Ⅱ上面が19世紀頃、整地層Ⅲ上面が時期不明、整地層Ⅳ上面が17世紀前半、整地層Ⅴ上面が16世紀後半以降の遺構面である。整地層Ⅵ上面は硬く締まり、16世紀頃の土器が出土する。整地層Ⅵの23層からは15世紀後半以降の土器が少量出土しており、堆積土の多くは中世後半以降のものである。遺構検出は整地層Ⅲ上面（第3面）と整地層Ⅴ上面（第2面）・地山上面（第1面）で行った。

## III 検出遺構

遺構には、土坑が7基あり、第3面では5基（SK10～14）、第2面では2基（SK08・09）を検出し、第1面では遺構はなかった。なお遺構番号は市G G第

43次調査報告からの継ぎ番号とした。検出遺構の詳細は一覧表に記す。多くの遺構は発掘区外に続き、全容が判明するものはない。検出したのは江戸時代以降の遺構のみで、中世の遺構は確認していない。





発掘区全景（第1面 北西から）



発掘区全景（第2面 北西から）

GG第65次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主要出土遺物	備考
S K08	不明	東西0.8以上×南北1.2以上	0.6	17世紀中期	土師器皿・羽釜、瓦質土器深鉢、国産陶器(肥前產椀・丸瓦)、鉄津	17層上面から掘削、第2面で検出
S K09	長方形または長楕円形	東西1.8×南北1.5以上	0.9	17世紀末～18世紀初め	土師器皿・羽釜、瓦質土器深鉢、国産陶器(肥前產椀・盤・信楽產鉢・盆・前堀焼・鉢、国産磁器(肥前產碗・皿)、輸入陶磁器(青花瓶、白磁皿、青磁碗)、軒丸瓦(左巻巴紋1)、軒平瓦(唐草紋3)、丸瓦、平瓦、枝瓦、道具瓦(板取瓦)、鉄釘3、輪羽口、鉄津、舟形五輪塔1	17層上面から掘削、第2面で検出
S K10	圓丸長方形か	東西1.8×南北1.3以上	1.2	18世紀末	土師器皿・鉢・培塿・瓦質土器深鉢・深鉢・方形鉢・舌出し・蓋・魁炉・国産陶器(肥前產椀・皿・信楽產鉢・盤・碗・輪・前堀焼・盆・常滑產盤・南島牛印豪他)、国産磁器(肥前產碗・皿)、輸入陶磁器(青花瓶・白磁皿)、土人形・軒丸瓦(左巻巴紋6、右巻巴紋6)、軒平瓦(唐草紋1)、軒枝瓦1、丸瓦、平瓦、枝瓦、鉄釘2、銅線2、鉄津、砾石(流紋岩)、動物遺存体(歯骨、魚鱗、貝殻)	6または7層上面から掘削、第1面で検出
S K11	圓丸方形か	東西0.9以上×南北1.2以上	1.3	18世紀末	土師器皿・培塿・瓦質土器深鉢・鉢・蓋・火明皿・鍋・国産磁器(肥前產碗・皿)、輸入陶磁器(青花大皿、白磁皿)、軒丸瓦(左巻巴紋1)、軒平瓦(右巻巴紋1)、軒枝瓦1、丸瓦、平瓦、枝瓦、鉄釘1、鉄津、動物遺存体(貝殻)	7層上面から掘削、第1面で検出
S K12	不明	東西0.6以上×南北0.5以上	0.4	19世紀代		11層上面から掘削、第1面で検出
S K13	不明	東西4.3×南北0.7以上	0.8	19世紀後半か?	土師器皿・培塿・瓦質土器深鉢・土管・軒丸瓦(左巻巴紋1)、軒平瓦(唐草紋1)、軒枝瓦(唐草紋2)、丸瓦、平瓦、枝瓦、鉄釘、鉄津、動物遺存体(歯骨、魚鱗)	6層上面から掘削、第1面で検出
S K14	不明	東西0.4以上×南北2.0以上	0.6	19世紀代	国産陶器(信楽產碗)、動物遺存体(魚鱗)	9層上面から掘削、第1面で検出

S K 09～11・13は比較的規模の大きな廃芥処理用の土坑と考えられ、大量の遺物が出土した。S K 09からは、遺物整理箱1箱分の板塀瓦が出土しており特徴的である。

#### IV 出土遺物

遺物整理箱6箱の土器類と10箱の瓦類、3箱の石・金属製品がある。多くは江戸時代のもので、遺構出土のものについては、遺構一覧表に記した。以下土坑 S K



発掘区全景（第3面 北西から）

## 10出土の土器類について報告する。

S K 10からは、遺物整理箱2箱分の約560点の土器が出土し、その内訳は出土土器組成表に記した。肥前磁器等から、18世紀末前後のものと考えられる。

土師器皿は大きくa～c類の3群に分けられる。a類(1～4)はやや平坦な底部から屈曲して口縁部につづく。口縁部は直線的なものや少し外反するものがある。口縁部のヨコナデ調整は内外面とも幅広く施され、内面のヨコナデとナデ調整との境は明瞭で、沈線風になるものがある。胎土は橙色系である。b類(5～10)は丸みのある底部で、底部と口縁部の屈曲がなく扁平な感じを受ける器形である。口縁部のヨコナデ調整は、端部のみのものと、内面に広く及ぶものがある。口径は6～10cm代のものがあるが、6・7cm代のものが多い。胎土は黄橙色系のものが多い。c類(11～14)は平らな底部で、やや丸みをもって口縁部に屈曲する。口縁部のヨコナデ調整は内外面とも幅広く施され、最後に外側に引き出され、上から見ると「の」字状になる。口径は7～11cm代のものがある。胎土は灰白色系のものが多い。

瓦質土器は土師質焼成のものが多い。19は三足の風炉と考えられ、灰白色の胎土である。底部外面には、「深草 菱吉」のスタンプがあり、京都深草産と考えられる。

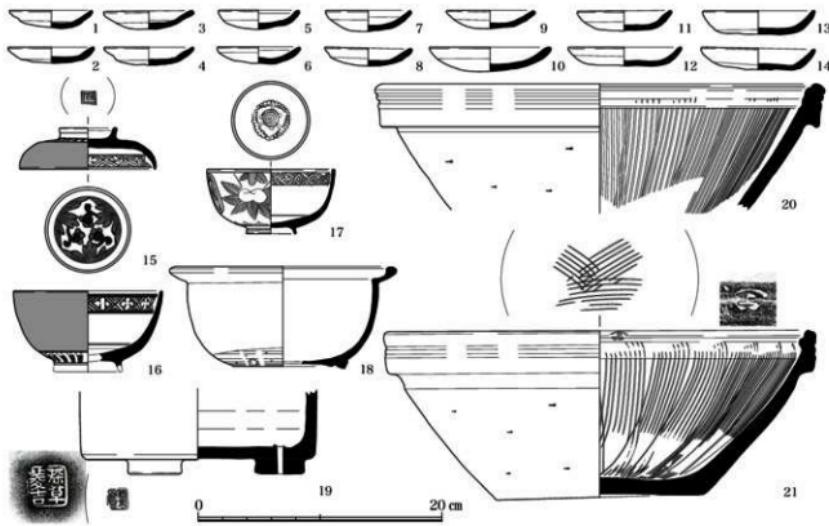
国産陶器には信楽産が多く、主体はいわゆる京・信楽系の陶器とされるものである。18は鉄袖の鍋で、この他灰釉系の椀皿類・鉄袖系の壺類がある。20・21は堺

GG第65次調査 SK 10出土土器組成表

種類	産地等	器種	点数	比率
土師器	瓦質土器	皿	92	16.58
		(a類)	16	2.85
		(b類)	60	10.70
		(c類)	17	3.03
		片	1	0.18
		焰壺	13	2.32
		小計	107	19.07
		脚鉢	2	0.36
		深鉢	11	1.96
		方形鉢	15	2.67
		鉢瓶	41	7.31
		舌出し	6	1.07
		壺	1	0.18
		楕円瓶	3	0.53
		小計	79	14.08
肥前	備前	盤	15	2.67
		蓋	4	0.18
		小計	16	2.85
		甕	2	0.36
		蓋	1	0.18
		小計	4	0.71
		壺	19	3.39
		脚鉢	1	0.18
		片	2	0.36
		小計	3	0.53
常滑	瀬戸・美濃	蓋	1	0.18
		甕	1	0.18
		脚鉢	9	1.60
		壺・瓶	29	5.17
		小計	38	6.77
		盤	10	1.78
		蓋	8	1.43
		打吹皿	2	0.36
		打吹受	1	0.18
		鉢	31	5.53
信楽	(京焼系)	蓋物	4	0.71
		蓋	1	0.18
		鍋	20	3.57
		踏蓋	2	0.36
		急須・土瓶	5	0.89
		壺	12	2.14
		盤	1	0.18
		水滴	1	0.18
		小計	98	17.47
		蓋	13	2.32
产地不明	肥前	鉢	1	0.18
		小鉢	7	1.25
		脚鉢	1	0.18
		楕木鉢	1	0.18
		瓶	1	0.18
		鍋	2	0.36
		小計	26	4.63
		小計	206	36.72
		盤	100	17.83
		碗蓋	8	1.43
国産磁器	肥前	筒形碗	9	1.60
		小碗	5	0.89
		皿	21	3.74
		鉢	16	2.85
		瓶	4	0.71
		蓋	1	0.18
		杯	1	0.18
		仮仮置	1	0.18
		小計	166	29.59
		蓋	1	0.18
輸入陶磁	青花	小計	167	29.77
		皿	1	0.18
		小計	2	0.36
		合計	561	100.00

の描跡で、描鉢の主体を占める。21は片口部分があり、その内の内面には「」の刻印がある。

肥前産の磁器には青磁染付の蓋付き碗(15・16)、濃のない「素描」の碗(17)の他、タコ唐草文の筒形碗、菊散らし文の丸碗などがある。



GG第65次調査 SK 10出土土器 (1/4)

## V 調査所見

調査の結果、元興寺東面回廊は確認できなかったが、中世以降の土地利用の状況が一部明らかになった。南側の市 G G 第 43 次調査の成果と合わせると、調査地周辺は 15 世紀後半～16 世紀末に大きく盛土されることがわかる。この時期の遺構面の 18 層上面は硬く締まり、同様な層は南側の調査区でもほぼ同じ標高で確認できる。以後江戸時代には随時盛土され、遺構面が形成される。

今回の発掘区で検出された遺構は江戸時代の廃糞処理用の土坑が多く、宅地の奥側の特徴を示していよう。一方、市 G G 第 43 次調査区の北側では、幅 1m 以上の東西方向の溝状の土坑 S K 03 が検出され、その南岸は石積みで護岸される。この土坑は現在の地番の 41 番地と 44 番地の境界線上にあり、さらに土坑を西に延長すると、41 番地と 43 番地の境界を経て、41 番地内にある南北 2 軒の境界に達する。おそらく土坑 S K 03 は 41 番地の南側を画する遺構と考えられ、西側の中新屋町の通りに間口をもつ東西方向に細長いかつての 41 番地が復原できる。土坑は出土土器から 16 世紀後半～17 世紀前半に築かれ、17 世紀前半～19 世紀前半頃までには埋没することが判明している。

中新屋町には、江戸時代の家別の間口奥行きを記した史料（明和九年（1772 年））と町絵図（天保六年（1835 年））が残る。44 番地の東側の宅地は、前者では奥行き



発掘区と周辺の宅地図 (1/800)

3間4尺、後者では5間4尺で、この間に北側に拡大している。また 40 番地の奥行きは前者では 22 間 3 尺、後者では 18 間 4 尺で、奥側が 38 番地の住人の土地となっている。このことから、調査地は 18 世紀後半には 40 番地住人宅内、19 世紀前半には 38 番地と 40 番地住人の宅地となる。18 世紀末の土坑 S K 10・11 は、この所有者の変化にともなう廃棄物処理にともなうものとも考えられよう。また市 G G 第 43 次調査検出の土坑 S K 03 の埋没年代もこの間とすれば矛盾はない。（中島和彦）

1) 安彦勘吾「中新屋町有文書」『奈良市古文書調査目録（八）奈良市教育委員会 1992

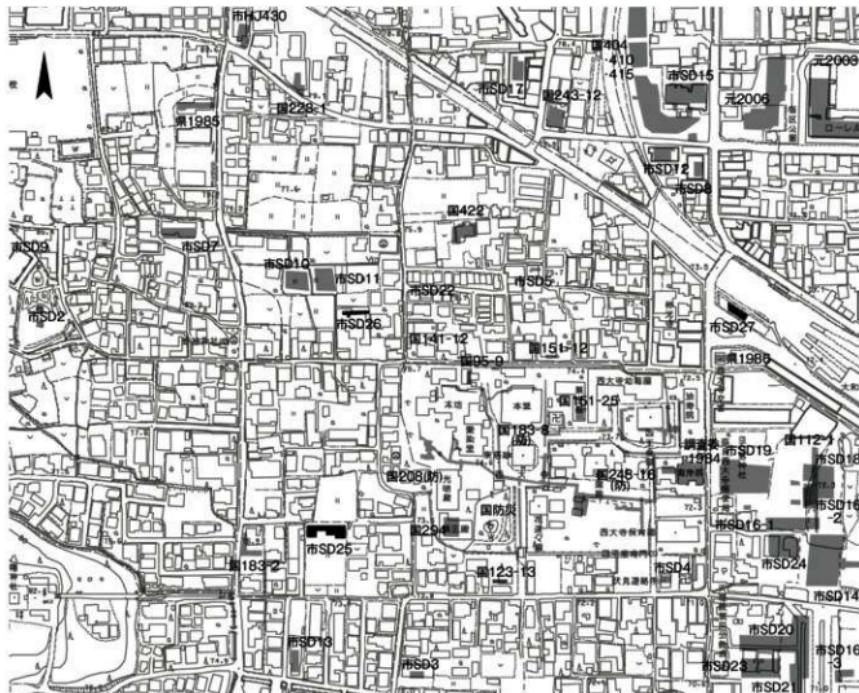
## 11. 西大寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 21 年度に西大寺旧境内において計 3 件の調査を実施した。第 25・26 次調査は個人住宅新築・道路工事にかかる調査、また 27 次調

査は駐輪場建設に伴い実施した。詳細は下表の通りである。このうち 25 次調査については、平成 24 年度に別途報告書の刊行を予定しているので、本書では割愛する。

平成 21 年度西大寺旧境内 発掘調査一覧表

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者	摘要
S D 2 5	個人住宅新築	西大寺新田町 2564-1 他	H21.4.8 ~ 7.14	321	久保邦・中居	H24 年度に別途報告書を刊行予定
S D 2 6	個人住宅新築・道路工事	西大寺新田町 536 番 他	H21.8.24 ~ 8.31	44	中島	本書で報告
S D 2 7	駐輪場建設	西大寺国見町一丁目 224 番地 1 の一部 他	H21.11.9 ~ 11.10	78	中島	本書で報告



西大寺旧境内の調査 発掘調査位置図 (1/4,000)

# (1) 正倉院跡推定地の調査 第26次

## I はじめに

調査地は、西大寺旧境内の正倉院跡推定地にある。調査地の北側の水田では、市SD第10・11次調査が行われており、15～16世紀の井戸、古代または中世の掘立柱等建物が検出されている。今回の調査は、正倉院関連の遺構と中世の遺構の有無の確認を目的とした。

## II 基本層序

発掘区内の地山面は南西から北東に向かい下降しており、北東側ほど堆積土が厚い。西側では、厚さ約0.45mの耕作土直下で明黄褐色砂礫の地山が現れ、東側では15世紀以降の遺物包含層が厚さ約0.6mあり、地表下約0.9mで地山となる。地山面の標高は西端が76.5m、東端が75.7mである。遺構検出は地山上面で行った。

## III 検出遺構

遺構には柱穴4基、土坑3基、溝4条、井戸2基がある。各遺構の規模等は末尾の遺構一覧表に記す。

掘立柱建物は、発掘区が狭く復原できなかつたが、柱穴1・2は形状・規模等から古代のものと考えられる。

土坑SK03は、平面円形の小土坑で、底から瓦器楕1点と瓦質土器の擂鉢の口縁部の破片が1点出土した。瓦器楕は伏せて出土したが、内容物はなかった。

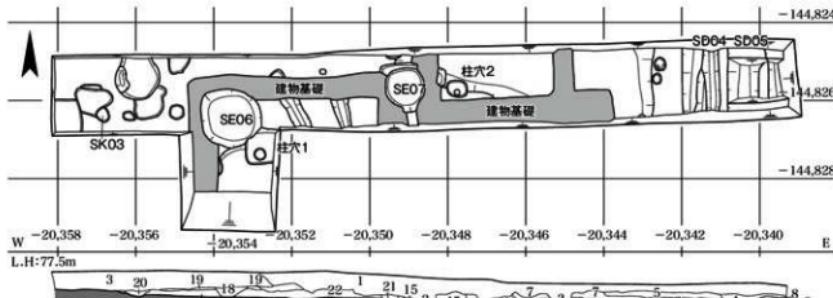
発掘区東端の南北溝SD05からは、14世紀後半頃の土器が多量に出土した。西側のSD04からも、ほぼ同時期の土器が少量出土した。SD05の東側には、遺



発掘区全景（南東から）

構または地下げに伴うと考えられる東側への落ち込みがあり、SD05の東肩が失われている。

井戸SE06とSE07は、いずれも井戸枠が残存せず、深さ2.5mほど掘削したが底には至らなかつた。15世紀後半頃の土器と共に瓦が少量出土した。

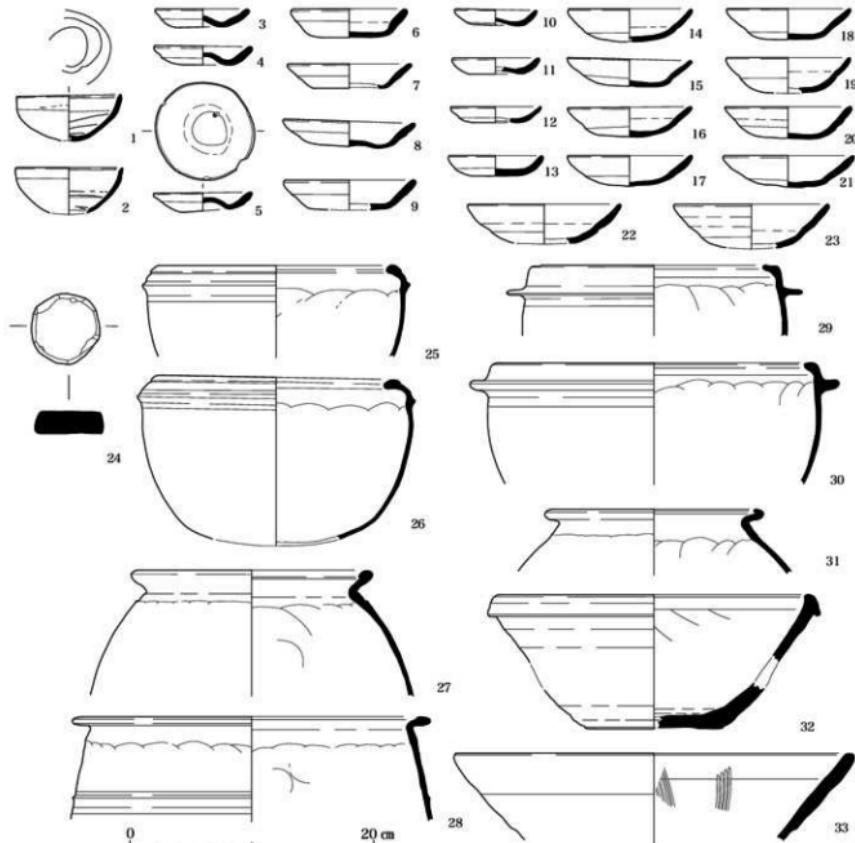


1 解体跡底底土	6 暗茶褐色土	12 暗灰褐色砂質土	16 暗灰褐色粘質土	22 泥茶灰色土
2 建物基礎裏方	7 淡茶灰色砂質土	13 黄褐色土	17 茶灰色粘質土	23 暗茶灰色土
3 耕作土	8 灰褐色土	14 茶褐色砂質土	18 灰褐色砂質土	24 暗茶灰色土
4 明茶褐色粘土 (地山の粘土と同じ)	9 明茶褐色土	15 明灰褐色土	19 明灰褐色砂質土	25 暗灰褐色粘質土
5 明茶灰色土	10 暗茶灰色土	20 淡灰褐色砂質土	26 茶灰色土	27 明黃褐色砂礫
	11 茶褐色土	15 明灰褐色土	21 茶灰色土	

SD第26次調査 発掘区遺構平面図・土層図 (1/125)

SD第26次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主要出土遺物	備考
S K 03	不整円形	径約 0.35m	0.3	14世紀後半	瓦器・瓦質土器・鉢類、不明石製品	
S D 04	南北方向	幅 0.6×長さ 5.0 以上	0.3	14世紀後半	土師器皿・羽釜、軒平瓦 1 (6764A)、丸瓦、平瓦、サヌカイト剝片 1	
S D 05	南北方向	幅 1.0×長さ 5.0 以上	0.5	14世紀後半	土師器皿・羽釜・甕・瓦器・瓦質土器・鉢類・須恵器鉢(東播磨産)・東海産陶器皿・円盤形土器・鏡印瓦 1 (平瓦四面に「西」の陽刻)・丸瓦・平瓦・凝灰岩・鉄滓	
S E 06	不整円形	径約 1.8m	2.8 以上	15世紀後半	土師器皿・羽釜・瓦器・瓦質土器・鉢類・浅鉢・深鉢・風呂・蓋・鉢類・羽器(束縛型)・甕・国産陶器(常滑産窯・瀬戸美濃産窯・产地不明窯)・輸入陶磁器(青磁碗・白磁皿)・軒丸瓦 3 (6139A)・西大寺 190 型式・型式不明)・丸瓦・平瓦・用途不明道瓦 1・堆 1・特殊堆 1・鐵石 1(片岩)・鉄滓・漆桶 1・箸 4・燒種 1	井戸枠は残存しない
S E 07	不整円形	径約 1.0m	2.6 以上	15世紀後半	土師器皿・羽釜・瓦質土器・鉢類・深鉢・鉢類・國産陶器(信楽産窯)・軒丸瓦 1 (左巻瓦紋)・軒平瓦 4 (6732K・6732M・西大寺 317 型式・型式不明 2)・鏡印瓦 1 (平瓦四面に「西」の陽刻)・丸瓦・平瓦・難波瓦・堆 2・土管・凝灰岩・鐵石 2 (ホルンフェルス)・鉄滓・用途不明鉄製品	井戸枠は残存しない



SD第26次調査 出土土器 (S K 03: 1, 33, S D 05: 2~32 1/4)

## IV 出土遺物

土器類が遺物整理箱3箱、瓦類が3箱、石製品・石器が合わせて1箱ある。遺構出土のものについては、遺構一覧表に記す。以下14世紀前半のS K 03、S D 05と、15世紀前半のS E 06、S E 07出土土器について記す。

S K 03からは、瓦器碗(1)と瓦質土器捕鉢(33)が併せて出土する。S D 05からも、同型式の瓦器碗(2)が出土する。土師器皿は、胎土の色調から、赤褐色系(3~9)と、白色系のもの(10~23)に二分され、後者が多い。土師器羽釜(25~31)は、口縁を内側に折り曲げる大和H型が多い。須恵器鉢(32)は東播系のもの。円盤形土製品は(32)平瓦を再利用したもの。

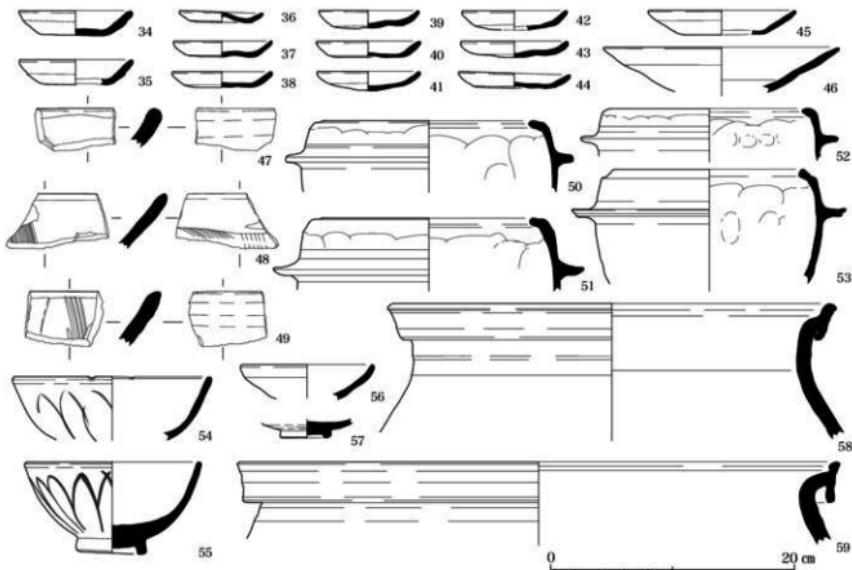
S E 06出土の土師器皿は、胎土・器形から深手で前代の赤褐色系の系譜を引くもの(34~35)と、浅手のもの(35~46)とに分かれる。土師器羽釜(51~53)は、大和H型が多い。瓦質土器捕鉢(47~49)は、口縁端部が丸いものと面をとるものがある。瓦器碗(56)は内外面のヘラミガキ調整がない。青磁碗は(54~55)龍泉窯系のもの、白磁皿(57)は陶器質の胎土で、高台部分は露胎。常滑産陶器甕(59)とS E 07出土の信楽産甕(58)は、いずれも形態から古い時期のもの。

## V 調査所見

調査の結果、柱穴を検出し古代の遺構の存在が確認できたが、調査面積が狭く建物を復原するには至らなかつた。また室町時代の井戸・土坑・溝を検出しており、北側の調査地部分を含め一帯が、14世紀以降に居住地として再開発されていることを確認した。(中島和彦)

SD第26次調査 出土土器組成表

種類	產地等	器種	SD05		SE06	
			点数	比率	点数	比率
土師器	■	175	50.43	119	50.42	
	(赤褐色系)	69	19.88	7	2.97	
	(白色系)	106	30.55	0	0.00	
	(灰褐色系)	0	0.00	112	47.46	
	羽釜・甕	154	44.38	34	14.41	
	小計	329	94.81	153	64.83	
瓦器	■	7	2.02	1	0.42	
	粗胚	3	0.86	16	6.78	
	瓦片	6	0.09	3	1.27	
	瓦片	0	0.00	2	0.85	
	瓦片	4	1.15	32	13.56	
	瓦片	0	0.00	6	2.54	
瓦質土器	■	0	0.00	3	1.27	
	小計	7	2.02	62	26.27	
須恵器	鉢	3	0.86	0	0.00	
	甕	0	0.00	2	0.85	
	小計	3	0.86	2	0.85	
	東海	1	0.29	0	0.00	
国産陶器	常滑	0	0.00	7	2.97	
	瀬戸	0	0.00	1	0.42	
	信楽	0	0.00	0	0.00	
	産地不明	0	0.00	1	0.42	
	小計	1	0.29	9	3.81	
	青磁	0	0.00	7	2.97	
輸入陶器	白磁	0	0.00	2	0.85	
	小計	0	0.00	4	1.84	
	合計	347	100.00	236	100.00	



SD第26次調査 出土土器 (S E 06 : 34~49, 51~57, 59, S E 07 : 50, 58, 59 1/4)

## (2) 西大寺寺地の調査 第27次

### I はじめに

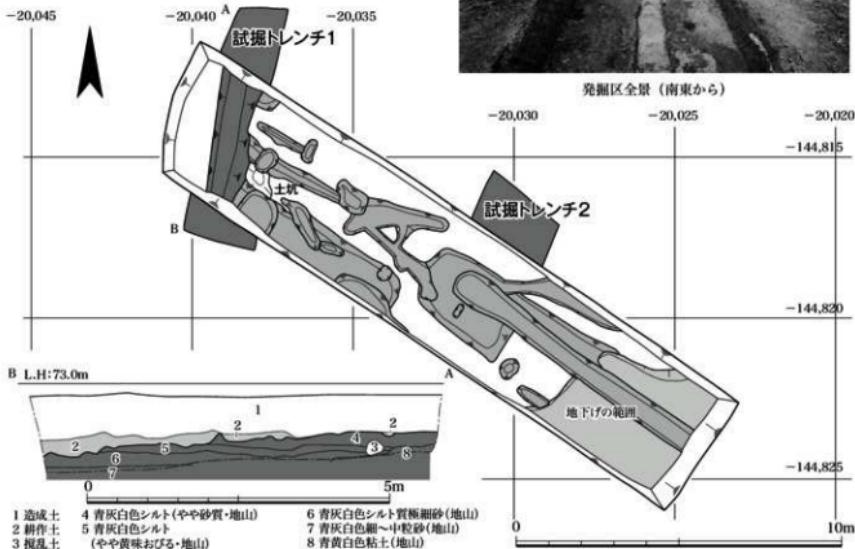
調査地は、西大寺旧境内の右京一条三坊二坪にあたり、西側には西三坊坊間東小路が推定される。調査地の南側約50mの地点では、昭和61年度に櫛原考古学研究所による発掘調査が行われ、平安時代頃の河川跡を検出している。また、その調査では地山面までの深さが約4.2mあり、造成土も約2.0mと厚いことが判明した。そのため今回の調査は、事前に遺構面の深さを確認する試掘調査を3箇所で行い、基礎掘削工事によって影響を受ける部分について、発掘調査を実施した。

### II 基本層序

発掘区内の層序は、北西部隅で、厚さ約0.6mの造成土直下が青灰白色シルトの地山となる。地山面は北から南に向かって下がり、南側では約0.4mほど低く、部分的に耕作土が残る。発掘区南端から北側約4.0m分は、地下げによって地山がさら一段落ち込むが、遺構面まで基礎掘削が及ばないことから耕作土上面で調査を止めた。地山面の標高は71.7~72.15mである。

### III 検出遺構

遺構は土坑1基のみで、他は近代の搅乱坑である。



発掘区遺構平面図 (1/150・淡い網かけ部分は搅乱坑)・試掘トレンチ1西壁土層断面図 (1/80)

土坑は、東西約0.7m、南北約0.9m、深さ約0.15mの平面不整形で、奈良時代の須恵器、鎌倉時代の土師器・瓦器が6点、平瓦片他が4点出土したが小片のため詳細な時期は不明。

### IV 出土遺物

奈良・鎌倉時代の土器類と瓦類が遺物整理箱1箱分である。多くは耕作土・搅乱坑出土である。

### V 調査所見

調査の結果、地山面を確認したが、顕著な遺構は確認できなかった。発掘区内では耕作土が残る部分が僅かで、遺構面は近代に大きく削平をうけたと考えられる。また発掘区内には、搅乱坑が広範囲に広がっており、遺構が失われていると考えられる。  
(中島和彦)



発掘区全景 (南東から)

## 12. 菩原寺旧境内の調査 第5次

事業名	庫裡建設	調査期間	平成21年8月17日～8月21日
届出者名	(宗)喜光寺	調査面積	44m <sup>2</sup>
調査地	奈良市菅原町516-2、516-3	調査担当者	秋山成人

### Iはじめに

菅原寺旧境内では、国1969年の調査において、金堂と考えられる遺構が、現本堂と重複する位置で確認されている。調査地はこの金堂と考えられる建物跡の北約55mの位置にある。調査地から北へ約10mの地点では、市KK第2次調査が行われ、奈良時代から江戸時代までの各時代の遺構を検出しているが、主要伽藍に関係のある遺構は検出されていない。本調査は、本堂北側の伽藍に関係する遺構の確認を目的として実施した。

### II 基本層序

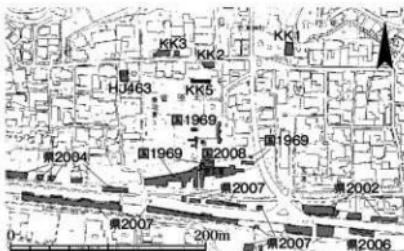
発掘区の基本層序は、上から造成土、灰色土(旧耕作土)、赤灰色土の順で堆積し、現地表下約0.2mで黄灰色粘土の地山となる。地山は南から北に向かって低くなり、標高は発掘区東側の南辺で76.5m、北辺で75.6mである。遺構検出は、地山上面で行った。

### III 検出遺構

検出した遺構は、奈良時代の掘立柱列(SA01・02)2条・井戸(SE03)1基・土坑(SK04・05)2基、室町時代の土坑(SK06)1基、江戸時代の土坑(SK07)1基である。詳細は下記の一覧表にまとめた。

### IV 出土遺物

遺物整理箱1箱分の土器と7箱分の瓦類が出土。土器はほとんどが小片で、8世紀の土師器壺・皿、須恵器壺・



KK第5次調査 発掘区位置図(1/5,000)

杯・杯蓋、13世紀の瓦器碗、17世紀の土師器皿などがある。瓦類は8世紀の軒平瓦(6663B)丸瓦・平瓦・堀、13~14世紀の丸瓦・平瓦・軒平瓦(「菅原寺」銘)、15世紀以降の土管、時期不明の軒丸瓦がある。

### Vまとめ

調査の結果、掘立柱列SA01は出土遺物からみて奈良時代前半の遺構とみられ、市KK第2次調査の建物と同様に、菅原寺創建以前の遺構である可能性がある。

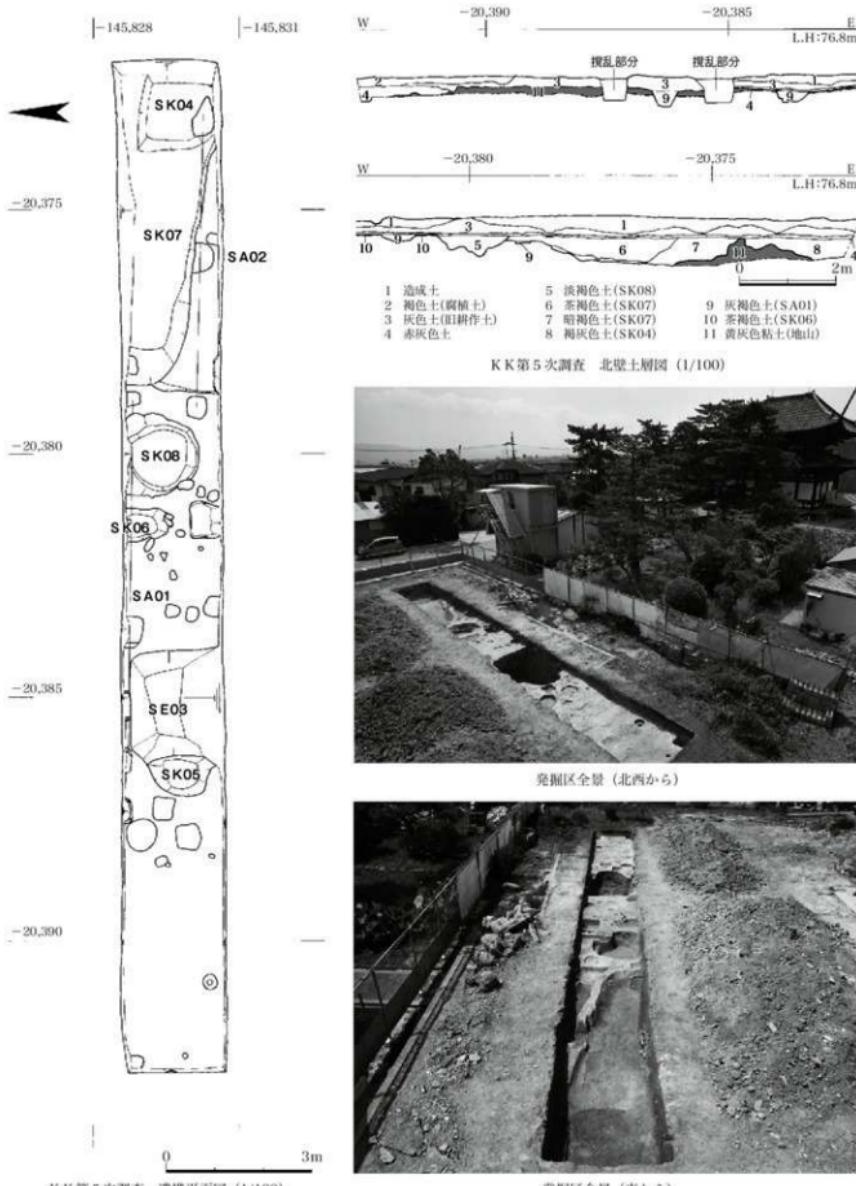
井戸SE03の枠抜き取り痕跡には、奈良時代後半の土器が含まれる。ただし、菅原寺との関連は明らかでなく、伽藍に直接関わる遺構を検出できなかった。発掘区の東側には室町時代以降の土坑が大きく広がり、奈良時代の遺構が削平されていると考えられる。(秋山成人)

KK第5次調査 検出遺構表

遺構番号	棟方向	規模(間)	全長(m)	柱間寸法(m)	備考
SA01	東西	3以上	7.2以上	2.4等間	柱穴掘形一辺約0.7m、深さ約0.4m、8世紀前半:土師器高杯・皿、須恵器蓋小片
SA02	東西	2以上	6以上	3等間	柱穴掘形一辺約0.5m、深さ約0.2m、8世紀:須恵器蓋小片

遺構番号	平面形	掘形		井戸枠構造	内法(m)	主な出土遺物・備考
		平面規模(m)	深さ(m)			
SE03	隅丸方形	東西2.4×南北1.8以上	2.4	抜取られ不明	8世紀後半:土師器皿・壺、製塙土器、須恵器杯・杯蓋・壺、黒滑・土器、転用窯。丸瓦の小片	

遺構番号	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	埋土	出土遺物	備考
SK04	不整形	東西3.0以上、南北1.8以上	0.8	褐色土	8世紀:須恵器蓋小片・丸瓦	重複関係からSA02より新しい
SK05	不整形	東西0.8以上、南北1.9以上	1.7	暗褐色土	8世紀:土師器皿・須恵器杯小片	重複関係からSE03より古い
SK06	不整形	東西0.7、南北0.8以上	0.2	茶褐色土	8世紀:土師器高杯	重複関係からSA01より新しい
SK07	不整形	東西4.2以上、南北1.5以上	0.5	褐色土	8世紀:6663B、13~14世紀:瓦器碗・土師器皿・軒丸瓦・「菅原寺」銘・軒平瓦・丸瓦・平丸・時期不明:軒平丸(型式不明)	
SK08	不整形	東西1.7、南北1.9	0.6	淡灰色土	18世紀:土師器皿	



## 13. 古市遺跡の調査 第8次

事業名	第10号市営住宅建替事業	調査期間	平成21年4月13日～4月28日
届出者名	奈良市長	調査面積	195m <sup>2</sup>
調査地	古市町1611番地他	調査担当者	武田和哉・松浦五輪美

### I.はじめに

調査地は、現在の古市遺跡の想定範囲の北東隅付近に該当している。調査地周辺では過去に調査事例が数件あり、調査地北辺を西流する能登川を隔てて調査地の北約100mの南紀寺遺跡内で実施した市MK第4次調査では、古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑や、飛鳥時代の掘立柱塀や溝などの遺構が検出されている<sup>1)</sup>。また、調査地の西約200mで実施した市FS遺跡第3次調査では、古墳時代の竪穴住居と奈良時代の掘立柱建物などを検出している<sup>2)</sup>。こうした成果を踏まえつつ、今回の調査では、敷地内に5ヶ所の発掘区を設定し、合計195m<sup>2</sup>の面積について発掘調査を実施した。

### II. 基本層序

基本層序は、各発掘区ごとに異なっている。

第1発掘区では、造成土(0.4～0.5m)の下に、暗灰色土(0.1～0.2m=旧水田土)または明茶灰色粘質砂土があり、地表下約0.6mで灰褐色もしくは黄褐色粘土の地山に達する。粘土層は発掘区の南側のみで残存しており、残りの部分は砂礫の層となっている。

第2発掘区では、造成土(0.2～0.6m)以下、暗灰色土(約0.1m=旧水田床土)、黄褐色粘土+礫(約0.1～0.2m)、茶灰色砂(0.1～0.2m)、淡茶灰色砂+礫(0.3～0.4m)と続く。その下層は同様の礫を含む砂が主体となった堆積層が地表下約1.5mまで続くことを確認したが、遺構面は確認できなかった。

第3発掘区では、造成土(0.3～0.6m)以下、暗灰色土(0.15～0.2m=旧水田土)、暗茶灰色土(約0.1m=旧水田床土)、茶褐色粘土(0.1～0.2m)、茶灰色土+礫(0.1～0.3m)と続き、地表下約0.8mで比較的安定した茶灰色土(0.2～0.3m)の層に達する。この上面で遺構検出を行った。この層の下には茶灰色土(約0.4m)、茶褐色粘質土(約0.2m)が堆積し、さらにもその下には茶灰色砂礫が0.5m以上堆積していることを確認した。

第4発掘区では、東側と西側で様相が異っている。東半では造成土(0.2～0.3m)以下、暗灰色土(0.1～0.2m=旧水田土)、暗灰褐色土(0.1～0.3m)、暗灰色粘質土(0.05～0.1m)、淡黄灰色砂質土と続き、地表下0.6



F S第8次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

～0.7mで黄灰色粘土(約0.2m=遺物包含層)に達する。この層は一見して第1発掘区の地山に似ており、同層上面で遺構検出を実施したが、遺構は確認できなかった。その下層は礫を含む砂が主体の堆積層がいくつか堆積しており、概ね地表下約1.5m付近まで続いている。

一方の第4発掘区の西半部分は南隣の第5発掘区と様相が似ている。その層序は、造成土(0.3～0.4m)以下、黒灰色粘土(約0.1m=旧水田土)、暗灰色土+黄褐色土(約0.1m)、茶灰色土+黄褐色土(約0.1m)と続き、地表下約0.9mで暗灰褐色粘質土の層に達する。その下は灰色砂礫の層など、砂と礫が主体となった堆積層が地表下約1.5m付近まで続いていることを確認した。

第1発掘区南側で検出した地山上面の標高は約96.9mである。また、第5発掘区で検出した砂礫を主体とした層の標高は約96.5mである。

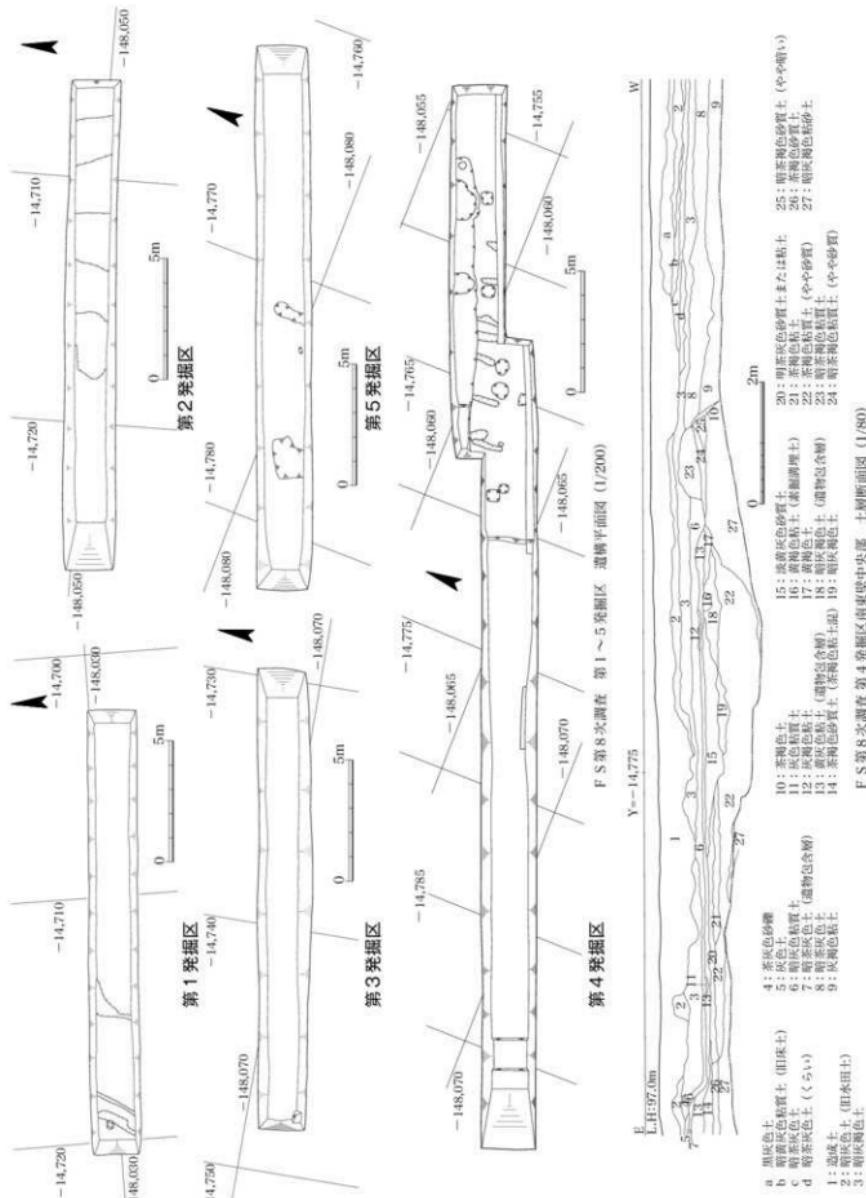
### III. 検出遺構

各発掘区とも、旧水田土の下層もしくは地山上面において遺構検出作業を行ったが、遺構は確認できなかった。

ただし、第4発掘区の中央付近では、地表下約0.8mで遺物を包含する層を確認し、8世紀の土器や時期不明の土馬の破片が出土したが、小片のため詳細な時期は特定できない。なお、この層は土層観察の結果、遺構の埋土ではないことを確認した。

### IV. 出土遺物

遺物整理箱2箱分の遺物が出土した。その内訳は、8世紀の土器、12～13世紀の瓦器片、18世紀以降の陶磁器の破片、時期不明の土器、土馬の破片、石器(サヌカイト)の破片である。出土遺物の大半は、摩滅が著



しく時期の特定できない土器片が占めている。

#### V. 調査所見

本調査では、遺構を確認することができなかった。土層観察の結果、土石流の痕跡と思われる径10～20cm程度の礫を含んだ層が各発掘区で確認されている。これらの層の一部には土器の破片を含んでいることがあるが、小片である上に摩滅しており、時期を特定することは困難である。こうしたことから、調査地の東方から流

出してきた土石流等の影響により、遺構は残存していないと判断される。ただし、第4発掘区の中央付近で確認した包含層の存在は、能登川上流あるいは標高の高い調査地の上流域に、奈良時代などの遺構が存在していることをうかがわせるものであると言えよう。（武田和哉）

1) 奈良市教育委員会「南紀寺遺跡の調査第3次」

『奈良市埋蔵文化財調査概要報告平成4年度』1993

2) 奈良市教育委員会「古市遺跡の調査第3次」

『奈良市埋蔵文化財調査概要報告平成8年度』1997



第1発掘区全景（東から）



第2発掘区全景（北東から）



第3発掘区全景（西から）



第4発掘区全景（東から）



第4発掘区全景（西から）



第5発掘区全景（西から）

## 14. 平成 21 年度実施 小規模調査・試掘等一覧

調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	届出者・通知者／事業内容	届出受理番号
2009-1	平城京跡（左京二条七坊七坪）、奈良町遺跡	西大寺町 43-1,-2,-3, 東伏見町 75、中御門 町 28,41	H21.5.13	16m <sup>2</sup>	(京) 天理教梅谷大教会／ 教会新築	H20.3242
	調査結果・措置：	現地表下 0.8 ~ 1.2 m (標高 79.1 ~ 79.6 m) で地山上面を確認。地山上面で鎌倉時代以前の掘立柱跡と 鎌倉時代の溝を検出。設計を変更し、遺構面の保護層を確保して工事着手。				
2009-2	あやめ池（上池）古墳状 隆起	あやめ池北一丁目 1291番地 1号地	H21.6.24 ~ 6.25	9m <sup>2</sup>	近畿日本鉄道株式会社／区 内整理事業	H16.4006
	調査結果・措置：	H20 年度に踏査した結果、古墳の存在が疑われたため、試掘を実施したが、丘陵の尾根上の隆起であり、古 墳ではなかった。工事着手。				
2009-3	西大寺旧境内	西大寺国見町一丁目 2196-1	H21.11.4	2.3m <sup>2</sup>	近畿日本鉄道株式会社／駅 舎増築工事	H19.3172
	調査結果・措置：	現地表下 1.8 m (標高 70.5 m) まで掘削し、旧建物の礎乱が及んでいたことを確認。工事着手。				
2009-4	新菜蒔寺旧境内、奈良町 遺跡	高畠町 611-3	H21.11.16 ~ 11.18	42m <sup>2</sup>	個人／個人住宅新築	H21.3268
	調査結果・措置：	現地表下 0.6 ~ 0.8 m (標高 121.5 ~ 121.7 m) で地山上面を確認。地山上面で奈良時代の柱穴と平安時代 後半以降の柱穴・土坑を検出。基礎掘削工事は遺構面まで及ばないことを確認し、工事着手。				
2009-5	平城京跡（左京三条大路）	油阪地方町へ上三条町 内地内	H21.11.24 ~ H22.1.24	29m <sup>2</sup>	奈良市長／三条線（上三条 工区）街路改良事業	H19.3066
	調査結果・措置：	5 番発掘区を設け、調査。現地表下 1.1 ~ 1.3 m (標高 69.9 ~ 74.4 m) で地山上面を確認。地山上面で中・ 近世の土坑・溝を検出。工事着手。				
2009-6	平城京跡（左京三条大路）	大宮一丁目地内	H22.1.25	2.5m <sup>2</sup>	奈良市長／大宮三条本町線 街路改良事業	H19.3065
	調査結果・措置：	現地表下 0.7 m (標高 65.6 m) で地山上面を確認。地山上面で時期不明の溝を検出。工事着手。				
2009-7	平城京跡（左京三条大路）	三条本町地内	H22.2.2	4.5m <sup>2</sup>	奈良市長／J R 奈良駅前周 辺整備事業	H21.3095
	調査結果・措置：	現地表下 1.5 m (標高 65.3 m) で地山上面を確認。地山上面で時期不明の耕作溝 2 条を検出。工事着手。				
2009-8	平城京南方遺跡	北之庄西町一丁目 5-4	H22.2.23 ~ 2.24	45m <sup>2</sup>	有限会社真紀ホーム／工場 建設	H21.3453
	調査結果・措置：	現地表下 0.9 m (標高 54.2 m) で平安時代以前の旧河川を確認。旧河川上面で鎌倉時代の耕作溝を検出。 工事着手。				

## 15. 平成 21 年度実施 工事立会一覧

### (1) 平成 21 年度文化財保護法第 93 条の 1、第 94 条の 1 の埋蔵文化財届出書および通知に伴う工事立会

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
1	H20.3140	右京北辺三坊六坪・ 龜北大路	西大寺北町一丁目 378-1	個人	共同住宅新築	宅地	H21.4.2	GL-1.3m まで掘削、地山確認、 上塗・溝および土器類の確認確認
2	H20.3434	左京二条六坊九坪	法蓮町 1095-5	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.3	GL-0.4m まで掘削、盛土内
3	H20.3455	右京二条四坊七坪	青野町 229-3	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.6	GL-0.4m まで掘削、盛土内
4	H20.3472	左京三条五坊十二坪	油阪地区町 4-1, 4-3	個人	店舗新築	宅地	H21.4.7	GL-1.4m まで掘削、地山確認
5	H20.3445	右京八条三坊二坪、 奈良町道跡	西九条町一丁目 3-14	個人	賃貸住宅新築	休耕地	H21.4.8	GL-0.3 ~ 0.4m まで掘削、耕作 土内
6	H20.3438	元興寺旧境内、奈良 町道跡	西寺林町 22 番地 南市町 10番 1号	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.8	GL-0.4m まで掘削、盛土内
7	H20.3334	左京五条大路（東一 坊）	柏木町 519-19, 519-20	個人	店舗新築	宅地	H21.4.10	GL-0.6m まで掘削、池の底確認
8	H20.3430	池田遺跡	池田町 175 番 1	個人	青空駐車場	宅地	H21.4.13	GL-0.35m まで掘削、褐色土から 須恵器焼の小片 1 点出土
9	H20.3389	右京三条一坊十五坪	二条大路南五丁目 441-3, 464, 466	個人	店舗新築	宅地	H21.4.13	GL-0.7m まで掘削、盛土内
10	H20.3369	左京四条三坊八・九 坪・四条四坊二坪・ 東三坊大路	三条東町へ三条御 川町地内	奈良市水道事業管理者	水道工事	道路	H21.4.14	GL-1.9m まで掘削、盛土内
11	H20.3456	東京東西大路（九 条）	東九条町 236-9 地	-建設側	分譲住宅新築	宅地	H21.4.15	GL-0.2m まで掘削、盛土内
12	H20.3458	東七坊二条大路・奈 良町道跡	油留町 20 番地	個人	ガレージ拡張	宅地	H21.4.16	GL-0.75m まで掘削、盛土内
13	H20.3386	右京西一坊坊間路（四 条）	四条大路四丁目	奈良市長	河川工事	道路	H21.4.17	GL-1.4m まで掘削、灰色土内
14	H20.3460	古市遺物散布地	古市町 670 番 1	KDDI㈱	携帯電話用無線 基地局新設工事	傾地	H21.4.21	GL-1.95m まで掘削、地山確認
15	H20.3415	赤井橋六瓢群	敷島町 546 番 89	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.21	GL-0.25m まで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
16	H20.3474	奈良町遺跡	財團町 177-3 ~ 173-3	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.4.22	GL-0.86mまで掘削、-0.46m下で地山確認
17	H20.3412	左京四条三坊七坪	三条室町 178番 7、178番 8	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.22	GL-2.1mまで掘削、地山確認
18	H20.3403	左京四条一坊一坪	西大寺東町一丁目 942-2他	大和情報サービス㈱	店舗新築	畠地	H21.4.23	GL-0.2mまで掘削、盛土内
19	H20.3441	西院寺町境内	西大寺東町一丁目 40-8	個人	賃貸住宅新築	宅地	H21.4.27	GL-0.2mまで掘削、盛土内
20	H20.3467	遺物散布地	山鹿町 652-3、652-9	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.30	GL-0.6mまで掘削、盛土内
21	H20.3440	左京二条五坊北界	法連町 717番 6	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.30	GL-0.3mまで掘削、盛土内
22	H20.3411	左京四条五坪十六坪	三条室町 1丁目 473-1、2	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H21.5.8	GL-1.2 ~ 1.3mまで掘削、地山確認
23	H20.3414	右京四条一坊十一坪	西院路五丁目 200-1	既設日本ハウス	道路工事	畠地	H21.5.8	GL-1.0mまで掘削、盛土内
24	H20.3225	奈良町遺跡	紀伊町 387番 香地の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H21.5.11	GL-0.8mまで掘削、盛土内
25	H21.3040	左京四条一坊一坪	西院路三丁目 95-4-1他	㈱ローソン	看板設置	宅地	H21.5.12	GL-1.25mまで掘削、地山確認
26	H20.3413	左京九条二坊十坪	西九条町二丁目 13番 の一部	個人	共同住宅新築	駐車場	H21.5.14	GL-0.4mまで掘削、盛土内
27	H20.3459	左京八条二坊九坪 (東市跡推定地)	東九条町 956番 2	KDDI ㈱	携帯電話用無線基地局新設工事	宅地	H21.5.15	GL-2.3mまで掘削、廃棄物の投棄見辺の範囲内
28	H20.3330	左京四条五条六坊七坪	三条町 1022番	京都銀行	店舗新築	宅地	H21.5.18	GL-1.1mまで掘削、旧耕土確認
29	H20.3466	左京三条六坊四坪、 奈良町遺跡	下三条町 43番 地	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H21.5.18	GL-1.2mまで掘削、灰色粘質土または明茶褐色土確認
30	H20.3424	左京五条五坊十六坪	大森町 14番 1号	個人	自己用住宅	宅地	H21.5.20	GL-0.2mまで掘削、盛土内
31	H21.3056	左京四条一坊一坪	西院路三丁目 953-2	大和情報サービス㈱	広告塔設置	宅地	H21.5.20	GL-1.2mまで掘削、-1.0m付近で地山確認
32	H21.3070	古市城跡	古市町 2156番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H21.5.26	GL-0.4mまで掘削、-0.3m下で地山確認
33	H20.3447	左京九条二坊十五坪	西九条二丁目 11-1	個人	共同住宅新築	宅地	H21.5.27	GL-0.8mまで掘削、一部で地溝の一部を残す。土壟片出土、道構面あり
							H21.6.4	工事状況の確認
34	H21.3016	左京一条六坊三坪	法蓮町 1268番 3の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H21.5.29	GL-0.5mまで掘削、-0.3m付近で地山確認
35	H21.3077	右京四条一坊一坪、 西一坊跡間西小路	西院路五丁目 200-1	US建築デザイン研究所	分譲住宅新築	宅地	H21.6.1	GL-0.4mまで掘削、盛土内
36	H21.3021	右京五条三坊十三坪	五条三丁目 769-2他	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.2	GL-0.2mまで掘削、盛土内
37	H21.3032	左京東三坊大路(三条)	芝辻町四丁目 2-7	西日本電信電話㈱	電話地下埋設工事の試験	道路	H21.6.5	GL-1.5mまで掘削、河川堆積とみられる明茶灰色粘砂確認
38	H21.3062	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町 54-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.5	GL-0.4mまで掘削、灰色砂質土内
39	H20.3462	右京五条四坊十五坪	平松五丁目 13他	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.6.8	GL-0.8 ~ 1.0mまで掘削、 GL-0.4 ~ 0.6m付近で地山確認
							H21.6.12	北半 GL-0.8mまで掘削、盛土内 南半 GL-0.55m下で大阪筋群の粘土層及び砂層
40	H21.3035	元興寺跡内、奈良町遺跡	新屋町地内	奈良市水道事業管理者	水道管理設	道路	H21.6.8	GL-0.8 ~ 0.9mまで掘削。既設埋設管掘り方確認
41	H20.3439	左京東五坊間西小路(三条)	大宮町一丁目 5	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.6.9	GL-1.5mまで掘削、盛土内
42	H20.3444	左京三条六坊六坪	柳町 8番 他	個人	共同住宅新築	宅地	H21.6.10	GL-0.5mまで掘削、道構・道構面および道構面確認
43	H21.3059	右京三条二坊十三坪	尼辻北町 271-2他	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.12	工事先行、GL-0.4mまで掘削、盛土内
44	H21.3116	右京北辺三坊六坪	西大寺北町一丁目 378-3	㈱吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.6.13	GL-0.56mまで掘削、地山確認、道構面あり
45	H21.3076	奈良町遺跡	紀伊町 1064-9	㈱日本中央住版	分譲住宅新築	宅地	H21.6.15	GL-0.5mまで掘削、盛土内
46	H21.3065	古市道跡	古市町 1675番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.15	GL-0.3 ~ 0.6mまで掘削、盛土内
47	H21.3117	右京北辺三坊六坪	西大寺北町一丁目 378-10	㈱吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.6.16	GL-0.2mまで地盤の表層削除、土壌 GL-0.9mまで地盤の表層削除改良
48	H21.3120	右京北辺三坊六坪	西大寺北町一丁目 378-2	㈱吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.6.16	GL-0.5mまで掘削、暗黄褐色土内(包含層または道構理土)、GL-0.9mまで地盤の表層改良
49	H21.3145	左京五条四坊十六坪	大森町	奈良市	区画整理事業	工事用地	H21.6.17	GL-0.5mまで掘削、盛土内
50	H21.3006	奈良町道跡	高天市町 45	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.17	GL-0.3mまで掘削、盛土内
51	H21.3064	左京一条五坊北界、 西坊四路大界	法連町 717番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.17	GL-0.3mまで掘削、盛土内
52	H21.3096	左京四条三坊七坪	三条室町 158番 12	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.18	GL-0.4mまで掘削、盛土内
53	H20.3408	右京三条一坊四坪	三条大路四丁目 1-1	桃水化学㈱	工場増築	工場	H21.6.18	GL-0.38mまで掘削、盛土内
54	H21.3073	右京一条五坊大路(七条)	六条町 98-1	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.6.18	GL-1.7 ~ 2.1mまで掘削、暗灰黒色土、盛土内
55	H21.3082	左京一条三坊二坪	慈の庵三丁目 1番 16-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.22	工事先行、GL-0.4mまで掘削、盛土内
56	H21.3057	右京三条三坊七坪、 西三坊間路	菅原町 460	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.23	工事先行、GL-0.4mまで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	道跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
57	H21.3119	右京一条北大路（西三坊）	西大寺北町一丁目378-1	鹿吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.6.25	GL-0.2mまで掘削、盛土内
58	H21.3118	右京北辺三坊二坪	西大寺北町一丁目378-4	鹿吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.6.26	GL-0.3mまで掘削、盛土内
59	H21.3053	左京一条三坊二坪	法華寺町1172番2	秋田工務店㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.6.26	GL-0.3mまで掘削、盛土内
60	H21.3122	左京一条三坊一坊、東一坊大路	柏木町529番1の一部	鹿日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H21.6.29	GL-0.2mまで掘削、盛土内
61	H21.3014	左京四条一坊五坪、東一坊坊間路	南新町78番地の1	櫻あかしや	事務所及び作業場、倉庫の建設工事	宅地	H21.6.29	GL-1.3mまで掘削、水田耕土内
62	H21.3098	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目989-6	鹿 R & K	分譲住宅新築	宅地	H21.6.30	GL-0.2mまで掘削、盛土内
63	H21.3058	左京五条四坊四坪	大安寺七丁目868-1の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.30	GL-1.0mまで掘削、地山確認、道構造あり
64	H21.3086	西三坊坊間路	六条一丁目711番1	個人	分譲住宅新築	宅地	H21.7.2	GL-0.4~0.65mまで掘削、盛土内
65	H20.3475	左京七条四坊十三・十四坪、東二坊大路	東九条町1112-1	鶴中川政七商店	事務所新築	荒廃地	H21.7.6	GL-0.9mまで掘削、盛土内
66	H21.3091	左京九条三八坪・八坪、東三坊坊間路	西九条町二丁目1番6	個人	共同住宅新築	宅地	H21.7.6	GL-0.3mまで掘削、盛土内
67	H21.3085	左京四条四坊一坪	三条大河町347-15	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.6	GL-0.7mまで掘削、旧耕作土内
68	H21.3023	左京四条四坊一坪	三条添川町3番12号	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.6	GL-0.35mまで掘削、表土内
69	H21.3088	左京二条五坊六坪	法蓮町62-2他	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.6	GL-0.3mまで掘削、盛土内
70	H20.3313	左京東四坊坊間路（一条）	法蓮町1951番1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.7	地山確認
71	H21.3103	左京五条三坊八坪	鹿の庭二丁目20-25	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.8	GL-0.35mまで掘削、盛土内
72	H21.3081	広大寺道跡	今市町271番地先	奈良市長	道路工事	宅地	H21.7.9 H21.7.14	GL-0.0mまで掘削、-0.5~0.7m付近で地山確認
73	H21.3037	左京五条四坊十四坪	大森町一~大安寺六丁目17-2	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.7.13	GL-0.65mまで掘削、盛土内
74	H20.3465	左京四条六坊十五坪、奈良町道路	三条町582番地	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.14	GL-0.45mまで掘削、盛土内
75	H21.3125	矢田原道跡	矢田原町1267	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.15	GL-0.1~0.3mまで掘削、地山確認
76	H21.3164	左京二条四坊十五坪、東四坊大路	法蓮町328-30	鹿アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H21.7.18	GL-0.4mまで掘削、盛土内
77	H21.3146	右京六条三坊十五坪	六条一丁目826-1	豊施工業㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.7.21	GL-0.4mまで掘削、盛土内
78	H21.3042	右京二条四坊五・六坪	音原町370番地	奈良市消防長	消防防火設備	学校地	H21.7.21 H21.7.28	GL-0.2mまで掘削、-1.7m付近で地山確認
79	H21.3104	元興寺旧境内、奈良町道路	元興寺旧境内、奈良東寺林町1番	個人	共同住宅新築	宅地	H21.7.22	GL-0.6mまで掘削、-0.5m下で地山確認
80	H21.3041	古市城跡	古市町268番地	奈良市長	消防防火設備	学校地	H21.7.22 H21.7.29 H21.7.30	GL-1.5mまで掘削、盛土内 GL-2.3~2.8mまで掘削、盛土内 GL-3.0mまで掘削、地山確認
81	H21.3039	元興寺旧境内（重点地区）	飯坂坂町9~今御門町25	大阪ガス㈱	ガス管敷設・入替	道路	H21.7.23	GL-0.8mまで掘削、地山確認
82	H21.3137	右京五条三坊十坪	平松二丁目281番86	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.23	GL-0.3mまで掘削、地山確認
83	H20.3290	右京六条一坊十一坪	開西電力㈱	電気工事	道路	H21.7.24	GL-2.6mまで掘削、-1.5m下で地山確認	
84	H21.3109	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目989番地	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.24	GL-0.3mまで掘削、盛土内
85	H21.3184	右京一条北大辺三坊六坪	西大寺北町一丁目378-5	鹿吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.7.27	GL-0.4mまで掘削、盛土内、一部地山確認
86	H20.3242	左京二条七坊七坪、奈良町道路	西坂鉄骨43-1他	天理教梅谷教会	教会新築	宅地	H21.7.27	GL-0.1~0.4mまで掘削、盛土内
87	H21.3106	左京四条四坊一坪	三条添川町71番21	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.28	GL-0.55mまで掘削、盛土内
88	H21.3147	西大寺旧境内	西大寺新田町564番・565番1	鹿フォレストホーム	駐車場造成	荒廃地	H21.7.29	GL-1.3mまで掘削、地山確認
89	H21.3167	西大寺旧境内	西大寺寺町一丁目2-11~1丁目2-7	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.7.30	GL-0.1~0.4mまで掘削、盛土内
90	H21.3129	右京三条三坊十三坪	宝来二丁目822-4他	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.3	GL-0.3mまで掘削、盛土内
91	H21.3197	右京一条北大辺二坊六坪、一条北大路	西大寺北町一丁目378-6(G号地)	鹿吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.8.3	GL-0.4mまで掘削、耕作土内
92	H21.3195	右京一条北大辺二坊六坪	西大寺北町一丁目378-7(1号地)	鹿吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.8.3	GL-0.4mまで掘削、耕作土内
93	H21.3196	右京一条北大辺二坊六坪、一条北大路	西大寺北町一丁目378-7(K号地)	鹿吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.8.3	GL-0.4mまで掘削、耕作土内
94	H21.3158	左京四条五坊十五坪、奈良町道路	三条町569番	積和不動産開西㈱	共同住宅新築	駐車場	H21.8.4	GL-0.6mまで掘削、黒褐色土内
95	H21.3020	右京四条二坊六坪	尼辻南町一一部	共同住宅新築	宅地	H21.8.5	GL-0.6mまで掘削、薄灰色土内、土器の被片確認	
96	H21.3180	右京北辺三坊二坪	西大寺新町一丁目175番4	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.6	GL-0.5mまで掘削、床土内
97	H21.3138	右京四条四坊四坪	平松二丁目213番1	個人	共同住宅新築	駐車場	H21.8.12	GL-0.3mまで掘削、耕作土内

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査結果	
							日付	結果
98	H21.3182	右京・一条四坊・一条 南大路	西大寺町二丁目 2031-4・6	オーエスハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.8.18	GL-0.1～0.2mまで掘削、盛土内
99	H21.3047	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町 53-3	㈱ 住	分譲住宅新築	宅地	H21.8.19	GL-0.5mまで掘削、盛土内
100	H21.3173	右京三条四坊五坪	宝来町一丁目 746-5, 746-6	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.21	GL-0.2mまで掘削、盛土内
101	H21.3179	左京五条六坊十二坪 (佐伯院跡推定地)	南京町59番2	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.21	GL-0.25mまで掘削、盛土内
102	H21.3130	西大寺境内・一条 栄間路	西大寺見月町一丁 目1	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.8.21	GL-0.8～1.3mまで掘削、盛土内
103	H21.3204	西大寺境内	西大寺電王町一丁 目1544-3, 1533-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.25	GL-0.1～0.2mまで掘削、盛土内
104	H21.3151	左京・一条六坊十三坪, 奈良町通路	坊屋町5-2, 6-3	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.25	GL-0.4mまで掘削、黒色土内
105	H21.3152	古市遺跡	吉田町 150番 17, 1521番 11	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.25	GL-0.35mまで掘削、地山確認
106	H21.3208	左京五条六坊一坪	大森町 4-1	個人	賃貸住宅新築	宅地	H21.8.27	GL-0.35mまで掘削、盛土内
107	H21.3108	左京三条大路（東一 坊）	三条大路二丁目地 内	関西電力㈱	電気管路修繕工 事	道路	H21.9.1	GL-1.8mまで掘削、-1.4m下で 地山確認
108	H21.3141	朱雀大路（四条）	四条大路三丁目 959-1	大洋美業㈱	店舗新築	宅地	H21.9.2	GL-1.0mまで掘削、旧耕土内
109	H21.3214	奈良町通路	中辻町 32-9, 32-13	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.3	GL-0.5mまで掘削、盛土内
110	H21.3168	左京四条二坊十二坪	四条大路一丁目 1000番 12	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.3	GL-0.45～0.9mまで掘削、盛土内
111	H21.3161	右京六条四坊十二坪	六条二丁目 1131番	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.3	GL-0.65mまで掘削、地山確認
112	H21.3141	左京五条二坊一坪	四条大路南 439-13	オーエスハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.9.3	GL-0.2mまで掘削、盛土内
113	H21.3187	左京五条六坊三坪	西木町 105	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.9.4	GL-0.6mまで掘削、盛土内
114	H21.3218	左京・一条五条北郊	法明町 717番 7	ミサワホーム近畿㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.9.4	GL-0.2mまで掘削、盛土内
115	H21.3054	奈良町通路	高畠町 1270番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.7	GL-0.2mまで掘削、地山確認
116	H21.3186	右京・一条二坊十四坪 他	西大寺町 233-9	奈良市長	公衆トイレ建設	宅地	H21.9.8	GL-1.4mまで掘削、耕作土内
117	H21.3202	右京八条四坊十三坪	八条四町1号 1492 番 93	㈱アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H21.9.8	GL-0.2mまで掘削、地山確認
118	H21.3142	右京・一条二坊三坪	二条町二丁目 59番 6	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.9	GL-0.5mまで掘削、盛土内
119	H21.3169	左京四条二坊十二坪	四条大路一丁目 1000番 14	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.11	GL-0.4mまで掘削、盛土内
120	H21.3215	右京六条一坊六坪・ 西二坊間東小路	西ノ京町 24番 12	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.11	GL-0.2mまで掘削、盛土内
121	H21.3241	左京六条四坊十六坪	大安寺五丁目 975 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.14	GL-1.3mまで掘削、-0.7m下で 地山確認
122	H21.3148	元興寺境内・奈良 町通路	今關町町内	奈良市水道事業管理者	水道工事	道路	H21.9.14	GL-1.1mまで掘削、既設埋設管 の堆積物内
123	H21.3145	左京二条七坊十六坪・ 東七坊間東小路、 奈良町通路	東落合町 29-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.2	GL-1.2mまで掘削、黒灰色粘質 土内
124	H21.3192	左京六条一坊七坪・ 第一坊間隙	柏木町 493-1～ 157-1	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.9.18	GL-0.7mまで掘削、盛土内
125	H21.3242	西大寺境内	西大寺町 2438-1 他	奈良交通㈱	駐輪場新築	宅地	H21.9.18	GL-1.7mまで掘削、地山確認、 造構面あり
126	H21.3084	左京六条二坊三坪	八条五丁目 417番 1の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.24	GL-0.2mまで掘削、盛土内
127	H21.3083	左京六条二坊三坪	八条五丁目 417番 2の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H21.9.24	GL-0.2mまで掘削、盛土内
128	H21.3240	右京七条一坊七坪	七条一丁目 426-6 他	㈱福岡屋住宅流通	分譲住宅新築	宅地	H21.9.24	GL-0.1mまで掘削、盛土内
129	H21.3226	左京二条七坊北郊・ 三条南路	西包町 14番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.25	GL-0.2mまで掘削、表土層内 出土遺物あり
130	H21.3255	左京五条六坊三坪	西木町 105-18	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.25	工事先行、上層確認できず
131	H21.3244	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目 33-4-5	-建設㈱	個人住宅新築	宅地	H21.9.28	GL-0.1mまで掘削、盛土内
132	H21.3247	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目 33-4-9	-建設㈱	個人住宅新築	宅地	H21.9.28	GL-0.15mまで掘削、盛土内
133	H21.3248	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目 33-4-10	-建設㈱	個人住宅新築	宅地	H21.9.28	GL-0.2mまで掘削、盛土内
134	H21.3249	右京六条四坊一坪	六条二丁目 1131番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H21.10.1	GL-0.1mまで掘削、盛土内
135	H21.3262	遺物散布地（奈良縣 通跡地図）5A-41	秋葉町 1667-5	オーエス工業株	分譲住宅新築	宅地	H21.10.2	GL-0.2mまで掘削、盛土内
136	H21.3266	左京五条三坊八坪	恋の崖一丁目 607-9	OS ハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.10.5	GL-0.4mまで掘削、盛土内
137	H21.3203	左京二条六坊北郊	道連町 1268番 3	㈱サンリフーム	個人住宅新築	宅地	H21.10.5	GL-0.2mまで掘削、盛土内
138	H21.3047	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町 53-3	㈱ 住	分譲住宅新築	宅地	H21.10.5	GL-0.4mまで掘削、盛土内
139	H21.3222	西大寺境内	国見町一丁目 224 番地1の一部他	奈良交通㈱	駐輪場建設	駐輪場	H21.10.7	GL-1.0～1.2mまで掘削、明青 灰色粘土、耕作土内
140	H21.3126	正勝寺境内	菩提山町 77 番	㈱エヌ・ティ・ティ ドコモ	携帯電話無線基 地局建設	宅地	H21.10.15	GL-1.9mまで掘削、1.6m下で地 山確認、14.15世紀頃の備前焼大 甕の破片を数点確認

番号	届出受理番号	道跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
141	H21.3252	右京七条三坊六坪・西三坊坊間東小路 5・6	七条一丁目 383番	-建設㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.10.15	GL-0.05mまで掘削、地山確認、出土遺物あり
142	H21.3188	左京二条五坊北郷	法蓮町 736-1 ~	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.10.15	GL-0.7mまで掘削、地山確認
143	H21.3216	右京五条四坊六坪	平松四丁目 395番 12	個人	個人住宅新築	宅地	H21.10.19	GL-0.25mまで掘削、盛土内
144	H21.3258	左京三条五坊十二坪・ 余良町道跡	油阪地区方町 6-7	個人	店舗付個人住宅 新築	宅地	H21.10.20	GL-0.3mまで掘削、盛土内
145	H21.3295	左京五条六坊三坪	西木辻町 105-23	個人	個人住宅新築	宅地	H21.10.23	GL-0.35mまで掘削、盛土内
146	H21.3296	左京五条五坊一坪	杉ヶ町 10-9	オーエッチ工業㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.10.26	GL-0.2mまで掘削、盛土内
147	H21.3298	左京九条二坊十五坪	西九条町一丁目 11番 3	個人	共同住宅新築	宅地	H21.10.27	GL-1.3mまで掘削、褐色土内
148	H21.3281	西大寺旧境内	西大寺新田町 535-2	個人	個人住宅新築	宅地	H21.10.27	GL-0.5mまで掘削、茶褐色土内
149	H21.3222	西大寺旧境内	西大寺国見町 224番地 1の一部	奈良交通㈱	駐輪場	駐輪場	H21.10.29	GL-0.6 ~ 1.0mまで掘削、堆山・造構物および遺物確認
150	H21.3312	左京五条六坊三坪	西木辻町 105番 20	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.2	GL-1.1mまで掘削、0.6m下で地 山確認
151	H21.3201	左京五条二坊八坪	大安寺町 565-19, -13	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.5	GL-1.3mまで掘削、1.2m下で地 山確認
152	H21.3251	矢田原道跡	矢田原町 812, 813, 824	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.6	GL-0.37mまで掘削、地山確認
153	H21.3299	右京四条二坊九坪	尼辻中町 184-1 他	個人	共同住宅新築	駐車場	H21.11.9	GL-0.2 ~ 0.3mまで掘削、盛土 内
154	H21.3159	右京五条三坊一坪	五条一丁目 481番 94	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.11	GL-0.1mまで掘削、盛土内
155	H21.3277	奈良町道跡	財坂町 382-2 ~ 168-8	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.11.12	GL-0.8mまで掘削、盛土内
156	H21.3259	右京二条二坊一坪	二条町三丁目 90番 89	㈱コナ・ジャパン	宅地造成	宅地	H21.11.13	GL-0.9mまで掘削、盛土内
157	H21.3327	左京九条一坊十三坪	西九条町四丁目 3 番地の1	近畿セキスキハイム工 業㈱	住宅用展示場	宅地	H21.11.16	GL-0.3mまで掘削、盛土内
159	H21.3286	右京七条三坊・西二 坊大路	六条一丁目 452-5	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.16	GL-0.1mまで掘削、盛土内
160	H21.3290	右京五条二坊一坪	五条町 358-1	個人	倉庫新築	宅地	H21.11.16	GL-0.1mまで掘削、耕作土内
161	H21.3301	西大寺旧境内	西大寺新田町 2545番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.17	GL-0.82mまで掘削、耕作土内
162	H21.3230	四条大路・西三坊大 路	平松一丁目内	奈良市長	道路工事	道路	H21.11.18	GL-1.6mまで掘削、0.5m下で地 山確認
163	H21.3239	左京五条七坊六坪	井上町 14-2, 17-3	個人	地区集会書新築	宅地	H21.11.18	GL-0.3mまで掘削、黒褐色土内
164	H21.3303	右京北四坊四坪内	西大寺宝ヶ丘 723-6	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.20	GL-0.2mまで掘削、地山確認
165	H21.3284	右京一条北四坊三六 坪	西大寺北町一丁目 378番 11	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.24	GL-0.3mまで掘削、耕作土内
166	H21.3328	植物散布地（奈良県 道跡地図）5A-1	秋葉町 1667-2	オーエッチ工業㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.11.25	GL-0.3mまで掘削、盛土内
167	H21.3292	右京七条六坊六坪	六条三丁目 11-14	㈱連合設計社	個人住宅新築	宅地	H21.11.27	GL-0.5mまで掘削、地山確認
168	H21.3334	右京六条三坊十五坪	六条一丁目 826-6	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.27	GL-0.6mまで掘削、地山確認
169	H21.3200	須恵器窯跡（奈良縣 道跡地図）4B-6	三松ヶ丘 500-115	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.30	GL-0.3mまで掘削、盛土内
170	H21.3261	普原寺旧境内	普原町内地内（普原 町 507-1）	奈良市長	河川工事	河川	H21.11.30	GL-0.5mまで掘削、褐色土内
171	H21.3324	左京四条五坊六坪	三条本町 1010	㈱ベルコ	集合所（営業所） 新築	宅地	H21.11.30	GL-3.2mまで掘削、地山確認
172	H21.3275	右京六条四坊二坪	六条二丁目 451-1 他	個人	青空駐車場造成	荒廃地	H21.12.2	GL-0.85mまで掘削、地山確認
173	H21.3323	西大寺旧境内	西大寺新田町 535 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.7	GL-0.8mまで掘削、地山、柱穴 基礎認
174	H21.3181	左京三条六坊・三条 大路	橋本町 15	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.12.9	GL-1.5mまで掘削、盛土内
175	H21.3304	左京五条七坊六坪	井上町 5-12, 5-13	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.9	GL-0.2mまで掘削、盛土内
176	H21.3321	左京五条七坊六坪	井上町 3-7	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.9	GL-0.4mまで掘削、盛土内
177	H21.3380	右京八条四坊十六坪	七条西町一丁目 600番 62	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.11	GL-0.3mまで掘削、盛土内
178	H21.3250	左京四条四坊一坪 -2-31	三条添川町 3-15 ~ 2-31	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.12.14	GL-0.65mまで掘削、地山確認
179	H21.3283	左京三条六坊五坪	上三条町 23-4	奈良市長	看板設置	宅地	H21.12.14	GL-0.85mまで掘削、褐色土内
180	H21.3352	左京二条六坊一・兼大 路・奈良町道跡	坊屋敷町 37-7	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.17	GL-0.4mまで掘削、盛土内
181	H21.3347	左京五条二坊六坪	四条大路南町 385 番 34	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.17	GL-0.3 ~ 0.4mまで掘削、盛土 内
182	H21.3395	左京三条四坊一坪 -東二坊大路	芝辻町 2丁目 9-2	㈲吉井新聞舗	店舗新築	宅地	H21.12.17	GL-0.2mまで掘削、盛土内
183	H21.3245	南紀寺道跡	南紀寺町二丁目 334-6	-建設㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.12.22	GL-0.3mまで掘削、盛土内
184	H21.3348	左京二条五坊北郷	法蓮町 752番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.22	削削なし
185	H21.3391	植物散布地 (奈良県道跡地図) 5A-417	秋葉町 1667-6	オーエッチ工業㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.12.22	GL-0.3mまで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
186	H21.3382	右京四条一坊二坪・ 四条三条間北小路	西条大路四丁目 81-3	-建設物	分譲住宅新築	宅地	H21.12.24	GL-0.3mまで掘削、盛土内
187	H21.3383	左京二条五坊・二条 三条間路	法蓮町 256-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.24	GL-0.4mまで掘削、灰色粘質土内
188	H21.3271	左京五条二坊十六坪	西条大路南町 439-8	オーエスハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.12.28	GL-0.2mまで掘削、盛土内
189	H21.3400	左京五条二坊十六坪	三条東町用田町 219番 4 他	個人	個人住宅新築	宅地	H22.1.5	GL-0.06mまで掘削、褐色土内
190	H21.3361	左京四条四坊二坪	柏木町 157-12	個人	個人住宅新築	宅地	H22.1.5	工事先行 GL-0.53mまで掘削、耕作土内
191	H21.3346	左京六条一坊七坪・ 東坊間路	大宮町一丁目 58-3 の一部	柳原商店	店舗増築	宅地	H22.1.6	GL-0.95mまで掘削、地山確認
192	H21.3341	左京三条五坊四坪	柳原商店	柳原商店	店舗増築	宅地	H22.1.7	GL-0.2mまで掘削、地山確認
193	H21.3260	松林苑（重点地区松林苑）	柳原町 1482(付近)	奈良市長	河川工事	山林	H22.1.7	GL-0.1~0.3mまで掘削、地山確認
194	H21.3368	左京九条四坊十六坪	東九条町 242-1	-建設物	分譲住宅新築	宅地	H22.1.12	GL-0.1~0.3mまで掘削、盛土内
195	H21.3309	右京四条一坊九坪	西条大路四丁目 29 番4 他	個人	個人住宅新築	宅地	H22.1.12	GL-0.4mまで掘削、盛土内
196	H21.3393	右京六条四坊二坪・ 西三坊大路	六条一丁目 931番 3 他	個人	共同住宅新築	宅地	H22.1.15	GL-0.3mまで掘削、地山確認
197	H21.3374	左京五条六坊六坪・ 佐伯院跡	西木津町 202番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H22.1.15	GL-0.1~0.3mまで掘削、黒褐色土内
198	H21.3414	恋の窓一丁目 607-6	恋の窓一丁目 607-6	オーエスハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.1.18	GL-0.2~0.4mまで掘削、盛土内
199	H21.3422	右京七条三坊十四坪	七条町二丁目 670	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H22.1.18	GL-0.7mまで掘削、盛土内
200	H21.3227	元興寺跡付近・奈良 町道跡	芝原町町 12-2	奈良市教育委員会	説明牌設置	寺院	H22.1.19	GL-0.2mまで掘削、茶褐色土内
201	H21.3335	右京二条三坊九・十 坪・二条三条間北路	近鉄西大寺南地区 20街区5-1地塊 及び6地塊の各一部	個人	個人住宅新築	宅地	H22.1.20	GL-0.3mまで掘削、盛土内
202	H21.3413	左京三条三坊・三条 大路	大宮町四丁目地内	奈良市長	下水道工事	道路	H22.1.22	GL-1.2mまで掘削、既設の水道 管廊内
203	H21.3306	左京八条四坊十一・ 十二坪	東九条 686番・ 688番の各一部	個人	賃貸・共同住宅 新築	宅地	H22.1.22	GL-0.3mまで掘削、盛土内
204	H21.3406	奈良町道跡	紀寺院町 985番 12	個人	個人住宅新築	宅地	H22.1.26	GL-0.3mまで掘削、盛土内
205	H21.3350	左京六条二坊十坪	大安寺西二丁目 281	奈良市教育委員会	プレハブ倉庫新築	宅地	H22.1.29	GL-0.5mまで掘削、盛土内
206	H21.3401	左京五条三坊十六坪	恋の窓一丁目 630 番 55	個人	個人住宅新築	宅地	H22.2.1	GL-0.3mまで掘削、盛土内
207	H21.3436	左京六条四坊十三坪	六条二丁目 1474-1 他	個人	個人住宅新築	宅地	H22.2.2	GL-0.4mまで掘削、盛土内
208	H21.3444	左京五条六坊一坪・ 奈良町道跡	大森町 1番 11	個人	個人住宅新築	宅地	H22.2.2	GL-0.5mまで掘削、盛土内
209	H21.3407	右京二条二坊一坪	三条町三丁目 90番 98	㈱日本中央住版	分譲住宅新築	宅地	H22.2.8	GL-0.1mまで掘削、盛土内
210	H21.3410	左京三条五坊六坪	法蓮町 62-10	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.2.9	GL-0.3mまで掘削、盛土内
211	H21.3408	阿弥陀寺山道跡	鳥島町一丁目 531 番 26	個人	個人住宅新築	宅地	H22.2.9	GL-0.4~1.2mまで掘削、地山 確認
212	H21.3438	広大寺池道跡	今市町 地内	奈良市長	河川工事	河川	H22.2.10	GL-0.2mまで掘削、盛土内
213	H21.3421	左京三条一坊三坪	西条大路三丁目 989番	個人	個人住宅新築	宅地	H22.2.12	GL-0.3mまで掘削、盛土内
214	H21.3420	左京八条四十坪	東九条 669 他	個人	賃貸住宅新築	青空駐車場	H22.2.12	GL-0.25mまで掘削、旧耕作土内
215	H21.3412	左京三条五坊六坪	大宮町一丁目 31番 1	奈良市長	ポンブ格納庫新築	宅地	H22.2.12	GL-0.9mまで掘削、河川堆積物 内
216	H21.3291	左京五条七坊十六坪・ 奈良町道跡	福知院町 20番 1	個人	物置新築	宅地	H22.2.15	GL-0.3mまで掘削、盛土内
217	H21.3371	右京一条二坊・西二 坊大路	西大寺本町	奈良市長	下水道工事	道路	H22.2.17	GL-1.4mまで掘削、1.3m下で地 山確認
							H22.2.22	発進軌跡、GL-1.0mで地山確認 地山確認
218	H21.3355	右京三条三坊十五坪	菅原町 508 他	喜光寺	土解建設	寺院	H22.2.19	GL-0.7~0.9mまで掘削、地山 確認
							H22.2.23	GL-0.6mまで掘削、一部で地山 確認
							H22.2.24	西面 GL-0.3mまで掘削、水田床 土・南面 GL-0.6mまで掘削、地 山確認
							H22.3.1	GL-0.4mまで掘削、地山確認
							H22.3.2	GL-0.5mまで掘削、地山上面確認 柱穴・土坑・溝を検出 軒平瓦 1点・平瓦片を確認
219	H21.3435	左京一条六坊五坪・ 奈良町道跡	北内町 82番 3 の 一部	個人	個人住宅新築	宅地	H22.2.22	GL-0.3mまで掘削、地山確認
220	H21.3191	左京三条五坊七坪・ 三条条間路	大宮町四丁目 1-3 1丁目 8-18	大阪ガス㈱	ガス管敷設・搬 去	道路	H22.2.22	GL-1.1mまで掘削、盛土内
221	H21.3381	左京三条四坊八坪	芝原町二丁目 223 番 4	個人	個人住宅新築	駐車場	H22.2.22	GL-0.9mまで掘削、茶褐色土内
222	H21.3424	右京七条一坊十五・ 十六坪	西 / 京町 132 他	医療法人 健仁会	青空駐車場設置	水田	H22.2.23	GL-0.2mまで掘削、盛土上面

平成21年度実施 工事立会一覧、踏査一覧

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
223	H21.3470	左京三条一坊一坪 (重点地区平城京跡周辺)	二条大路南三丁目地内	奈良市長	公園造成	公園	H22.2.25	GL-0.4mまで掘削、盛土内
224	H21.3476	右京二条二坊一坪	二条町三丁目	㈱日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H22.2.26	GL-0.3mまで掘削、盛土内
225	H21.3458	右京四条一坊十四坪	西条大路五丁目 99-1の一部、99-2	個人	賃貸住宅新築	宅地	H22.3.1	GL-0.3mまで掘削、盛土内
226	H21.3472	紀寺跡、奈良町遺跡	紀寺町 916 番	個人	個人住宅新築	宅地	H22.3.3	GL-0.25mまで掘削、盛土内
227	H21.3488	奈良町遺跡	高畠町 1203-3, 1203-5	個人	個人住宅新築	宅地	H22.3.2	GL-0.5~1.0mまで掘削、地山確認
228	H21.3360	和田カナタオリ遺跡	和田町境内	奈良市長	道路改良工事	道路	H22.3.3	GL-0.55mまで掘削、地山確認
229	H21.3464	左京三条一坊十六坪	西三条三丁目 11-13	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H22.3.5	GL-1.0mまで掘削、地山確認
230	H21.3467	左京五条三坊一坪	四条大路南町 439-8	オーエスハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.3.11	GL-0.4mまで掘削、盛土内
231	H21.3366	奈良町道跡	高畠町 644-17	個人	個人住宅新築	宅地	H22.3.15	GL-0.5mまで掘削、盛土内
232	H21.3310	左京三条六坊八坪	内侍原町 40	個人	個人住宅新築	宅地	H22.3.17	GL-0.55mまで掘削、遺物包含樹内
233	H21.3316	左京六条一坊八・九 坪・東・坊跡間	柏木町 155-3 ~ 497-1	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H22.3.18	GL-0.6mまで掘削、盛土内
234	H21.3439	奈良町道跡	北京駅町 57-25	個人	個人住宅新築	宅地	H22.3.19	GL-0.3mまで掘削、盛土内
235	H21.3525	右京一条二坊十四坪・ 一条・秦条跡	西大寺空町 2321-1	㈲中畠ビル	事務所新築	宅地	H22.3.19	GL-1.0mまで掘削、地山確認、奈良時代の遺構面あり
236	H21.3398	右京六条四坊三・四 坪	六条二丁目 885-1	㈱京西ハッピーサービ スセンター新築	老人デイサービス スセンター新築	水田	H22.3.23	GL-0.6mまで掘削、旧河川の堆積層内
237	H21.3495	左京四条一坊三坪	四条大路二丁目 984-1の一部	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1mまで掘削、盛土内
238	H21.3496	左京四条一坊三坪	四条大路二丁目 992、984-1の各一部	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1mまで掘削、盛土内
239	H21.3497	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 984-1の一部	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1mまで掘削、盛土内
240	H21.3498	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 992の一部	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1mまで掘削、盛土内
241	H21.3500	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 998-1の一部	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1mまで掘削、盛土内
242	H21.3501	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 998-1、992の各一部	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1mまで掘削、盛土内
243	H21.3502	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 998-1の一部	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1mまで掘削、盛土内
244	H21.3503	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 998-1の一部	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1mまで掘削、盛土内
245	H21.3491	西隆寺跡	西大寺本町 196 番 1の一部	旭化成ホームズ㈱	分譲住宅新築	宅地	H22.3.29	GL-0.2mまで掘削、盛土内
246	H21.3430	法華寺跡境内	法華寺町 無番地	奈良市長	サインボード設置	道路	H22.3.31	GL-0.6mまで掘削、盛土内
247	H21.3454	左京二条六坊北側	法蓮町 957 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H22.3.31	GL-0.25mまで掘削、盛土内

(2) 平成 21 年度文化財保護法第 125 条の 1 の現状変更許可申請に伴う工事立会

番号	申請受理番号	遺跡	申請地	申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
1	H19.1099	史跡大安寺跡境内	東九条 1303 番地	個人	掩壁設置	農業用倉庫敷地	H21.4.16	GL-0.3mまで掘削、盛土内
2	H21.1073	史跡大安寺跡境内	大安寺一丁目 1257-1	個人	十歳の除去及び 仮設フェンスの設置	宅地	H21.11.20	掘削なし
3	H21.1056	史跡元興寺塔跡	新星町 元興寺 境内	奈良市教育委員会	説明碑設置	元興寺境内	H22.1.19	GL-0.15mまで掘削、盛土内
4	H20.1134	史跡平城京朱雀大路	二条大路南三丁目	平城遷都 1300 年記念 事業協同組合	史跡上にあら築山除 去と車止めの除去	史跡	H22.2.2	現地表上の盛土の除去のみ
5	H21.1055	史跡元興寺小塔院跡	西新星町 45 番	宗教法人 小塔院	説明版設置	宅地	H22.3.1	GL-0.4mまで掘削、表土削除、 田舎系の土壌蓋 1 点・江戸時代以 降の瓦 1 点を確認

16. 平成 21 年度実施 踏査一覧

No	踏査地	事業者	事業内容	事業面積	届出受理番号	踏査期日	踏査所見
1	奈良阪町 2781 他	奈良市長	鴻池運動公園整備事業	24,000m <sup>2</sup>	H19.4005	11/25	遺構及び遺物の散布は認められ なかつた。

---

## 第2章 自然科学分析報告

---

奈良市教育委員会では、発掘調査の成果をより総合性の高い確実なものとするために、遺跡や遺物の肉眼観察では把握できない事象について、自然科学分析を活用している。

これまでにってきた主な自然科学分析は、下記の通りである。

- 1 環境の指標性が高く、生活資源となっている植物を主とした生物遺体の同定
- 2 年代の手がかりとなる遺物が含まれない地層や遺構の年代を比定するため行う、試料の含有放射線量から年代値を求める年代測定（例：放射性炭素年代測定、TL年代測定）や、年代の指標性が高い広域火山灰（例：AT火山灰、AH火山灰）の同定
- 3 遺物に付着したり土壤に含まれたりする有機物や化学物質、あるいは土器の胎土や地質に含まれる鉱物の成分を同定する理化学分析（例：蛍光X線分析）

平成21年度は、下記の自然科学分析を実施した。

- ① 平城京第622次調査 奈良時代の道路側溝S D 2005a・bおよび宅地内の溝S D 102・104・114b・119・148bの埋土の花粉分析  
奈良時代の道路側溝S D 2005内および築地S A 220上の杭列S X 810～815の杭材の樹種同定  
奈良時代の土器埋納遺構S X 803の土器内部から出土した金属製薄板の蛍光X線分析
- ② 平城京第623次調査 繩文時代後期以前の流路と弥生時代後期の溝から採取した木材の樹種同定および放射性炭素年代測定（AMS）  
弥生時代後期の溝の埋土と奈良時代の井戸および溝の埋土の花粉分析
- ③ 西大寺旧境内第25次調査 奈良時代の溝埋土の花粉・珪藻分析、種実・樹種同定

本書には①と、前年度までの調査で実施したが未報告であった下記の自然科学分析の成果とをあわせて報告する。なお、②は次年度の年報にて、また③は次年度刊行予定の別報告書にて、それぞれ報告する予定である。

- ④ 平城京第459-2次調査 奈良時代の道路側溝S D 101内の杭列S X 801の杭材の樹種同定  
(平成13年度実施分)
- ⑤ 平城京第608次調査 奈良時代の道路側溝S D 2005b・cおよび宅地内の溝S D 121の埋土の花粉分析  
(平成20年度実施分)  
奈良時代の道路側溝S D 2005b・2006の埋土の珪藻分析  
奈良時代の道路側溝S D 2005b内の杭列S X 822の杭材の樹種同定

④は五条条間北小路北側溝（本書の報告ではS D 2005）の西延長分の成果であり、⑤は今回報告する調査地の成果である。

(安井宣也)

# I. 平城京第459-2次調査における樹種同定

## 1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

## 2 試料

試料は、五条条間北小路北側溝 S D 101（本書報告部分では S D 2005として報告）の北岸に沿って打ち込まれた護岸杭列 S X 801 から採取した木材 12 点である。

## 3 方法

カミソリを用いて、試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって 60 ~ 600 倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

## 4 結果

結果を表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

モミ属 *Abies* マツ科 図 2-1・2 (No. 15・35)

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかで、傷害樹脂道が存在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で 1 分野に 1 ~ 4 個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に 5 種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの 4 種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ 45m、径 1.5m に達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

ツガ *Tsuga sieboldii* Carr. マツ科 図 2-3 (No. 7)

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1 分野に 2 ~ 4 個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、ツガに同定される。ツガは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ 20 ~ 25m、径 50 ~ 80cm である。材は耐朽、保存性中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

## 5 所見

同定の結果、五条条間北小路北側溝 S D 101 の北岸の護岸杭列 S X 801 から採取した木材はモミ属 10、ツガ 2 であった。モミ属およびツガは温帯に普通に分布する針葉樹である。これらの樹種が杭として選択的に用いられていたと考えられる。（株式会社 古環境研究所）

## 参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文水堂出版 p.20-48。

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文水堂出版 p.49-100。

鳥地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.

表 1 護岸杭列 S X 801 採取木材の樹種同定結果

試料	結果 (和名/学名)
No.7	ツガ <i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
No.12	モミ属 <i>Abies</i>
No.15	モミ属 <i>Abies</i>
No.31	ツガ <i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
No.35	モミ属 <i>Abies</i>
No.38	モミ属 <i>Abies</i>
No.45	モミ属 <i>Abies</i>
No.74	モミ属 <i>Abies</i>
No.86	モミ属 <i>Abies</i>
No.93	モミ属 <i>Abies</i>
No.102	モミ属 <i>Abies</i>
No.113	モミ属 <i>Abies</i>



図 1 護岸杭列 S X 801 (南西から)

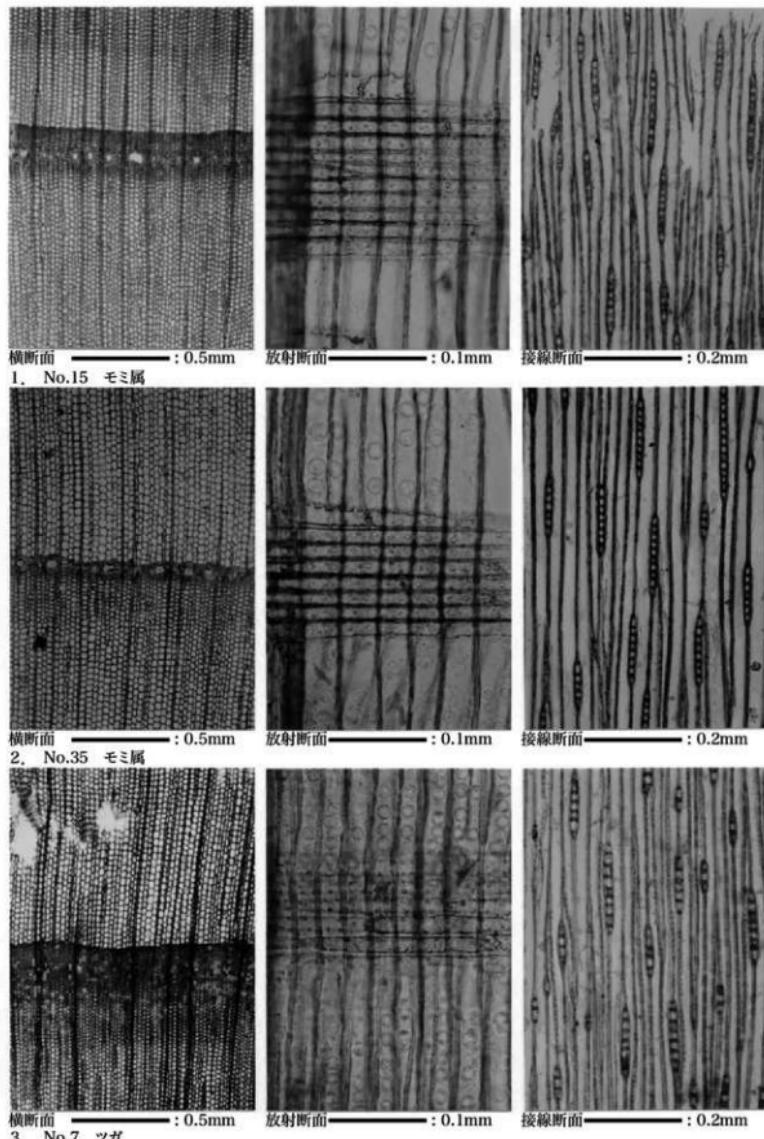


図2 渡岸杭列SX801採取木材の断面写真

## 2. 平城京第 608 次調査における自然科学分析

### I 花粉分析

#### 1 はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

#### 2 試料

分析試料は、A 発掘区の奈良時代の溝 S D 121 (平成 20 年度年報を参照) より採取された試料 A (暗茶褐色砂質土)、試料 B (暗茶褐色砂質土) の 2 点、F 発掘区の奈良時代の五条条間北小路北側溝 S D 2005 より採取された c - 第 1 層 (試料 3 (灰色砂)) から b - 第 5 層 (試料 8 (灰色粗砂)) の 6 点、奈良時代の五条条間北小路南側溝 S D 2006 より採取された試料 10 (灰色砂質土) から試料 12 (淡灰褐色粘土) の 3 点の計 11 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

#### 3 方法

花粉の分離抽出は、中村 (1973) の方法をもとに、以下の手順で行った。

##### 1) 試料から 1 cm<sup>3</sup> を採量

##### 2) 0.5% リン酸三ナトリウム (12 水) 溶液を加え 15 分間湯煎

##### 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法で砂粒を除去

##### 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置

##### 5) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトリシス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎) を施す

##### 6) 再び冰酢酸を加えて水洗処理

##### 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレラート作成

##### 8) 檢鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉 (1973) および中村 (1980) をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで表示。イネ属については、中村 (1974, 1977) を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や

類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

#### 4 結果

##### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 23、樹木花粉と草本花粉を含むもの 4、草本花粉 23、シダ植物胞子 2 形態の計 52 である。これらの学名と和名および粒数を表 I に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図 1、図 2 に示す。なお、200 個未満であっても 100 個以上の試料については傾向をみると参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真 (図 3) に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、3 分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

##### 〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、モクセイ科  
〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ニワトコ属-ガマズミ属

##### 〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ササゲ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、ゴキヅル、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属、ベニバナ

##### 〔シダ植物胞子〕

##### 單条溝胞子、三条溝胞子

##### 〔寄生虫卵〕

##### 回虫卵、鞭虫卵、異形吸虫類卵？

##### (2) 花粉群集の特徴

##### 1) A 発掘区 溝 S D 121 (試料 A・B)

いずれの試料も花粉密度が低く、ほとんど検出されない。

##### 2) F 発掘区 五条条間北小路北側溝 S D 2005 b - 第 5 層～c - 第 1 層 (試料 8 ～試料 3) ・図 1

下位より花粉構成と花粉組成変化の特徴を記載する。

表 1 平城京第 608 次調査 花粉分析結果

学名	和名	A 発掘区			F 発掘区						SD2006		
		SD121		SD2005c	SD2005b		SD2006			10	11	12	
		A	B	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	10	11	12	
Arboreal pollen	樹木花粉									1	1	1	
<i>Podocarpus</i>	マキ属												
<i>Alnus</i>	モミ属			1	7	7	1			1	7	1	
<i>Tsuga</i>	ツガ属			1	4	7	2			4	5	4	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属裸管葉系属			1	4	12	17	14		1	21	16	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	2	1	13	34	23	7	3		5	26	24	
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	1		2	1	1							
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae 科	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科			1	7	14	3			1	17	18	
<i>Juglans</i>	クルミ属												1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		1					1		1	1	1	
<i>Betula</i>	カバノキ属			2		1	1			1	1	1	
<i>Corylus</i>	ハシバミ属									2		2	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシマテ属-アサダ			1		1	1	1			1	3	
<i>Castanea crenata</i>	クリ						1						1
<i>Castanopsis</i>	シイ属	1		3	3	2	4	1		12	20		
<i>Fagus</i>	ブナ属				3	1					1	2	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ系属	2		8	6	9	7			4	29	13	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanus</i>	コナラ属アカガシ系属	2		4	15	15	13			6	14	19	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ				1						2		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ					2					1	1	
<i>Acer</i>	カエデ属			1									
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ						1			1			
<i>Vitis</i>	ブドウ属			47							1	24	
Oleaceae	ウツクシイチゴ科											1	
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木+草本花粉												
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科			1	3	2	6			1	4	7	
Rosaceae	バラ科										1		
Leguminosae	マメ科					1					1		
<i>Sambucus-Burnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属	1											1
Nonarboreal pollen	草本花粉												
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属										2		
Gramineae	イネ科	8	1	24	149	145	42	6		67	227	149	
<i>Oryza</i> type	イネ属型			2	1	2	7				3	9	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	2	39	33	5			4	37	22		
<i>Anemone keiskei</i>	イボクサ				1	1							
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属			2	1								
<i>Polygonum</i>	タデ属				2		1						
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節			2	5					2			
<i>Rumex</i>	ギシギシ属			2									
<i>Fagopyrum</i>	シバ属			1	1						1	2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	2	46	42	8					2	4	6	
Caryophyllaceae	ナデシコ科			6	3						1	1	
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属			2									
Cruciferacae	アブラナ科	1		8	3	2					4		
<i>Vicia</i>	ササゲ属				1								
Hydrocotyleidae	デンドメグサ属	2	1	2	24	3	3	1		1	7	5	
Apionidae	セリ亞科			1	8	2				1	11	7	
Plantago	オオバコ属	1			5	2	1						
<i>Actinostemma lobatum</i>	ゴキヅル				4							3	
Lactucaeidae	タンボク科				9	4	2			1	7		
Asteroidae	キク科	2	2	8	4					1	4	2	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	5	3	13	57	38	12			17	36	25	
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ				1								
Fern spore	シダ植物胞子												
Monolete type spore	单季, 滞胞子	13	2	6	4	7	1	1		9	7	8	
Trilete type spore	三条, 滞胞子	1	1	1	3	6	1			2	13	4	
Arboreal pollen	樹木花粉	8	3	88	93	101	55	5	0	27	141	152	
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木+草本花粉	1	0	1	4	2	6	0	0	1	6	8	
Nonarboreal pollen	草本花粉	19	6	49	376	291	83	7	0	94	346	234	
Total pollen	花粉总数	28	9	138	473	394	144	12	0	122	493	394	
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料 1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	1.7	6.0	6.7	6.4	3.8	5.3	7.8	0.0	7.9	4.2	2.9	
		$\times 10^3$	$\times 10$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	
Unknown pollen	未同定花粉	0	1	9	14	7	4	1	0	9	14	9	
Fern spore	シダ植物胞子	14	3	7	7	13	2	1	0	11	20	12	
Helmint eggs	寄生虫卵												
<i>Ascaris(lumbricoides)</i>	回虫卵				3	1	1						
<i>Trichuris(trichiura)</i>	鞭虫卵				1	1	1						
<i>Metagonimus-Heterophyes ?</i>	異形吸虫類卵				1								
Total	計	0	0	0	5	2	2	0	0	0	0	0	0
Helminth eggs frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料 1cm <sup>3</sup> 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	35	14	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
					$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$						
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	

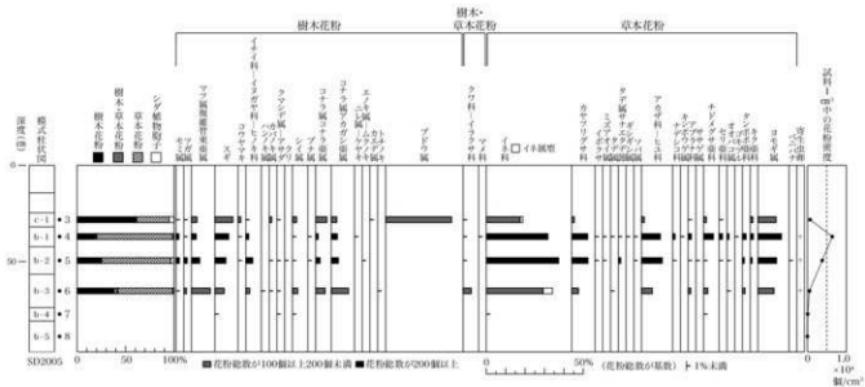


図1 平城京第608次調査 F発掘区SD 2005b-cの花粉ダイアグラム

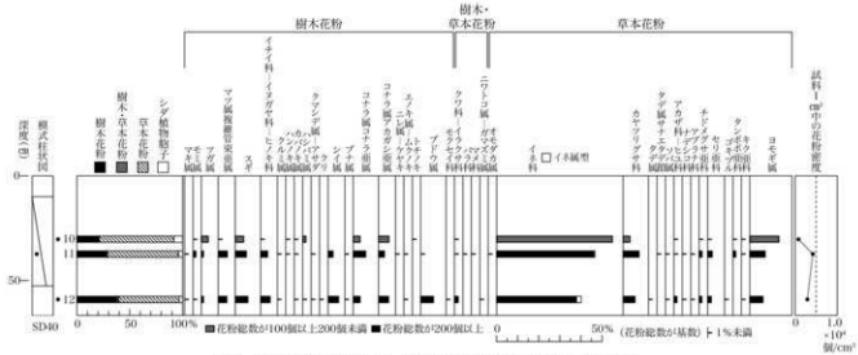


図2 平城京第608次調査 F発掘区SD 2006の花粉ダイアグラム

• b-第5層、b-第4層（試料8、試料7）

花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

• b-第3層（試料6）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、約55%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）を主に、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、カヤツリグサ科などが出現する。樹木花粉ではマツ属複維管束亞属、コナラ属アガシ亞属、スギ、コナラ属コナラ亞属などが出現する。回虫卵、鞭虫卵がわずかに検出された。

• b-第2層、b-第1層（試料5、試料4）

いずれの試料も類似した出現傾向を示し、草本花粉が約70%以上を占める。草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属などが伴われる。b-第2層（試料5）でベニバナ、ササゲ属、

両試料からソバ属がわずかに出現する。樹木花粉ではスギ、マツ属複維管束亞属、コナラ属アガシ亞属、コナラ属コナラ亞属、イチイ科-イタガヤ科-ヒノキ科などが出現する。b-第2層（試料5）では回虫卵、鞭虫卵が、b-第1層（試料4）では回虫卵、鞭虫卵、異形吸虫類卵？（小蓋が欠落し断定できないため）がわずかに検出された。

• c-第1層（試料3）

樹木花粉が約60%を占め、花粉密度は低くなる。ブドウ属が高率に出現し、スギ、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アガシ亞属、マツ属複維管束亞属などが低率に出現する。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属などが出現する。

3) F発掘区 五条三条間北小路南側溝SD 2006（試料

## 12から試料 10)・図2

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

## ・試料 12

草本花粉の占める割合が高く、約 55% を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が多く出現し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、ソバ属などが出現する。樹木花粉ではスギ、ブドウ属、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属などが低率に出現する。

## ・試料 11

草本花粉の占める割合が高くなる。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが増加し、ソバ属がわずかに認められた。樹木花粉ではブドウ属、シイ属が減少する。

## ・試料 10

花粉密度が低くなり、草本花粉の占める割合がさらに高くなる。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が増加する。樹木花粉ではツガ属、コナラ属アカガシ亜属がやや増加する。

## 5 考察

## 1) A発掘区 溝SD 121

いずれの試料も花粉密度が低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積時間が速かったことなどが考えられる。したがって、溝 SD 121 は常時滞水する溝ではなかったとみなされる。

## 2) F発掘区 五条条間北小路北側溝 SD 2005b・c

下位より、b-第5層・第4層は、花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積時間が速かったことなどが考えられる。

b-第3層の時期は、イネ科、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、カヤツリグサ科などが生育していた。いずれも人里植物および畑作雑草であり、周囲にやや乾燥した環境が分布していたと推定される。なお、イネ属型が検出されることから、周辺に水田の分布も推定される。近隣には、マツ属複維管束亜属、スギなどの針葉樹と、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属などの広葉樹が分布し、地域的な森林要素であったと考えられる。寄生虫卵がわずかに検出された。生活汚染程度であることから、堆積地に近接して生活域が分布していたと推定される。

b-第2層、b-第1層の時期は、人里植物ないし畑作雑草であるアカザ科-ヒユ科、ヨモギ属などの草本が

生育していた。水生植物であるイネ科、カヤツリグサ科が増加し、少ないながらイネ属型が水田雑草のミズアオイ属などと共に出現することから、周辺地域で水田が拡大したと考えられる。ソバ属、ササゲ属、ベニバナの有用植物が検出された。寄生虫卵も出現することから、居住域からの汚染が示唆される。

c-第1層（試料3）の時期は、地域的な森林および周辺の環境は下部と大差がない。高率に出現するブドウ属は、現地生が高いと考えられ、ブドウ、エビヅル、ヤマブドウ、サンカクヅルなどが生育していた。溝堀絶時の周辺の様相を示していると思われる。

## 3) F発掘区 五条条間北小路南側溝 SD 2006

下位より、試料 12 の時期はイネ科が極めて多く、ヨモギ属、カヤツリグサ科が生育し、ブドウ属も現地生が高いことから周辺に生育していたと思われる。イネ科が極めて多く、集落域などの人為地の環境が示唆される。また、イネ属型やソバ属などの有用植物も検出された。近隣には、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、マツ属複維管束亜属などの針葉樹と、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属などの広葉樹が分布し、地域的な森林要素であったと考えられる。

試料 11 の時期は、現地生が高いと考えられたブドウ属が減少し、試料 10 の時期では、花粉密度が低くなり、イネ科、ヨモギ属が増加することからやや乾燥化したと考えられる。

## 6まとめ

A発掘区の奈良時代の溝 SD 121、F発掘区の奈良時代の五条条間北小路北側溝 SD 2005b・c、F発掘区の奈良時代の五条条間北小路南側溝 SD 2006 の花粉分析の結果、いずれもイネ科を主にヨモギ属またはカヤツリグサ科やアカザ科-ヒユ科が生育し、やや乾燥した集落域や畠地の人為環境が示唆された。有用植物としてイネ属型、ソバ属、ササゲ属が検出された。

## 参考文献

- 金原正明（1993）「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本 第10巻古代資料研究の方法』角川書店、p.248-262。
- 鳥賀吉三郎（1973）「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学研究館収蔵目録』第5集、60p。
- 中村純（1967）『花粉分析』古今書院、p.82-110。
- 中村純（1974）「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として」『第四紀研究』13.p.187-193。
- 中村純（1977）「福作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号、p.21-30。
- 中村純（1980）「日本産花粉の標識」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集、91p。

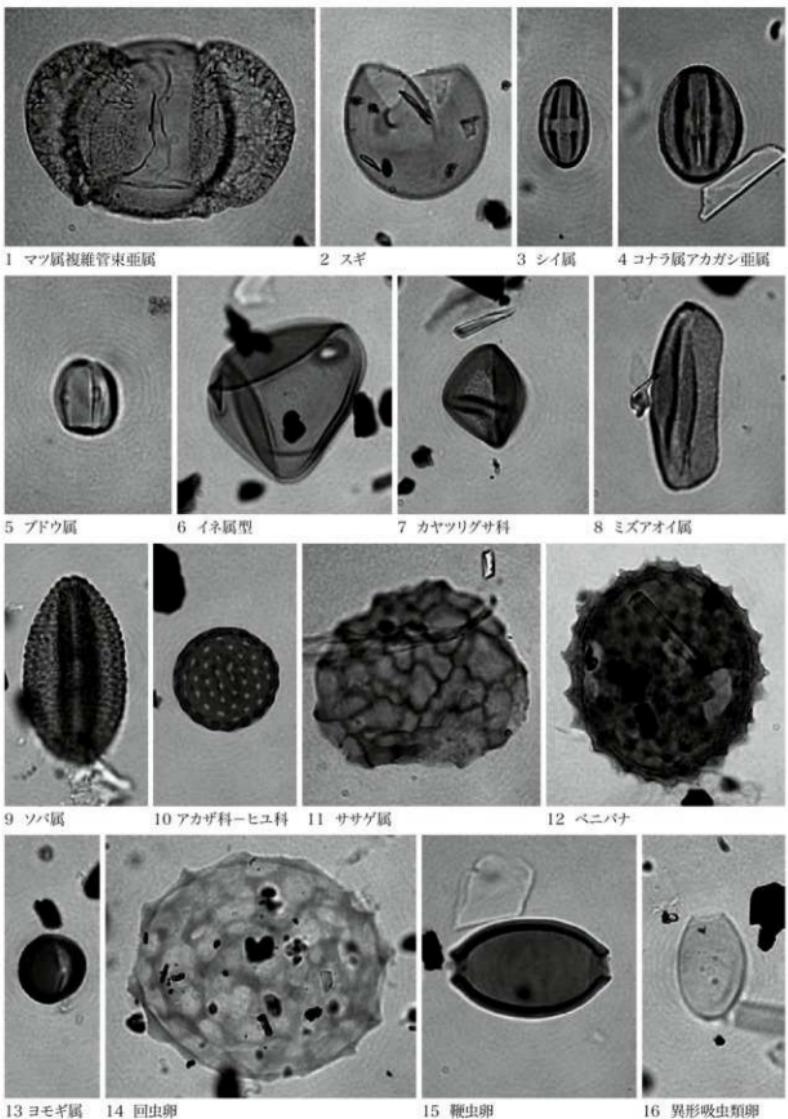
— 10 $\mu$ m

図3 平城京第608次調査 花粉・寄生虫卵頭微鏡写真

## II 珪藻分析

## 1 はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する单細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壤、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

## 2 試料

分析試料は、F発掘区で検出した奈良時代の五条条間北小路北側溝 S D 2005b の第4層から採取された試料7（暗灰色粘土）、奈良時代の五条条間北小路南側溝 S D 2006 から採取された試料12（淡灰褐色粘土）の2点である。

## 3 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から  $1\text{ cm}^3$  を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1 時間放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロビペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラートを作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査した。

## 4 結果

## (1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）9分類群である。表1に分析結果を示す。また、出現した主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下に表記した分類群を記載する。

## 〔貧塩性種〕

*Amphora copulata*、*Amphora montana*、*Cymbella naviculiformis*、*Cymbella tumida*、*Eunotia minor*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula clementioides*、*Navicula cuspidata*、*Rhopalodia gibberula*

## (2) 珪藻群集の特徴

- 1) F発掘区 五条条間北小路北側溝 S D 2005 b - 第4層（試料7）

表2 平城京第608次調査 珪藻分析結果

分類群	F発掘区	
	SD2005b 第4層(7)	SD2006 12
貧塩性種（淡水生種）		
<i>Amphora copulata</i>		1
<i>Amphora montana</i>	2	
<i>Cymbella naviculiformis</i>	2	
<i>Cymbella tumida</i>	1	
<i>Eunotia minor</i>	1	
<i>Hantzschia amphioxys</i>		1
<i>Navicula clementioides</i>	1	
<i>Navicula cuspidata</i>		1
<i>Rhopalodia gibberula</i>	1	
合計	7	4
未同定	0	0
破片	4	16
試料 $1\text{ cm}^3$ 中の殻密度	2.4	$1.2 \times 10^3$
完形殻保存率 (%)	-	-

珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻の *Amphora montana*、流水不定性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Cymbella naviculiformis*、好止水性種の *Cymbella tumida*、好止水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor*、流水不定性種の *Navicula clementioides* がわずかに出現する。

## 2) F発掘区 五条条間北小路南側溝 S D 2006 (試料12)

珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、流水不定性種の *Amphora copulata*、*Navicula cuspidata*、*Rhopalodia gibberula* がわずかに出現する。

## 5 考察

## 1) F発掘区 五条条間北小路北側溝 S D 2005 b - 第4層（試料7）

珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻、好止水性種、流水不定性種がわずかに出現する。珪藻の生育しにくい乾燥した環境が示唆され、溝は珪藻の繁殖できない短期間、雨水等が流れる溝であったと推定される。

## 2) F発掘区 五条条間北小路南側溝 S D 2006 (試料12)

珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻、流水不定性種がわずかに出現するのみで、珪藻の生育しにくい乾燥した環境が示唆され、溝は珪藻の繁殖できない短期間、雨水等が流れる溝であったと推定される。

## 参考文献

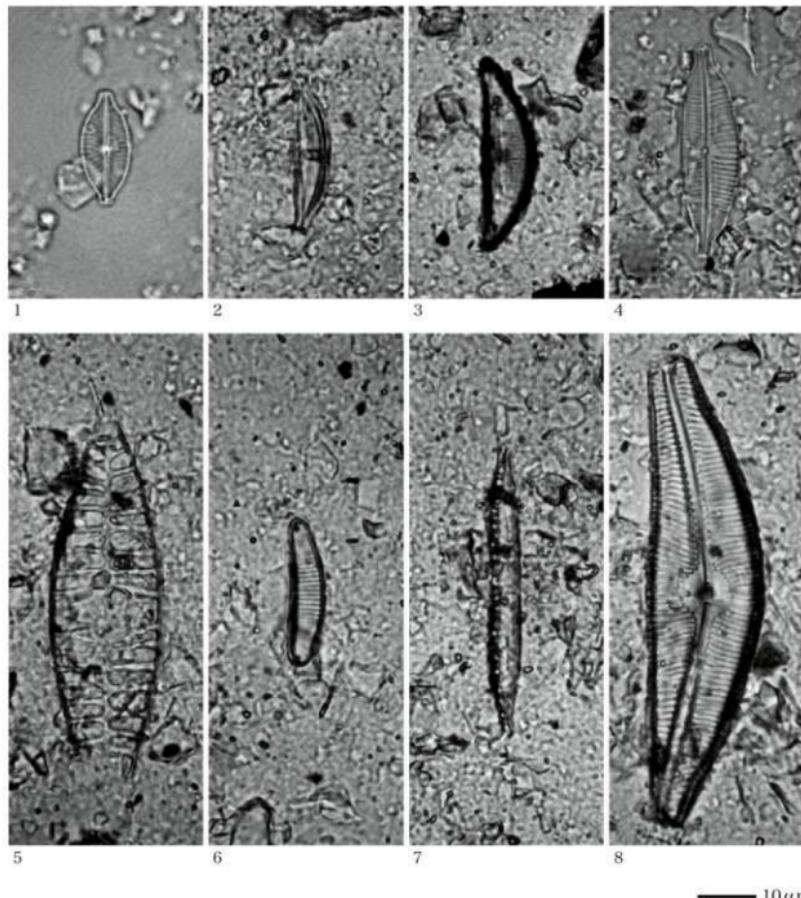
Hustedt,F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131-506.

Lowe,R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Research Center.

Krammer+H.-Lange-Bertalot (1986-1991)  
ciliophyceae-1-4.

Asai,K.&Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa, Diatom,10,p.35-47.  
安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42,p.73-88.  
伊藤良永・堀内誠二 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環

境解析への応用. 珪藻学会誌, 6,p.23-45.  
小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展開—. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.  
小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27,p.1-20.  
渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指數 DALpo, pH 耐性能. 内田老舗圖, pp.666.



1. *Navicula clementioides* 2. *Amphora montana* 3. *Amphora copulata* 4. *Cymbella naviculariformis*  
5. *Navicula cuspidata* 6. *Eunotia minor* 7. *Hantzschia amphioxys* 8. *Cymbella tumida*

図4 平城京第608次調査 珪藻顕微鏡写真

## IV 樹種同定

## 1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

## 2 試料

試料は、F発掘区で検出した奈良時代の五条条間北小路北側溝S D 2005b内の護岸の杭列SX822の杭材8点〈木杭2・3・5～10〉である。

## 3 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

## 4 結果

主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

モミ属 *Abies* マツ科 図5-1（木杭6）

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、そのうちウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。〈木杭2・5～8〉

ツガ属 *Tsuga* マツ科 図5-2（木杭3）

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1分野に2～4個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりツガ属に同定される。ツガには、ツガ、

コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20～25m、径50～80cmである。材は耐久性、保存性とともに中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。〈木杭3〉

ヒノキ *Chamaceyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図5-3（木杭9）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強韌であり、耐久性、耐湿性はともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。〈木杭9・10〉

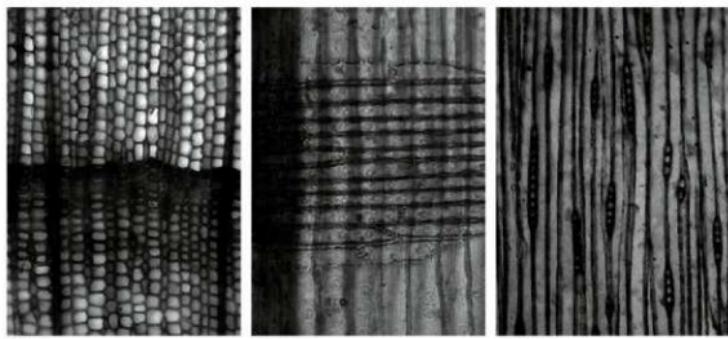
## 5 所見

同定の結果、F発掘区で検出した奈良時代の五条条間北小路北側溝S D 2005b内の護岸の杭列SX822の杭材は、モミ属5点、ツガ属1点、ヒノキ2点であった。モミ属は温帯性のモミと考えられ、木材は耐久性、保存性は低いが、軽軟なことから加工が容易な木材である。ツガ属の木材は重厚で耐久性、保存性は中庸で、切削、加工はあまり容易でない。ヒノキの木材は木理通直で大きな材が取れる良材であり、とくに保存性が高い。モミ、ツガ属、ヒノキは温帯に広く分布する針葉樹であり、モミは谷間や緩傾斜地の適潤な深層の肥沃地を好み、ツガ属はやや瘦せた尾根上等に生育する。ヒノキはやや傾斜のある適潤地を好み、急傾斜地、尾根筋、岩盤上にも生育する。近畿では山地部に照葉樹に混じり生育する。以上のことから、護岸の杭列SX822の杭材は当遺跡周辺に生育していたか、近隣地域からの流通の範囲でもたらす事の出来る木材であったといえる。

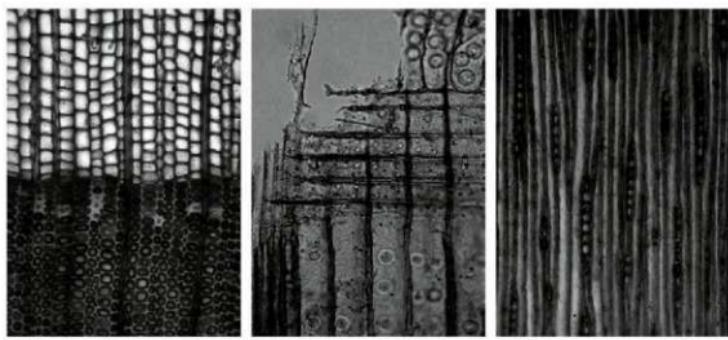
（株式会社 古環境研究所）

## 参考文献

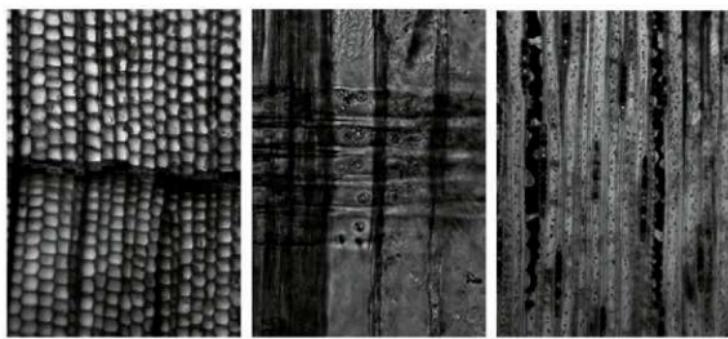
- 佐伯浩・原田浩（1985）「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版、p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩（1985）「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版、p.49-100.
- 鳥地謙・伊東隆夫（1988）「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣、p.296
- 山田昌久（1993）「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究』特別第1号、植生史研究会、p.242



1. 木杭6 毛ミ属  
横断面 ━━━━ : 0.2mm 放射断面 ━━━━ : 0.1mm 接線断面 ━━━━ : 0.2mm



2. 木杭3 ツガ属  
横断面 ━━━━ : 0.2mm 放射断面 ━━━━ : 0.1mm 接線断面 ━━━━ : 0.2mm



3. 木杭9 ヒノキ  
横断面 ━━━━ : 0.2mm 放射断面 ━━━━ : 0.05mm 接線断面 ━━━━ : 0.2mm

図5 平城京第608次調査 木材の断面写真

### 3. 平城京第622次調査における自然科学分析

#### I 花粉分析

##### 1 はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

##### 2 試料

分析試料は、左京五条四坊九坪東辺の雨落溝 S D 106 より採取されたNo.3、及び南辺の雨落溝 S D 114b より採取されたNo.5、同十坪北辺の雨落溝 S D 119 より採取されたNo.8、同十五坪西辺の雨落溝 S D 104 より採取されたNo.10、同十六坪南辺の雨落溝 S D 148b より採取されたNo.13、五条三条間北小路北側溝 S D 2005b より採取されたNo.16・18、同aより採取されたNo.14 の計8点（いずれも奈良時代の埋土）である。

##### 3 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm<sup>3</sup> を採量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- 6) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理

を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

#### 4 結果

##### （1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉 26、樹木花粉と草本花粉を含むもの 5、草本花粉 25、シダ植物胞子 2 形態の計 58 である。これらの学名と和名および粒数を表 I に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図 2 に示す。なお、200 個未満であっても 100 個以上の試料については傾向をみると参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真（図 1）に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、3 分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

##### 〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、モチノキ属、トチノキ、ブドウ属、ミズキ属、ツツジ科、カキ属、モクセイ科

##### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属-ガマズミ属

##### 〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、ネギ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、キカシガ属、アカバナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、ゴキヅル、タンボポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、ベニバナ〔シダ植物胞子〕

##### 〔単条溝胞子、三条溝胞子〕

##### 〔寄生虫卵〕

##### 回虫卵、鞭虫卵、マンソン裂頭糸虫卵

##### （2）花粉群集の特徴

##### 1) 九坪東辺の雨落溝 S D 106 (試料 No.3)

花粉密度は低く、樹木花粉と草本花粉の占める割合はほぼ同じである。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属を主に、シイ属、スギ、マツ属複雑管束亜属などが出現する。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、ミズ

表1 平城京第622次調査 花粉分析結果

分類群 学名	和名	九坪					五条東間北小路北側溝				
		SD106 No.3	SD114b No.5	SD119 No.8	十五坪 SD102 No.10	十六坪 SD148b No.13	(b) No.16	(b) No.18	(a) No.14	SD2005	
Arboreal pollen <i>Podocarpus</i>	樹木花粉				1						
<i>Abies</i>	マツ属		2	2	1	6	3	3	4		
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1		1	5	5	1	4	3		
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属裸粒管束亞属	5		1	62	9	14	24	8		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	11	1	4	36	25	26	34	38		
<i>Sciodipitys verticillata</i>	コウヤマキ						1	2	1		
Taxaceo-Cephalotaxaceo-Cupressaceae <i>Salix</i>	イチイ科 - イヌヤ科 - ヒノキ科 ナナゴ属	4		2	26	11	7	12	11		
<i>Abius</i>	パンノキ属	1				2		1		1	
<i>Betula</i>	カバノキ属	1				2		3	2		
<i>Corylus</i>	ハシミツ属				3	3	1	2	3		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシテ属 - アサダ				3						
<i>Castanea crenata</i>	クリ	1		2	1		2	1			
<i>Castanopsis</i>	シイ属	12	3	2	20	11	13	7	5		
<i>Fagus</i>	ブナ属				3						
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ属	28	4	9	28	45	23	27	41		
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカシヨ属	26	6	8	34	19	27	19	19		
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属 - ケヤキ	1	1		2	1	1	4	1		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属 - ムクノキ					1	1			1	
<i>Ilex</i>	モチノキ属	1									
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	1			1						
<i>Vitis</i>	ブドウ属						2				
<i>Cornus</i>	ミズキ属					1					
Ericaceae	ツツジ科									1	
<i>Diopyros</i>	カキ属									1	
Oleaceae	モクセイ科									1	
Arboreal - Nonarboreal pollen Moraceo-Urticaceae	樹木・草本花粉 クワ科 - イラクサ科		3			3	1	2	5		
Rosaceae	バラ科					1	1	3			
Leguminosae	マメ科				2	1			1		
Scrophulariaceae	ゴマノハグサ科						1				
<i>Sambucus-Filicium</i>	ニワトコ属 - ガマズミ属					1					
Nonarboreal pollen Gramineae	草本花粉 オモダカ属				2	1	3				
<i>Oryza type</i>	イネ科	40 *	8	35	198	147	160	141	142 *		
Cyperaceae	イネ属型	1			6	1	6		4		
<i>Anemone Japonica</i>	カヤツリグサ科	9			24	14	16	14	30		
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	1		4			1		1		
<i>Allium</i>	ネギ属								5		
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属				2	1			2		
<i>Rumex</i>	キシギシ属					2		1			
<i>Fagopyrum</i>	ソリ属				2						
Chenopodiaceo-Amaranthaceae	アカザ科 - ヒユ科	1	4	6	23	6	42	6			
Caryophyllaceae	ナデシコ科		1	1	1	2	1	2	2		
<i>Ranunculus</i>	キンボウガ属								1		
Cruciferae	アブラナ科	1		2	3	6			1		
<i>Rotula</i>	キカシグサ属				6	1					
Osmagraceae	アカバナ科	1									
Hydrocotylloideae	チドメグサ科	1	1	3	16	8	4	10	5		
Aipoideae	セリ亞科	2			7	1	2	2	7		
<i>Plantago</i>	オオバコ属					2	1	7	7		
<i>Actinostemma lobatum</i>	ゴキヅル				1	1					
Lactucoidea	タンボボ科				1		1				
Asteroidae	キク科		2	3	3	4	3	3	3		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	14	3	33	32	25	17	39	31		
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ						1				
Fern spore	シダ植物孢子										
Monolete type spore	单孔溝孢子	4	2		2	4	3	3	9		
Trilete type spore	三孔溝孢子	1		1	3	4	1	2	4		
Arboreal pollen Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木花粉 樹木・草本花粉	95	15	31	228	138	123	145	142		
Nonarboreal pollen	草本花粉	3	0	0	4	5	3	5			
Total pollen	花粉粒数 試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	71	12	83	312	237	230	277	240		
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>		169	27	114	544	380	356	425	387		
Unknown pollen	未同定花粉	10	2	10	11	13	10	7	2		
Fern spore	シダ植物孢子	5	2	1	5	8	4	5	13		
Helminth eggs (Acaris/hymenocystis)	寄生虫卵									10	
<i>Trichuris trichiura</i>	蛔虫卵									8	
<i>Diphyllobothrium mansei</i>	マンゾン製糞球虫卵									1	
Total	計	0	0	0	0	0	0	0	0	19	0
Helminth eggs frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	0.0		
Digestion rimeins	明らかな消化道	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)		
Charcoal fragments	難燃化物	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)		

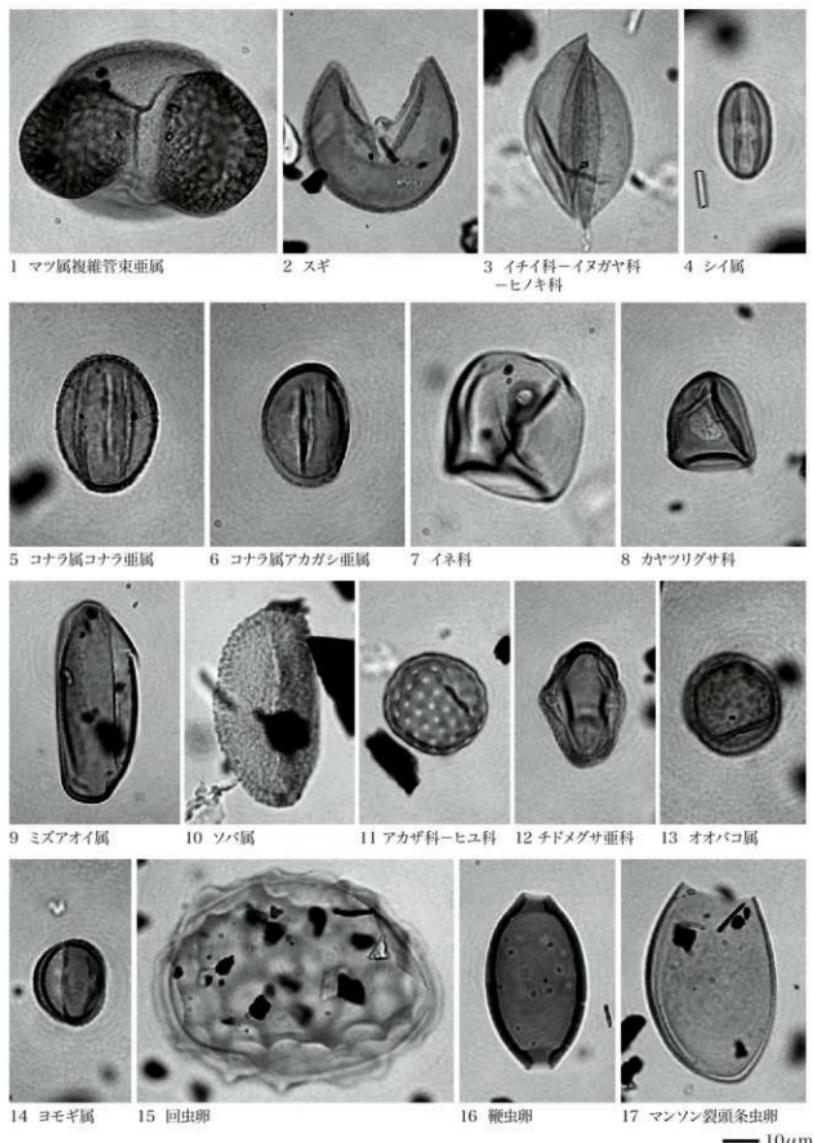


図1 平城京第622次調査 花粉・寄生虫卵微鏡写真

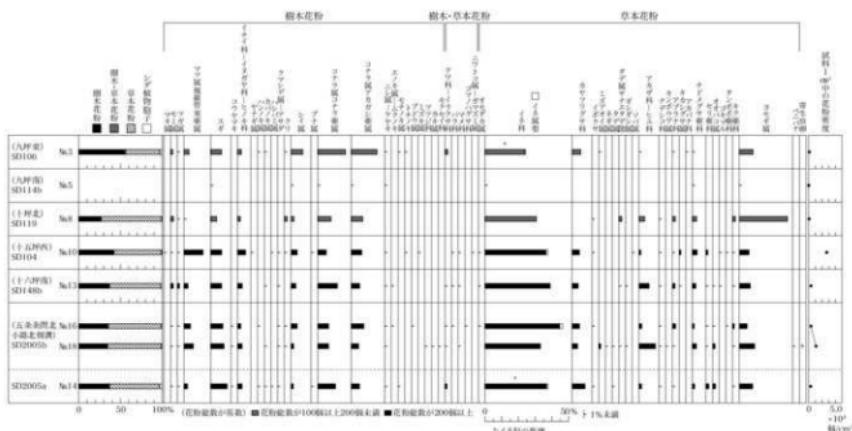


図2 平城京第622次調査 花粉ダイアグラム

アオイ属などが出現する。

### 2) 九坪南辺の雨落溝 S D 114b (試料No.5)

花粉密度が極めて低く、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、ニレ属-ケヤキ、スギ、草本花粉のイネ科、ヨモギ属、チドメグサ亜科がわずかに出現する。

### 3) 十坪北辺の雨落溝 S D 119 (試料No.8)

花粉密度は低い。草本花粉が約70%を占める。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が優占し、アカザ科-ヒユ科、チドメグサ亜科などが低率に出現する。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、スギなどが出現する。

### 4) 十五坪西辺の雨落溝 S D 104 (試料No.10)

草本花粉の占める割合が高く、約55%を占める。草本花粉ではイネ科(イネ属型を含む)が高率に出現し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、チドメグサ亜科が伴われ、オモダカ属、ソバ属などが出現する。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、シイ属などが出現する。

### 5) 十六坪南辺の雨落溝 S D 148b (試料No.13)

草本花粉の占める割合が高く、約60%を占める。草本花粉ではイネ科を主に、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、カヤツリグサ科などが低率に出現する。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属などが出現する。

### 6) 五条条間路北小路北側溝 S D 2005b (試料No.16、No.18)、S D 2005a (試料No.14)

S D 2005b のNo.16とNo.18では花粉構成と花粉組成とともに類似する。草本花粉の占める割合が高く、約65%を占める。草本花粉ではイネ科が高率に出現し、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉ではスギ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などが出現する。S D 2005b 北側溝No.18では、樹木花粉のツツジ科、カキ属、モクセイ科、草本花粉ではイネ属型、オモダカ属、ミズアオイ属、ベニバナがわずかに出現し、回虫卵、鞭虫卵、マンソン裂頭虫卵があわせて1cm<sup>3</sup>中約150個検出される。

S D 2005a のNo.14では草本花粉の占める割合が高く、約60%を占める。草本花粉ではイネ科(イネ属型を含む)が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが出現する。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、マツ属複維管束亜属などが出現する。

### 5 花粉分析から推定される植生と環境

それぞれの地点において花粉群集の特徴から植生の復元を行う。

### 1) 九坪東辺の雨落溝 S D 106 (試料No.3)

花粉密度が低く、乾燥あるいは乾湿を繰り返す環境が推定される。溝は通常は乾燥しており、雨水が流れるときのみ水が流れていると推定される。周辺にはコナラ属

コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属を主に、ニヨウマツ類（マツ属複雑管束亜属）やスギの樹木とイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などの草本が分布していた。

### 2) 九坪南辺の雨落溝 S D 114b（試料No.5）

花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥か乾湿を繰り返す堆積環境が推定され、溝は當時は乾燥し雨水が流れる溝であったと推定される。

### 3) 十坪北辺の雨落溝 S D 119（試料No.8）

花粉密度が低く、比較的乾燥した環境を好むヨモギ属とイネ科が多くアカザ科-ヒユ科、チドメグサ亞科なども生育し、周辺は乾燥した環境であった。周辺にはコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などの広葉樹が生育しスギも分布していたと考えられる。

### 4) 十五坪西辺の雨落溝 S D 102（試料No.10）

イネ科にはイネ属型が伴われ、水田雜草のオモダカ属も出現する。また、栽培植物のソバ属が検出されることなどから、周辺に水田やソバの畠が分布していたと考えられる。溝の周囲にはイネ科を主としてヨモギ属、カヤツリグサ科、チドメグサ亞科などの草本が繁茂していたとみなされる。近隣の森林はマツ属複雑管束亜属の割合が高く、二次林化が行われている。他の地点とは様相が異なる。

### 5) 十六坪南辺の雨落溝 S D 148b（試料No.13）

周辺にはイネ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などの草本が生育し、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの広葉樹とスギ、マツ属複雑管束亜属、モミ属、ツガ属などの針葉樹が分布していた。

### 6) 五条条間北小路北側溝 S D 2005b（試料No.16、No.18）、SD 2005a（試料No.14）

S D 2005b のNo.16、No.18の森林植生は、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などの針葉樹とコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの広葉樹で構成される。S D 2005a のNo.14ではマツ属複雑管束亜属が少ない。ともに堆積地周辺には水田の分布が示唆され、水田や溝周囲にイネ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などの草本が生育していたと見なされる。

S D 2005b のNo.18では寄生虫卵が $1\text{cm}^3$ 中約150個検出され、糞便の堆積ではないか生活汚染を受ける溝であったと考えられる。わずかに出現するベニバナは、植栽ではなく薬用に起因する可能性が示唆される。またS D 2005b のNo.18の時期には樹木花粉のツツジ科、

カキ属、モクセイ科が出現しており、これらの樹木が植栽されていた可能性を考えられる。

## 6まとめ

左京五条四坊九坪の東辺の雨落溝 S D 106（試料No.3）と南辺の雨落溝 S D 114b（試料No.5）、同十坪北辺の雨落溝 S D 119（試料No.8）は、いれも花粉密度が低く、花粉の分解が行われるような常時は乾燥した溝であったと考えられた。同十六坪南辺の雨落溝 S D 148b（試料No.13）、五条条間北小路北側溝 S D 2005a（試料No.14）では、イネ科を主に、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などの草本と、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの広葉樹とスギの針葉樹が分布していた。同十五坪西辺の雨落溝 S D 102（試料No.10）と五条条間北小路北側溝 S D 2005b（試料No.16・No.18）は、マツ属複雑管束亜属の割合が高く、二次林化が行われており、他の地点より時期が下ると考えられた。また、試料No.18では寄生虫卵がやや多く、生活汚染を受ける溝であったと考えられ、周囲にツツジ科、カキ属、モクセイ科が植栽されていたと考えられた。

## 参考文献

- 金原正明（1993）「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本』第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。  
 島倉巳三郎（1973）「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集、60p。  
 中村純（1967）「花粉分析」古今書院、p.82-102。  
 中村純（1974）「イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として」『第四紀研究』13,p.187-193。  
 中村純（1977）「福作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号、p.21-30。  
 中村純（1980）「日本産花粉の標識」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集、91p。

## II 樹種同定

### 1はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2 試料

試料は、五条条間北小路北側溝 S D 2005 内の杭列 S X 811～813・815・東四坊坊間東小路西側溝 S D 1011 内の杭列 S X 810 および九坪西辺を画する築地 S A 220 上の杭列 S X 814 の各遺構から出土した杭材 29 点である。

### 3 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、

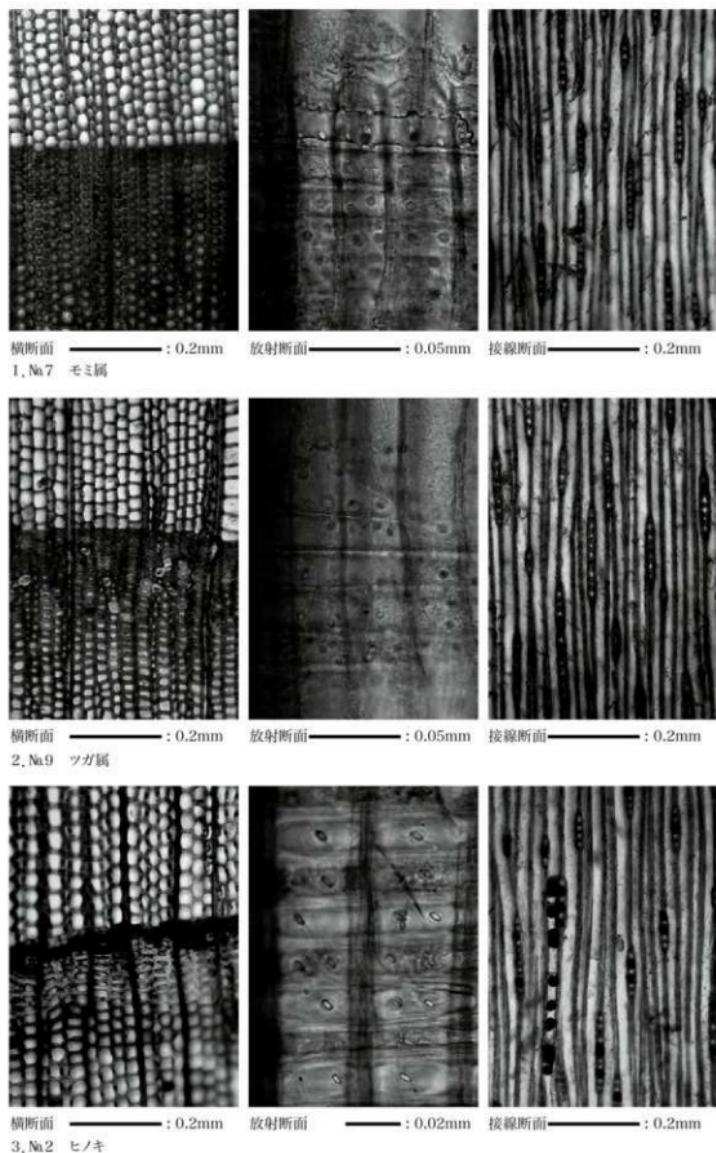
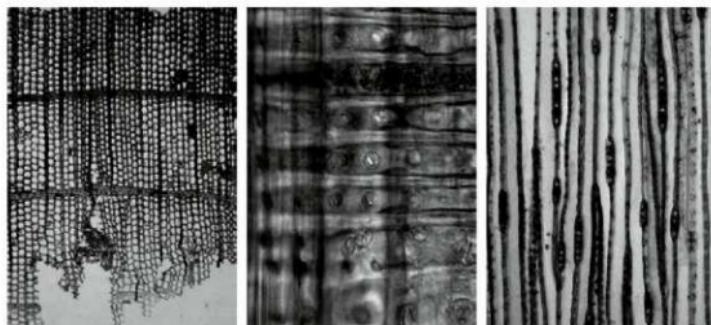
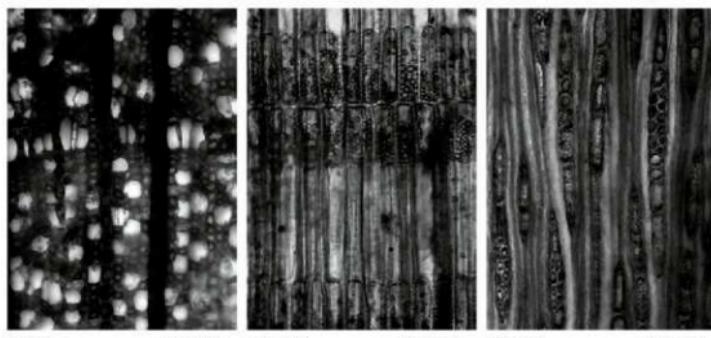


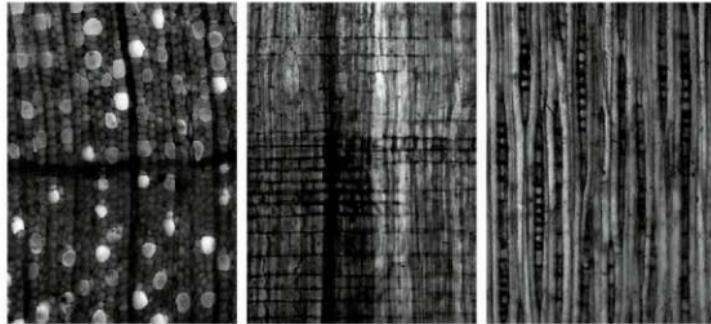
図3 平城京第622次調査 木材の断面写真①



横断面 放射断面 接線断面  
4. No.23 ヒノキ  
: 0.5mm : 0.02mm : 0.2mm



横断面 放射断面 接線断面  
5. No.14 シキミ  
: 0.2mm : 0.2mm : 0.2mm



横断面 放射断面 接線断面  
6. No.16 サカキ  
: 0.2mm : 0.2mm : 0.2mm

図4 平城京第622次調査 木材の断面写真②

表2 平城京第622次調査 樹種同定結果

No	調査次数・発掘区	試料名称	通路	通模種別・番号	時代	採取部位	結果(学名/和名)		
1	HJ 622 B発掘区	SXB13 木杭No.1	平城京跡 (五条東閣北小路)	SX813 (SD2005内の杭列)	奈良	木杭	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
2		SXB13 木杭No.2					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
3		SXB13 木杭No.3					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
4		SXB13 木杭No.4					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
5		SXB13 木杭No.5					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
6		SXB13 木杭No.6					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
7		SXB12 木杭No.1	平城京跡 (東四坊坊間東小路)	SX812 (SD2005内の杭列)			<i>Abies</i> モミ属		
8		SXB12 木杭No.2					<i>Abies</i> モミ属		
9		SXB12 木杭No.3					<i>Tsuga</i> ツガ属		
10		SXB12 木杭No.4					<i>Abies</i> モミ属		
11		SXB10 木杭No.1					<i>Abies</i> モミ属		
12	HJ 622 D発掘区	SXB10 木杭No.2					<i>Abies</i> モミ属		
13		SXB15 木杭No.1	平城京跡 (五条東閣北小路)	SX815 (SD2005内の杭列)			<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
14		SXB15 木杭No.5					<i>Ilicium religiosum</i> Sieb. et Zucc. シキミ		
15		SXB15 木杭No.6					<i>Abies</i> モミ属		
16		SXB15 木杭No.7					<i>Cleyera japonica</i> Thunb. サカキ		
17		SXB15 木杭No.8					<i>Ilicium religiosum</i> Sieb. et Zucc. シキミ		
18		SXB14 木杭No.2	平城京跡 (左京五条四塚九坪)	SX814 (九坪東面墓地SA220上の杭列)			<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
19		SXB14 木杭No.5					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
20		SXB11 木杭No.1					<i>Abies</i> モミ属		
21		SXB11 木杭No.2					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
22		SXB11 木杭No.3					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
23		SXB11 木杭No.4	平城京跡 (五条東閣北小路)	SX811 (SD2005内の杭列)			<i>Abies</i> モミ属		
24		SXB11 木杭No.5					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
25		SXB11 木杭No.6					<i>Abies</i> モミ属		
26		SXB11 木杭No.7					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
27		SXB17 付近木杭No.1					<i>Abies</i> モミ属		
28		SXB17 付近木杭No.2					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		
29		SXB17 付近木杭No.3					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ		

放射断面(柱目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

#### 4 結果

表2に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図3・4に示す。以下に同定根拠となつた特徴を記す。

モミ属 *Abies* マツ科 図3-1 (Na.7)

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晚材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、そのうちウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

ツガ属 *Tsuga* マツ科 図3-2 (Na.9)

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晚材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1分野に2～4個存在する。放射

仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりツガ属に同定される。ツガ属には、ツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20～25m、径50～80cmである。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

図3-3 (Na.2)・図4-4 (Na.23)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晚材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭であり、耐朽性、耐湿性とともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

シキミ *Ilicium religiosum* Sieb. et Zucc. モクレン科

図4-5 (Na.14)

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布

する散孔材である。早材部の年輪界付近に於いて、道管が少し並ぶ傾向を示す。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く 50 を超える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～2細胞幅で、单列部が太い。

以上の形質よりシキミに同定される。シキミは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、高さ 10 m、径 30cm に達する。材は、強さ中庸で、旋作、器具、薪などに用いられる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

図 4-6 (N.16)

横断面：小型の道管が、単独ないし 2 個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く 40 を超える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ 8～10 m、径 20～30cm である。材は強健、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

## 5 所見

同定の結果、五条条間北小路北側溝内の杭列 S X 811～813、815 等、東西坊間東小路西側溝 S D 1011 内の杭列 S X 810、九坪東辺を画する築地 S A 220 上の杭列 S X 814 で出土した木材は、ヒノキ 15 点、モミ属 10 点、シキミ 2 点、ツガ属 1 点、サカキ 1 点であった。ヒノキ、モミ属、ツガ属は温帯に広く分布する針葉樹で、いずれも常緑高木である。周辺地域には植生の主要要素としては分布しないため、流通による可能性がある。シキミ、サカキは照葉樹林の要素で周辺の山野に普通に分布していたと考えられる。

## 参考文献

- 佐伯浩・原田浩 (1985)「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版, p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩 (1985)「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版, p.49-100.
- 鳥地謙・伊東隆夫 (1988)「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣, p.296
- 山田昌久 (1993)「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究』特別第 1 号, 植生史研究会, p.242

## III. 金属製薄板の蛍光X線分析

### 1. はじめに

物質に X 線を照射すると、その物質を構成している元

素に固有のエネルギー（蛍光 X 線）が放出され、この蛍光 X 線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

### 2 試料

分析試料は、土器埋納遺構 SX803 の土器内部から出土した大きさ約 1～2 cm の金属製薄板 2 点（試料 1、試料 2）である。

### 3 分析方法

エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（堀場製作所製分析顕微鏡、XGT-5000 Type II）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法 (FP 法) による定量分析を行った。測定条件は、測定時間 3000 秒、ビーム径 100 μm、電圧 50kV、試料室内真空である。

### 4 分析結果

図 5 に各元素の定量分析結果 (wt%) および X 線スペクトル図を示す。

### 5 考察

金属製薄板 2 点について蛍光 X 線分析を行った。その結果、両試料とも銀 (Ag) の明瞭なピークが認められ、銅 (Cu) の小さなピークも認められた。銀 (Ag) の含量は、試料 1 では 98.6%、試料 2 では 99.2% といずれも高い値である。したがって、これらの金属製薄板の主成分は銀であり、銅 (Cu) もわずかに含まれていると考えられる。

### 6 まとめ

土器埋納遺構 SX 803 で出土した金属製薄板 2 点について、蛍光 X 線分析により材質を調査した結果、両者とも銀製品であることが確認された。

(株式会社 古環境研究所)

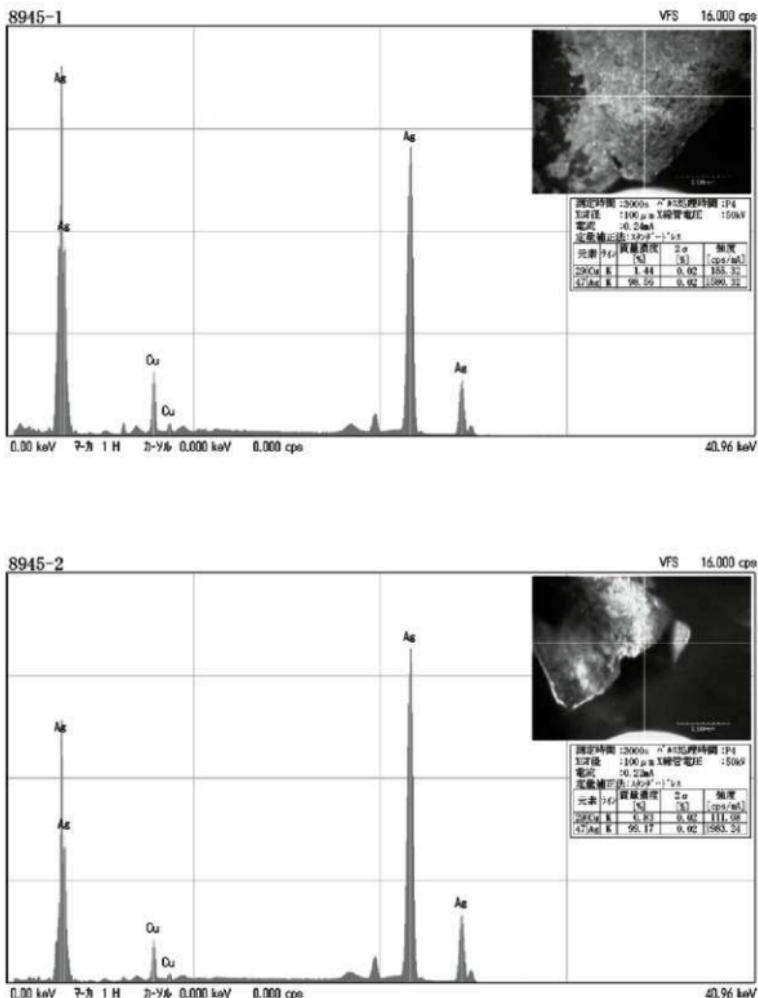


図5 平城京第622次調査 蛍光X線分析結果



---

### 第3章 平成21年度 保存活用事業報告

---

# 平成 21 (2009) 年度埋蔵文化財保存活用事業報告

## 1. 展示

### A 常設展示

対象: 一般

会期: 平成 21 年 4 月 1 日 (水) ~ 10 月 23 日 (金)  
(140 日間)

場所: 埋蔵文化財調査センター展示室

趣旨: 奈良市の歴史を埋蔵文化財の展示を通じて知つ  
てもらう。

内容: 旧石器時代~江戸時代の各時代の埋蔵文化財を  
遺跡ごとに展示。

観覧者数: 1,473 名

### B 平城遷都 1300 年祭記念 第 27 回秋季特別展

「出土品に見る奈良のやきものと暮らし」の開催

対象: 一般

会期: 平成 21 年 11 月 2 日 (月) ~ 12 月 25 日 (金)  
(42 日間)

場所: 埋蔵文化財調査センター展示室・ロビー

趣旨: 発掘調査で出土した土器・陶磁器類を時代を超  
えて、国産品から海外のものまでを展示、焼き  
物を通して奈良の人々の暮らしを紹介。

観覧者数: 659 名

その他: ・案内を「しみんだより」11 月号・奈良市役  
所のホームページに掲載。

- ・宣伝用のポスター・チラシの作成・配布。
- ・展示解説用パンフレットの作成。
- ・事前に報道機関に資料を配布。
- ・埋蔵文化財講演会を実施。

平成 21 年 11 月 21 日 (土) 13:00 ~ 16:30

参加者 32 名

会場: 埋蔵文化財調査センター講座室

土橋理子「海のシルクロードを来た陶磁器  
-奈良・平安時代-」

中島和彦「奈良でつくられた土器のはなし」

### C 発掘調査速報展示 (2 回) の開催

対象: 一般

趣旨: 発掘調査などの最新の成果を夏と春の 2 回  
に分けて、展示・紹介する。

#### ① 夏季速報展示

会期: 前期 平成 21 年 7 月 6 日 (月) ~ 7 月 31 日 (金)  
後期 平成 21 年 8 月 10 日 (月) ~ 8 月 31 日 (月)  
(合計 35 日間)

場所: 前期 埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー  
後期 市役所ロビー

内容: 帯解黄金塚古墳の調査成果と「磚積式石室」に  
ついて出土遺物や写真パネルで紹介。また、西  
大寺旧境内出土のイスラム陶器・木簡も併せて  
展示。

観覧者数: 848 名 (前期 589 名 後期 259 名)

その他: ・案内を「しみんだより」7 月号・奈良市役  
所のホームページに掲載。  
・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。  
・展示リーフレットの作成。  
・事前に報道機関に資料を配布。

#### ② 春季速報展示

会期: 平成 22 年 3 月 1 日 (月) ~ 3 月 31 日 (水)  
(23 日間)

内容: 市指定文化財 弥勒寺蔵 三角縁吾作銘二神二獸  
鏡と、併せて文化財に指定された鏡の伝来を記  
した文書を初公開した。

観覧者数: 357 名

その他: ・案内を「しみんだより」3 月号・奈良市役  
所のホームページに掲載。  
・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。  
・展示リーフレットの作成。  
・事前に報道機関に資料を配布。

### D 年間観覧者数 2,922 名 (249 日間)。累計 18,569 名。 月平均 243 名。内訳は表 1 のとおり。

表 1

月別	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
	49	207	313	589	103	145	71	329	402	194	163	357

地域別	奈良市内	奈良県内	近畿圏内		近畿圏外		男女別	男		女	
			近畿圏内	近畿圏外	男	女		男	女	男	女
	133	66	56	18				1998	924		

年齢別	～9 歳	10 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	60 ～ 69 歳	70 歳～	学生
	12	20	32	30	26	40	86	56	19

## 2. 施設見学の受け入れ

### 埋蔵文化財調査センター施設見学

#### (1)

対象：大安寺西小学校 6 年生 120 名

期日：平成 21 年 5 月 8 日（金）

#### (2)

対象：鈴良市生涯学習財団三笠公民館主催講座

受講者 30 名

期日：平成 21 年 5 月 29 日（金）

#### (3)

対象：立命館宇治中学高等学校社会科教員研修会  
11 名

期日：平成 21 年 7 月 22 日（水）

#### (4)

対象：大安寺西小学校 3 年生 7 名

期日：平成 21 年 10 月 16 日（金）

#### (5)

対象：富雄歴史教室 20 名

期日：平成 21 年 3 月 8 日（月）

成果について、職員が図や写真などを使用して報告する。

参加者数：47 名

その他：・募集案内を「しみんだより」2 月号・奈良市役所のホームページ、春季速報展のポスター・チラシに掲載。

・事前に報道機関に資料を配布。



埋蔵文化財調査報告会



展示室を見学する小学生

## 3. 講演会・教室の開催

### A 「埋蔵文化財調査報告会」の開催

対象：一般

期日：平成 22 年 3 月 20 日（土）

内容：平成 21 年度に埋蔵文化財調査センターが行った主な発掘調査の報告と、春季速報展示に関連して、三角縁神獣鏡についての報告を行った。  
・久保邦江「西大寺旧境内の調査」  
・鐘方正樹「弥勒寺藏 三角縁吾作銘二神二獸鏡について」

会場：埋蔵文化財調査センター講座室

趣旨：平成 21 年度に実施した調査や、展示品の調査

### B 「夏休み親子考古学体験」の開催

対象：小学 4 年生以上の児童とその保護者

期日：平成 21 年 8 月 14 日（金）

内容：クイズに答えながら埋蔵文化財調査センターの展示室を見学後、瓦の拓本を体験する。  
会場：埋蔵文化財調査センター展示室・講座室  
趣旨：展示室を見学することで、奈良の歴史を知ってもらい、本物の遺物に触ることで、考古学に親しんでもらう。

参加者数：22 名

その他：募集案内を「しみんだより」8 月号・奈良市役所のホームページに掲載。



夏休み親子考古学体験

#### 4. 市民考古サポーター養成講座

##### A Stage 1 受講生の募集

対象：一般

期日：平成 21 年 7 月 8 日（水）～平成 22 年 3 月 3 日（水）

毎月 1 ～ 2 回、全 13 回（表 2）

内容：埋蔵文化財調査センターが行う発掘調査、出土遺物の整理、展示会などの活動支援ボランティアの養成講座。職員が講師をつとめる講座・実習のプログラムにより、将来の活動に必要な基本的知識・技術を身につける。

募集人員：25 名

その他：・案内を「しみんだより」6 月号と奈良市役所のホームページに掲載。

・募集用のチラシを作成・配布。

表 2

	日時	講座名
第 1 回	7 月 8 日	開講式・オリエンテーション 考古学とは何か
第 2 回	7 月 22 日	石器のはなし・縄文人のくらし
第 3 回	8 月 12 日	弥生の社会・古墳のはなし
第 4 回	9 月 2 日	佐紀古墳群を訪れる（実習）
第 5 回	9 月 9 日	奈良の都平城京
第 6 回	10 月 14 日	奈良時代の土器・古代の瓦
第 7 回	10 月 21 日	平城宮跡をみる（実習）
第 8 回	11 月 11 日	発掘作業の流れ
第 9 回	12 月 2 日	発掘現場を見る（実習）
第 10 回	12 月 9 日	舞台裏をみる（出土品整理作業）
第 11 回	1 月 13 日	拓本のとり方（実習）
第 12 回	2 月 10 日	奈良町と中近世の土器・陶磁
第 13 回	3 月 3 日	土器類の分類整理（実習） 閉講式

##### B Stage 2 の活動

講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

対象：平成 20 年度の受講修了者 25 名

登録人員：18 名

活動開始：平成 23 年 5 月～

活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、講座の準備、受付、体験学習の補助や施設見学の案内、発掘現場作業補助などに参画。

月平均活動延べ人数：63 名



市民考古サポーター養成講座 Stage 1



市民考古サポーター養成講座 Stage 2

## 5. 体験学習・実習の受け入れ

### A 博物館実習

対象：追手門学院大学学生 1名

期日：平成 21 年 10 月 26 日（月）～30 日（金）の  
5 日間

内容：第 27 回秋季特別展の展示設営

### B 市立高校体験学習

#### (1)

対象：一条高校人文科学科 1 年生 40 名

期日：平成 21 年 9 月 29 日（火）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：出土遺物の整理実習（洗浄・注記・拓本）

#### (2)

対象：一条高校人文科学科 2 年生 40 名

期日：平成 21 年 8 月 20 日（木）～26 日（水）

場所：平城京跡発掘調査現場（奈良市大森町）

内容：発掘調査の体験実習



高校体験学習・発掘現場実習

### C スーパーサイエンスハイスクール事業現地研修

対象：奈良県立奈良高校 地学部 3 名

期日：平成 21 年 7 月 23 日（木）

場所：平城京跡発掘調査現場（奈良市大森町）

内容：「珪藻と古環境」の現地研修

### D 中学校職場体験学習

#### (1)

対象：伏見中学校 2 年生 男子 3 名

期日：平成 21 年 7 月 28 日（火）～30 日（木）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記

#### (2)

対象：田原中学校 男子 1 名・女子 2 名

期日：平成 21 年 10 月 7 日（水）～9 日（金）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・ポスター発送準備

#### (3)

対象：三笠中学校 男子 1 名・女子 1 名

期日：平成 21 年 11 月 18 日（水）～19 日（木）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄

#### (4)

対象：京西中学校 男子 1 名

期日：平成 22 年 1 月 19 日（火）～20 日（水）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記

#### (5)

対象：平城西中学校 男子 3 名

期日：平成 22 年 2 月 2 日（火）～4 日（木）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記



博物館実習



高校体験学習・出土遺物の整理



中学校職場体験学習

## 6. 文化財学習用キット（ドキ土器キット）の貸出

対象：奈良市内の小中学校など

趣旨：市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦などの実物資料を教員用の解説書を付けて小中学校などへ貸し出し、社会科学習、郷土を知る学習の補助教材として利用してもらう。また、埋蔵文化財調査センターを見学する小中学生・自主活動グループに「触ることのできる文化財」として使用した。

資料の内容

- ①縄文土器と弥生土器
- ②縄文時代の石鎌と弥生時代の石鎌・石包丁
- ③古墳時代の埴輪と須恵器
- ④-1 土器A
- ④-2 土器B 奈良時代の土器
- ⑤奈良時代の瓦 軒丸瓦・軒平瓦
- ⑥奈良時代の鏡と墨書き土器・和同開珎

### (1)

場所：佐保小学校

期日：平成 21 年 4 月 9 日（木）～16 日（木）

資料：①・②・③

### (2)

場所：奈良育英小学校

期日：平成 21 年 4 月 16 日（木）～22 日（水）

資料：①

### (3)

場所：佐保小学校

期日：平成 21 年 5 月 7 日（木）～14 日（木）

資料：④-1・④-2・⑥

## (4)

場所：奈良育英小学校

期日：平成 21 年 5 月 28 日（木）～6 月 4 日（木）

資料：④-1・④-2

## (5)

場所：財奈良市生涯学習財團 平城東公民館

期日：平成 21 年 9 月 4 日（金）～14 日（月）

資料：⑤

## (6)

場所：神功小学校

期日：平成 21 年 10 月 20 日（火）～27 日（火）

資料：④-1・④-2・⑤・⑥



ドキ土器キットで学習する小学生

## 7. 職員の講師など派遣

### A 一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

期日：①平成 21 年 7 月 9 日（木）

②平成 21 年 9 月 15 日（火）

場所：一条高校（奈良市法華寺町）

派遣人数：①②各 1 名

内容：①発掘調査について ②考古学概論

### B 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館主催「土曜講座」

期日：平成 21 年 9 月 5 日（土）

場所：奈良県立橿原考古学研究所 講堂

派遣人数：1 名

内容：平城京左京五条四坊九・十坪の調査について

### C 平成 21 年度奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会「発掘調査報告会」

期日：平成 22 年 3 月 6 日（土）

場所：河合町中央公民館 視聴覚室

派遣人数：2 名

内容：帶解黄金塚古墳第 2 次調査・西大寺境内第 25 次調査

## 8. 埋蔵文化財調査センター保管遺物・写真などの貸出ほか

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究に関する問い合わせ、資料の閲覧を受け入れた。

A 遺物などの貸出 20 件（表3の通り）

B 写真などの貸出・提供・掲載許可 20 件（表4の通り）

C 学術研究に関する資料閲覧 12 件（表5の通り）

表3

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H 21.4.1 ~ H 22.3.31	平城京跡出土木簡（模造品）10点（礎進上木簡1点、月借鉄進上木簡1点、豹皮分銭付札1点、渋皮御田侍奴画指木簡1点、北宮封職木簡1点、衛府進塗付札1点、碌布付札1点、槐花進上木簡1点、造酒司脊1点、瓦進上木簡1点）、分銅（模造品）1点（平城京跡第167次調査出土）
2	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所	「河南省鞏義黃冶唐三彩窯の簡報 付論、大安寺出土陶枕の再検討」に参考資料として使用	H 21.5.11 ~ H 21.5.22	唐三彩輪花杯1点（平城京跡第93次調査出土）、陶枕4点（平城京跡第293次調査出土1点、大安寺境内第68・73・92次調査出土各1点）、杯2点（平城京跡第127次調査出土）、唐白釉円面獣脚硯1点（平城京跡第130次調査出土）
3	群馬県立歴史博物館	第86回企画展「国宝 武人ハニワ、群馬へ帰る！」に展示	H 21.6.15 ~ H 21.9.11	家形埴輪1点（杉山古墳出土）
4	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	速報展「大和を掘る 27~2008年度発掘調査速報展」に展示	H 21.7.1 ~ H 21.9.25	奈良三彩火舎1点、須恵器1点、宝珠鏡2点（平城京跡第579・608-A次調査出土）、奈良三彩火舎1点、須恵器1点、土師器6点、炭片4点（平城京跡第608-D次調査出土）、須恵器1点、土師器8点（平城京跡第608-E次調査出土）、播磨産軒丸瓦1点（平城京跡第608-F次調査出土）、播磨産軒平瓦1点、平瓦2点、熨斗瓦2点（平城京跡第459-2次調査出土）、理納遺構出土状況写真パネル3点
5	島根県立古代出雲歴史博物館	平成21年度特別展「どこで！一出雲と相撲～」に展示	H 21.7.6 ~ H 21.10.2	墨書き土器2点（「相撲所」「左相撲」）（平城京跡第28次調査出土）
6	春日大社	夏季特別公開「春日大社の考古学展」に展示	H 21.7.22 ~ H 21.9.25	土師器9点（平城京跡第559次調査出土）、土師器10点（元興寺境内第62次調査出土）
7	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良県立橿原考古学研究所平城遷都1300年祭記念第2回ミニ展示「井戸と暮らし」に展示	H 21.8.25 ~ H 21.9.30	本釣瓶1点、釣瓶釣り金具1点、碁石7点（平城京跡第1次調査出土）、瓢箪の柄杓1点（平城京跡第257-1次調査出土）、瓦製井筒1点（平城京跡第327-1次調査出土）
8	島根県立古代出雲歴史博物館	平成21年度企画展「出雲國誕生と奈良の都」に展示	H 21.9.30 ~ H 21.12.22	角柱2点（西隆寺跡第8次調査出土）
9	大阪府立近つ飛鳥博物館	平成21年度秋季特別展に展示	H 21.9.30 ~ H 21.12.16	土師器5点、石鉗1点、車輪石1点、管玉3点、滑石製小玉2点、ガラス玉2点、碧玉原石2点（平城京跡第257-3次調査出土）
10	木簡学会	木簡学会第31回研究集会で展示	H 21.12.4 ~ H 21.12.7	木簡8点（「神護景雲二年」1点、「參議從三位石上朝臣」1点、「東海道 東糞道」1点、「太政官譙奏」1点、「三権務所」1点、「福車貳両」1点、「金堂所 鶴院」1点、「大德一心念」1点）（西大寺境内第25次調査出土）
11	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	平城遷都1300年記念特別陳列「平城京発掘」に展示	H 21.12.18 ~ H 22.3.31	三彩施釉瓦10点（平城京跡第28・73次調査出土）、木簡1点（平城京跡第73次調査出土）、陶瓶7点、軒丸瓦1点、軒平瓦1点（平城京跡第1次調査出土）、軒丸瓦1点、軒平瓦1点、丸瓦5点（平城京跡第291次調査出土）、埋納遺構出土状況写真パネル3点
12	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所飛鳥資料館	飛鳥資料館研究図録第12冊に掲載	H 22.1.5 ~ H 22.1.25	素紋鏡9点（平城京跡第157・207・273-1・283-2・284・292-1・314・363・364-7次調査出土）、小型海獸葡萄鏡3点（平城京跡第208・273-2・314次調査出土）、花鳥紋青銅鏡1点（平城京跡第258次調査出土）、唐花六瓣鏡1点（平城京跡第266次調査出土）、唐草双鳥紋六棱鏡1点（平城京跡第531次調査出土）

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
13	大阪府立近つ飛鳥博物館	平成 21 年度冬季特別展「ふたつの飛鳥の終末期古墳—河内飛鳥と大和飛鳥—」に展示	H 22.1.7 ~ H 22.3.14	須恵器 2 点、土師器 1 点、練原石(磚) 1 点(黄金塚古墳第 2 次調査出土)、黄金塚古墳第 2 次調査、埴丘全景など写真パネル 4 点
14	日進市教育委員会	企画展「にっしんの廻路～飛鳥・奈良・平安時代の旅投宿～」に展示	H 22.2.1 ~ H 22.6.8	土師器 7 点(平城京跡第 1 ・ 276-2 ・ 310-1 ・ 327-3 ・ 347-2 次、東市跡第 6 次調査出土)、須恵器 15 点(平城京跡第 133 ・ 180 ・ 257-2 ・ 276 ・ 283 ・ 327-3 ・ 557 次、西大寺旧境内第 14 次、大安寺旧境内第 53 ・ 58 、東大寺旧境内第 11 次調査出土)、銭貨 2 点(和同開珎)(東市跡第 4 次調査出土)
15	奈良県立図書情報館	図書展示「平城京の世界」に展示	H 22.3.9 ~ H 22.4.30	円面鏡 1 点(平城京跡第 196-2 次調査出土)、墨書き器「東院」 1 点(平城京跡第 284 次調査出土)、銭貨 6 点(和同開珎 2 点、神功開寶 2 点、萬年通寶 2 点、東市跡第 4 次調査出土)、筆と墨のレプリカ各 1 点、木簡赤外線写真パネル 1 点
16	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	平城遷都 1300 年記念 春季特別展「大唐皇帝陵展」に展示	H 22.3.25 ~ H 22.7.20	唐三彩輪花杯 1 点(平城京跡第 93 次調査出土)、陶枕 4 点(平城京跡第 293 次調査出土 1 点、大安寺旧境内第 68 ・ 73 ・ 92 次調査出土各 1 点)、杯 2 点(平城京跡第 127 次調査出土)、三足炉 1 点(平城京跡第 578 次調査出土)、唐白釉円面獸脚砚 1 点(平城京跡第 130 次調査出土)、奈良三彩 42 点(平城京跡第 1 ・ 14 ・ 56 ・ 91 ・ 134 ・ 171 ・ 180 ・ 307 ・ 310-3 ・ 327-3 ・ 347-2 ・ 351-2 ・ 479 ・ 557 ・ 608-A ・ 622 次、大安寺旧境内第 28 ・ 30 ・ 43 ・ 53 ・ 72 ・ 92 次、西大寺旧境内第 3 次、東市跡第 4 ・ 19 ・ 26 次、試掘 88-6 調査出土)、白磁碗 1 点(大安寺旧境内第 60 次調査出土)、三彩垂木瓦 6 点(大安寺旧境内第 78 次調査出土)、三彩施釉瓦 10 点(平城京跡第 28 ・ 73 次調査出土)、イスラム陶器 33 点、墨書き器「皇甫東朝」 1 点(西大寺旧境内第 25 次調査出土)、胡人面付硯脚(平城京跡第 506-1 次調査出土)

## 奈良市管内

17	なら奈良館	常設展示	H 21.4.1 ~ H 22.3.31	土師器 9 点(平城京跡第 52 ・ 314 次、東市跡第 4 ・ 6 次調査出土)、須恵器 14 点(平城京跡第 52 ・ 157 次、東市跡第 4 次調査出土)、木製品 2 点(平城京跡第 174 次調査出土物 1 点、第 257-3 次調査出土へら 1 点)、パネル 1 点(貴族の食卓風景)
18	奈良市水道局	常設展示	H 21.4.1 ~ H 22.3.31	軒丸瓦 2 点、軒平瓦 1 点(平城京跡第 28 次調査出土)
19	辰市人権文化センター	常設展示	H 21.4.1 ~ H 22.3.31	埴 1 点(平城京跡第 14 次調査出土)
20	富雄公民館	常設展示	H 21.4.1 ~ H 22.3.31	弥生土器 2 点(杏遺跡出土)、古墳時代の須恵器 2 点、土師器 2 点(杏遺跡、平城京跡第 162 次調査出土)、奈良時代の土師器 1 点、須恵器 5 点(平城京跡第 52 ・ 92 ・ 133 ・ 157 ・ 222 次調査出土)、墨レプリカ 1 点、鎌倉時代の土師器 1 点、瓦器 1 点(奈良町遺跡、菅原東遺跡出土)、室町時代の土師器(奈良町遺跡、元興寺旧境内第 4 ・ 13 次調査出土)、江戸時代の土師器・陶磁器(奈良町遺跡、元興寺旧境内第 15 次、菅原東遺跡出土)、パネル 12 点

表 4

	申請日	申請機関	目的	内容	その他
1	H21.5.15	島根県立古代出雲歴史博物館	平成 21 年度企画展「出雲国誕生と奈良の都」の展示図録などに掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 16 年度口絵 7 掲載 西隆寺跡第 8 次調査角柱写真 1 点	貸出・掲載許可
2	H21.6.11	東京法令出版株式会社	中學歴史資料集「グラフィックワイド歴史」に掲載	平城京第 167 次調査出土、銅製分銅(壺形)写真 1 点	掲載許可
3	H21.8.6	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良県立橿原考古学研究所平城遷都 1300 年祭記念第 2 回ミニ展示「井戸と暮らし」の展示図録に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 7 年度園版 3 掲載 平城京跡第 310-1 次調査井戸 S E 510-1 点、「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書」平成 10 年度 82 直掲載 平城京跡第 422 次調査①井戸 S E 02-1 点(②井戸 S E 02 断面 1 点)	貸出・掲載許可

	申請日	申請機関	目的	内容	その他
4	H21.8.8	大阪府立近つ 飛鳥博物館	平成 21 年度秋季特別展の図 録などに掲載	埋蔵文化財調査センター常設展示図録『出土品が語る奈良の 歴史』掲載 背原東遺跡①添の検出状況 1 点 ②土師器・ 須恵器集合写真 1 点 ③ガラス小玉など集合写真 1 点	貸出・ 掲載許可
5	H21.8.26	学校教育課	奈良市教育委員会ホーム ページに掲載	西大寺旧境内出土第 25 次調査出土 イスラム陶器写真 1 点	貸出・ 掲載許可
6	H21.8.27	株式会社 東 京堂出版	「不思議探検 暮らしの中の 左右石」に掲載	平城京跡第 28 次調査出土「左相撲」墨書き土器写真 1 点	貸出・ 掲載許可
7	H21.9.4	株式会社 日 本アートセン ター	「週刊 古社名刹巡洋の旅 33 号 南都の遺風」に掲載	奈良市ホームページ掲載 佐紀古墳群（西群）航空写真 1 点	貸出・ 掲載許可
8	H21.9.7	小学館	総合女性月刊誌「和樂」に 掲載	平成 20 年度秋季特別展パンフレット『奈楽地寶』掲載 奈 良三彩集合写真 1 点	貸出・ 掲載許可
9	H21.9.24	株式会社 鄂 土出版	「戦国日本」に掲載	『多聞庵城跡 発掘調査概要報告』図版 1 掲載 多聞庵城跡 （多聞山）全景写真 1 点	貸出・ 掲載許可
10	H21.9.25	日外アソシ エーツ株式会 社	「考古博物館事典」に掲載	埋蔵文化財調査センターパンフレット掲載、埋蔵文化財調 査センター全景写真 1 点	貸出・ 掲載許可
11	H21.10.22	大阪府立近つ 飛鳥博物館	平成 21 年度冬季特別展「ふ たつの飛鳥の終末期古墳一 河内飛鳥と大和飛鳥」の 図録などに掲載	黄金塚古墳第 2 次調査 ①埴丘全景 1 点 ②A 発掘区の石 敷きと外堤 1 点 ③B 発掘区の石敷き 1 点 ④C 発掘区の 石敷きと土器出土状況 1 点	貸出・ 掲載許可
12	H21.11.20	第一法規株式 会社	「月刊文化財 平城京特集 平城京の寺院」に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 17 年度 卷首図版 1 掲 載 大寺安寺境内第 110 次調査 西塔地区基壇全景航空写 真 1 点	貸出・ 掲載許可
13	H21.12.4	実業印刷株式 会社	奈良県教育委員会委託事業 小学校 5・6 年生向け社会科 翻訳本「ガイドブック 奈 良の遺跡案内」に掲載	宮跡庭園復元建物写真 1 点、宮跡庭園復元建物とモデル写 真 1 点、埋蔵文化財調査センター展示室内観写真 1 点	貸出・ 掲載許可
14	H21.12.11	奈良県土木部 河川課	遊歩道整備における案内サ インに掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 5 年度 図版 49 掲載 平城京跡第 284 次調査 東堀河 1 点、『奈良市埋蔵文 化財調査概要報告書』平成 6 年度 図版 64 掲載 平城京跡 第 314 次調査 東堀河 1 点	貸出・ 掲載許可
15	H21.12.16	奈良県立橿原 考古学研究所 付属博物館	平城遷都 1300 年記念特別 陳列「平城京発掘」の図録 に掲載	①平城京跡第 378-2 次調査 無文銀鏡②平城京跡第 266 次 調査 唐花六花鏡③平城京跡第 207・208・273-2・292・ 314 次調査 小型海獸葡萄鏡・素紋鏡集合④平城京跡第 28・73 次調査 三彩施釉瓦⑤平城京跡第 28・73 次調査「相 撲所」墨書き土器⑥平城京跡第 28 次調査「淡路國」・ 「遼江國」付札木簡⑦平城京跡第 180 次調査 甲斐型杯⑧平城京跡第 431-1 次調査「美濃國」刻印土器 以上、平成 20 年度秋季 特別展パンフレット『奈楽地寶』掲載⑨平城京跡第 405 次 調査 神功開寶鉄造造物跡⑩平城京跡第 167 次調査 刷 製分釦（壺形）⑪平城京跡第 103 次調査 刷製分釦（笠形） ⑫平城京跡第 459-2・608-F 次調査 摻磨產軒丸・軒平瓦 等⑬『平城京左京二条二坊十二坪発掘調査概要』表紙掲載 平城京跡第 73-1 次調査 平城京左京二条二坊十二坪遺跡全 景写真⑭『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和 54 年度巻首図版 掲載 平城京左京五条二坊十四坪遺跡全景写真⑯⑰平城京跡 第 608-A・D・E 調査埋納遺構出土土器集合写真	貸出・ 掲載許可
16	H22.1.13	日進市教育委 員会	企画展「にっしんの空跡～ 飛鳥・奈良・平安時代の痕 跡～」のパンフレットなど に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成元年度巻首図版 3 掲載 平城京跡第 182 次調査 S X 16 出土須恵器写真 1 点、 同概要報告書図版 18 掲載 平城京跡第 182 次調査上器埋納 遺構 S X 16 写真 1 点、奈良市内航空写真 1 点	貸出・ 掲載許可
17	H22.1.22	奈良県立橿原 考古学研究所 付属博物館	平成 22 年度橿原考古学研 究所付属博物館年間パンフ レットに掲載	平成 20 年度秋季特別展パンフレット『奈楽地寶』掲載 大 寺西塔楓譜写真 1 点	貸出・ 掲載許可

	申請日	申請機関	目的	内容	その他
18	H22.2.8	宮内庁書陵部	黄金塚古墳陵墓参考地の地形図を作成するため	黄金塚古墳周辺測量データ	貸出・使用許可
19	H22.2.24	奈良県立橿原考古学研究所	「考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開」研究成果報告書に掲載	①弥勒寺蔵 三角縁吾作鉢二神二獸鏡②平城京跡第 531 次調査出土唐草双鳥紋六稜鏡③平城京跡第 273-2 次調査出土小型海獸葡萄鏡④平城京跡第 208 次調査出土小型海獸葡萄鏡⑤平城京跡第 314 次調査出土小型海獸葡萄鏡⑥平城京跡第 266 次調査出土唐花六花鏡⑦平城京跡第 258 次調査出土花鳥紋背円鏡 以上 7 点三次元 CG 画像データ	掲載許可
20	H22.2.19	奈良県立図書情報館	図書展示「平城京の世界」に写真パネルを展示	西大寺旧境内第 25 次調査風景写真 5 点	貸出・使用許可

表5

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1	H21.6.15	元興寺文化財研究所職員	個人研究	元興寺旧境内第 3・19・21・26・42・43・45・47 次調査出土土器
2	H21.9.15	京都大学大学院学生	個人研究	宮山 4 号墳、ベンショ塚古墳、水間遺跡第 6 次調査出土玉類、菅原東遺跡出土綠色凝灰岩未成品
3	H21.9.18	国学院大学聴講生	個人研究	平城京跡第 228・269 次、大安寺旧境内第 29 次、古市城跡、東市跡 31 次調査出土土器
4	H21.9.30	奈良県立橿原考古学研究所職員	個人研究	南紀寺遺跡第 3 次、平城京跡第 437 次調査出土土器
5	H21.11.12	奈良大学生	個人研究	平城京跡第 276 次調査出土井戸枠材
6	H21.11.18	大谷大学教授	個人研究	平城京跡第 28・73 次調査出土「相撲」関連墨書き土器
7	H21.12.14	日進市教育委員会職員	特別展資料調査	平城京内出土の尾張産須恵器、平城京出土の土師器・須恵器食器類
8	H21.12.15	山本考古学研究所所長、元興寺文化財研究所職員	個人研究	西大寺旧境内第 25 次調査出土イスラム陶器
9	H22.2.19	鯖島県埋蔵文化財センター職員	個人研究	平城京跡第 228・269 次、元興寺旧境内第 4・31・38 次、東大寺旧境内第 3 次調査出土土器
10	H22.3.4	鳥取県教育庁文化財課古代文化センター職員	特別展資料調査	平城京跡第 257-3 次調査出土土器
11	H22.3.8	奈良県立橿原考古学研究所職員	個人研究	平城京跡第 28・89・257・327-1・349・378-7・427・437・486・491・497・520・538 次、東市跡第 4 次調査出土石製腰帶具
12	H22.3.9	岡山市立オリエント美術館職員	特別展資料調査	西大寺旧境内第 25 次調査出土イスラム陶器

(池田富貴子)

---

## 第4章 紀要

---

# 平城京の陶観

三好美穂

## Iはじめに

陶観は、都城跡をはじめ官衙跡、寺院跡など全国の古代遺跡から多くの出土例が報告されており、これらの出土例からも窺えるように、国家制度の充実および地方においては体制の波及を示す一面をもつ考古資料である。その中でも、全国の約2割を占めている平城宮・京の出土陶観は、種類も多様で、都という条件を反映して共伴遺物に恵まれ、時期が特定できる例も多い点で注目されている。

平城京跡の陶観研究については、奈良文化財研究所(以下、奈文研と記す)によって『平城京出土陶観集成Ⅰ—平城宮跡—』、『平城京出土陶観集成Ⅱ—平城京・寺院—』が刊行され、総数1072点(平城宮533点、平城京539点)の陶観が集成された<sup>1)</sup>。この集成では、宮城跡での調査資料は網羅されてはいるものの、平城京跡からのものは奈文研調査に限定されている。奈良市教育委員会が実施した平城京跡での発掘調査では、2008年度までに陶観383点(以下、奈良市資料と記す)が出土しているが、これらの集成は未刊行であり、早急に公表する必要がある。奈文研と奈良市資料を合わせれば、平城京跡出土陶観のはば全体像の把握が可能となり、他地域の出土資料との比較検討等の研究に寄与できるものと考えられる。本稿では、奈良市資料を網羅することから始め、主体を占める円面観を中心に形態分類および製作技法を検討しながら概要を記す。そして、奈文研資料と併せて平城京における出土傾向等の予察を述べ、今後の基礎研究につなげる事を目的とした。

## II 平城京跡出土陶観の概要

### 対象資料

ここで取り扱う資料は、奈良市教育委員会が1979年度から2008年度までに実施した平城京跡の調査で出土した陶観382点で、時期的には8世紀代の資料が大半を占めるが、9世紀前半代のものも含めた。

### 一覧表の作成について

調査単位ごとに、陶観の種類、型式、製作技法、法量、形態的な特徴に主眼をおいて観察したデータを表内に盛り込んだ。また、坪ごとに検索できるよう右京、左京、東市跡、寺院にわけて作表した。陶観の名称と部位<sup>2)</sup>および型式名称については、基本的に『平城京出土陶観集成Ⅰ—平城宮跡—』(以下、『集成Ⅰ』と記す)に準拠

した。ただ、分類上必要なものについては、新たに型式分類名称を付した。これについては、後述する型式分類においてその都度明記することとする。以下、陶観の種類とその製作技法を中心に述べる。

### (1) 陶観の種類

奈良市資料の陶観の種類には、円面観、円形観、宝珠観、形象観、風字観、特殊観の他に転用観がある。転用観は、須恵器杯・皿・蓋・甕部片・甕底部片を利用して観としたもので、猿面観もこれに含まれる。



杯蓋観(須恵器杯蓋の転用)

観の中では転用観が一番多く、定形観と同じように研究対象とするべきではあるが稿を改めることとする。ただし、須恵器甕部等の破片を二次的に加工して作られた「猿面観」については一覧表に組み入れた。以下、観の種類ごとに述べる。

### 1) 円面観

脚部の形態の違いによって、圈足円面観、蹄脚円面観、獸脚円面観、無脚円面観に分けられている。

i. 圈足円面観 平面円形の観面と周囲にめぐる海部、円筒形状の脚部からなる観である。種類別では出土量が最も多く、奈良市資料は261点ある。観面の形状から『集成Ⅰ』では以下の3つに分類している。(図2)

#### 【観面の分類】

a : 観面が明確な段をもって隆起するもの。

b : 観面が弧を描いて隆起するもの。

c : 観面が水平なもの。

261点のうち、観面が残る資料168点を分類すると、aが124点、bが19点、cが15点、不明が10点であった。『集成Ⅰ』では、上記の観面分類の他に、それぞれのタイプの中での細分と特徴が説明されている<sup>3)</sup>が、a～cのタイプの中には、タイプを越えて、共通する分類基準を設定できると判断できる。そのため、『集成Ⅰ』で説明された細分と特徴とは別に、観部の外堤部と脚台に焦点をあて以下のように分類を新たに試みた。

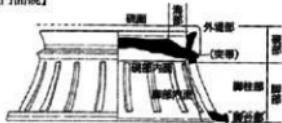
#### 【観部の分類】

外堤部と突帯の形状から3つに分類した。

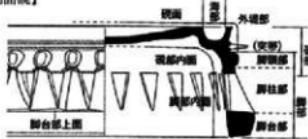
A : 外堤部は脚柱部のほぼ延長線上につくられ、外堤は直立もしくは外方に開いて立ちあがる。突帯は脚柱部より外側に付される。

B : 外堤部と突帯が脚柱部より外側につくられる。

【圓足円面観】



【脚脚円面観】



【円形観】



【風字観】



図1 各部の名称(『平城京出土陶器集成 I - 平城宮跡 -』による)

C : 外堤部は A 同様に脚柱部の延長線上につくられる  
が、突帯が一体化したような形につくられる。

#### 【脚台部の分類】 脚台部の形状から 6 つに分類した。

- 1 : 脚台は脚柱下端から L 字状に屈曲し、端部が上方に突出したもの。
- 2 : 脚台は脚柱下端から L 字状に屈曲し、脚台端部が下方に突出したもの。
- 3 : 脚台は脚柱下端から L 字状に屈曲し、脚台端部が上・下に突出したもの。
- 4 : 脚台は脚柱下端から L 字状に屈曲し、脚台端部は突出せず脚台端部は丸もしくは方形におさめる。
- 5 : 脚台は脚柱下端から真下にのび、脚台端部は突出せず、方形状に作り平坦な接地面をもつもの。
- 6 : 脚台は脚脚円面観にみられるような厚みのある方形を呈するもの。

以上の形態的特徴を表す分類記号を組み合わせ、出土資料ごとに明示することにより、多量にある圓足円面観の主流の型を把握することを目的とした。表記方法は、例えば覗面は a、外堤部から突帯は A、脚台は 1 に分類できる個体ならば、a - A 1 と表示する。

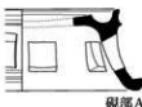
【分類結果】 圓足円面観 261 点のうち、覗部から脚部まで残存する資料は 15 点ある。大半が覗面は a、覗部は A に分類できるが、脚台の形状は多様である。

- a - A 1 : 1 点、a - A 2 : 1 点、a - A 3 : 2 点、  
a - A 4 : 1 点、a - A 5 : 6 点、a - A 6 : 1 点

【覗面の分類】



【覗部の分類】



【脚部の分類】

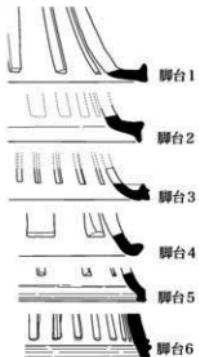


図2 圓足円面観の分類

b - A 2 : 1 点、b - A 5 : 2 点

覗部だけが残存する資料は 153 点で、このうち型式が分かるものが 138 点ある。

a - A : 94 点、a - B : 15 点、a - C : 1 点

b - A : 15 点、b - C : 1 点、c - A : 12 点

脚台部だけが残存する資料は 64 点で、その型式は次のとおりである。

1 : 10 点、2 : 19 点、3 : 11 点、

4 : 5 点、5 : 13 点、6 : 5 点

以上、覗部・覗面の分類では、a - A に分類できるものが圧倒的に多く、圓足円面観の主体を占める型であることが理解できる。また、覗面が弧を描いて隆起する b には、覗部分類の B がなく、覗面が水平な c は、A タイプだけに限られ、B・C がない。量的な違いはあるがタイプに多様性がみられることから、同時に型式差も多いことを示す結果といえよう。次に主体を占めるタイプのものについて、法量や調整、焼成方法についてみてみる。

a - A タイプは、外堤部径が最小 7.9cm から最大 29.4 cm までのものがあるが、9.0cm 台～19.0cm 台のものが多く、特に 13.0cm 台と 16.0～17.0cm 台に集中する傾向がみられる。調整は、覗部は基本的にロクロナデであるが、脚部上端から覗部内面にかけてヘラケズリのような痕跡が見られる個体がある。ゆるやかな曲面になるようにコテ状の工具を使って形成したと考えられる。焼成方法は、窯内では正位置に据えて焼いたもの（正置焼成）

が58点、逆さに向けて焼いたもの（倒置焼成）は74点、自然軸を確認できないものが42点ある。

a - Bタイプは、外底部径が不明なものが多いため、16.0cm台のものだけがみられる。調整は、基本的にa - Aタイプと同じである。焼成方法は、正置焼成が7点、倒置焼成が4点、不明3点である。

b - Aタイプは、外堤部径9.5cm～18.0cmまでのものがあるが、量的には10cm前後と15cm前後のものが多い。脚部に刻線文や綾文を施しているものが5点（072・078・160・162・358）、観面内面に重ね焼きの痕跡が残るもの1点（129）を確認した。正置焼成が7点、倒置焼成は5点ある。

c - Aタイプは、外底部径9.4～23.0cmまでのもので、10.0～14.0cmの小型のものが多い。12点のうち6点は観面に突帯状の低い内堤が巡っており、このタイプの特徴かもしれない。198の脚台内面に須恵器杯あるいは皿の口縁部とみられる破片が溶着している。正置焼成が4点、倒置焼成は8点ある。

このように圓足円面観の外提部の大きさには、小型のものから大型のものまであることがわかったが、a - Aタイプのものより、b - Aタイプやc - Aタイプの大きさが若干小型化を示すような傾向がみられる。タイプと法量の差異が時期差を示しているのかもしれない。

脚台部の分類については、脚台1～6タイプのもののがそれぞれあり、量的には均衡するような結果であるが、脚台2と5がやや多く、蹄脚円面観のように厚みのある四角形状を呈する脚台6は、他のものと比べ少ない。大きくみると、圓足円面観の脚台部がL字形に屈曲するものが主流で、その中でさらに1～4タイプに分かれると理解した方がよさそうである。また、脚台部の形態は、大半が須恵器甕の口縁部形態と類似しており、陶甕の生産地を考える際の手がかりになると見える。脚台5に分類した資料088・107は、和泉陶邑窯産須恵器甕の口縁部形態と類似することから、陶邑産の製品である可能性も指摘できよう。

これまでみてきたように、圓足円面観の形態は多様性に富んでいるが、外堤や突帯端部の形状によってさらに細分できる可能性がある。外堤部の端部を観察すると、丸くおさめるもの（134）と三角形状のもの（107）、方形のものに大きく分けられ、方形にはさらに内傾するもの（366）と外傾するもの（027）、窪みをもつ平坦面のもの（348）などがある。（図3）また、外堤部の下に圓線や突帯がめぐるもの、波状文を施すものなど様々である。脚台についても圓線や突帯がめぐるもの



図3 外堤端部の細分



資料198

資料129



資料358

資料162

存在しており、型式分類が難しい状況ではあるが、これら細部の違いは、時期、生産地、工房や工人の差などを反映している可能性が考えられるため、今回提示した分類を基準にしてさらに観察を深めていきたい。

ii. 蹄脚円面観 平面円形の観面に海部がめぐる観部と獸脚様の脚柱と脚台からなる観である。平城京では圓脚円面観に次いで多く、奈良市資料は59点ある。製作技法の違いから蹄脚円面観Aと蹄脚円面観Bに分類される。

蹄脚円面観A 観部と脚台部は別々に作り、型作りした獸脚様の脚柱部で結合したもので、脚台・脚柱の形状から①薄板・三角形、②薄板・砲弾形③肉厚・細棒に細分されている。

蹄脚円面観B 観部と脚台部を一連で成形したのち、側面に型作りした脚頭・脚柱飾りを貼りつけ、下底部の台を補充し、脚柱飾りの間を削り取って透孔とするもので、脚台・脚柱・観面の形状により①～⑤に細分されている<sup>4)</sup>。蹄脚円面観Aの製作技法上の簡略形で後出するものと考えられている。

蹄脚円面観Aに分類できるものは24点あり、蹄脚円面観Bは35点ある。出土資料の大半が破片で、全体を復原できるものは一個体（272）しかないと、『集成I』で示された上記の分類定義だけでは資料を細分することができない状況である。

そこで、残存する資料をもとに観察をおこなった結果、蹄脚円面観においても製作技法の違いはあるが、共通する分類基準を設定できると判断した。外堤部を欠く観部片と脚部片が多いため、対象資料に則した分類を試みた。

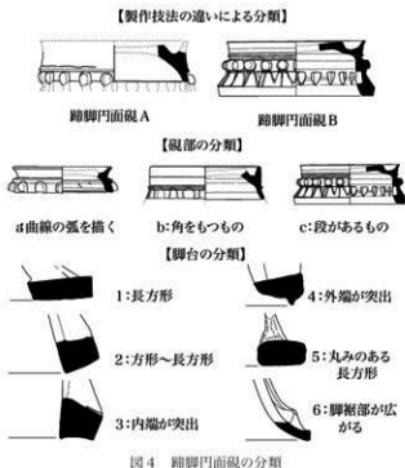


図4 踏脚円面観の分類

## 【観部の分類】

- a : 観部内面が曲線状の弧を描くもの。
- b : 観部内面が角をもつものの。
- c : 観部内面に段をもつものの。

## 【脚台部の分類】

- 1 : 断面形は長方形、高さが低く底部は平坦なもの。
- 2 : 断面形は方形～長方形、底部は平坦なもの。
- 3 : 断面形は方形～長方形、底部の内端が突出する。
- 4 : 断面形は方形～長方形、底部の外端が突出する。
- 5 : 断面形は丸みをもつ長方形、底部は平坦なもの。
- 6 : 圓足円面観の脚底部にみる脚台で端部は四角形、

先端は下方へ突出するものとしないものがある。  
この分類により、圓足円面観と同じ要領で踏脚円面観A-a I等と記すこととし、出土一覧表を作成した。資料によっては部位を欠くものがあるが、判断できる範囲で記載した。

## 【分類結果】

## (踏脚円面観A)

観部が残存する資料は14点ある。

a : 13点、b : 0点、c : 1点

脚台が残存する資料は6点ある。

1 : 2点、2 : 2点、3 : 0点、

4 : 0点、5 : 2点、6 : 0点

踏脚円面観Aの観部内面は、064・171・186など観部内面がアーチ状の弧を描く観部aタイプが最も多い。おそらくコテ状の工具を使用して観部内面を丁寧に成形

したものと考える。126のように内面に段がつく観部cタイプの個体は1点ある。

脚台の資料が少ないが、脚台5に分類した076・285の脚柱は、『集成I』で示された細棒状を呈している。踏脚円面観Aは、自然釉が確認できたものは全て倒置焼成とみられるが、外面に自然釉がかかるものが数点ある。正置焼成の可能性もあるので、今後の観察にも注意が必要である。外堤部径が16.6～22.0cm、脚台径は24.2～33.0cmの中へ大型品が多い。

## (踏脚円面観B)

観部から脚柱部までが残存する資料は1点(272)のみで、踏脚円面観B-a 2に分類できる。

観部が残存するものは13点ある。

a : 4点、b : 3点、c : 4点、不明 : 2点

脚台が残存するものは21点ある。

1 : 1点、2 : 8点、3 : 8点、

4 : 2点、5 : 0点、6 : 2点

様々な型式に属するものがあり、踏脚円面観Aではみられない019・273などの脚台6が存在する。

大きさは、外堤部径19.8～29.0cm、脚台径15.8～32.0cmのものがある。平城宮においては、脚台径が18.4cmの中型品が最小であるが、奈良市資料では15.8cmが最小である。

踏脚円面観Bは、この分類結果が示すように、型式差が多くみられ、生産工房あるいは工人が多彩であることが推測できる。さらに、今回示した分類の中にも、まだ別々の型式的特徴として括れる要素も内包している。製作技術上の系譜を知るための重要な手掛かりになると考えるが、この問題については、奈良市資料だけで分析するには限界があるので、平城宮等の出土陶観をも含め検討し、改めて提示したい。

iii. 獣脚円面観 観部に3個以上の獣脚を付し、脚部下端を脚台で繋がないものである。1点確認した。139は残存する脚部の位置から3カ所に獣脚が付くとみられる。観裏面はロクロケズで調整され、裏面から外堤にかけては自然釉が厚くかかる。観面一面に墨が付着する。獣脚円面観は、8世紀初めには生産されなくなると言わわれているが、本資料は、右京三条三坊一坪の調査<sup>5)</sup>で検出した井戸S E 14の抜取穴から8世紀末頃の土器と共に出土したものである。

iv. 無脚円面観 脚柱部がないもので2点(120・237)ある。いずれも観面に突帯状の内堤がめぐるタイプで、外堤部から観裏面にかけて自然釉がかかる。237は観部裏面も観として使用しており、器表面は滑らかで墨

痕が付着している。裏面には重ね焼きの痕跡もみられる。

### 2) 円形硯

硯部は平面円形、海部が片方に偏るか区別されないので、5点（122・217・232・322・338）確認した。232は獸脚が、338には面取りされた高い脚が付く。5点とも硯裏面に自然釉がかかる。

### 3) 宝珠硯

外形を2個以上偶数の円弧と1個の尖形とで宝珠形に造形し、裏面に2脚もしくは4脚付するので、3点（275・293・379）確認した。293の外形は、宝珠硯の定義と若干異なり、1個の円弧と1個の尖形で宝珠形を作っている。硯面には突帯状の内堤を眉形に付け、硯面と海部を分ける。裏面には面取りされた低い脚が3個付くと考える。

宝珠硯は型作りと考えられており、硯面に范傷があり同范と認定されるものが平城宮内裏北外郭地区と東院西辺地区から出土している<sup>6)</sup>。

### 4) 形象硯

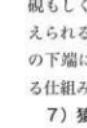
梢円形の硯部に海部と硯面部を設け、鳥・亀・羊などの頭頸部・胸部・尾部を立体的に造形するもので、16点



円形硯



資料 355



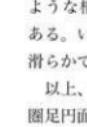
資料 286



宝珠硯



資料 208



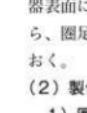
資料 293



形象硯



資料 024



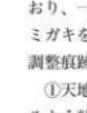
風字硯



特殊硯



資料 207



資料 155

ある。硯部には堤によって海部を作るが、海部は硯面に比べ丁寧な仕上げの調整を加えていないものが多い。040は鳥形硯で、硯面から硯尻が残っている。平城宮内裏東方官衙・造酒司地区南辺で出土した鳥形硯<sup>7)</sup>と形態がよく似ている。024は竹管によって羽毛が表現されている。

### 5) 風字硯

硯尻側に2脚をつけて少し高くし、硯面を硯頭側に傾斜させるもので、15点ある。このうちには黒色土器B類の風字硯（163）1点を含む。いずれも硯裏面に自然釉が厚くかかるものが多く調整が見えにくいため、硯面・硯裏面ともにナデおよびヘラケズリ痕跡が残る。中にはハケメ痕跡が残るものがある。376は、眉毛状を呈する突帯で海部と硯面とを分けている。012は硯部と硯裏面に重焼きの痕跡がある。

### 6) 特殊硯

上述してきた種類に属さない形の硯をまとめた。多角硯（115）は平面12角形に面取りされ、平坦な硯面と高い角高台がめぐる<sup>8)</sup>。硯面中央部がわずかに窪む。高台外面には丁寧なヘラミガキが施されている。水滴付きの硯（207）は、外堤の内側に水滴が付された硯で、形象硯もしくは宝珠硯になる可能性がある。水滴になると考えられる部位は、「凸」形状を呈しており上部を欠く。その下端に径0.4～0.5cmの小穴が穿たれ硯面に水が流れ込む仕組みになっている。硯裏面には自然釉が厚くかかる。

### 7) 猿面硯

須恵器もしくは甕の体部片を打ち欠き、猿の顔面のような梢円形状に加工したもので、2点（155・356）ある。いずれも硯面・硯裏面は丁寧に磨かれ、手触りが滑らかであるが、硯面にはわずかにロクロ目が残る。

以上、奈良市資料のうち量的にも多く残存状態の良い圈足円面硯および蹄脚円面硯を中心に形態的特徴を把握するために形態分類を試み、その概要を述べた。次に、器表面に残された調整痕跡や自然釉がかかる状態などから、圈足円面硯・蹄脚円面硯の製作技法についてふれておく。

### （2）製作技法

#### 1) 圈足円面硯製作工程

圈足円面硯は、須恵器の基本的な製作技法と共通しており、一般的な須恵器・皿などに比べて器表面にヘラミガキを施すなど丁寧に仕上げたものが多い。器表面の調整痕跡から以下の製作過程を復原した。

①天地を逆方向にして、丸みをおびた平底の鉢状になるよう粘土紐を巻き上げる。②内・外面をロクロナデまたはロクロケズリで調整したのち、脚台部を作る。硯部

内面から脚柱部内面にかけてアーチ状を呈しているものが多いが、おそらく端部に丸みをもったコテ状の工具を使っていると考える。③器体を正位置に据えなおし、外堤・突帯になる部分に粘土紐を貼りつけ形を整えて、④段階の丸みをおびた底部外面に海部と硯面を作る。海部は、クロナデにより窪みを作り出しているものとコテ状の工具で作りだしているものがある。硯面は、クロケズリのちミガキを加えて仕上げているものが大半である。外堤部よりも硯面が高いものは、硯面に粘土を足して重上げしているようである。外堤や突帯の貼付は、接合痕跡が分からないように、ヘラ先などの工具で丁寧に脇を調整している個体がほとんどである。⑤最後に、ヘラ状工具を使って脚柱部の透孔を穿ち、囲線や線刻などで文様を描く。

圈足円面硯は、硯の大きさにかかわらずほとんど同じ工程で製作されているものと考える。また、コテ状の工具の使用やヘラミガキの多用、突帯の貼り付け後にひと手間かけるなど非常に丁寧に作られている個体が多いことも判明した。

例外的な資料として、圈足円面硯をみようみまねで製作したと考えられるもの(005)が出土している。調整痕跡も雑な印象があり、興味深い資料である。

## 2) 蹄脚円面硯の製作技法

蹄脚円面硯脚は、製作技法の違いにより、①硯部と脚台部は別々に作る蹄脚円面硯Aと②硯部と脚台部を一連で成形する蹄脚円面硯脚Bに分類されており、両者にみられる脚柱部の飾りは、脚頭・脚節・獸脚様の三角飾りを一連で型作りされたものを貼り付けていると考えられている。蹄脚円面硯AとBの成形技法については、指摘されるとおり硯部と脚台は別作りされるものと、一連で作られたものがあることが分かる。しかし、脚柱部の飾りが「型づくり」という点に関しては疑問が残るため、以下で若干の私見を記す。

「型づくり」の根拠としては、①脚頭・脚節に木目痕が残る。②脚頭剥離面・脚柱内面の縱方向ヘラケズリ痕跡は脚柱部の型作り成形時の痕跡であると述べられている。これに対して筆者は違う見方をしており、これらの痕跡は「型づくり」によるものではなく、板を利用して形を整えている可能性はあるものの、基本的に手づくねによる一連の作業中の痕跡と考える。資料観察からは、形を揃えた脚頭と三角形の脚柱を別々に作ったものを接合したのち、脚節を貼り付けたと判断され、脚頭・脚節に残る木目痕とされているものは、脚節の粘土紐を貼り付けた際に、接合部分の脇をヘラ状の工具または布や革



頭部の脇に残るナデの痕跡



貼り付けによる脚節部



コテ状工具の痕跡



手づくね成形による脚頭部

の端を使って押された時に生じたナデ痕跡であると考えられる。蹄脚円面覗Aの脚柱部は、同一個体内では形のばらつきが少ない精巧な製品が多いが、別個体と比べると様々な形を呈しており、「型」が存在するのであれば同範製品が存在することになるが、現在のところはそのような資料はみつかっていない。仮に板目痕跡が残っている資料があれば、それは板を利用して形を整えた際の痕跡と見た方が妥当であると考えられる。脚部の下にはナデ調整痕跡が残る資料(080-082)もある。また、脚柱部の脚頭様の三角飾りにはヘラケズリ痕跡を残すものが大半を占めていることからも、「型」を使用していない根拠としてあげることができる。

### 3) 蹄脚円面覗Aの製作工程

器面上に残された痕跡や調整から復原してみる。

①覗部・脚柱部・脚台をそれぞれ作る。②脚台に脚柱部を貼り付ける。③覗部を天地逆に向けて置く。④覗部下端と脚頭部の接合する部分にヘラで線を描き貼る位置に記す。⑤脚柱→脚台部を天地逆にむけて、明示した線を参考にして、覗部下端に脚頭部を貼り付ける。⑥最後に脚頭部と覗部下端がしっかりと接合するように、脚頭部の脇をヘラなどの工具でナデつける。⑦天地逆にして焼成する。

④の工程は出土資料の157、⑥は031・119・126から復原した。④の工程は必ずおこなっているとは限らず、蹄脚円面覗Aの外堤部の下方にある突帯の下に脚頭部を貼り付けている個体が多いことから、突帯を貼り付けの基準としていたのかもしれない。186の覗部下端には、脚頭部を貼り直した痕跡がみられる。蹄脚円面覗は大型のものが多く、接合面の狭い覗部と脚柱→脚台部の接合はかなり難しい作業であったことが想定できる。

### 4) 蹄脚円面覗Bの製作過程

蹄脚円面覗Bの製作技法は、圈足円面覗の製作過程と①②までは同じである。③器体を正位置に直し、幅の広い脚台部をつくる。④外堤・突帯になる部分に粘土紐を貼りつけ形を整える。底部・海部の作り方は圈足円面覗と同じである。⑤側面に脚頭と三角飾りを貼った後に脚部の細い粘土を貼付け、飾りをつくる。脚台に乗せた三角は、脚台に粘土を足して三角を埋め込んだ資料もある。⑥脚柱飾りの間をヘラ状の工具で切り取り透孔とする。蹄脚円面覗Bの製作技法は、注意深い作業が必要な工程を残すが、蹄脚円面覗Aに比して製作過程全体としては簡略化したものであるといえよう。このような製作技術の改良は、量産面や未経験の工人への波及においては大きな一助となつたであろう。

### III 陶器の出土分布状況

奈良市資料383点と『集成I・II』で報告された平城宮・京跡および寺院跡の資料を合わせると、1,455点<sup>9)</sup>となり、これらの出土地点を視覚的に捉えるために図5に示し、平城京の条坊ごとに出土点数を表2~4<sup>10)</sup>にまとめた。

#### (1) 平城京右京での傾向

三条大路付近から以北は、右京二条三坊から右京三条三坊にかけての地域に集中しており、その他は平城宮や朱雀大路に近いところに分布している。四条大路以南では、右京八条一坊に集中しており、その他は慈師寺旧境内近辺、右京五条四坊、右京六条一坊、右京七条一坊・二坊、右京八条二坊に疎らに分布している。これらの疎密傾向は、遺跡の性格を反映していることもあれば、地域における発掘調査の面積の多少により左右されている場合も考えられる。特に右京二条三坊から三条三坊にかけては、近鉄西大寺駅周辺地区画整理事業地に伴う広範囲に奈良市が発掘調査を実施している場所であり、右京八条一坊については、大和郡山市の焼却場建設に伴う大規模な発掘調査が実施されたところである。

そこで、出土点数が多かった右京二条三坊の各坪の調査面積を例にとって出土率を調べてみた。表1は、各坪で実施した調査の総面積と出土量を出し、1,000m<sup>2</sup>あたり何点出土しているのかを算出したものである。出土率が一高いのは、右京二条三坊六坪・十二坪・十五坪で1,000m<sup>2</sup>あたり4.0点台で、低いのは七坪の0.7点であった。坪内での発掘区の位置による違いも考慮する必要はあるが、坪によって差異が認められる。右京八条一坊十三・十四坪では、十三坪が調査面積3,115m<sup>2</sup>で23点出土、十四坪は4,300m<sup>2</sup>で16点で、出土率は、十三坪が7.4点、十四坪は3.7点となる。出土率としては、右京二条三坊六坪<sup>12)</sup>と右京八条一坊十三坪<sup>13)</sup>では、宮に近い二条三坊六坪より宮から離れた八条一坊十三坪の方が出土量が高い。右京八条一坊十三坪では、工房関係の遺物が大量に出土しており、

条坊	調査面積	出土点数	出土率
R.2-3-2	7,450	20	2.7
R.2-3-3	10,540	15	1.4
R.2-3-4	12,050	9	0.7
R.2-3-6	6,985	28	4.0
R.2-3-7	13,192	9	0.7
R.2-3-9	2,150	2	0.9
R.2-3-10	3,030	3	1.0
R.2-3-11	9,728	21	2.2
R.2-3-12	1,390	6	4.3
R.2-3-15	1,000	4	4.0
R.8-1-13	3,115	23	7.4
R.8-1-14	4,300	16	3.7

表1 陶器の出土率

のかもしれない。しかし、両坊をもって右京全域の出土傾向として一般化することは注意が必要である。

### (2) 平城京左京での傾向

左京では、平城宮に近い二条大路界隈に分布が集中しており、量的にもまとまって出土する坪が多い。特に、長屋王邸宅跡とされる左京三条二坊一・二・七・八坪<sup>13)</sup>からの出土量は平城京内においても特異であり、出土率は次のとおりである。

一坪：発掘面積 7,000m<sup>2</sup>、15 点、出土率 2.1 点

二坪：発掘面積 4,400m<sup>2</sup>、7 点、出土率 1.6 点

七坪：発掘面積 15,000m<sup>2</sup>、68 点、出土率 4.5 点

八坪：発掘面積 3,300m<sup>2</sup>、34 点、出土率 10.3 点

長屋王邸宅内の家政機関の存在が推定されている七・八坪に集中していることがわかる。

さらに一条大路付近、四条から五条の東四坊大路付近、五条一坊の地域などにも分布が集中している。五条大路以北と東四坊大路以西といった範囲では出土量の多少はあるにせよ、どの坊からも陶器が出土している。一方、

東四坊大路から以東（外京域）になると分布・出土量とともに希薄である。この周辺一帯には、中世～近世の都市遺跡が広がっているため、奈良時代の遺構が壊され出土遺物が少ない所が多い。

五条大路以南では、左京七条一坊のように集中するところもあるが、全体的には右京と同じような疎らな分布傾向を示している。

### (3) 東市跡推定地での傾向

平城京東市跡は、左京八条三坊五・六・十一・十二坪の4坪分にあたると推定されている。十一・十二坪には東堀河が南北に流れおり、橋脚も検出されている。これまでの調査で陶器は 10 点確認されており、いずれも圈足円面窓である。今までの発掘面積と出土点数は、六坪は 8,128m<sup>2</sup> で 3 点、十一坪は 2,332m<sup>2</sup> で 5 点、十二坪が 563m<sup>2</sup> で 2 点である。出土率は、順に 0.4 点、2.1 点、3.5 点となる。東市跡推定地内は、東堀河以外の地点では陶器に限らず出土遺物量が全体的に希薄傾向を示すが、外堤部径が 27.5cm の大型の圈足円面窓（a - A タイプ）

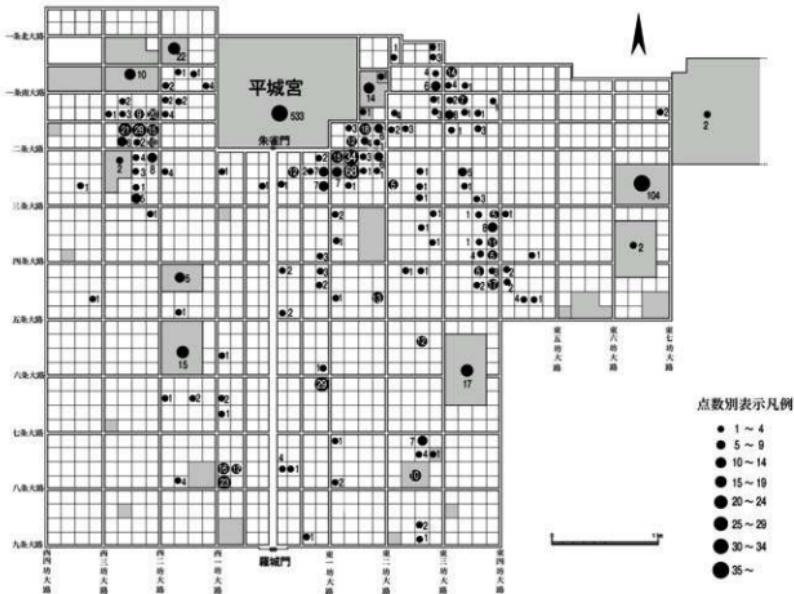


図 5 平城京出土陶器の分布状況

が八条三坊六坪から出土しており、東市内の遺構の性格を考える際の手掛かりになるであろう。

右京・左京の出土傾向は、これまでに工房関連遺跡や宮外官衙または家政機関としての性格をもつ遺跡が多い傾向にあることが指摘されているが、これ追認し得る結果であった。しかし、遺跡の立地条件の違いなどもあり、出土率だけで判断することは危険である。研究の進んでいない転用窯の問題も存在し、定形窯と転用窯の差異や検出遺構や他の遺物の検討を進めていく中で、ひとつの要因としてみておきたい。

#### (4) 寺院での傾向

奈良市資料の寺院出土陶器は、量的には少なく、史跡大安寺旧境内が13点、元興寺旧境内が1点、皆原寺境内が2点、西大寺旧境内が8点、西隆寺跡が4点で、奈文研資料を合わせても197点と少ない。寺院内では、主要伽藍よりも実務的な空間に出土が偏るとの見解が『集成Ⅰ・Ⅱ』で示されている。奈良市資料においても、大安寺旧境内では主要伽藍からの出土ではなく、小子房や僧房周辺、境内地に残された杉山古墳の周濠埋土から出土した資料に限られる。寺院という性格上、窯の使用頻度が一般宅地よりも多く、相当量の筆記道具類が必要であったことは想像できる。興味深い事例として、興福寺一乘院の発掘調査では、1つの土坑から98点もの陶器が出土しており注目される。このような出土状況は、平城宮においてもみられず、寺院遺跡の特徴であるともいえよう。ただ、大安寺旧境内に残された杉山古墳の周濠からは多数の転用窯が出土しており<sup>14)</sup>、現在遺物調査中の西大寺第25次調査<sup>15)</sup>で出土した窯の主体を占めるのも転用窯である。転用窯と定形窯の使い分けも今後の窯の研究において重要な視点になると思われる。

#### IV 圓足円面窯と蹄脚円面窯

今後の資料増加によって認識の補正は必要であるが、宮および寺院を含めた平城京跡では、圓足円面窯と蹄脚円面窯を合わせた円面窯が陶器の約9割を占めており、それぞれの出土状況を示したものが図7である。

円面窯のうち、大きさが中・小型のものに中心のある圓足円面窯が多い点は、調査地の違いを越えて共通する

表2 出土地別による陶器の内訳

出土場所	圓足円面窯	蹄脚円面窯	その他の陶器	計
左京・右京	448 (62.7)	134 (18.7)	133 (18.6)	715
東市跡	10 (100)	0	0	10
寺院跡	142 (72.1)	7 (3.6)	48 (24.3)	197
平城宮	278 (52.2)	193 (36.2)	62 (11.6)	533
合計	878 (60.3)	334 (30.0)	243 (16.7)	1455

( ) 内数字: %

表3 出土陶器の内訳 (右京・左京)

条- 批	圓足	蹄脚	円面	円形	空腹	形象	風字	墨風	特種	圓面	不明	計
R1-2-4	1	2										4
R1-2-6	(1)											1
R1-2-11	1											1
R1-2-13	2											2
R2-2-9	2											2
R2-2-15	3	1										5
R2-2-16	1	(1)										2
R2-3-2	13	4										20
R2-3-3	9	2	2									15
R2-3-4	8											9
R2-3-5	1											2
R2-3-7	19	8										26
R2-3-8	7	1										8
R2-3-9	1											2
R2-3-10	1	2										3
R2-3-11	11	5	1	1			2					21
R2-3-11+15	(1)											1
R2-3-12	3	2	(1)	1								7
R2-3-15	4											4
R3-1-3	(1)											1
R3-1-15	(1)											1
R3-2-15	4											4
R3-3-1	6	1	1									8
R3-3-5	(4)	(1)										5
R3-3-6	1											1
R3-3-7	3											3
R3-3-8	3	1										4
R3-4-6	1											1
R3-5-13							1					1
R4-3-1	(1)											1
R5-2-12								(1)				1
R5-4-3	(1)											1
R6-1-4							(1)					1
R7-1-14	1											1
R7-1-15	1											1
R7-2-1	(1)							(1)				2
R7-2-5	(1)											1
R8-1-11	(4)	(6)	(2)									12
R8-1-13	(13)	(5)	(2)	(1)	(2)							23
R8-1-14	(10)	(5)	(1)	(2)								16
R8-2-12	(1)	(3)										4
R8-2-2	(1)	(1)										2
R8-2-2	(2)											2
R8-2-3	(1)											1
R8-2-4	(1)											2
R8-2-5	(1)											1
R8-2-6	(9)	(2)	(1)									12
R2-2-6	(2)											3
R2-2-10							(1)					1
R2-2-11	(14)	(1)						(3)				18
R2-2-12	3	1										4
R2-2-13	(1)											1
R2-2-14	(3)						(2)	(1)				6
R2-2-15	4											4
R2-3-3	(2)											2
R2-3-6	(1)						(2)					3
R2-4-1	1	1										2
R2-4-2	6	1										8
R2-4-3	1											1
R2-4-7	7	1										8
R2-4-10	1											1
R2-4-11	3											3
R2-4-16	1											1
R2-5-2北	1											1
R2-7-15	2											2
R3-1-3	1											1
R3-1-7	(9)	(2)										12
R3-1-10	(2)											2
R3-1-14	(2)	(3)	(1)									7
R3-1-15	(6)	(1)										7
R3-1-16	(2)											2
R3-2-1	(9)	(6)	(2)									17

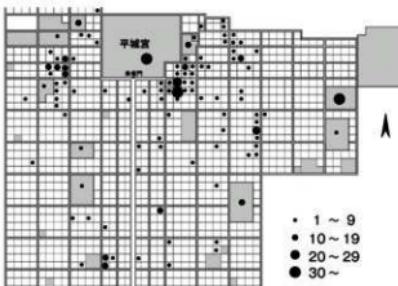
( ) 内数字: 奈文研資料

表4 出土陶器の内訳（左京2・東市・寺院・平城宮）

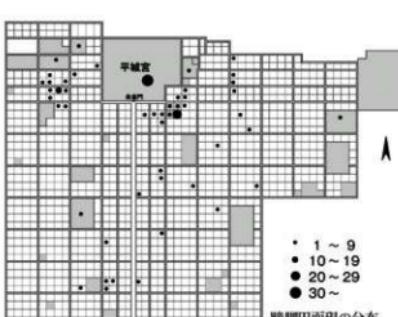
条・坊・坪	脚足	蹄足	円面	円形	窓	板	風字	黒風	特殊	箱面	不明	計
L3-2-2	(2)	(5)					(1)					8
L3-2-6	(1)											1
L3-2-7	(34)	(21)	(3)	(3)	(1)	(3)		(3)				68
L3-2-8	(20)	(5)	(1)	(4)	(1)				(1)	(2)		34
L3-2-9	1	1										3
L3-2-10	(1)	(1)										2
L3-2-15	(1)											1
L3-2-16	4				1							6
L3-3-3	4											4
L3-3-6			1									1
L3-3-10	1											1
L3-3-11	1											1
L3-3-12	1											1
L3-4-7	(3)	(1)		(1)								5
L3-4-12	1	1										3
L3-4-13	1				1							2
L3-4-13												1
L3-4-21	(2)											2
L3-2-3	1											1
L3-3-10	1											1
L3-3-14	1											1
L3-3-16	1											1
L3-4-9				(1)								1
L3-4-11			1									1
L3-4-12	3											3
L3-4-13	4	1										6
L3-4-14	11											11
L3-4-15	7	1										8
L3-4-16	5											5
L3-5-1	1											1
L3-5-12	2											2
L3-5-13	2											2
L3-5-14	(1)	(1)										2
L3-5-15	1											1
L3-5-16	1	2										3
L3-2-3			1									1
L3-2-14	6	2		2	2	1						13
L3-3-8	1											1
L3-3-9	1											1
L3-4-9	2		1	1								5
L3-4-10	2											2
L3-4-15	8	6	1	2								17
L3-4-16	3											3
L3-5-6		1										1
L3-5-7	2											2
L3-5-8	2											2
L3-5-9	1											1
L3-5-11					1							1
L3-5-13	1											1
L3-5-10	8	1										10
L3-7-16	(16)	(3)	(2)	(5)	(1)	(1)		(1)				29
L3-8-3	(3)	(1)										4
L3-8-6					(1)							1
L3-8-21	1											1
L3-8-24	1				1							2
L3-8-39	(6)						(1)					7
L3-8-39+16	(1)											1
L3-8-39+17	(3)				(1)							4
L3-8-15						(1)						1
L3-8-12	1											1
L3-8-11	1					1						2
L3-8-32	1											1
左京2合計	298	81	16	26	6	19	17	4	7	2	0	476
東市路地定め	10											10

遺跡名	圓面	蹄足	円面	円形	窓	板	風字	黒風	特殊	箱面	不明	計
大安寺	8 (2)		1 (2)	1	1		2					17
歩華寺	(1)	(2)					(1)					14
阿含院淨土院	(1)											3
文殊寺	(1)								1	2		3
施毛王寺	(1)											1
興福寺	(77)	(2)	(13)	(1)	(4)	(4)	(2)	(1)				104
大寺方	5 (2)	1		1			1					10
内政寺	3 (15)	1	1 (1)									22
東大寺									(2)			2
吉祖院堂	(4)								(1)			5
華嚴寺	(8)	(1)			(2)	(1)	(3)					15
華嚴寺	2											2
寺院計	142	7	16	4	7	7	9	2	2	1	0	197

平城宮跡	(278)	(193)	(11)	(16)	(3)	(11)	(9)	(8)	(4)			533
( ) 内数字：奈文研資料												



脚足円面鏡の分布



蹄脚円面鏡の分布

が、その出土比率には差異が見られる。だが外堤部径が20cmを越す大型の圓足圓面鏡は、三条大路以北の平城宮周辺に多いことも指摘できる。

平城宮では大型品を主体とする蹄脚圓面鏡が数多く出土している点は、これまでに指摘されているところで、平城宮が日本律令国家の政庁であるという遺跡の特殊性を顕著に示している。

平城宮内では、長屋王邸とされる左京三条二坊七坪から21点の蹄脚圓面鏡が出土している。蹄脚圓面鏡の出土率は45.6%で平城宮を上回っており、出土率の高さは長屋王邸宅という特殊性を反映したものとみられる。

蹄脚圓面鏡は、社会的地位や身分を象徴する頂点に位置する最高級の鏡であったことはほぼ間違いないと考えられる。

## Vまとめ

本稿では、平城宮跡から出土する陶製の鏡を考古資料として集成し、概要を説明してきた。石製品にも視点を向けて調査したが、石製鏡は奈良時代のものでは正倉院に伝わる青斑石鏡<sup>10)</sup>がみられるだけで、平城宮・京に

おいては出土例を確認することができなかつた。このことからも観は、平城京跡では陶器が100%近い状況で主体を成すものであったと理解してよいであらう。

平城京跡出土陶器(定形観)は、調査地の違いを越えて、円面観が9割近く占め、宝珠観など他の形の観は少數に止まり、円面観のなかでも中小型の大きさの圈足円面観と大型の蹄脚円面観の2種の陶器を中心であったことが明らかになつた。このことは、古代律令国家が、都城の役所で使用する中心的な観として、唐代に盛行した「丸い観」を選択した結果であり、円面観が律令体制を象徴するものであったことを示すものであらう。

圈足円面観は、宮・京を通じて常に多数を占めるが、平城宮においては、平城京よりも蹄脚円面観の出土割合が高く、長屋王邸など高級貴族の邸宅も宮に順じる状況を呈している。蹄脚円面観は、高い品質の観として製作され、陶器の中の頂点に位置するものであったといえる。

宝珠観や形象観、風字観、特殊観といった少数の観の位置づけが問題ではあるが、平城京内で多量に出土する須恵器・蓋などの転用観は、律令国家を支えた文書行政の普及を直接的に示す考古資料であるとも思われる。

平城京跡出土陶器の生産地については、量的に陶邑窯の製品が中心を占めると思われるが、狼投窯の製品も確実に一定量あり、その他の生産地を想定せざる得ない資料も存在する。製作技法の研究は、生産地の特定、流通ひいては観の地方への波及などを知るためには欠かせないものであり、今回の分類視点をもとに今後も継続的に陶器研究を進めていきたい。

本稿をまとめるにあたり、神野 恵・木村理恵(奈良文化財研究所)、宮原晋一(奈良県立橿原考古学研究所)、小森俊寛・大洞真白・備前知世(八幡市教育委員会)、井戸竜太(鼬牧方市文化財研究調査会)の各氏、奈良市埋蔵文化財調査センター所長をはじめとする職員諸氏の御教示・御協力を得たことに深く感謝申し上げます。

調査「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書」平成元年度 奈良市教育委員会 1990

- 6) このことについては、『平城京陶器集成Ⅰ』p.29資料番号21とp.33資料番号66の資料が判明であると報告されている。観面には木目麻(范傷)が残ることから同范と認定されいるが、奈良市資料の宝珠観はいずれも破片であるため、型作りの痕跡はみいだせなかつた。
- 7) 2006奈良文化財研究所『平城京出土陶器集成Ⅰ－平城宮跡－』2006奈良文化財研究所史料第77冊 p.73-資料番号469, PL22-469, Ph59-469
- 8) 平城宮東方官衙地区からも12角形に復元される無高台の多角観が出土している。陶邑窯の製品である可能性が考えられてい。
- 9) 1,455点は奈良市および奈良研が実施した発掘調査で出土したものと合計した点数である。奈良県立橿原考古学研究所、大和郡山市教育委員会、元興寺文化財研究所や大学による発掘調査の出土資料は含まないが、平城京出土陶器資料の大半を占める奈良市資料と奈良研資料によってほぼ平城京の出土傾向を窺うことができるものと考える。
- 10) 表4・5は、奈良市資料と奈良研資料をまとめて提示したものである。表内表示は、p.132を参照して頂きたい。
- 11) 奈良国立文化財研究所『右京八条二坊十三・十四坪の調査』奈良国立文化財研究所学報第46冊 1989年  
発掘区が十三坪と十四坪にまたがっているので、坪境小路路面へ中軸線から南を十三坪に、北を十四坪として、掲載報告書から発掘面積を計測した。
- 12) 右京二条三坊六坪の調査掲載文献は以下のとおりである。  
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成6年度 奈良市教育委員会 1995、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成7年度 奈良市教育委員会 1996、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成12年度 奈良市教育委員会 2002
- 13) 奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995  
発掘面積は、脚注8)と同じ方法で計測した。
- 14) 三好美穂、池田裕英、細川富貴子『第IV章 出土土器 第3節 土器』『史跡大安寺旧境内I』奈良市教育委員会 1997
- 15) 西大寺旧境内の第25次調査は、平成21年度に実施された発掘調査であり、現在遺物調査中である。
- 16) 本資料は、正倉院事務所『正倉院宝物 中倉』朝日新聞社 1988を参考にした。

1) 奈良文化財研究所『平城京出土陶器集成Ⅰ－平城宮跡－』2006

奈良文化財研究所史料第77冊、奈良文化財研究所『平城京出土陶器集成Ⅱ－平城京・寺院－』2007奈良文化財研究所史料第80冊

2) 円面観の観面にめぐる帯について、煩雑さを避けるために内堤の用語を用いた。

3) a～cの分類は、奈良文化財研究所によって示されたもので、3つの分類の中にはそれぞれ特徴をもつものがあるとされているが、本稿では使用しなかつた。

4) 蹄脚円面観についても奈良文化財研究所が提示したものである。本稿では、蹄脚円面観の特徴を簡略して記したが、本来の定義内容は奈良文化財研究所『平城京出土陶器集成Ⅰ－平城宮跡－』2006奈良文化財研究所史料第77冊に収録されている。

5) 「平城京右京三条三坊一坪の調査」第169・173・182・184次

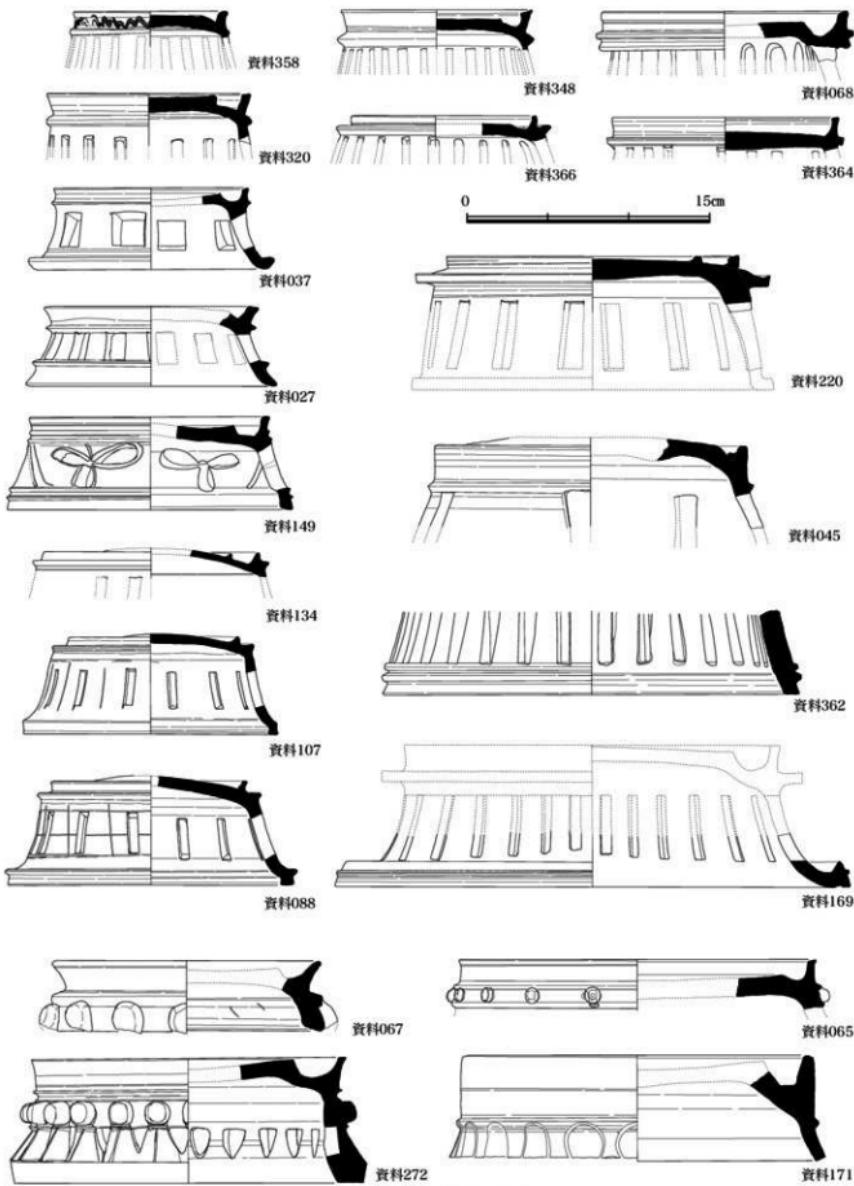
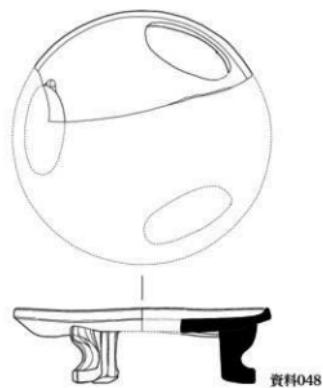
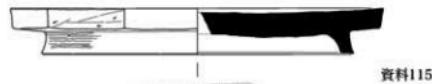


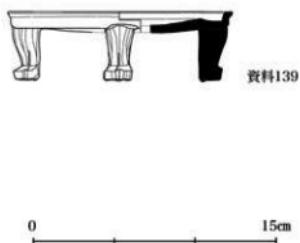
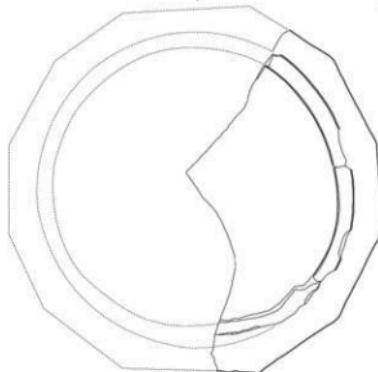
図7 平城京跡出土陶磧1 (1/3)



資料048



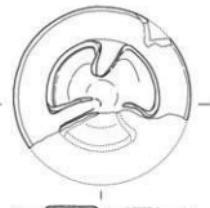
資料115



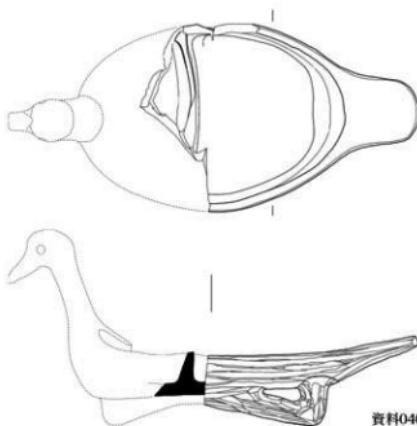
資料139



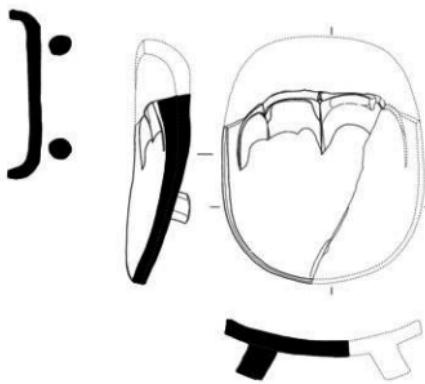
資料356



資料039



資料040



資料112

図8 平城京跡出土陶器2 (1/3)

【圓足円面鏡】



様々な大きさの圓足円面鏡



資料 149



資料 107



資料 220



資料 088

【蹄脚円面観】



資料 272



資料 157



資料 126



資料 284



資料 033



資料 177



資料 273

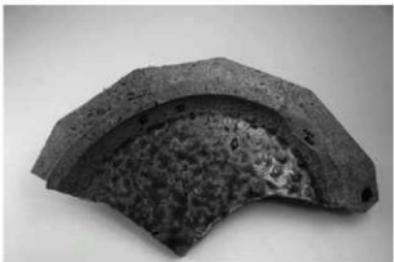


資料 137

【その他の観 - 1】



資料 039



資料 115



資料 293



資料 139



資料 208



資料 062 (裏面)



資料 048



資料 306

【その他の観 - 2】



資料 311



資料 318



資料 024



資料 024 (鳥胸部外面)



資料 040



資料 040 (裏面)



資料 005



資料 005 (裏面)

## 平城京跡出土陶硯一覧

1. 本表は、奈良市教育委員会が昭和 54 年度から平成 20 年度までに、平城京跡内において実施した発掘調査で出土した陶硯の概要をまとめたものである。本書に収録した陶硯は、奈良市埋蔵文化財調査センターで整理を行い、収蔵・保管している。
2. 一覧表の配列は、平城京一条坊復原に基づき、右京、左京、東市跡推定地、寺院旧境内地順に配列した。
3. 資料番号は、一個体ごとに番号を付した。接合するものや同一個体と考えられる破片も明記した。
4. 調査次数は、奈良市教育委員会が実施した発掘調査に付与された番号である。
5. 遺跡名の表示要領は次のとおりである。 H J = 平城京、 L = 右京、 R = 左京、 T I = 東市跡推定地、 G G = 元興寺旧境内、 S D = 西大寺旧境内、 K K = 菩原寺旧境内、 D A = 大安寺旧境内、 S R = 西隆寺旧境内  
条、坊、坪は算用数字と、(ビリオド) を用いて表示した。 例) 右京一条二坊四坪 = R.1.2.4
6. 出土遺構名および造構時期は各掲載概要報告書に準拠した。時期は、世紀 = C 、前半 = 前、中頃 = 中、後半 = 後、末頃 = 末、時期不明 = — (ハイフン) で表した。
7. 確の種類は、次のように略記した。 圓足円面硯 = 圓足、蹄脚円面硯 = 蹄脚、円面硯 = 円面、円形硯 = 円形、宝珠硯 = 宝珠、形象硯 = 形象、風字硯 = 風字、黒色土器 B 類の風字硯 = 黒風、特殊硯 = 特殊、猿面硯 = 猿面
8. 確型式は、基本的に奈良文化財研究所『平城京出土陶硯!』に準拠しているが、圓足円面硯と蹄脚円面硯は筆者による分類も明示した。
9. 砯の残存状態は、硯部が残存するもの = ○ 、残存しないものは × とし、脚部は残存する部位を明記し、残存しないものは × を付した。
10. 法量は、可能な限り計測をしたが、小破片で計測できないものは — (ハイフン) を付した。
11. 備考には、自然軸の降下や形態的特徴および調整等を記した。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	造構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備考
								硯部	脚部		
001		HJ207	R.1.2.4	柱穴	—	圓足	5	×	脚柱～脚台	脚台 30.0	自然軸不明。胎土には白色微石粒を多く含む。
002		HJ207	R.1.2.4	S D 03	8 C 前～中	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。脚柱内面はロクロナデ調整。
003		HJ207	R.1.2.4	包含層	—	蹄脚	B - 4	×	脚柱～脚台	脚台 26.5	正置焼成。
004	3	HJ348	R.1.2.11	素掘溝・包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 20.0 硯面 15.0	3片接合。正置焼成カ。外堤部端面は内傾する。硯部内面はコチエ成形した後、ロクロナデ調整。
005		HJ578	R.1.2.13	S E 501	8 C 後	圓足	—	○	×	外堤 11.3 硯面 6.8	ナデによって硯面周縁に瘤みをつくり海部とする。硯部裏面は指オサエによる凹凸が著しい。外表面はケズリ調整。圓足円面硯に分類したが、形態は他の資料と著しく異なる。
006		HJ578	R.1.2.13	S K 601	11C 末～12C 初	圓足	5	×	脚柱～脚台	—	脚柱下部には 2 条の突帯がつく。脚台は四角形状。
007		HJ534	R.2.2.9	S D 02	8 C	圓足	a - A	○	×	外堤 25.2	正置焼成。硯面の厚さが 0.6mm と薄い。
008	2	HJ503	R.2.2.9	包含層	—	圓足	2	×	脚柱～脚台	脚台 15.5	2片接合。正置焼成。透孔数 8 (復原)。脚柱外側の透孔の間には、縱方向の刻線が 1 条ある。脚台は屈曲するタイプ。
009		HJ460	R.2.2.15	S D 109	12 C 前	圓足	a カ	○	—	—	自然軸不明。
010		HJ460	R.2.2.15	S E 503 裏込	8 C 後～末	圓足	5	×	脚柱～脚台	脚台 29.8	正置焼成。脚台上半に 2 条の突帯が廻る。脚柱部の透かし孔は細長い梢円形状を呈する。
011		HJ460	R.2.2.15	S E 503 新	8 C 後～末	圓足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成カ。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備考
								観部	脚部		
012		HJ460	R.2.2.15	S E 503 新	8 C 後～末	風字		○	—	—	倒置焼成。観面・観裏面に重焼き痕跡が残る。内外面ともケズり調整。研尻近くに脚部痕跡あり。
013		HJ460	R.2.2.15	S D 15 下層	8 C	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。細い粘土紐を貼り付け脚節とする。
014		HJ504	R.2.2.16	廐棄土坑	I2 C 中	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 17.0	倒置焼成。透孔は指ナデで面取りする。
015		HJ283	R.2.3.2	S D 101	8 C ～ 9 C	風字		○	○	—	倒置焼成。眉形状の突帯で内堤を作る。裏面は自然軸が厚くかかり、調整不明。観尻側に9角に面取りした脚部が付く。
016		HJ283	R.2.3.2	SD103	8 C ～ 9 C	圓足	b - A	○	—	突帯 15.0 観面 9.6	倒置焼成。観部内面のロクロ目が顕著である。観面に低い突帯状の内堤がめぐるタイプ。
017		HJ283	R.2.3.2	SD103	8 C ～ 9 C	圓足	—	×	脚柱のみ	—	倒置焼成。
018		HJ283	R.2.3.2	SD103	8 C ～ 9 C	圓足	b カ - A	○	脚柱	—	自然軸不明。資料 016 と形態が似る。
019		HJ283	R.2.3.2	S E 511	9 C 前	蹄脚	B - 6	×	脚柱～脚台	脚台 21.5	正置焼成。脚節は貼付けと考える。外面には暗オリーブ色(7.5Y4/3)の自然軸が厚くかかる。
020		HJ283	R.2.3.2	S K 514	9 C 前	圓足	a - A カ	○	—	観面 12.5	自然軸不明。観部内面に成形時の接合痕残る。胎土に黑色粒子が多く含まれている。
021		HJ283	R.2.3.2	包含層	—	圓足	a - A	○	—	外堤 13.4	自然軸不明。観面の中央に朱もしくはベンガラが付着。
022		HJ283	R.2.3.2	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱	突帯 14.1 観面 10.3	自然軸不明。透孔が貫通していない箇所がある。観面に低い突帯状の内堤がめぐるタイプ。
023		HJ283	R.2.3.2	包含層	—	圓足	a - A	○	—	観面 13.0	倒置焼成か。観部裏面に粘土紐接合痕が残る。
024		HJ283	R.2.3.2	S E 508	8 C 末	形象		○	○	残存長 11.2 残存幅 6.7	正置焼成。頭部を欠く。全面丁寧なミガキを施す。鳥体部にある外堤部外面に竹管文で羽毛を表す。観裏面には鳥の脚を付す。
025		HJ327-I	R.2.3.2	S B 231・232	8 C	圓足	a - A	○	脚柱	観面 17.5	正置焼成。外堤の下に細い2段の突帯が付く。観部内面は段がつくタイプ。
026		HJ327-I	R.2.3.2	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱	—	自然軸不明。外堤部の下に細い突帯が付く。観部内面に段がつく。資料 023 と形態が似る。
027		HJ327-I	R.2.3.2	包含層	—	圓足	a - A 5	○	脚柱	外堤 13.2 脚台 5.5 器高 4.9	倒置焼成。外堤部下の突帯は、細く尖った三角形状を呈する。
028		HJ327-I	R.2.3.2	包含層	—	圓足	6	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。脚台に圓線が2条めぐる。
029		HJ327-I	R.2.3.2	包含層	—	蹄脚	A - a	○	×	外堤 17.9	倒置焼成。観部裏面にはタクキ目が残る。
030		HJ351-2	R.2.3.2	包含層	—	風字		○	脚部	軸 14.0	倒置焼成。観部裏面はヘラ削りした後、ナデ調整。
031	3	HJ431-2	R.2.3.2	S B 322・土坑 ・包含層	8 C	蹄脚	A - a	○	脚頭	突帯 22.0	3片同一個体と考える。自然軸不明。観部に脚頭部の脛を押さえて接合する。観部内面はコテ状の工具で成形。
032	2	HJ431-2	R.2.3.2	S B 336	8 C	圓足	5	×	脚柱～脚台	脚台 19.8	2片同一個体と考える。倒置焼成。脚台端部は丸みをおびた三角形状を呈する。
033	3	HJ431-2	R.2.3.2	素掘溝	8 C	蹄脚	A	×	脚柱～脚台	脚台 30.5	2片接合。1片同一個体と考える。自然軸不明。脚柱と脚台の接合痕跡が明瞭。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								観部	脚部		
034	3	HJ431-2	R.2.3.2	小穴	8 C	圓足	a - A	○	脚柱～脚台	外堤 8.3 突帯 8.8 観面 5.3	3片接合。倒置焼成。外堤部外面に波状文がある。外堤端部および突帯端部は丸くおさめる。
035		HJ273-2	R.2.3.3	S E 506	8 C中	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 16.0	自然釉不明。観面中央部が窪むタイプ。外堤部下の突帯下面に工具のアタリが残る。
036	2	HJ310-1	R.2.3.3	包含層	—	蹄脚	B - 3	×	脚柱～脚台	—	2片同一個体と考える。正置焼成。脚台の接合痕明顯。
037	7	HJ310-1	R.2.3.3	S A 306・ 包含層	8 C前	圓足	a - A 4	○	○	外堤 12.0 脚台 15.2 観面 8.4 器高 5.0	5片接合。2片同一個体。倒置焼成。脚部の器厚が0.7～1.2cmと厚いのに比して観面が0.5cmと薄い。
038	2	HJ310-1	R.2.3.3	S D 109・ 包含層	8 C	形象		○	脚部	—	2片同一個体と考える。正置焼成。外堤および観部外面に波状の線刻あり。
039	2	HJ310-1	R.2.3.3	包含層	—	円形		○	無脚	外堤 10.9 器高 1.3	2片接合。自然釉みあらず。全形は皿形を呈しており、観面には銀杏形の内堤部が3ヵ所に付く。内外面とも丁寧な磨きを施す。
040	2	HJ310-1	R.2.3.3、 • 293 R.2.3.4	素掘溝・包含層	—	形象		○	脚部	残存長 17.2 幅 11.8 残存高 5.5	2片接合。正置焼成。鳥形觀。観裏面にはハケメ痕跡が残る。平城宮内裏東方官衙・造酒司地区から出土した鳥形觀に似る。
041		HJ310-1	R.2.3.3	包含層	—	圓足	a - A	○	×	外堤 13.0	正置焼成。観部内面はコテ状の工具で調整。
042		HJ310-1	R.2.3.3	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 10.6 観面 6.6	倒置焼成。外堤部はやや内湾しながら立ち上がる。端部は内傾する。外堤部下の突帯は、細く尖った三角形状を呈する。
043		HJ431-3	R.2.3.3	S E 524 振形	8 C	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 17.0	正置焼成。
044		HJ431-3	R.2.3.3	S E 529 振形	8 C後	圓足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成。外面の手触りが滑らかである。
045		HJ431-3	R.2.3.3	S E 529 柄内	9 C前	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 19.7	正置焼成。海部に重ね焼き痕跡あり。外堤端部は外傾する。
046		HJ431-3	R.2.3.3	S E 530 柄内	8 C末	圓足	不明	○	—	—	倒置焼成。
047		HJ431-3	R.2.3.3	S E 530 柄内	8 C末	蹄脚	A - a カ	○	—	—	自然釉不明。脚部がかなり開くタイプになると考える。
048		HJ431-3	R.2.3.3	小穴	8 C	円形		○	○	観部 15.5	倒置焼成。梢円形状の海部が2つ以上ある。獸脚。
049		HJ431-3	R.2.3.3	包含層	—	圓足	a - A	○	—	外堤 20.5 突帯 21.9 観面 16.0	倒置焼成。脚部を欠いたのち、割れ口を研磨して観部のみを再利用したと考える。
050		HJ273-1	R.2.3.4	S B 230	8 C末	圓足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成。
051		HJ293	R.2.3.4	包含層	—	圓足	a - A	○		外堤 28.0	倒置焼成。外堤部は三角形状で、観部裏面に段が付く。
052		HJ293	R.2.3.4	土坑	—	圓足カ	不明	○	—	観面 15.6	倒置焼成。
053		HJ293	R.2.3.4	S B 278	8 C	圓足	a - B	○	—	観面 12.5	自然釉不明。観部裏面にカキ目のような痕跡が残る。コテによるものか。外堤部と脚部が大きく外へ張り出すタイプ。
054		HJ293	R.2.3.4	S B 270	8 C	圓足	4	×	脚柱～脚台	脚台 24.6	倒置焼成。透孔の裏面から角を面取りする。
055	2	HJ293	R.2.3.4	素掘溝・包含層	—	形象		○	—	—	2片同一個体と考える。倒置焼成。細い突帯状の内堤で海部と観面を分ける。観裏面ヘラケズリ。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								観部	脚部		
056	7	HJ293	R.2.3.4	包含層	—	圓足	I	×	脚柱～脚台	脚台 29.8	7片同一個体と考える。倒置焼成。脚柱の上部外面に円形貼文が付く。貼文は手づくね。脚部外面はロクロナデで調整。
057	3	HJ378-2	R.2.3.4	S D 106	8 C	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 21.6 観面 16.8	3片接合。倒置焼成。外堤部下の突帯～脚柱にかけて円形貼文あり。
058		HJ378-2	R.2.3.4	包含層	—	圓足	a - B	○	×	—	正置焼成。観面中央部が皿状に窪む。裏面は不定方向ナザ。
059		HJ495-2	R.2.3.5	S D 104	8 C～9 C 初	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 19.2	倒置焼成。外堤部の下に脚頭状の円形貼文が付く。観面中央が窪むタイプ。観部裏面は、アーチ状の弧を描く。
060		HJ495-2	R.2.3.5	包含層	—	形象		○	×	—	正置焼成。外堤部外面～裏面は丁寧な磨きを施す。
061		HJ286-2	R.2.3.6	S D 110	8 C	圓足	4	×	脚台	—	正置焼成。
062	2	HJ286-2	R.2.3.6	土坑	8 C	風字		○	脚部	—	2片接合。倒置焼成。観尻裏面に角高台が2脚つく。観裏面に線刻あり。
063	3	HJ286-2	R.2.3.6	柱穴	8 C	圓足	b - A	○	脚柱部	外堤 14.3	3片接合。正置焼成。観面と海部の区別はあるが、観面の高さが低い。観面にわずかにヘラケズリ痕跡残る。
064		HJ286-2	R.2.3.6	包含層	—	蹄脚	A - a	○	脚頭	—	外面に自然釉かかる。観部裏面はコテ状工具で形成。
065		HJ310-2	R.2.3.6	S D 110	8 C	蹄脚	B - a	○	—	外堤 22.0 観面 17.8	倒置焼成。脚頭部は直径 0.9cm と小さい。その下に細い脚節を付す。
066		HJ310-2	R.2.3.6	S B 273	8 C	圓足	a カ b - A	○	脚柱部	外堤 10.8	倒置焼成。外堤の下に突帯が2条めぐる。
067		HJ310-2	R.2.3.6	小穴	—	蹄脚	A - a	○	脚頭部	外堤 16.6 外面に自然釉かかる。観部裏面にコテ状工具のアタリがみられる。	外堤 16.6 突帯 16.7
068		HJ310-3	R.2.3.6	S K 603	8 C	圓足	a - B	○	脚柱部	外堤 16.0 観面 11.6	正置焼成。外堤部下に細い圓線が一条。その下に突帯が2条めぐる。
069		HJ310-3	R.2.3.6	S E 524	8 C	圓足	a カ c - A	○	×	外堤 17.8	倒置焼成。
070		HJ310-3	R.2.3.6	落ち込み	8 C	圓足	a - A 5	○	脚柱～脚台	外堤 18.0 脚台 22.4 器高 5.7	倒置焼成。脚台上半に三角形状の突帯が1条めぐる。
071		HJ326-2	R.2.3.6	素掘溝	—	圓足	6	×	脚柱～脚台	脚台 21.0	正置焼成。
072		HJ326-2	R.2.3.6	包含層	—	圓足	3	×	脚柱～脚台	脚台 26.9	正置焼成カ。脚部が大きく開くタイプ。
073		HJ326-2	R.2.3.6	包含層	—	圓足	a - A	○	×	外堤 20.0	正置焼成カ。緻密な胎土。外堤は細長い四角形状を呈する。観部裏面に段がつくタイプ。
074		HJ443-4	R.2.3.6	S D 101	8 C～9 C 初	圓足	—	×	脚柱のみ	—	脚柱外面はロクロケズリ調整。
075		HJ443-4	R.2.3.6	小穴	8 C	圓足	—	×	脚柱のみ	—	脚柱外面はロクロケズリ調整。
076	3	HJ443-5	R.2.3.6	S K 609・ 包含層	8 C	蹄脚	A - 5	×	脚台	脚台 32.2	2片接合。1片同一個体と考える。自然釉不明。脚柱は丸棒状になると見える。
077		HJ443-5	R.2.3.6	S D 101	8 C	圓足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。
078		HJ443-5	R.2.3.6	小穴	—	圓足	b カ - A	○	×	突帶 13.0 観面 9.5	倒置焼成。外堤部下に線刻による模様がある。
079		HJ443-5	R.2.3.6	包含層	—	蹄脚	B - c	○	脚頭～脚柱	—	自然釉不明。観部裏面に段がつくタイプ。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								観部	脚部		
080		HJ443-5	R.2.3.6	包含層	—	蹄脚	A カ	×	脚柱のみ	—	自然軸不明。貼り付けた脚筋の下にナデ痕跡がみえる。
081	4	HJ443-6	R.2.3.6	S B 370・ S K 610・ 整地層・包含層	8 C ~ 9 C 初	團足	a - A 5	○	脚柱～脚台	外堤 19.0 突帯 20.5 脚台 22.0	4片同一個体と考える。倒置焼成。外堤部上半に三角形状の突帯が1条めぐる。HJ310-3 次資料No.064と形態が似る。
082		HJ443-6	R.2.3.6	素掘溝	—	蹄脚	A	×	脚頭～脚柱	—	自然軸不明。脚頭部の形態が細長い。脚筋は粘土貼付により成形されている。脚頭～脚柱は一体で手づくね。
083		HJ292-1	R.2.3.6	S F 0611 直上	8 C ~ 9 C 初	團足	b - A	○	脚柱	外堤 14.5	自然軸不明。脚柱に縦方向と斜方向の線刻あり。
084		HJ292-1	R.2.3.6	S F 0611 直上	8 C ~ 9 C 初	蹄脚	B - 3	×	脚柱～脚台	外堤 28.5	正置焼成。脚台の接合痕がわかる事例。
085		HJ292-1	R.2.3.6	S D 104	8 C ~ 9 C 初	團足	5	×	脚柱～脚台	脚台 15.8	正置焼成か。梢円形状の透孔あり。脚台に1条の突帯めぐる。
086		HJ292-1	R.2.3.6	包含層	—	團足	a カ b - A	○	脚柱	外堤 24.0	自然軸不明。外堤端部は外傾する。
087		HJ292-1	R.2.3.6	包含層	—	團足	a - A	○	—	外堤 9.2	自然軸不明。小型。観部内面ロクロナデ。
088	8	HJ327-5	R.2.3.6	S D 104・ 素掘溝	8 C	團足	b - A 5	○	脚柱～脚台	外堤 10.5 突帯 12.4 脚台 15.7 器高 6.2	8点接合。正置焼成。外堤は脚部よりやや内側につく。観部内面～脚部内外面はロクロナデ調整。
089		HJ364	R.2.3.7	S D 104	8 C ~ 9 C	團足	4	×	脚柱～脚台	脚台 15.3	正置焼成。
090		HJ364	R.2.3.7	S D 104	8 C ~ 9 C	團足	a - A	○	脚柱	外堤 14.5	自然軸不明。観部内面はロクロケズリ調整。
091		HJ364	R.2.3.7	S D 104	8 C ~ 9 C	形象		○	—	—	正置焼成。観面および外堤部外面は丁寧に磨かれている。一部にハケメ痕跡残る。海部は成形時の指オサエの痕が残る。
092		HJ364	R.2.3.7	素掘溝	—	團足	—	×	脚柱のみ	—	倒置焼成。外面に線刻による文様が施される。
093		HJ378-4	R.2.3.7	S X 02	8 C	團足	a - A	○	—	—	正置焼成。
094	2	HJ378-4	R.2.3.7	S D 104・ 自然河川	8 C ~ 9 C ・ 13 C ~ 15 C	團足	a - B	○	—	突帯 24.0 観面 18.0	2片同一と考える。正置焼成。外堤部下に細い2条の突帯、観面には低くて細い内堤部がめぐる。石のような質感。
095		HJ378-4	R.2.3.7	S D 104	8 C ~ 9 C	團足	6	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。脚台内面はロクロケズリ、脚部内面はロクロナデ。脚台外面に團線が1条めぐる。
096		HJ378-4	R.2.3.7	S D 104	8 C ~ 9 C	團足	a カ c - A カ	○	—	—	自然軸不明。観部内面はロクロナデ。
097		HJ378-4	R.2.3.7	S D 104	8 C ~ 9 C	蹄脚	B - 3	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。胎土に黒色粒子が含まれ、ケズリにより引っ張られて線状になっている。
098		HJ327-2	R.2.3.9	包含層	—	團足	a カ - A 5	○	脚柱～脚台	外堤 14.0 突帯 13.7 脚台 16.7	自然軸不明。外堤下に突帯が2条めぐり、突帯間に円形貼文が付く。長脚。
099		HJ327-2	R.2.3.9	—	—	蹄脚	B - A	○	—	—	自然軸不明。海部底は平坦面を成す。
100		HJ317	R.2.3.10	S D 102	8 C 前～12 C	蹄脚	A - a	○	脚頭部	—	倒置焼成。胎土粗い。
101	2	HJ317	R.2.3.10	S D 102	8 C 前～12 C	蹄脚	B - 3	×	脚柱～脚台	脚台 30.2	2片接合。正置焼成。脚柱部三角形飾り外面のケズリが粗く、ケズリ残しあり。脚柱部と脚台の接合痕跡明瞭。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備考
								観部	脚部		
102	3	HJ327-3	R.2.3.10	包含層	—	團足	a - A 1	○	脚柱～脚台	外堤 9.8 突帶 10.1 観面 5.5 脚台 12.4 器高 5.2	3片接合。倒置焼成。脚柱部に5個の透孔あり。観面はロクロケズリ、観部内面はコテ状工具で成形。工具のアタリが残る。小型観。
103		HJ327-5	R.2.3.11	S D 103	8 C～9 C 初	蹄脚	B - 3	×	脚台～脚柱	—	正置焼成。
104		HJ327-5	R.2.3.11	素掘溝	—	蹄脚	A - a	○	脚頭部	—	倒置焼成。脚頭部を貼り直した痕跡あり。
105		HJ327-5	R.2.3.11	S E 508	9 C 中	團足	2	×	脚柱～脚台	脚台 16.3	正置焼成。
106		HJ327-5	R.2.3.11	包含層	—	蹄脚	B - a	○	×	外堤 29.0	自然軸不明。観部内面コテ状工具で成形。
107		HJ327-5	R.2.3.11	包含層	—		b - A 5	○	脚柱～脚台	外堤 12.0 突帶 13.7 脚台 18.0 器高 6.7	正置焼成。全体の形状が資料088に似る。観部内面～脚部外表面はロクロナダ調整。脚台部上半に突帯が1条めぐる。
108		HJ292-1	R.2.3.11	包含層	—	團足	2	×	脚柱～脚台	脚台 17.8	正置焼成。
109		HJ292-1	R.2.3.11	S D 103	8 C～9 C 初	團足	a - A	○	脚柱	外堤 13.8	正置焼成。脚部外面に縱方向の刻線が1条ある。
110		HJ292-1	R.2.3.11	S D 103	8 C～9 C 初	團足	2	×	脚柱～脚台	脚台 21.0	倒置焼成。
111	2	HJ292-1	R.2.3.11	土坑・包含層	8 C	團足	a - A	○	—	外堤 15.2	2片同一個体と考える。正置焼成。観面に小さい突帯が2条めぐる。
112		HJ327-5	R.2.3.11	S D 103	8 C～9 C 初	風字カ		○	○	—	正置焼成。内堤は花弁を表現している。鍋状の棱線で花弁の輪郭を表現している。花弁は貼り付け。脚部は7角形に面取りする。
113		HJ378	R.2.3.11	S D 102	8 C	團足	5	×	脚柱～脚台	脚台 12.8	自然軸不明。脚柱部に縱方向の線刻を施す。透孔の有無不明。
114	2	HJ378	R.2.3.11	S D 102	8 C	團足	c - A	○	×	外堤 21.1	2片接合。正置焼成。正置焼成。観面には低い突帯状の内堤がめぐる。観部裏面はコテ状の工具で成形したのちナダか。
115	2	HJ378	R.2.3.11	S D 102・ S X 804	8 C・中世	特殊		○		短径 22.8 長径 23.6 器高 2.8	多角観。2片接合。倒置焼成。観部と海部の区別がなく、ほぼ水平である。12角形になると考える。
116		HJ378	R.2.3.11	S X 804	中世	團足	a - A	○	×	外堤 7.9	倒置焼成。小型観。
117		HJ378	R.2.3.11	包含層	—	團足	b カ - A	○	×	外堤 10.0 突帶 10.7	倒置焼成。外堤部端面は内傾。外堤部下の突帯は低い。
118	2	HJ378	R.2.3.11	包含層	—	團足	a カ - A	○		外堤 13.4	2片同一個体と考える。倒置焼成。観面に低い内堤がめぐるタイプ。
119		HJ378	R.2.3.11	包含層	—	蹄脚	A - a	○	×	外堤 22.0 観面 17.2	倒置焼成。脚頭部は残存しないが、接合時に脚頭部側面に沿って施したナデ痕跡が残る。
120		HJ443-1	R.2.3.11	S D 104	8 C	円面		○	無脚	外堤 13.7	倒置焼成。観面に細長い三角形状の内堤がめぐる。
121		HJ443-1	R.2.3.11	素掘溝	—	蹄脚	A - a	○	脚頭部	—	倒置焼成。焼成がやや軟質。
122		HJ443-1	R.2.3.11	S X 804	8 C	円形		○	—	外堤 15.4 突帶 18.3	倒置焼成。海部が片側による。
123		HJ443-1	R.2.3.11	包含層	—	風字		○	×	—	自然軸不明。観部内面にハケメ痕跡あり。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								観部	脚部		
124		HJ494-I	R.2.3.12	土坑	8 C	蹄脚	A - a	○	×	—	倒置焼成。脚頭部は欠損しているが、脚頭周囲の脇を押さえて貼り付けた痕跡が残る。
125	3	HJ494-I	R.2.3.12	土坑	8 C	圓足	3	×	脚柱～脚台	脚台 23.8	2片接合。1片は同一個体と考える。倒置焼成。器壁の厚みが一定である。
126	2	HJ480	R.2.3.12	S B 210	8 C後	蹄脚	A - c	○	×	外堤 20.8	2片接合。倒置焼成。脚頭部は残存しないが、貼付時に脚頭部の周囲を工具でナデ付けた痕跡が残る。
127	2	HJ480-I	R.2.3.12	S K 602	8 C後	圓足	2	×	脚柱～脚台	脚台 15.0	2片同一個体と考える。正置焼成。脚台端部は三角形状を呈する。
128		HJ494-3	R.2.3.12	包含層	—	円形カ		○	脚柱	—	自然軸不明。脚部が長く、外面には縱方向の線刻がある。
129	2	HJ494-3	R.2.3.12	S X 803	9 C前	圓足	b - A	○	脚柱	外堤 11.3 突帯 12.5	2片接合。正置焼成。観部内面は不定方向のナデ、重ね焼き痕跡が残る。
130		HJ200	R.3.2.15	落ち込み	8 C	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 28.4	正置焼成。
131		HJ220	R.3.2.15	包含層		圓足	a - B	○	—	外堤 16.0 突帯 16.8	倒置焼成。観部内面はコチ状工具で成形。
132		HJ443-7	R.3.2.15	S D 150	8 C	圓足	5	×	脚台	脚台 25.0	正置焼成。脚台端部は屈曲せず、細長い長方形状におさめる。
133		HJ443-7	R.3.2.15	包含層	—	圓足	a カ - A	○	×	突帯 26.8	倒置焼成。海部はコチ状工具による成形か。
134		HJ160	R.3.3.1	包含層	—	圓足	b - C	○	×	外堤 13.3 突帯 14.5 観面 10.0	自然軸不明。観面に小さい内堤が付くタイプ。
135		HJ160	R.3.3.1	包含層	—	圓足	1	×	○	脚台 15.8	倒置焼成。
136		HJ160	R.3.3.1	包含層	—	圓足	c - A	○	×	外堤 10.0 突帯 11.4	倒置焼成。観面はロクロケズリ。
137		HJ160	R.3.3.1	包含層	—	蹄脚	B - c カ	○	脚柱	—	正置焼成。細い粘土紐を貼り付け脚節とする。
138		HJ173	R.3.3.1	S E 16	8 C	圓足	2	×	脚柱～脚台	脚台 10.5	倒置焼成。
139		HJ173	R.3.3.1	S E 14	8 C末	円面		○	○	外堤 13.6	倒置焼成。靴脚がつく。観裏面はロクロケズリ。観部一面に墨が付着。
140		HJ173	R.3.3.1	包含層	—	圓足	2	×	脚柱～脚台	外堤 15.8	倒置焼成。
141		HJ184	R.3.3.1	土坑	8 C	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 10.8	自然軸不明。
142		HJ184	R.3.3.1	素掘溝	—	圓足	c - A 2	○	脚柱～脚台	外堤 13.5	自然軸不明。脚柱部に花弁状の透孔がみられる。
143		HJ257-4	R.3.3.6	素掘溝	—	圓足	a カ - A	○	—	外堤 12.8	倒置焼成。
144		HJ257-2	R.3.3.7	素掘溝	—	圓足	5	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。脚台外面に3条の圓線がめぐる。
145		HJ257-2	R.3.3.7	包含層	—	圓足	6	×	脚柱～脚台	脚台 20.4	自然軸不明。脚柱部に縱方向の刻線が2条ある。
146		HJ257-2	R.3.3.7	包含層	—	圓足	a カ - A 6	○	脚柱～脚台	突帯 16.5 脚台 18.6	倒置焼成。脚部の透孔は梢円形状を呈す。
147		HJ196-2	R.3.3.8	S D 102	8 C	蹄脚	B - 3	×	脚柱～脚台	脚台 31.5	自然軸不明。脚台内面に半円形状の抉りが入る。
148	2	HJ196-2	R.3.3.8	包含層	—	圓足	—	×	脚柱のみ	—	2片同一個体と考える。自然軸不明。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備考
								観部	脚部		
149		HJ196-2	R.3.3.8	包含層	—	圓足	a - A 5	○	○	外堤 14.8 脚台 17.6 観面 10.2	倒置焼成。外堤部の下と脚台上半に細い突帯がそれぞれ2条めぐる。脚柱部に花弁状の透孔を穿孔する。脚柱部外面には、穿孔した花弁状透孔の外周を線刻で縁取る。
150		HJ257	R.3.3.8	S D 208	14 C ~ 15 C	圓足	b - A	○	×	—	倒置焼成。
151		HJ222	R.3.4.6	包含層	—	圓足	a - A	○	—	外堤 14.0	倒置焼成カ。突帯下面に切り欠きが見られる。
152		HJ287	R.3.5.13	整地土	12 C	楕字		○	脚部	軸 9.7	自然軸不明。研頸部を欠くが、研尻~観中央にかけては同じ幅である。観裏面に格子目状のタキシ痕跡が残る。観面にはいたるところに指ナデがみられる。研尻付近に角高台が一对付く。
153		HJ491	R.7.1.14	S E 07	I2 C 中	圓足	3	×	脚柱~脚台	脚台 10.2	正置焼成。透かし孔の軸が 0.3mm と狭い。小型観。
154	3	HJ349	R.7.1.15	S X 10・11	8 C 後~15 C 後	蹄脚	B - a	○	脚柱~脚台	—	3片同一個体と考える。倒置焼成。焼成はやや軟質。
155		HJ349	R.7.1.15	S X 11	15 C 後	猿面		○	—	—	須恵器鉢を打ち欠き、周縁を磨いて観に転用している。
156		HJ520	L.1.3.5	南北溝	8 C	円形		○	無脚	—	倒置焼成。観面に突帯状の内堤めぐる。観裏面ロクロケズリ。
157	14	HJ520	L.1.3.5	土坑・包含層	8 C	蹄脚	A - 1	×	脚頭~脚台	—	6片接合。8片同一個体と考える。倒置焼成。脚台は薄型の長方形で、ロクロケズリ調整。脚柱飾りは均整がとれおり、形の差異が少ない。三角形状の飾りの角は丸みをもつ。
158		HJ019	L.1.3.13	素掘溝	—	圓足	—	○	脚柱	—	正置焼成。脚部の透孔間に縱方向の刻線が2条ある。
159		HJ019	L.1.3.13	素掘溝	—	圓足	b カ - A	○	×	外堤 10.0	正置焼成。外堤部は内湾気味に立ち上がる。
160		HJ019	L.1.3.13	素掘溝	—	圓足	b - A	○	脚柱	外堤 15.4 突帯 18.3	倒置焼成。脚部外面に縱方向の線刻と綾衫文を施す。
161		HJ019	L.1.3.13	包含層	—	圓足	a - A	○	×	外堤 14.0	自然軸不明。脚部に縱方向の線刻あり。観面に突帯状の内堤めぐるタイプ。観部内面はロクロナデおよび不定方向ナデ。
162		HJ019	L.1.3.13	素掘溝	—	圓足	b - A 2	○	脚柱~脚台	外堤 15.0 脚台 21.0	倒置焼成。透孔の間の脚柱外面に線刻模様あり。外堤部下の突帯は長く、端部は丸くおさめる。
163		HJ440	L.1.3.13	S E 01	8 C	黒楕		○	×	—	観頭部は圓丸形状を呈する。内外面のミガキ密。
164		HJ003	L.1.3.14	S K 01	8 C	圓足	4	×	脚柱~脚台	—	自然軸不明。透孔の角を内面から面取りする。
165	2	HJ003	L.1.3.14	包含層	—	圓足	a カ - A 2	○	脚柱~脚台	外堤 18.0 突帯 19.0 脚台 19.8	2片接合。正置焼成カ。四角形状の外堤部と丸く細長い突帯がつく。観部内面は不定方向のナデ。
166	2	HJ440	L.1.3.14	S E 01 柄内	8 C	圓足	a - A 3	○	脚柱~脚台	外堤 16.6 突帯 17.0 観面 10.0	2片同一個体と考える。自然軸不明。観部内面は不定方向のナデ調整。
167		HJ307	L.1.4.5	S D 02	8 C ~ 9 C 中	圓足	2	×	脚柱~脚台	脚台 14.1	正置焼成。自然軸が厚く調整不詳。
168		HJ028	L.2.2.12	包含層	—	圓足	c - A カ	○	脚柱~脚台	—	倒置焼成。観面に低い内堤めぐる。
169		HJ073	L.2.2.12	包含層	—	圓足	c - A	○	×	突帯 19.5	倒置焼成カ。外堤は「く」の字状に屈曲しながら立ち上がる。観面に低い内堤めぐる。
170	3	HJ073	L.2.2.12	包含層	—	圓足	3	×	脚柱~脚台	—	3片接合。倒置焼成。内外面ロクロナデ調整。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								観部	脚部		
171		HJ073	L.2.2.12	包含層	—	蹄脚	A - a	○	脚頭部	外堤 25.3 突帶 25.8	倒置焼成。観部内面はコテ状工具で成形。
172		HJ431-I	L.2.3.2	S E 562 挖形	8 C 末	圓足	—	×	脚柱のみ	—	自然軸不明。外表面ロクロナデ調整。
173		HJ431-I	L.2.3.2	S E 562 柄内	8 C 末～9 C 初	圓足	—	×	脚柱のみ	—	自然軸不明。脚柱部の透孔間に横方向に3条の縦線をめぐらせたのち、縱方向に刻線を2条施す。
174		HJ431-I	L.2.3.2	小穴	—	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 17.0	正置焼成。観部内面はコテ状の工具で調整。
175		HJ431-I	L.2.3.2	包含層	—	圓足	a - A	○	×	外堤 8.6	自然軸不明。小型窓。観部内面コテ状の工具で成形。外堤端部はやや内傾する。突帶は三角形状を呈す。
176	4	HJ447	L.2.4.1	包含層	—	圓足	I	×	脚柱～脚台	脚台 15.8	4片同一個体と考える。正置焼成。脚台上面に脚柱が剥離した痕跡残る。小型の蹄脚円面観。
177	2	HJ447	L.2.4.1	包含層	—	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	脚台 15.8	2片接合。正置焼成。脚台上面に脚柱が剥離した痕跡残る。小型の蹄脚円面観。
178		HJ157	L.2.4.2	素掘溝	—	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	脚台 23.8	正置焼成。脚節が2重にある。貼付。
179		HJ157	L.2.4.2	柱穴	8 C	圓足	a - B	○	脚部	外堤 14.2	倒置焼成。脚部に十字形の透孔あり。
180		HJ157	L.2.4.2	包含層	—	形象	—	○	×	幅 12.0	正置焼成。外堤部外表面にミガキを施す。観尻は欠損。
181		HJ157	L.2.4.2	包含層	—	圓足	a カ - A	○	脚柱～脚台	外堤 25.2	正置焼成。外堤部の下に突帶が2条めぐる。
182		HJ157	L.2.4.2	包含層	—	圓足	c - A	○	脚柱～脚台	外堤 20.0	倒置焼成。
183		HJ157	L.2.4.2	包含層	—	圓足	a - A	○	×	突帶 13.5	倒置焼成。
184		HJ157	L.2.4.2	包含層	—	圓足	a - A	○	×	外堤 9.2	正置焼成。観面は使用された痕跡みられず。
185	2	HJ157	L.2.4.2	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱～脚台	外堤 12.5	2片接合。自然軸不明。観部内面はロクロナデおよび不定方向のナデで調整。
186		HJ260	L.2.4.3	包含層	—	蹄脚	A - a	○	脚頭部	突帶 21.1	倒置焼成。脚頭部を貼り直した痕跡残る。
187	2	HJ172	L.2.4.7	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱	—	2片接合。倒置焼成。観部内面はコテ状工具で成形。
188		HJ174	L.2.4.7	S D 01	8 C	圓足	a - A	○	脚柱	—	倒置焼成。脚部外表面の透孔間に縱方向の線刻を施す。
189		HJ174	L.2.4.7	土坑	8 C	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。脚台内外面はヘラケズリ。
190	2	HJ174	L.2.4.7	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱～脚台	—	2片同一個体と考える。正置焼成。外堤部の下には突帶が付かない。観面には小さい内堤がめぐる。内外面ともにロクロナデ調整。
191		HJ174	L.2.4.7	包含層	—	圓足	a - A	○	×	外堤 12.0	正置焼成。外堤端部は内傾する。
192		HJ174	L.2.4.7	包含層	—	圓足	2	×	○	脚台 16.0	自然軸不明。外表面ロクロナデ調整。
193		HJ174	L.2.4.7	包含層	—	圓足	2	×	○	—	倒置焼成。外表面ロクロナデ調整。
194		HJ174	L.2.4.7	包含層	—	圓足	c - A	○	×	外堤 12.8	倒置焼成。観面に低い内堤がめぐる。
195		HJ598	L.2.4.10	包含層	—	圓足	a - A	○	×	外堤 15.5	倒置焼成。観面に低い三角形状の内堤部がめぐる。外堤端部は観面 10.2 やや内傾する面をもち、突帶断面形は半円形状である。
196		HJ180	L.2.4.11	S E 07 挖形	8 C	圓足	a - B	○	×	—	倒置焼成。
197	2	HJ180	L.2.4.11	包含層	—	圓足	2	×	脚柱～脚台	脚台 19.0	2片同一個体と考える。脚台上に突帶が1条めぐる。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備考
								観部	脚部		
198	3	HJ180	L.2.4.11	包含層	—	圓足	c カ - 2	○	脚柱～脚台	脚台 19.0	2片接合。1片同一個体と考える。正置焼成。須恵器杯カ皿の高台が脚台に溶着。全体的に器面が荒れており、観部には気泡があり膨らみがみられる。
199		HJ267	L.2.4.16	包含層	—	圓足	a - A	○	×	—	自然軸不明。外面ロクロナデ調整。
200		HJ600	L.2.5.北郊	田河川	5C後～10C初	圓足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成。脚柱部の透孔は上下2段になる可能性あり。
201		HJ531	L.2.7.15	S X 25	15C後～16C前	圓足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成。脚柱外面に綾杉文を線刻する。
202		HJ605	L.2.7.15	土坑	—	圓足	—	×	脚柱のみ	—	自然軸不明。脚柱部透孔間に綾杉文を線刻する。
203	3	HJ312	L.3.1.3	S D 03	8C	圓足	a - A	○	脚柱のみ	観面 16.9 外堤 22.0 突帯 23.8	3片接合。倒置焼成。
204		HJ002	L.3.2.9	包含層	—	圓足	a - A	○	×	—	倒置焼成。観面に小さい三角形の内堤がめぐる。
205		HJ002	L.3.2.9	包含層	—	蹄脚	B - I	×	脚台～脚柱	—	正置焼成。脚台の接地面に粘土が剥がれた痕跡が残る。
206		HJ002	L.3.2.9	包含層	—	楕字	—	○	脚部	—	正置焼成。6角の脚部が付く。
207		HJ187	L.3.2.16	整地土	8C	特殊	—	○	×	残存高 3.5	正置焼成。観部に円筒形状の水滴が付き、下方に小穴が穿孔されており、観面に水が流れる仕組みになっている。
208		HJ187	L.3.2.16	包含層	—	宝珠カ	—	○	×	—	宝珠形になる平坦な観部に幅0.3cmの溝を掘り巡らし、海部と陸部を分ける。
209		HJ231	L.3.2.16	S D 41	8C	圓足	—	×	脚柱のみ	—	倒置焼成。
210		HJ231	L.3.2.16	包含層	—	圓足	a - A	○	×	外堤 11.5 観面 7.6	倒置焼成。外堤部の下に突帯が2条めぐる。
211		HJ231	L.3.2.16	包含層	—	圓足	a - A	○	×	外堤 16.7 観面 12.4	自然軸不明。観部内面にロクロ目が残る。
212		HJ231	L.3.2.16	包含層	—	圓足	I	×	脚柱～脚台	脚台 24.0	自然軸不明。透孔の裏面を面取りする。
213		HJ247	L.3.3.3	S K 09	8C前	圓足	a - A	○	—	外堤 29.4	自然軸不明。観部内面はコチ状工具で形成。
214		HJ375	L.3.3.3	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱	—	正置焼成。観面に凹凸がある。海部の幅が狭くV字状を呈す。観部裏面は気泡があり、器面が膨らんでいる。
215		HJ391	L.3.3.3	S D 01	8C	圓足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成。脚柱の透孔は上下2段になると考える。
216		HJ391	L.3.3.3	包含層	—	圓足	a カ - A	○	脚柱	—	倒置焼成。脚柱部の透孔は横方向の長方形を呈す。
217		HJ475	L.3.3.6	S D 03	8C	円形	—	○	—	外堤 21.8	倒置焼成。海部の位置不明。
218	2	HJ499	L.3.3.10	東幅河	8～9C	圓足	a - B	○	×	外堤 20.5	2片接合。倒置焼成。外堤部と突帯の形状は四角形状を呈する。
219		HJ191	L.3.3.11	S A 02	8C	圓足	3	×	脚柱～脚台	脚台 16.0	自然軸不明。脚柱部の透孔間に縱方向の刻線が1条ある。
220	3	HJ596	L.3.3.12	S D 01上層	8C	圓足	—	○	脚柱	外堤 18.0 突帯 20.3	3片接合。軸？観面に四角形状の内堤が1条めぐる。観部内面は不定方向のナデ。
221		HJ194	L.3.4.6	S E 24	8C中～後	圓足	4	×	脚柱～脚台	脚台 14.0	正置焼成。内外面ロクロナデ調整。
222		HJ413	L.3.4.12	S X 06	9C～10C末	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 13.8	倒置焼成。外堤部の端部は内傾、突帯は丸くおさめる。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								観部	脚部		
223		HJ413	L.3.4.12	包含層	—	円形		○	×	突帯 12.5	正置焼成。観面には使用痕跡が明瞭に残る。観部裏面にはロク口目が残る。
224		HJ461	L.3.4.12	河川 10	—	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	脚台 18.8	正置焼成。接合部に亀裂が入る。
225		HJ544	L.3.4.13	擾乱		宝珠		○	×	—	正置焼成。外堤部の小破片。
226	2	HJ544	L.3.4.13	整地層・包含層	8 C	圓足	c カ - A	○	×	外堤 12.0 突帯 13.0	2片接合。自然軸不明。ナデによるわずかなへこみを海部としている。
227		HJ365	L.4.1.13	素掘溝	—	圓足	5 カ	×	脚柱～脚台	—	自然軸不明。脚部下端に細い突帯が1条めぐる。
228		HJ550	L.4.2.3	河川 03	8 C 前～中	蹄脚	B - b	○	×	突帯 25.0 観面 19.0	正置焼成。内面はコテ状工具で成形。外堤部の下に細い突帯が1条めぐる。
229		HJ314	L.4.3.10	素掘溝	—	蹄脚	B	○	脚頭部	—	自然軸不明。
230	2	HJ301	L.4.3.14	S K 09	8 C	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 11.0	2片接合。自然軸不明。観部内面は不定方向のナデ。脚柱外面に縦方向の刻線がある。
231		HJ442	L.4.3.16	S D 02	8 C ～ 9 C	圓足	1	×	脚柱～脚台	脚台 14.6	正置焼成。脚台はロクロナデ調整。
232		HJ099	L.4.4.11	S D 01	8 C	円形		○	獸脚	外堤 21.7	倒置焼成。獸脚は3カ所に付くと考える。海部は片側に寄る。
233		HJ331	L.4.4.12	S D 02	8 C	圓足	—	○	×	観面 12.5	正置焼成。観面の皴裂。観面裏面は指オサエの凸凹が残る。
234		HJ335	L.4.4.12	S D 1061	8 C	圓足	c カ	○	×	—	倒置焼成。観面に重ね焼きによる変色あり。観面に低い内堤がめぐる。
235		HJ335	L.4.4.12	包含層		圓足	1	×	脚柱～脚台	—	倒置焼成。脚柱部下半に圓線が1条めぐる。
236		HJ335	L.4.4.13	S D 03	8 C	圓足	—	×	脚柱のみ	—	倒置焼成。脚柱部に圓線が2条、縦方向の刻線が1条ある。
237	2	HJ208	L.4.4.13	柱穴Na 1・ 包含層	8 C	円面		○	無脚	—	2片接合。正置焼成。観面には自然軸が厚くかかり、使用痕跡が無い。観部裏面で墨を磨った痕跡あり。
238		HJ339	L.4.4.13	S D 1062	8 C	風字		○	×	—	観部裏面に縦方向の板目状の圧痕あり。
239	2	HJ339	L.4.4.13	包含層		圓足	—	×	脚柱のみ	—	2片同一個体と考える。脚柱外面に圓線1条と縦方向の刻線が1条ある。
240		HJ339	L.4.4.13	包含層		圓足	a カ b - A	○	×	外堤 20.0	倒置焼成。外堤部先端に重ね焼きの痕跡残る。
241	3	HJ339	L.4.4.13	包含層		圓足	a カ	○	脚柱	—	3片接合。倒置焼成。外堤部外面に波状文を施す。
242		HJ164	L.4.4.14	包含層		圓足	a - A	○	脚柱	突帯 13.0	倒置焼成。観部内面不定方向のナデ調整。
243	3	HJ168	L.4.4.14	土坑	8 C	圓足	a - A 3	○	脚柱～脚台	外堤 17.0 脚台 23.4	3片接合。自然軸不明。焼成はやや軟質。外堤下に突帯が付かないタイプ。脚柱部に線割による文様あり。
244		HJ168	L.4.4.14	土坑	8 C	圓足	—	×	脚台のみ	脚台 12.0	正置焼成。小型観。
245	2	HJ347-2	L.4.4.14	土坑・包含層	8 C	圓足	a - A	○	脚柱	—	2片同一個体と考える。正置焼成。観面の中央部が凹むタイプ。
246		HJ347-2	L.4.4.14	包含層	—	圓足	3	×	脚柱～脚台	脚台 17.5	倒置焼成。脚部の器厚が0.3～0.4mmと薄い。
247	3	HJ347-2	L.4.4.14	包含層	—	圓足	a - B	○	脚柱	—	3片接合。倒置焼成。外堤部は外反しながら立ち上がる。観部裏面に指オサエの痕跡あり。
248	2	HJ347-2 - 353-1	L.4.4.14	S E 09・包含層	8 C	圓足	5	×	脚柱～脚台	脚台 20.5	2片同一個体と考える。正置焼成。脚柱下端に突帯が1条めぐる。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備考
								観部	脚部		
249	2	HJ353-1	L.4.4.14	S B 01・包含層	8 C	圓足	a カ - A	○	脚柱	外堤 18.8	2片同一個体と考える。正置焼成。外堤端部は内傾する。
250	3	HJ353-1	L.4.4.14	S B 11-8	8 C	圓足	5	×	脚柱～脚台	脚台 20.5	3片接合。正置焼成。脚柱下端に突帯が1条めぐる。
251	2	HJ353-1	L.4.4.14	S X 06・ S E 05	8 C	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 15.8	2片同一個体と考える。正置焼成。脚柱外面の透孔間に縱方向の刻線が3条ある。
252		HJ353-1	L.4.4.14	包含層	—	圓足	a - B	○	脚柱	外堤 21.5	資料 251 と同一個体の可能性あり。倒置焼成。
253		HJ181-1	L.4.4.15	包含層	—	圓足	a - B カ	○	×		正置焼成。観部内面はロクロナデ調整。
254		HJ325-2	L.4.4.15	素掘溝	—	圓足	2	×	脚柱～脚台	脚台 18.8	正置焼成。脚台端面に圓線が2条めぐる。
255	2	HJ325-2	L.4.4.15	包含層	—	圓足	3	×	脚柱	脚台 23.2	2片接合。倒置焼成。脚柱部突帯を付し、突帯の上下にそれぞれ透孔がある。
256		HJ325-2	L.4.4.15	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱	観面 18.0	倒置焼成。脚部の透孔は2段になる可能性がある。
257		HJ347-1	L.4.4.15	S D 79	8 C	圓足	a - A	○	脚柱	突帶 17.5	正置焼成。三角形状の内堤が廻る。
258		HJ347-1	L.4.4.15	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 15.0	倒置焼成。観面周縁に低い内堤がめぐる。
259		HJ253	L.4.4.15	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱～脚台	器高 5.0	自然軸不明。
260		HJ253-3	L.4.4.15	S D 026	8 C	蹄脚	A - a	○	脚頭部	外堤 18.0	倒置焼成。内外面ロクロナデ調整。
261		HJ199	L.4.4.16	包含層	—	圓足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成。
262		HJ218	L.4.4.16	包含層	—	圓足	a - A	○	×	突帶 18.0	正置焼成。
263		HJ218	L.4.4.16	包含層	—	圓足	3	×	脚柱～脚台	脚台 16.6	正置焼成。内外面ロクロナデ調整。
264		HJ218	L.4.4.16	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 12.9	正置焼成。内外面ロクロナデ調整。
265		HJ334	L.4.4.16	S D 101	8 C	圓足	2	×	脚柱～脚台	脚台 21.0	倒置焼成。脚台端部に重ね焼き痕跡残る。
266		HJ186	L.4.5.1	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 9.0 観面 5.8	正置焼成。観面中央部の器厚が0.5mmと薄い。
267		HJ372	L.4.5.12	河川？	8 C	形象	—	○	脚部	—	正置焼成。側縁部はケズリ調整。脚部に楕円形の孔が作られている。
268	2	HJ065	L.5.1.1	S D 02	8 C	圓足	a - A 5	○	脚柱～脚台	外堤 17.1 突帶 17.4 脚台 18.8	2片同一個体と考える。脚部外面に縱方向の線刻あり。外堤部の下とく脚部下半に小さい突帯がめぐる。
269	2	HJ065	L.5.1.1	S X 01	8 C	圓足	a - A	○	×	外堤 21.0	2片同一個体と考える。自然軸不明。脚部の透孔は0.7～0.8cm間隔で入る。
270		HJ316	L.5.1.15	S D 02	8 C～10 C末	形象	—	○	脚部	—	正置焼成。
271		HJ316	L.5.1.15	S D 02	8 C～10 C末	蹄脚	B - 4	×	脚柱～脚台		正置焼成。脚柱三角飾り表面にケズリ残しあり。
272	5	HJ338	L.5.1.16	整地土・包含層	8 C	蹄脚	B - a 2	○	○	外堤 19.5	5片同一個体と考える。正置焼成。全体的に白く焼きあがる。
273	4	HJ338-1	L.5.1.16	S X 04・包含層	8 C	蹄脚	B - 6	×	脚柱～脚台	脚台 32.0	4片同一個体と考える。正置焼成。脚柱の三角飾りは厚みがなく扁平状の三角形状。脚部の様相が他の資料と異なる。
274		HJ338-1	L.5.1.16	包含層	—	圓足	c - A	○	脚柱	外堤 23.0 内堤 16.8	倒置焼成。観面に低い内堤がめぐる。観面の器厚が1.5cmある。
275		HJ020	L.5.2.3	包含層	—	宝珠	—	○	×	—	倒置焼成。尖頭部の破片。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								観部	脚部		
276		HJ001	L.5.2.14	斜行大溝	8 C	風字		○	×	—	自然軸不明。観裏面に脚部を付した痕跡あり。
277		HJ001	L.5.2.14	素掘溝	—	円形	—	○	×	—	倒置焼成。外堤部端面の角を面取りする。
278		HJ001	L.5.2.14	素掘溝	—	圓足	2	×	○	脚台 20.5	倒置焼成。内外面クロナダ調整。
279		HJ001	L.5.2.14	土坑	8 C	圓足	c カ - A	○	○	外堤 14.0	倒置焼成。内外面クロナダ調整。
280		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	形象		○	脚部	—	自然軸不明。内堤に径 0.4cm の貫通孔がある。外堤部外面および観裏面に線刻で模様を描く。外堤部に脚部を付す。
281		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	圓足	a - A	○	×	—	正置焼成。焼成やや軟質。観部内面はコテ状工具で成形。
282		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	圓足	2	×	脚柱～脚台	脚台 18.0	正置焼成。脚部外面下半に圓線が 1 条めぐる。
283		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	圓足	—	×	脚柱	—	自然軸不明。
284	2	HJ001	L.5.2.14	包含層	—	蹄脚	B - b	○	脚頭部	外堤 25.1 視面 21.5	2 片同一個体と考える。倒置焼成。外堤部の下に圓線が 2 条めぐる。
285	3	HJ001	L.5.2.14	包含層	—	蹄脚	A - 5	×	脚台～脚柱	脚台 24.2	3 片接合。外面に自然軸かかる。脚柱は、棗が丸みを帯びた三角形状を呈する。表面はヨコナダ調整。
286		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	円形		○	×	外堤 18.2 視面 13.0	倒置焼成。脚部は獸脚風のものが 3 本つくと考える。
287		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	形象		○	×	—	正置焼成。内堤中央部には径 0.3cm の貫通孔がある。
288		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	圓足	c - A	○	脚台～脚柱	外堤 9.4 脚台 13.4 器高 5.1	倒置焼成。脚柱部には幅約 1.0cm の長方形透孔が 16 個所、縱方向の刻線が 1 条ある。
289		HJ593	L.5.3.8	包含層	—	圓足	3	×	脚柱～脚台	脚台 22.0	正置焼成。脚台下端にはやや丸みのある四角形状の突帯がつく。
290		HJ217	L.5.3.9	S X 01	8 C	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 14.2	正置焼成。
291		HJ608	L.5.4.9	包含層	—	圓足	—	×	脚柱のみ	—	内外面ともに自然軸が付着。
292		HJ608	L.5.4.9	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 15.0	自然軸不明。内面はコテ状工具で成形。
293	2	HJ608 + 579	L.5.4.9	S X 02 + 03	8 C	宝珠		○	脚部	—	2 片接合。側置焼成。尖頭は平面三角、観面は梢円形になる。眉形の突帯を貼り付け海部と観部を分け内堤とする。
294		HJ459-2	L.5.4.9	S D 01	8 C	円面カ		×	獸脚	残存高 3.3	倒置焼成。
295		HJ459-2	L.5.4.9	S D 01	8 C	特殊		○	×	—	正置焼成。外堤部外面に把手が付く。円形観カ。
296		HJ459-3	L.5.4.10	S D 02	8 C	圓足	1	×	脚柱～脚台	脚台 16.8	倒置焼成。内外面クロナダ調整。
297		HJ579	L.5.4.10	S X 62	8 C	圓足	3	×	脚柱～脚台	—	自然軸不明。脚台上端には丸みのある四角形状の突帯。
298		HJ553	L.5.4.15	S D 85	8 C	圓足	1	×	脚柱～脚台	脚台 15.2	正置焼成。
299	2	HJ553	L.5.4.15	S D 85 + 包含層	8 C	圓足	a - A	○	×	外堤 13.8	2 片同一個体と考える。正置焼成。
300		HJ553-1	L.5.4.15	S D 96	8 C	蹄脚	A - 2	×	脚柱～脚台	脚台 30.0	外面に自然軸かかる。脚台部ヘラケズリ調整。
301	2	HJ553-1	L.5.4.15	包含層	—	蹄脚	B - 3	×	脚柱～脚台	脚台 30.0	2 片同一個体と考える。自然軸不明。脚柱と脚台の接合痕が残る。
302		HJ553-1	L.5.4.15	包含層	—	蹄脚	A - 1	×	脚柱～脚台	脚台 33.0	自然軸不明。脚柱部の三角飾り表面はヨコナダ調整。
303		HJ565	L.5.4.15	S K 07	8 C	圓足	a カ - A	○	×	—	正置焼成。観部内面コテ状工具で成形。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備考
								観部	脚部		
304		HJ565	L.5.4.15	S X 01	8 C	圓足	a - A	○	×	外堤 13.7	倒置焼成。紐のない須恵器杯蓋と同じ形に作り観面とした後、粘土紐を巻上げて脚柱部と外堤部を作ったと考えられる珍しい事例である。他の個体には同技法は確認できない。
305	2	HJ565	L.5.4.15	包含層	—	蹄脚	A カ	×	脚柱～脚台	—	2片同一個体と考える。外面に自然釉かかる。脚柱部の三角飾りは鋭角ではなく丸みをおびる。
306		HJ575	L.5.4.15	S D 42	8 C	形象		○	×	—	自然釉不明。観裏面は不定方向へラケゼリ調整、刻線あり。
307		HJ575	L.5.4.15	S X 01	8 C	圓足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。
308		HJ575	L.5.4.15	S X 02	8 C	圓足	a - A	○	—	外堤 19.0	正置焼成。海底部は平坦な面を呈す。
309		HJ575	L.5.4.15	S X 23	8 C	円面カ		×	獸脚のみ	残存高 6.8	自然釉不明。脚部裏面に須恵器片カが溶着する。
310		HJ575	L.5.4.15	柱穴 2	8 C	圓足	a - A	○	×	—	正置焼成。
311		HJ575	L.5.4.15	包含層	—	形象		○	脚部	—	正置焼成。外堤部外面に線刻による模様がある。
312		HJ575	L.5.4.15	包含層	—	蹄脚	B - c	○	脚頭	外堤 20.8	正置焼成カ。外堤部下の圓線は作り出しによる。
313	2	HJ581	L.5.4.15	S D 165	8 C	圓足	a - A	○	×	外堤 18.0	2片接合。自然釉不明。外堤はやや内湾しながら立上がる。端部は内傾する。
314	2	HJ581	L.5.4.15	S D 165・ 包含層	8 C	蹄脚	A - 2	×	脚柱～脚台	脚台 32.0	2片同一個体と考える。外面に自然釉かかる。脚柱部の三角飾り表面はヨコナデ調整。
315	2	HJ468-4	L.5.4.16	S D 03	8 C	圓足	b - A	○	×	外堤 15.9 突帯 16.4	2片接合。自然釉不明。観面と外堤部の接合部が歪む。この状態で使用したらしく、墨が歪んだ内部にまで染み込む。
316		HJ468-4	L.5.4.16	包含層	—	圓足	1	×	脚柱～脚台	脚台 15.4	倒置焼成。脚台外面はロクロナデ調整。
317		HJ468-4	L.5.4.16	包含層	—	圓足	2	×	脚柱～脚台	脚台 19.2	自然釉不明。外面ロクロナデ調整。
318		HJ506-1	L.5.5.1	S D 40 最下層	8 C	圓足カ		×	○	残存高 5.9	正置焼成。脚柱部に人面を付す。髪の毛と口髭は円形貼文で表現する。鼻梁が高く、異国人を模したものと考える。
319		HJ506-1	L.5.5.1	S D 50	8 C	圓足カ	—	×	脚台	—	自然釉不明。脚台のみの破片。
320	3	HJ552	L.5.5.2	S D 13	8 C	圓足	a - A	○	脚柱	外堤 12.5 突帯 12.6 観面 8.1	3片接合。倒置焼成。観面外間に重ね焼き痕が残る。
321		HJ552	L.5.5.2	S D 96	8 C	圓足	a - A カ	○	脚柱	—	倒置焼成。
322		HJ017	L.5.5.6	包含層	—	円面	—	○	脚部	—	正置焼成。貼付の角高台がめぐる。
323		HJ009	L.5.5.7	S D 01	8 C	蹄脚	B - b カ	○	×	外堤 21.5	倒置焼成。観部外下面下半に脚頭部の張り付け痕跡が残る。
324		HJ478	L.5.5.11	S X 04	8 C	風字カ		○	脚部	—	倒置焼成。脚部は低い角高台。
325		HJ518	L.6.1.13	包含層	—	圓足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。外面ロクロナデ調整。
326		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C～9 C	形象		○	×	—	自然釉不明。観部に磨きあり。海部は粗いナデ調整。
327		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C～9 C	圓足	a - A	○	×	—	倒置焼成。外堤部下に細い突帯が1条めぐる。
328		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C～9 C	圓足	5	×	○	外堤 17.5	正置焼成。脚台部上半に突帯が1条めぐる。
329		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C～9 C	圓足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。
330		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C～9 C	圓足	a - 2	×	脚柱～脚台	脚台 17.9	倒置焼成。脚柱部に縱方向の刻線が1条ある。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								観部	脚部		
331		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C ~ 9 C	團足	a - A	○	×		倒置焼成。
332		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C ~ 9 C	團足	a - A	○	○	外堤 18.5	倒置焼成。脚部には長方形・円形・梢円形の透孔がある。
333		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C ~ 9 C	團足	a - B	○	脚柱		倒置焼成。観部内面には粘土層が付着。観面には重焼き痕。
334	3	HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C ~ 9 C	蹄脚	B - 3	×	脚柱～脚台	脚台 18.3	3片接合。正置焼成。脚台上面上には指オサエの痕跡が残る。
335		HJ284	L.6.3.10	東堀河	8 C ~ 9 C	團足	a - B	○	脚柱	外堤 16.8	正置焼成。観部内面はロクロナデ調整。
336		HJ134	L.8.2.1	S E 01	8 C	團足	a - A	○	×	外堤 13.4	倒置焼成。観部内面はロクロ目が明瞭。
337		HJ014	L.8.2.4	S X 02	8 C	團足	a - A	○	×		正置焼成。内外面ロクロナデ調整。
338		HJ014	L.8.2.4	S E 02・掘形	8 C	円形カ		○	脚部		倒置焼成。7角に面取りした高い脚が付く。
339	2	HJ508	L.9.1.12	包含層	—	團足	5	×	脚柱～脚台	脚台 16.0	2片同一個体と考える。自然軸不明。脚台上端に突帯が1条めぐる。
340		HJ538	L.9.3.11	S D 20	8 C	形象		○	×	—	正置焼成。海部裏面に脚柱の痕跡あり。外堤部外面に線刻がある。
341		HJ538	L.9.3.11	S D 21	8 C	團足	—	×	脚柱のみ	—	自然軸不明。脚柱部外面に線刻による模様がある。
342		HJ122	L.9.3.12	S D 01	8 C 後	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	脚台 22.1	正置焼成。
343		HJ103	朱雀大路	包含層	—	蹄脚	B	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。脚節部貼付け。
344		T125	東市 L.8.3.6	S D 103	8 C	團足	1	○	脚柱～脚台	脚台 13.4	倒置焼成。
345		T125	東市 L.8.3.6	素掘溝	—	團足	a - C	○	×		正置焼成カ。外堤部の幅が細く、高さも低い。
346		T125	東市 L.8.3.11	包含層	—	團足	a - A	○	脚柱	外提 13.8	正置焼成。観部内面にロクロ目がみえる。
347		T125	東市 L.8.3.11	包含層	—	團足	a - A	○	脚柱	外提 27.5	倒置焼成。観部内面はコテ状工具で成形。
348		T134	東市 L.8.3.11	東堀河	8 C ~ 9 C	團足	a - A	○	×	外提 11.8 突帯 12.4	倒置焼成。小型観。
349		T126	東市 L.8.3.6	S E 274抜取り	8 C	團足	2	×	脚柱～脚台	脚台 14.4	倒置焼成。内外面ロクロナデ調整。
350		T131	東市 L.8.3.12	S D 09	8 C	團足	b カ - A	○	×	外提 18.0 突帯 19.8	正置焼成。内面はロクロナデ調整。
351		T131	東市 L.8.3.12	S D 09	8 C	團足	b カ - A	○	×	—	自然軸不明。観面の凹凸が著しい。使用痕跡なし。
352		T104	東市 L.8.3.11	東堀河	8 C ~ 9 C	團足	a - B	○	×	外提 16.8	倒置焼成。海部底は平坦面を呈す。内外面ロクロナデ調整。
353		T106	東市 L.8.3.11	包含層	—	團足	a - A	○	×	外提 16.8	正置焼成。観面裏は平滑である。
354		不詳	—	—	—	蹄脚	B - c	○	脚頭部	突帯 19.8	正置焼成カ。外堤部下に2条の突帯がめぐる。
355		試 95-5	L.2.3.12・13	土坑	8 C	円形		○	無脚	直径 15.8 内堤 10.0	正置焼成。
356		GG56	元興寺旧境内	S K 14	8 C	竜面		○		幅 4.9 長 8.0 高 2.0	須恵器縁を打ち欠き、全体を磨いて観に転用している。観面にはわずかにロクロ目残る。
357	3	SD14	西大寺旧境内	S D 03	8 C	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	脚台 27.8	3片接合。倒置焼成。脚柱部内面はロクロケズリ調整。
358		SD16-1	西大寺旧境内	S E 501曲物内	8 C	團足	b - A	○	×	外提 9.45	正置焼成。外堤部外面に波状文がある。内面はロクロナデ。
359		SD17	西大寺旧境内	整地層	8 C	團足	a - A	○	×	—	自然軸不明。外堤部の下に堆みのある幅広い突帯が付く。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備考
								観部	脚部		
360		SD19-1	西大寺旧境内	S E 508 裏込	15 C	楕字		○	×	—	正置焼成。観部・観裏面は不定方向のヘラケズリ調整。
361		SD21	西大寺旧境内	包含層		圓足	a - A	○	×	—	倒置焼成。
362	3	SD23	西大寺旧境内	S A 51	8 C	圓足	6	×	脚柱～脚台	脚台 25.7	2片接合、1片は同一個体と考える。正置焼成。脚台部外面に圓線が2条めぐる。脚柱部外面は縦方向のヘラケズリ。
363		SD24	西大寺旧境内	S D 06	8 C	円形カ		○	脚部	—	正置焼成。低い角高台がめぐる。
364		SD24	西大寺旧境内	S D 06	8 C	圓足	c - A	○	×	外提 14.0	正置焼成。観部内面はロクロナデ、中央は縦方向のナデ調整。
365		KK2	菅原寺旧境内	S X 01	8 C	圓足	—	×	脚柱のみ	—	自然軸不明。脚柱部外面に線刻により模様を描く。
366		KK4	菅原寺旧境内	包含層	—	圓足	a - A	○	×	外提 15.5	正置焼成。観部内面は不定方向のナデ調整。
367	2	DA106	大安寺旧境内	S X 06	8 C～9 C 前	圓足カ	a カ - A	○	脚柱	—	2片同一個体と考える。自然軸不明。
368		DA28	大安寺旧境内	包含層	—	形象カ		○	×	—	正置焼成。海部裏面に脚部の痕跡が残る。
369		DA28	大安寺旧境内	包含層	—	圓足	a - A	○	脚柱	外提 24.0	自然軸不明。観面裏は平滑で調整痕跡が不明。
370		DA28	大安寺旧境内	包含層	—	圓足	c - A	○	脚柱	外提 11.0 突帯 12.2	正置焼成。観面裏に當て具とみられる痕跡あり。
371		DA28	大安寺旧境内	包含層	—	円面		○	無脚	外提 15.0 内提 10.0	倒置焼成。観面に三角形状の内堤をめぐらせる。
372		DA30	大安寺旧境内	包含層	—	圓足	a - B	○	脚柱	外提 16.0 観面 12.0	正置焼成。脚部～脚裾が大きく広がるタイプ。観部内面に粘土屑が多く付着。
373		DA72	大安寺旧境内	杉山古墳周濠	8 C～9 C	圓足	a - A	○	脚柱	外提 14.0 突帯 15.0	倒置焼成。外堤部は内湾しながら立ち上がる。端部は内傾する。
374		DA72	大安寺旧境内	包含層	—	圓足	—	×	脚柱	—	自然軸不明。脚柱部外面に線刻による縦横の線がある。
375		DA72	大安寺旧境内	包含層	—	圓足		×	脚柱	—	正置焼成。脚柱部外面はロクロケズリ調整。
376		DA72	大安寺旧境内	包含層	—	楕字		○	×	—	正置焼成。観面上に眉毛状の内堤がある。外堤部上端に重焼きの痕跡が残る。
377		DA94	大安寺旧境内	包含層	—	圓足	3	×	脚柱～脚台	脚台 30.0 ～	倒置焼成。脚部の透孔の周囲を外面から面取りする。
378		DA94	大安寺旧境内	包含層	—	楕字		○	脚部	—	外面ともに自然軸が付着。調整不明。
379		DA94	大安寺旧境内	包含層	—	宝珠		○	脚部	—	倒置焼成。外堤・内堤ともに輪花状を呈す。
380		SR07	西隆寺旧境内	小穴	8 C	圓足	a - A	○	×	突帯 25.0 観面 20.0	正置焼成。観部内面はコテ状工具で成形。
381		SR07	西隆寺旧境内	包含層	—	圓足	b - A	○	×	—	正置焼成。
382		SR08	西隆寺旧境内	包含層	—	円面		○	無脚	直径 22.0	倒置焼成。
383		SR08	西隆寺旧境内	包含層	—	圓足	b カ	○	×	観面 8.0	自然軸不明。観部内面は不定方向のナデ調整。

# 弥勒寺蔵 三角縁吾作銘二神二獸鏡について

鏡方正樹

## I. はじめに

奈良市中町の弥勒寺が所蔵する三角縁吾作銘二神二獸鏡（以下、弥勒寺鏡と略称）が、平成21年3月に奈良市指定文化財に登録された。そこで、奈良市教育委員会では弥勒寺鏡に対する関連調査<sup>1</sup>を奈良県立橿原考古学研究所・高松市歴史資料館・天理大学附属天理参考館の協力を得て実施し、保存処理<sup>2</sup>を独立行政法人奈良文化財研究所と協定書を結んで行った。その成果の一部をまとめたのが本稿である。なお、弥勒寺からの寄託を受けて、現在奈良市埋蔵文化財調査センターで弥勒寺鏡を保管している。

## II. 弥勒寺鏡の来歴

弥勒寺に残る「弥勒寺古鏡記」には、僧詮海が天保5年（1834）に弥勒寺鏡の銘文を解説しようとしたことが記されている。これによって、すでに江戸時代後期から弥勒寺に三角縁神獸鏡1面が所蔵されていたことがわかる。そして、同じ頃に書かれたとみられる「龍華山古鏡詩并序」の中に、寺地がかいつての登美山に属し、その崩れた崖地を掘って鏡を得たのではないかという推測を僧詮海が述べている。この頃には、鏡の出土地の詳細は不明となっていた可能性が高い。

大正3年（1914）11月19日付で弥勒寺から奈良県へ提出された「寶物及貴重品臺帳」（県立奈良図書館蔵）には、本鏡1面を漢鏡と称して第1号に挙げている。ここでも作者・伝米は不詳となっており、天保5年の「弥勒寺古鏡記」を引いて備考に鏡の概要を記すのみである。

昭和25年（1950）に奈良県の主要古墳を紹介した末永雅雄の『大和の古墳』では、「富雄の丸山」の項に弥勒寺鏡に関する記述がなく、この時点では弥勒寺鏡の存在が研究者にもほとんど知られていなかったと思われる。

弥勒寺鏡の存在が一般的に知られるようになった契機は、富雄町史編纂事業による史料調査によってその重要性が認識され、昭和29年（1954）刊行の『富雄町史』に掲載されたことである。しかしこの時点では、享保・元文年間頃の発掘品で富雄丸山古墳出土品と関係あるものという伝聞が記されているに過ぎず、「弥勒寺古鏡記」などの史料については一切言及されていない。また、昭和36年（1961）の『古墳時代の研究』の中で、小林行雄は伝富雄丸山古墳出土鏡を3面として扱っており、弥勒寺鏡は含めていない。研究資料として積極的に利用さ

れた形跡は未だ認められない。

昭和43年（1968）に刊行された『奈良市史』考古編の中で、弥勒寺鏡の詳細が初めて紹介された。執筆者の末永雅雄は「弥勒寺古鏡記」及び「龍華山古鏡詩并序」の存在を確認し、富雄丸山古墳出土品と聞いていたがその内容から「丸山古墳出土と伝えられて来たことは一応保留しておくことがよい」と述べるにいたっている。しかし、弥勒寺鏡を「伝丸山古墳出土遺物」の中に一括し



図1 弥勒寺と富雄丸山古墳の位置

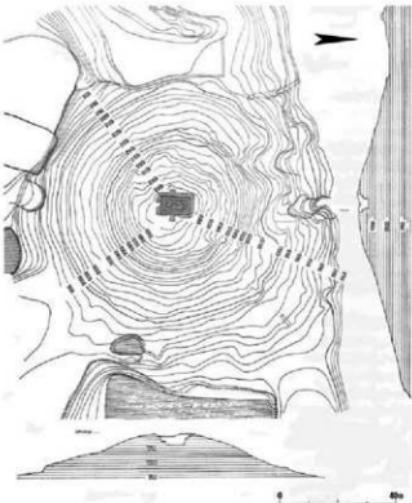


図2 富雄丸山古墳の埴丘（奈良県教育委員会 1973）

て記述するという構成内容が、弥勒寺鏡を富雄丸山古墳出土品と単純に結び付けて扱われる原因の一つとなってしまった。

三角縁神獸鏡の研究が大きく進展しようとする中で、三角縁神獸鏡の集成表を作成する必要性が生じていた。平成元年（1989）、椿井大塚山古墳出土鏡の一般公開に合わせて、京都大学文学部博物館図録『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』が刊行され、三角縁神獸鏡目録が作成された。この目録は、三角縁神獸鏡研究の基礎的な準拠資料としてその後広く活用されるようになる。そして目録の中で、弥勒寺鏡出土古墳を富雄丸山1号墳（伝）として登載したことがその後の取扱いに少なからず影響を与えることとなった。おそらくそれによって、弥勒寺鏡を富雄丸山古墳（伝）と記載する研究者及び研究機関が多くなったとみられる。

以上のように弥勒寺鏡の来歴を整理すると、江戸時代には出土地不詳であったものが戦後になってから伝富雄丸山古墳出土と言い換えられたことがわかる。その理由は不明であるが、明治の盗掘で富雄丸山古墳から多くの副葬品が出土したことの記憶が村人たちの間で交錯したのかかもしれない。弥勒寺鏡が富雄丸山古墳出土品であると推測できる根拠は今のところ全くないようである。

### III. 弥勒寺鏡の特徴

弥勒寺鏡は、いわゆる船載鏡群に属する。鏡面直径21.7cm・縁の高さ1.0cm・重量940.8gで、銹化によって全体が黒色化しているが、鏡背の文様は比較的鮮明である。鏡面の表面は、銹膨れによって全体的に荒れている。

背面中央に半球形の鉤があり、鉤孔形態は三角縁神獸鏡に特有の長方形である。鉤の外周には、有節重弧文圓座の紐座がめぐる。内区の文様帶は、鋸齒文を刻み突出する界線によって、主文帶と銘帶に区分される。主文帶は四個の擬文座乳等間隔に区切られ、その間に神像二体と獸像二体が紐を挟んで対向する位置に配置されている。神像の表現は、二体ともに膝がなく、一体は蓮華座のようなものに膝をしづめている。頭に三山冠を被り両肩から翼をのばすが、その表現もそれぞれ異なる。神像の右側には、旌や幢を寫したといわれる傘松形文様（旌飾文）がみられる。

銘帶の文字は欠損のため一部判読できないものの、後述の伝香川県出土同範鏡を参照すれば「吾作明竟莫（甚）大好除去不羊宜古市上有東王父西王母渴飲玉泉飢食棗」となる。

外区は、鋸齒文帶・複波文帶・鋸齒文帶の三文様帶で

構成されており、縁との境に外周突線はみられない。縁は三角形に突出し、銹化が著しい。

### IV. 同範鏡の検討

弥勒寺鏡と同じ文様のいわゆる同範鏡には、伝香川県出土とされる個人藏鏡1面があり、高松市歴史資料館に現在寄託されている。直径21.6cm、重量938.6gで、銹化によって鏡背全体が黒色化するが、鏡面は比較的遺存状態がよく一部に光沢がある。

鏡背のおよそ2/3の部分に著しい銹化と附着物が認められ、文様の詳細を観察することが難しい状態にある。観察できた範囲では、複数の範キズの位置や形状が合致し、本来の原鏡に由来する文様を両鏡が共有することを確認した。

鉤孔の方向は24度ほど弥勒寺鏡とずれているが、概ね方向は同じである。鉤孔と概ね合致する方向の周縁端部に幅4cmほど削った箇所があり、湯口の位置を示すと推定できる。なお、弥勒寺鏡では銹化のために周縁端部の遺存状況が悪く、湯口の位置を確認できない。

文様の鮮明さについては明らかな差異が認められた。内区文様を構成する突線は、弥勒寺鏡が細く鋭いのに対して、伝香川県鏡は太丸くにぶい仕上がりとなっている。伝香川県鏡の有節重弧文圓紐座をみると、磨り減ったような状態でほとんど文様がみえない。また、銘帶において少なくとも「明～不」までの連続する8文字が太くなつて見える。弥勒寺鏡と比較して、伝香川県鏡の文様は明らかに不鮮明に縛上がつっている。

また、伝香川県鏡のみ現われている範キズの存在を確認した。有節重弧文圓紐座から雲氣文を貫いて獸像胸部に至る大きな範キズに近接して、有節重弧文圓紐座を横断するもう一つの範キズが伝香川県鏡にある。この範キズは弥勒寺鏡に認められないので、伝香川県鏡の鑄造が弥勒寺鏡より遅れることを示唆する。

これらの範キズが凸線でなく凹線として現われていることも確認できた。範型のキズはひび割れであり、その空隙に溶湯（高温で溶けた金属）が入り込むから、製品には凸線となって範キズが現われる。しかし、実際のキズは四凸か逆転してみえる。この違いがどのような理由によって生じたのか理解する上で、鈴木勉の見解が参考となる。それによると、「ひびには新しい真土を筆などで塗り込み補修する。その後十分乾燥してから鋳込みを行うのであるが、鋳込みの瞬間、塗り込まれた真土が僅かに膨張する。膨張した真土は範型の表面に飛び出し、流れ込んだ溶湯はその分だけ凹み、ひびに從って凹線となる」といって、「凹線の存在は、ひびの補修という工程

の存在を証明する」と論じる(鈴木勉2004)。この見解に従えば、①弥勒寺鏡が一回以上、伝香川県鏡が二回以上の補修を経た範型で鋳造されたか、②弥勒寺鏡あるいは共に幾つか鋳造された鏡の中の一面を踏み返し製作した範型を使用して伝香川県鏡が鋳造されたという想定が成り立つ。①の場合、同範での複数鋳造によって範キズが増加するものの、鮮明度の変化は必ずしも鋳造順序を示さないという実験結果があり、伝香川県鏡の文様が不鮮明であるのは単純に湯流れの状態に左右されたことになる。②の場合、二次的に製作された範型に乾燥段階で新たなキズが多く生じる可能性が想定されるが、伝香川県鏡に認められた新規のキズは極めて少ない。ただし、伝香川県鏡の文様が不鮮明である点は、踏み返しによる劣化に起因するとも想定できる。資料数が2面と少なく、①・②のどちらとも断定するのは難しいが、①の方が範キズの状況と合致しているように思われる。両鏡ともに範型の補修が認められる点から考えると、煩雑な工程が加わりながら補修の想定が難しい蝶原型による製作ではないだろう。

また、内区で多く見られる凹んだ皺が両鏡の同じ位置に同じ形状で認められた。この皺については、「鋳型の傷とは関わりなく、鋳造の湯回りの状態によってできるもの」と考え、「金属の原鏡を踏み返して複数の真土型をつくる同型鏡の技法」の痕跡と想定する見解(岡村秀典1993)がある。これに従えば、初鋳の鏡を踏み返して2次範を製作し、その範型でつくられた同型鏡が弥

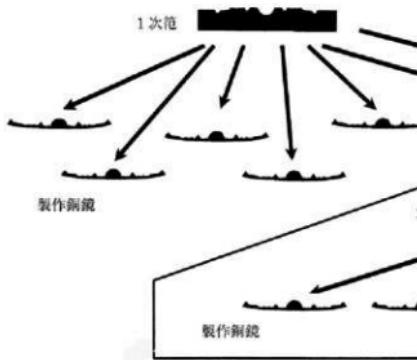
勒寺鏡と伝香川県鏡であるという推測ができる。しかし、両鏡の間に範キズの増加とその補修がみられるので、①の想定に基づいて一つの2次範を幾度か補修して鋳造したと考えるのがよさそうである。とすれば、範型は同型鏡の技法で製作されたものの、両鏡については同範関係にあることになる。したがって、水野敏典らが示した三角縁神獸鏡製作モデル(奈良県立橿原考古学研究所2005)に当てはめれば、蝶原型を使用するモデルC 2 bよりも金属原型を使用するモデルC 2 aでの生産方式が最も理解し易いように思われる(図3)。

#### V. 天理参考館伝富雄丸山古墳出土鏡との比較検討

弥勒寺鏡が富雄丸山古墳から出土したという伝聞を確認できるのは、戦後に刊行された『富雄町史』が初出である。しかも、富雄丸山古墳出土品は明治12・13年頃を上限として三度に及ぶ盗掘で出土しており、江戸時代から所蔵されてきた弥勒寺鏡とは出土した時期や経緯が明らかに異なる。

石製品が主体の富雄丸山古墳出土品(京都国立博物館蔵)については、箱書に「明治ノ末葉奈良県生駒郡富雄村字大和田丸山古墳出土」と明記され、昭和47年の発掘調査出土品と接合する鍛形石の存在が確認されたことにより、その記載内容の正しさが判明している。一方、天理参考館が所蔵する伝富雄丸山古墳出土鏡には出土地に関する確かな証拠はなく、文字通り「伝」がつくのみである。いずれも守屋孝藏の旧蔵品である点が共通しており、「伝」が付与されたのはそのような理由によるも

製作モデルC 1  
同範技法による製作



製作モデルC 2  
同範技法と2次範製作技法の複合

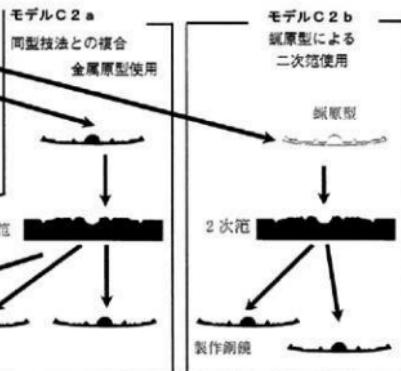


図3 「同範鏡」製作モデル(奈良県立橿原考古学研究所2005)

のかも知れない。

そこで、天理参考館蔵のもう一つの伝富雄丸山古墳出土鏡と弥勒寺鏡の比較検討を行い、同じ古墳からの出土と伝える鏡に何らかの共通性が認められるか否かについて検討した。

#### (1) 品目の特徴

天理参考館蔵の伝富雄丸山古墳出土鏡は3面あり、守屋孝蔵から昭和30年6月29日に購入されている。守屋孝蔵は東京の古物商からこれらの鏡を買い受けたらしい。それぞれの鏡の外見的特徴を以下に列記する。

1. 三角縁吾作銘四神四獸鏡〔環状乳式〕(日1220  
か3) 直径21.5cm・重量1129.8g

鏡面の約半分に別の鏡が重なって副葬された痕跡がある。鏡背は約半分に鋳化が認められるものの、他の約半分は鋳化せず光沢があり土が附着する。

2. 三角縁画文帶五神四獸鏡(日1221  
か2) 直径21.7cm・重量1079.0g

鏡面の一部に鋳化と鉄錆の附着があるものの、全体的に光沢が認められる。鏡背は約2/3に鋳化があり、約1/3に光沢がある。

3. 三角縁画像文帶盤龍鏡(日1222  
か1) 直径24.6cm・重量1600.6g

鏡面の約半分に別の鏡が重なって副葬された痕跡がある。鏡背は少し鋳化が認められるものの、全体的に光沢がある。

3面の鏡はすべて三角縁神獸鏡で、製作時期に新古關係が想定されている。吾作銘四神四獸鏡が斜線に近く肉厚で最も古い。天理参考館鏡3面はいずれも1000g以上あるのに対し、弥勒寺鏡は940.8gと軽く厚みも全体的に薄い。神獸表現からみても、天理参考館鏡より弥勒寺鏡の方が新しい型式となろう。

#### (2) 副葬状態の復元

鏡面に残る痕跡から、3面は重ねられ鏡面を上にして副葬されていた可能性が推定できる。重なりの順序は、画像文帶盤龍鏡(鏡面上向き)の左横に吾作銘四神四獸鏡(鏡面上向き)を半分重ね、さらにその左横に画像文帶五神四獸鏡(鏡面上向き)を半分重ねたと考えられる。一番上の画文帶五神四獸鏡の鏡面上に残る鉄錆の分布から、その上には鉄器があったと思われる。復元される副葬状態から3面はセットで出土した可能性が高く、そこに弥勒寺鏡が入る余地はないだろう。この点は、天理参考館鏡3面と弥勒寺鏡1面の残存状態の明確な違いからも傍証できる。天理参考館鏡3面はいずれも表面に光沢が残り、遺存状態は良好である。一方、弥勒寺鏡は表面

全体に剥離等の誘化による破損が認められる。

#### (3) 比較検討による所見

天理参考館蔵の三角縁神獸鏡3面が伝わる通りに富雄丸山古墳出土であるとすれば、残存状態の明確な違いから弥勒寺鏡1面は異なる古墳から出土した蓋然性は高まる。しかし、話はそう単純ではない。天理参考館鏡の良好な遺存具合は、黒塚古墳や椿井大塚山古墳などの堅穴式石槨出土鏡とよく似ていることが注意されるのである。富雄丸山古墳は昭和47年に発掘調査が実施され、埋葬施設は粘土槨1基であることが確認されている(奈良県教育委員会1973)。粘土槨出土鏡は、表面が鋳化して光沢を失う例が多い。鏡の状態からみれば、むしろ弥勒寺鏡の方が粘土槨出土品に似ている。

ここで気になることがある。富雄丸山古墳出土品(京都国立博物館蔵)の収納箱には、メスリ山古墳出土と判明した「滑石製椅子形模造品残闕」も一緒に入れてあった。メスリ山古墳の埋葬施設は堅穴式石槨である。伝富雄丸山古墳出土鏡とされた理由が、同じ守屋氏旧蔵の富雄丸山古墳出土品と関連するとすれば、転じてメスリ山古墳出土品との関連性も疑われる。ただし、守屋氏旧蔵の椅子形石製品は関保之助旧蔵品を落札して得たもの(大阪市立大学日本史研究室2008)であり、入手経路が天理参考館鏡と明らかに異なる。

以上の点を勘案すると、今のところ二つの伝富雄丸山古墳出土鏡はどちらも出土古墳不詳と考えておいた方がよいだろう。

#### VI. おわりに

古鏡に添付されてある「龍華山古鏡詩并序」には、寺地がかかつての登美山に属し、その崩れた崖地を掘って鏡を得たのではないかという推測が記されている。江戸時代の「小野氏系図」によると、靈山寺が所在する丘陵周辺を登美山と称したことがわかる。その内容の是非はおくとしても、富雄丸山古墳とは異なる弥勒寺近くの別の古墳から出土した可能性もあり、富雄川流域の古墳時代を考える上で弥勒寺鏡が極めて重要な資料であることは間違いない。

弥勒寺周辺の古墳については、多くの副葬品が出土した直径86mの大円墳として著名な富雄丸山古墳と詳細不明の茶臼山古墳がある他、小規模な後期古墳が幾つか散在する程度である(図1)。富雄地域だけで古墳に埋葬された地域首長の台頭や系列を組み立てるには、古墳や集落などの遺跡数が少ない。ただし、大字中字菅谷から車輪石が出土したと言われており、周辺調査の進展で新知見が得られれば、弥勒寺鏡の評価もさらに高まろう。

また、奈良市内の古墳からかつて出土した鏡などの副葬品は、市外で保管・管理されているものがほとんどであり、市内に残っている古鏡は弥勒寺鏡を含めてわずかである（表1参照）。郷土に残る貴重な資料としての価値も十分に認められる。

なお、古鏡に附された「龍華山古鏡詩并序」および「弥勒寺古鏡記并被斎所藏古鏡銘」には、江戸時代後期以前から弥勒寺に古鏡が伝わること、天保年間に常楽寺（大和郡山市鶴町）住職の詮海が狩谷被斎（江戸の国学者）所蔵鏡の銘文を参考にして弥勒寺鏡の銘文を釈読しようとしたことなどが記されている。古鏡の由来と国学者の交流を伝える古文書としての価値が認められ、古鏡と不可分の資料であるため、併せて奈良市指定文化財に附指定となったことを付記しておく。

弥勒寺鏡の関連調査にあたっては、下記の諸氏からご協力をいただきました。記して深謝いたします。

上原孝夫・奥山誠義・金森大雄・高妻洋成・下垣仁志・田辺征夫・藤原郁代・水野敏典・毛利直子・森下章司・山本英之・脇谷草一郎

#### 〔註〕

1 開闢調査として、弥勒寺鏡の三次元デジタルアーカイブ画像を奈良県立橿原考古学研究所のご協力を得て作成した（画像は水野敏典 2010 年に掲載）。また、高松市歴史資料館寄託の同鉢鏡と天理大学附属天理参考館の伝富雄丸山古墳出土鏡の調査を各機関のご協力を得て実施した。

2 弥勒寺鏡の保存処理は、独立行政法人奈良文化財研究所と共同研究「青銅鏡の劣化と保管環境に関する研究」の協定書を締結で行つた。なお、保存処理方法は、以下の通りである。

- ①鏡背面に B72 を 3%（アセトン・トルエン 1：1 混合液）と BTA 1% 入りを 3 回塗布
- ②鏡面に B72 を 3%（アセトン・トルエン 1：1 混合液）と BTA 1% 入りを 2 回塗布する。
- ③鏡面・鏡背面の照かりをアセトンで処理

#### 〔引用・参考文献〕

弥勒寺鏡に関する記述や写真は、下記の図書に掲載がある。

- ・富雄町史編纂委員会編 1954『富雄町史』
- ・奈良市史編集審議会編 1971『奈良市史』考古編
- ・京都大学文学部 1989『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』
- ・植口隆康 2000『三角縁神獸鏡新鑑』
- ・奈良県立橿原考古学研究所 2002『政権交代—古墳時代前半後半のヤマト』橿原考古学研究所特別展図録第 58 冊
- ・車崎正彦編 2004『考古資料大観』第 5 卷（弥生・古墳時代 編）同巻の伝香川縣出土鏡は、下記の図書に写真等の掲載がある。
- ・高松市歴史資料館 1995『鏡の美へ譜岐出土・伝来の和鏡を中心として』第 6 回企画展図録

天理参考館蔵の伝富雄丸山古墳出土鏡については、下記の図書に詳しい。

- ・京都国立博物館 1982『富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』
- ・天理大学附属天理参考館 2006『東西の古墳文化』天理ギャラリー 第 129 回展

#### その他

- ・上野勝治 1992『透造面からみた三角縁神獸鏡』『古代学研究』128 号
- ・岡村秀典 1993『福岡県平原遺跡出土鏡の検討』『季刊考古学』第 43 号
- ・大阪市立大学日本史研究室 2008『メスリ山古墳の研究』
- ・鈴木祐 2004『三角縁神獸鏡復元研究』『文化財と技術』第 3 号
- ・奈良県教育委員会 1973『富雄丸山古墳発掘調査報告』
- ・奈良県立橿原考古学研究所 2005『三次元デジタル・アーカイブを活用した古鏡の総合的研究』
- ・新納泉 1991『椎現山鏡群の型式学位置』『椎現山 51 号墳』
- ・水野敏典 2010『考古資料における三次元デジタル・アーカイブの活用と展開』平成 18～21 年度科学研究費補助金基盤研究(A)成果報告書

表 1 奈良市内出土鏡所在地一覧(東部山間地域は除く)

出土古墳	出土面数	所在地	備考
弥勒寺鏡	1	弥勒寺(中町)	三角縁 1
円照寺圓山 1 号墳	4	東京国立博物館	三角縁 1 ほか
円照寺圓山古墳	1	円照寺・椎考研	三角縁 1
難解丸山古墳	1	橿原考古学研究所	方格規矩鏡
吉古方形鏡	5	東京国立博物館	道弧文鏡ほか
吉備塙古墳	1	橿原考古学研究所	圓文帶神獸鏡
難塙古墳	1	奈良國立博物館	道弧文鏡
マツ塙古墳	9	橿原考古学研究所	四獸鏡ほか
難塙古墳	1	所在不明	神獸鏡
難門戸丸山古墳	15	宮内省農務部	道弧文鏡ほか
佐紀陣山古墳(日葉勝塙墳)	3	御陵内へ再埋納	方格規矩鏡ほか
不還寺山 2 号墳	1	奈良國立博物館	四獸鏡
山上都帶解町(山村)古墳出土	2	五島美術館(東京)	圓彌鏡ほか
山上都大安寺町古墳出土	1	五島美術館(東京)	獸帶鏡
奈良市大塚出土	1	宮内省農務部	道弧文鏡
大和あや池出土	2	五島美術館(東京)	珠文鏡ほか
西ノ峯附近出土	1	内藤虎次郎(所在不明)	前漢鏡
垂仁天皇陵発掘力	1	新家力三(所在不明)	東形鏡
南都御陵之所發掘	1	五島美術館(東京)	彷彿鏡 1
天保三年(1832)聖武陵付近出土	1	岡山県津市(香藤麻羅)	四獸鏡

計 53

表 2 詳細・真偽不明の奈良市内出土鏡(東部山間地域は除く)

出土古墳	出土面数	所在地	備考
伝富雄丸山古墳	3	天理参考館	三角縁 3
法蓮町南近	1	不明	三角縁
法蓮町南山附近	1	不明	半円形方格神獸鏡
野神古墳	2	不明	不明
東風天皇陵(平安時代盗掘)	1	不明	不明

計 8

弥勒寺古銘記

和州登美庄中村、弥勒寺所藏古銘、径八寸、重六十二兩。

其面飾而無照。於背鑄異人猛獸波瀾尖等。四釘鼻鉢凡如五

歲、周圍有銘凡三十字々画甚奇古、中七八字殘缺、不可讀。

漢鏡也。其銘曰、

吾作明竟莫大好○○○○○真古○○○有東王父西王母湯次

玉泉乳食蜜

鏡無金、飲飴以水、東都被蕭漢鏡路鏡三面、其銘字與令大抵

相同。

天保五年甲午二月

比丘詮界記

捨棄所藏古銘

○前漢鏡 背ニ仙人ノ像ヲ鋤ル、銘アリ字數四十三字

吾作明竟甚大好上有東王父西王母仙人王廣赤松子易次玉泉

飢食事子秋萬歲不老汗由天下由四海兮

鏡二金屬ナク、渴二散水ナク、飲シ篇ニシテ流环ニ作ル

○同 銘字二十七

吾作明竟甚大ユ上有王子喬赤松子天鹿其壽滿天下其萬世無

雙 離離篇ナク、龍左文字ナリ

○後漢鏡 銘字三十五

尚方作竟甚異食龍在左白虎在右朱鳥玄武云因名子孫嗣々

宜父母家中富昌貴且

右釋文被藏所考

天保二年秋、宗淵僧都訪狩谷氏、親見古鏡、寫其銘字來見

贈畢 類之得讀弥勒寺古銘、實感恩而之。

天保八年乙未秋

詮界再寫

龍華山古銘詩并序

寺弓弥勒ト号ス。和州添下郡鳥見ノ庄中村二在傳ヘ曰フ、

行基菩薩ノ草創ナリト。一古鏡ヲ藏ス。徑七寸重サ六十二

兩、面テ全ク鍍ス、背ニ異人猛獸波瀾尖等ノ状ヲ鋤ル。

之ヲ環ニシテ路有り、三十字計リ。篆書極テ古雅ナリ然レモ

開壞多クメ讀ムニ決ル。中二就テ吾作明竟玉泉西王母等ハ分

明ニ見ツ可。

或カ云ク漢鏡ナリト。是ナリ乎否ヤ、更ニ後哲ノ鑑定ヲ結ツ。

廟ニ二案スルニ寺地在昔ノ登美山右僕射林木山属ス、以ノ

故ニ崩屋廬地之際、是等之埋藏物ヲ得ルコト有ル者ナラン。

廟ニ昏ス、古鏡對メ何ヲ見ル

感ヲ發シ情ヲ懷イ子等間ナラ不

三五年夜中、無月ノ色。

二千年ノ外ノ古人の鏡。

比丘詮界詩

此鏡全ク光アルコトナケレハ、十五夜ノ月ノ雲中ニアルニ齊

シ、依テ三五夜中ト云感懷ノ一ツ也。漢鏡ナント云ナレハ、

カツテ昔ノ人ノ照ラシケン顔ヲタコニ想ヒヤラル、ナレ

ハ、是亦感懷ノ一也。ナヘテ鏡ハ明ニ物ヲ照ヌヲ以テ能トシ

シヲ賞スルコトナルニ、今ハ之ニ反シテ全ク現今光リナク照

スコトナキニ就テ懷ヲ感セシムル、是此詩ノ趣向トスル處

弥勒寺古銘記  
和州登美庄中村、弥勒寺所藏古銘、徑八寸、重六十二兩。

其面飾而無照。於背鑄異人猛獸波瀾尖等。四釘鼻鉢凡如五

歲、周圍有銘凡三十字々画甚奇古、中七八字殘缺、不可讀。

漢鏡也。其銘曰、

吾作明竟莫大好○○○○○真古○○○有東王父西王母湯次

玉泉乳食蜜

鏡無金、飲飴以水、東都被蕭漢鏡路鏡三面、其銘字與令大抵

相同。

天保五年甲午二月

比丘詮界記

捨棄所藏古銘

○前漢鏡 背ニ仙人ノ像ヲ鋤ル、銘アリ字數四十三字

吾作明竟甚大好上有東王父西王母仙人王廣赤松子易次玉泉

飢食事子秋萬歲不老汗由天下由四海兮

鏡二金屬ナク、渴二散水ナク、飲シ篇ニシテ流环ニ作ル

○同 銘字二十七

吾作明竟甚大ユ上有王子喬赤松子天鹿其壽滿天下其萬世無

雙 離離篇ナク、龍左文字ナリ

○後漢鏡 銘字三十五

尚方作竟甚異食龍在左白虎在右朱鳥玄武云因名子孫嗣々

宜父母家中富昌貴且

右釋文被藏所考

天保二年秋、宗淵僧都訪狩谷氏、親見古鏡、寫其銘字來見

龍華山古銘詩  
和州登美庄中村、龍華山古銘詩并序

寺弓龍華山古銘詩并序

贈畢 類之得讀龍華山古銘、實感恩而之。

天保八年乙未秋

詮界再寫

龍華山古銘詩并序

寺弓龍華山古銘詩并序

行基菩薩ノ草創ナリト。一古鏡ヲ藏ス。徑七寸重サ六十二

兩、面テ全ク鍍ス、背ニ異人猛獸波瀾尖等ノ状ヲ鋤ル。

之ヲ環ニシテ路有り、三十字計リ。篆書極テ古雅ナリ然レモ

開壞多クメ讀ムニ決ル。中二就テ吾作明竟玉泉西王母等ハ分

明ニ見ツ可。

或カ云ク漢鏡ナリト。是ナリ乎否ヤ、更ニ後哲ノ鑑定ヲ結ツ。

廟ニ二案スルニ寺地在昔ノ登美山右僕射林木山属ス、以ノ

故ニ崩屋廬地之際、是等之埋藏物ヲ得ルコト有ル者ナラン。

廟ニ昏ス、古鏡對メ何ヲ見ル

感ヲ發シ情ヲ懷イ子等間ナラ不

三五年夜中、無月ノ色。

二千年ノ外ノ古人の鏡。

比丘詮界詩

此鏡全ク光アルコトナケレハ、十五夜ノ月ノ雲中ニアルニ齊

シ、依テ三五夜中ト云感懷ノ一ツ也。漢鏡ナント云ナレハ、

カツテ昔ノ人ノ照ラシケン顔ヲタコニ想ヒヤラル、ナレ

ハ、是亦感懷ノ一也。ナヘテ鏡ハ明ニ物ヲ照ヌヲ以テ能トシ



(背面)

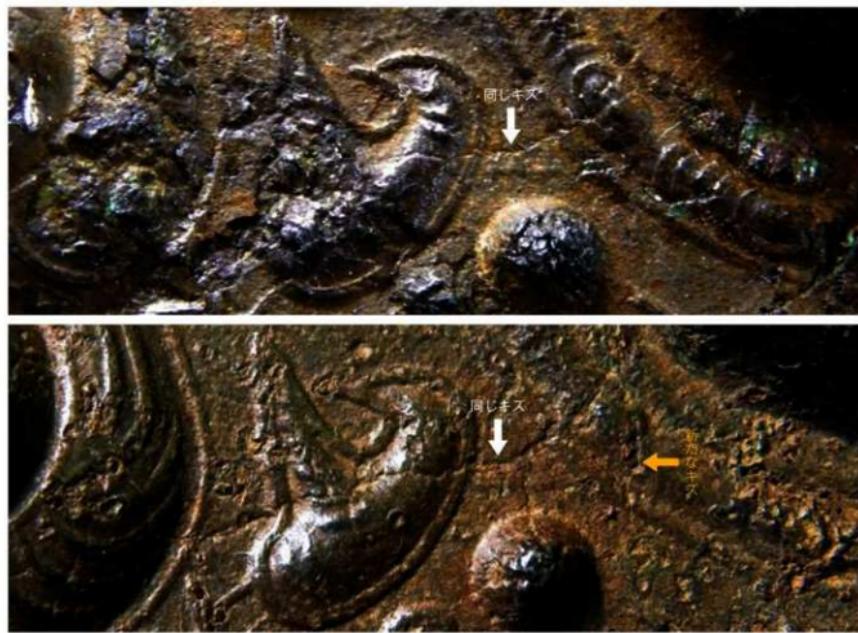


(鏡面)

伝香川県出土 三角縁吾作銘二神二獸鏡（個人蔵 高松市歴史資料館寄託資料）



神像の比較（左；弥勒寺鏡 右；伝香川県鏡）



范キスの比較（上；弥勒寺鏡 下；伝香川県鏡）



弥勒寺鏡（左）と伝富雄丸山古墳出土鏡（右）の鏡面比較



弥勒寺鏡（左下）と伝富雄丸山古墳出土鏡の背面比較 [伝富雄丸山古墳出土鏡 天理大学附属天理参考館]



伝富雄丸山古墳出土鏡の研磨状態復元案（背面）



伝富雄丸山古墳出土鏡の研磨状態復元案（鏡面）　【伝富雄丸山古墳出土鏡　天理大学附属天理参考館】

**印刷・製本の基本仕様**

表紙：アートポストカード220kg・マットpp加工  
見返し：白色上質紙110kg  
巻頭図版：特アート紙135kg  
本文：白色マットコート紙90kg  
本文フォント：ヒラギノ明朝体  
製本：左開き・糸かがり綴じ・平装製本

---

## 奈良市埋蔵文化財調査年報 平成21(2009)年度

I S S N 1 8 8 2 - 9 7 7 5

印刷 平成24(2012)年3月14日

発行 平成24(2012)年3月27日

---

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター

630-8135 奈良市大寺西二丁目281番地

TEL 0742-33-1821

FAX 0742-33-1822

URL <http://www.city.nara.lg.jp/>

E-mail [maizoubunka@city.nara.lg.jp](mailto:maizoubunka@city.nara.lg.jp)

発行 奈良市教育委員会

630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1

TEL 0742-34-1111 (代)

印刷 関西美術印刷株式会社

630-8325 奈良市西木辻町153-1

TEL 0742-62-3000 (代)

---

© 2012 by the Nara Municipal Board of Education

Printed in Japan.

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner.

---

この冊子は、300部作成し、1部当たりの印刷経費は2,454円です。

ISSN 1882-9775

**ANNUAL RESEARCH REPORT  
of  
Archaeology in Nara City Area  
2009**

**CONTENTS**

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS IN NARA CITY AREA IN 2009.
- II REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL SCIENCE.
- III REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS IN 2009.
- IV BULLETIN OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCHCENTER OF NARA CITY.

**NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION,  
2012**

**ANNUAL RESEARCH REPORT**  
of  
**Archaeology in Nara City Area**  
**2009**

---

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION, 2012